

# 大和川・今池遺跡

## —第1地区 発掘調査報告—

1979.3

大和川・今池遺跡調査会



金銅製鈴

# 大和川・今池遺跡

## —第1地区 発掘調査報告—

1979.3

大和川・今池遺跡調査会

## 序 文

日本書紀に記述されている依羅池（推定）に隣接するこの大和川今池遺跡は開発行為に対処する試掘調査の結果、20世紀のこの地で、古代人の生活風景を呼び起こすことができました。

大阪湾より大和川をさかのぼること數kmの広大な水田地帯に古墳時代の人々が居住していた足跡が顔を出すとは、よもや誰も思わなかつたでしよう。

当時の人々が生活していた掘立柱建物14棟と、人々の口をうるおした井戸、さらに現代の下水道にあたる排水溝は、その建物と計画的に配置されている事が明らかになりました。

5世紀後半から6世紀後半と1世紀たらずの短かい年月しか営んでいなかつたようであるが、当時の生活様式を知る重要な手がかりとなり、百舌鳥古墳群と古市古墳群の中間地域に位置する事からその両者に脈絡する所ではないかと思われます。

報告書刊行においては発掘調査から報告書作製へと一年たらずで成果を公表しなければならないということで、長期間にわたる担当者及び調査に参加していただいた学生諸君には多くの苦労をおかけしました。

彼等の成果が報告書として後世に残っていく事はいうまでもありません。又、発掘された歴史的事実が現地に保存されていく事を希望してやみません。

本報告書作製にあたっては、大阪府南部下水道、堺市下水道、松原市下水道、大阪府文化財保護課、同志社大学 鈴木重治教授 立命館大学 口下雅義教授 地元各位に対して深厚なる感謝を申し上げます。

昭和54年3月31日

大和川・今池遺跡調査会理事長

高 尾 正 二

## 例　　言

1. 本報告は、大阪府堺市常盤町、松原市天美西町にまたがる、大和川・今遺跡、第1地区、発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、昭和53年4月1日～同年6月14日にかけて発掘調査を行い、その後、報告書作製まで実施したものである。
3. 調査主体者は大和川・今池遺跡調査会が行い、事務局は堺市教育委員会、社会教育課内に設置した。大阪府教育委員会・石神怡、堺市教育委員会・奥田豊の指導の下に、第1地区は堺市教育委員会文化財保護係・技師森村健一が担当した。又、堺市教育委員会・北野俊明、石田修、樋口吉文の各氏に協力を受けた。
4. 発掘調査にあたっては、不動建設株式会社の協力を得た。
5. 本文の執筆は、堺市教育委員会教育課文化財保護係・技師森村健一が担当し、川口宏海、十河稔郁、古閑哲朗諸氏に協力を得た。各分担は、文末に銘記した。  
地質調査については、立命館大学・日下雅義教授に御玉稿をいただいた。  
陶磁器については、同志社大学、鈴木重治教授、依羅池について松原市市史編さん室主査、出水睦巳、木製品について大阪府文化財センター技師・小野久隆各氏の御教示を得た。
- 石材鑑定は大阪市立自然史博物館学芸員・那須孝悌氏に御教示を得た。
6. 本書作成にあたっては調査員が行い、遺物整理には調査員、調査補助員全員がことにあたり、遺物写真撮影には上野芝カメラの協力を得た。  
編集については、森村が諸氏の協力を得て行った。
7. 本報告書に掲載した図面は、土層図 $\frac{1}{10}$ 、各遺構は $\frac{1}{10}$ 、土器は $\frac{1}{10}$ の縮尺で統一して原図を作製した。

土層名、遺物の色調については、「新版、標準土色帖」（農林省、農林水産技術会議事務局）をもちいた。又、建物—T、各落ち込み（pit）—Pと略号した。基準高は、特に記さないかぎりO、P=10.000Mと統一した。

石製品の実測図の場合、左をA面、右をB面とした。

9. 調査参加者は次の通りである。但し、発掘調査、内業作業當時とした。  
敬称略。

調査員一川口宏海、植田一正、森村紀代

調査補助員一藤後 力、上野俊雄、喜多哲也、石丸廣道、田中佐知子、

滝川昌宏、岩本佳代子、木村真弓、井上浩四郎、勝田幸枝、

足立 寛、川口賀子、長岡雅典、津村季之、加藤芳樹、

西岡君雄、村谷陽子、米田純子、古園哲朗、奥野朋子、

十河稔郁、村田純子、山口明子、直川範子、都築敦子、

野田朋子、長井竜男、柳原 香、加藤暢彦、辻本記公子、

篠野容子、山中竜一、岸 託男、佐藤 彰、森本久美子、

佐伯ケサ子、上原ムツ子、山本良子、宮脇敏子、森 薫、

井上直子、西野善子、長谷川 仁、山口昌宏、木村晃久、

武内敬子、藏城生雄、上野浩司、尾崎孝一、古賀 彰、

浅本千秋、河田清美、樺谷映実、足立俊彦（現、松原市教育委員会）田中美世子、佐村紀子、西野善子

調査協力者一大阪府教育委員会、堺市教育委員会、松原市教育委員会、大阪府下水道部、南部下水道、堺市下水道部、松原市下水道部、  
小平 登自治会長、親友会、西野 正自治会長

10. 地籍調査は森村、田中、佐村が行った。

# 目 次

## 序

## 例 言

第1章 遺跡の位置と環境 .....	1
1. 地理的環境 .....	(日下) 3
2. 歴史的環境 .....	(川口) 3
第2章 調査経過 .....	(森村) 15
第3章 調査結果 .....	19
1. 現状と調査方法 .....	(森村) 19
2. 層位 .....	(タ) 20
3. 溝 .....	(タ) 23
4. 掘立柱建物 .....	(タ) 32
5. 掘立柱建物について .....	(タ) 60
6. 井戸状遺構 .....	(川口、森村) 69
7. 不明落ち込み .....	(古園) 91
8. 包含層出土遺物 .....	(古園、川口、十河、森村) 112
9. 遺物出土密度と保存状態 .....	(川口) 163
10. 須恵器に記入されたヘラ記号について .....	(森村) 165
11. 耕作用井戸 .....	(古園) 168
12. 杭列 .....	(タ) 175
第4章 結語 .....	(森村) 178
1. 調査のまとめ .....	178
2. 記紀にみる「依羅池」について .....	182

## 図版目次

- 図版-1 今池遺跡航空写真(昭和35年撮影)  
図版-2 1地区・遺構全体写真  
図版-3 溝-1 D-2, B-3, C-3, 2  
図版-4 溝-2, セクション7, 3, 6  
図版-5 掘立柱建物-1, 6  
図版-6 掘立柱建物-1, P-7  
図版-7 掘立柱建物-2・溝-1  
図版-8 掘立柱建物-2, P-6, 10  
図版-9 掘立柱建物-3, 8 (南→北)  
図版-10 掘立柱建物-4, 5, 7  
図版-11 掘立柱建物-4, P-1, 3  
図版-12 掘立柱建物-5, P-20, 掘削前後  
図版-13 掘立柱建物-6, P-10, 13  
図版-14 掘立柱建物-6, P-1, 2, 6, 8 土層断面  
図版-15 掘立柱建物-7(上), P-2, 4  
図版-16 掘立柱建物-4, 8, 9(上), 掘立柱建物-9(下)  
図版-17 掘立柱建物-11, 溝-6, 7, 8  
図版-18 掘立柱建物-13(上), 12(下)  
図版-19 掘立柱建物-10, 14, 掘立柱建物-10, P-3  
図版-20 井戸状遺構-1, 上面・土層断面  
図版-21 井戸状遺構-1, 下層, 遺物出土状態  
図版-22 井戸状遺構-1, 下層, 最下層, 遺物出土状態  
図版-23 D-3, 出土, 太型船形石斧, E-5出土, 金銅製鉛出土状態  
図版-24 B-3, 出土土器, 溝-1出土石鎌  
図版-25 スラッグ・不定形刃器出土状態  
図版-26 井戸-2 上面・断面  
図版-27 井戸-6 上面・断面  
図版-28 P-161, 砕石出土状態, 出土砾石  
図版-29 井戸状遺構-1, 上層包含層, 上層出土土器  
図版-30 井戸状遺構-1, 下層出土遺物  
図版-31 井戸状遺構-1, 下層出土遺物・技法  
図版-32 井戸状遺構-1, 最下層・出土遺物  
図版-33 井戸状遺構-2, 上層(左) 下層(右)出土遺物

- 図版-34 溝-2・出土土器
- 図版-35 第1地区出土 石製品
- 図版-36 石製品、技法接写
- 図版-37 第1地区・包含層出土・杯身
- 図版-38 T-1、T-4、T-5出土須恵器、須恵器鉢、その他
- 図版-39 井戸状遺構-3、4、井戸-2、瓦器、溝-9、P-193出土遺物
- 図版-40 P-43出土遺物、包含層出土須恵器鉢、器台

## 挿 図 目 次

第 1 図 土地条件図・地域概念図 .....	1 頁
第 2 図 今池遺跡と周辺遺跡 .....	2
第 3 図 調査風景 .....	15
第 4 図 第1地区・第2地区位置図 .....	19
第 5 図 第1地区・第2地区方眼図 .....	20
第 6 図 遺構全体図(折り込み) .....	20-21
第 7 図 セクション-A 土層断面図 .....	21
第 8 図 セクション-B 土層断面図 .....	22
第 9 図 セクション-C 土層断面図 .....	22
第 10 図 セクション-D 土層断面図 .....	23
第 11 図 溝-1 土層断面図及び平面図 .....	24
第 12 図 溝-1 出土石鐵 .....	25
第 13 図 溝-2 土層断面図 .....	26
第 14 図 溝-2 出土土器 .....	30
第 15 図 溝-8・9・10 断面図 .....	31
第 16 図 溝-9 出土土器 .....	31
第 17 図 掘立柱建物-1 遺構図 .....	32
第 18 図 掘立柱建物-1 各柱穴遺構図 .....	33
第 19 図 掘立柱建物-2 遺構図 .....	34
第 20 図 掘立柱建物-2 各柱穴遺構図 .....	35
第 21 図 掘立柱建物-3 遺構図 .....	36
第 22 図 掘立柱建物-3 各柱穴遺構図 .....	36
第 23 図 掘立柱建物-4 遺構図 .....	37
第 24 図 掘立柱建物-4 各柱穴遺構図 .....	38
第 25 図 掘立柱建物-4 出土土器(上P-10、下P-3) .....	40

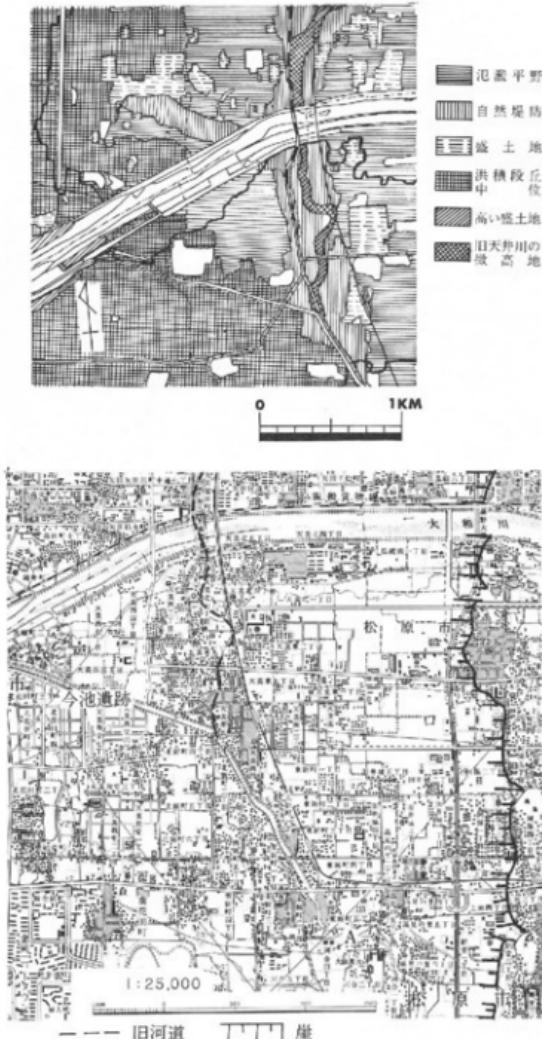
第 26 図	掘立柱建物-5	遺構図	41
第 27 図	掘立柱建物-5	各柱穴遺構図	42
第 28 図	掘立柱建物-5	各柱穴遺構図	43
第 29 図	掘立柱建物-5	出土土器	45
第 30 図	掘立柱建物-6	遺構図	46
第 31 図	掘立柱建物-6	各柱穴遺構図	47
第 32 図	掘立柱建物-7	遺構図	48
第 33 図	掘立柱建物-7	各柱穴遺構図	49
第 34 図	掘立柱建物-8	遺構図	49
第 35 図	掘立柱建物-8	各柱穴遺構図	50
第 36 図	掘立柱建物-9	遺構図	51
第 37 図	掘立柱建物-9	各柱穴遺構図	51
第 38 図	掘立柱建物-10	遺構図	52
第 39 図	掘立柱建物-10	各柱穴遺構図	53
第 40 図	掘立柱建物-11	遺構図	53
第 41 図	掘立柱建物-11	各柱穴遺構図	54
第 42 図	掘立柱建物-12 (上)・柱穴遺構図(下)	55	
第 43 図	掘立柱建物-13 (上)・柱穴遺構図(下)	57	
第 44 図	掘立柱建物-14 (上)・柱穴遺構図(下)	59	
第 45 図	掘立柱建物主軸表		63
第 46 図	時期別・掘立柱建物図		64
第 47 図	井戸状遺構-1	遺構図	70
第 48 図	井戸状遺構-1	遺物出土状態図	72
第 49 図	井戸状遺構-1	上層(包含層)出土土器	74
第 50 図	井戸状遺構-1	上層出土土器	77
第 51 図	井戸状遺構-1	上層出土木製品	78
第 52 図	井戸状遺構-1	下層出土土器	81
第 53 図	井戸状遺構-1	下層出土土器	82
第 54 図	井戸状遺構-1	最下層出土土器・木製品	84
第 55 図	井戸状遺構-2	遺構図及び出土遺物	85
第 56 図	井戸状遺構-2	上層・下層出土土器・木製品	87
第 57 図	井戸状遺構-3	遺構図及び出土遺物	89
第 58 図	井戸状遺構-4	遺構図及び出土遺物	90
第 59 図	井戸状遺構-5	遺構図	90
第 60 図	不明落ち込み遺構図		92
第 61 図	不明落ち込み遺構図		95

第 62 図	不明落ち込み遺構図	97 頁
第 63 図	不明落ち込み遺構図	101
第 64 図	不明落ち込み遺構図	104
第 65 図	不明落ち込み遺構図	106
第 66 図	P-43 遺構図及び出土土器	107
第 67 図	P-123・P-179 遺構図及び出土土器	108
第 68 図	P-161 遺構図及び遺物出土状態	109
第 69 図	P-161 出土砥石	110
第 70 図	P-193 遺構図及び出土土器	111
第 71 図	不定形刃器	112
第 72 図	石器類	113
第 73 図	黒褐色粘質土 出土須恵器 杯蓋 (1~18)	115
第 74 図	黒褐色粘質土 出土須恵器 杯蓋 (19~37)	116
第 75 図	黒褐色粘質土 出土須恵器 杯身 (1~18)	117
第 76 図	黒褐色粘質土 出土須恵器 杯身 (19~36)	118
第 77 図	黒褐色粘質土 出土須恵器 杯身 (37~54)	119
第 78 図	黒褐色粘質土 出土須恵器 杯身 (55~72)	120
第 79 図	黒褐色粘質土 出土須恵器 杯身 (73~91)	121
第 80 図	黒褐色粘質土 出土須恵器 杯身 (92~110)	122
第 81 図	黒褐色粘質土 出土須恵器 杯身 (111~140)	123
第 82 図	黒褐色粘質土 出土須恵器 杯身 (141~173)	124
第 83 図	黒褐色粘質土 出土須恵器 杯身 (174~189)	144
第 84 図	出土須恵器 壺	145
第 85 図	出土須恵器 壺	146
第 86 図	出土須恵器 高杯	150
第 87 図	出土須恵器 器台、不明須恵器、鉢	153
第 88 図	出土須恵器 線、蛸殻、土師質壺蓋	155
第 89 図	金銅製鉗、鉄製釘	155
第 90 図	土師器、土師質壺	158
第 91 図	出土、青磁、羽釜形土器	159
第 92 図	出土、瓦器、土製メンコ、不明陶器	160
第 93 図	出土、平瓦、丸瓦	162
第 94 図	出土、須恵質摺鉢、須恵器、摺鉢	163
第 95 図	須恵器出土密度図	164
第 96 図	土師器出土密度図	164
第 97 図	須恵器ヘラ記号拓影	166

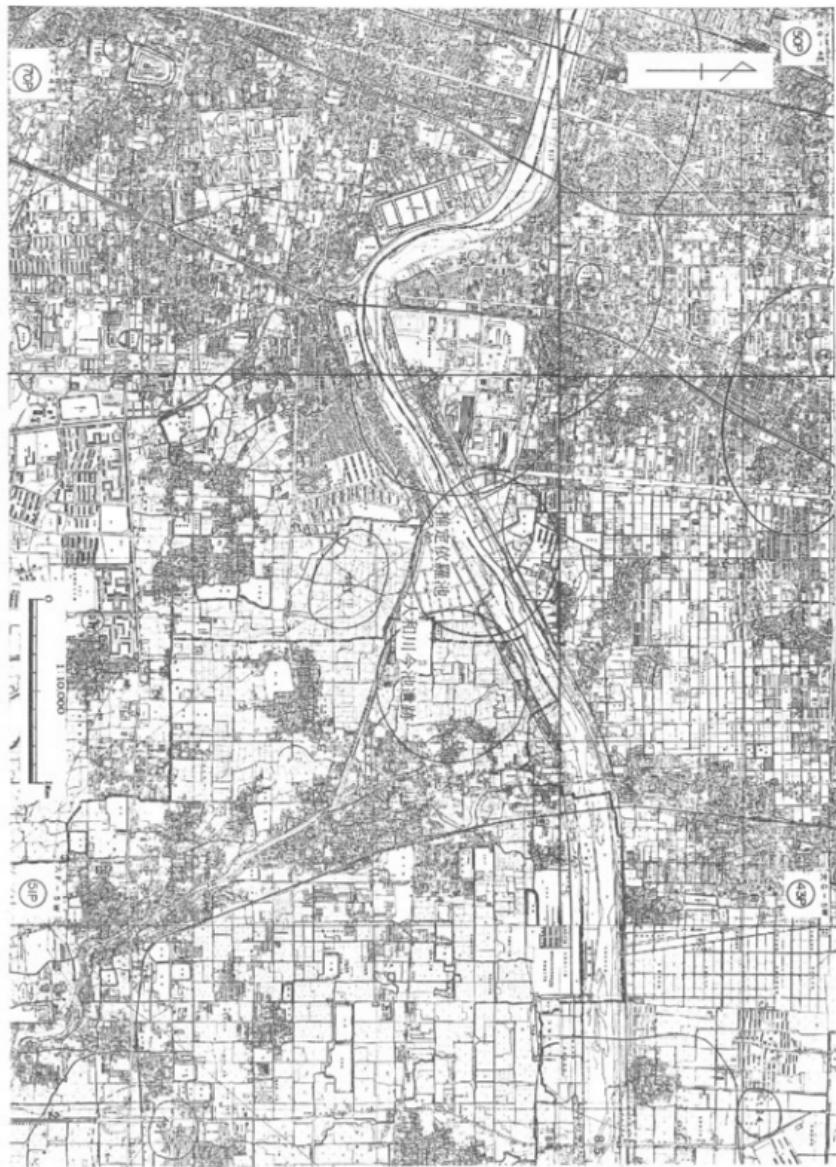
第 98 図	周辺旧状図と井戸位置図	169
第 99 図	井戸—1・2 遺構図	170
第 100 図	井戸—2 出土遺物	171
第 101 図	井戸—2 出土砥石	172
第 102 図	井戸—3・4・5 遺構図	173
第 103 図	井戸—6・7 遺構図	174
第 104 図	大和川今池遺跡周辺 旧状図「明治18年測量 大日本帝国陸地測量部」 抜粋	178
第 105 図	今池遺跡内小字名	180
第 106 図	依羅池、推定(太線)と周辺地形図(昭和36年作製)	183
第 107 図	依羅池の地籍図	183
第 108 図	「大和川開墾前地方図」一部(大依羅神社所蔵)	185
第 109 図	表題不明(大依羅神社所蔵)一部	185
第 110 図	「依羅池古図」(大依羅神社所蔵)	187
第 111 図	「大和川池中貫通見取図」(大依羅神社所蔵)	189
第 112 図	試掘地点の土層図	190

# 第1章 遺跡の位置と環境

本遺跡は、新大和川の南註-1岸の大坂府堺市北東部より大阪府松原市北西部にかけての地域、行政区画上の大阪府堺市常盤町から大阪府松原市天美西町にわたる広大な範囲をもつ遺跡である。この地域を巨視的に眺めると、生駒山地の麓に広がる河内平野（沖積平野）の南端部、摂津と中河内の境に位置し、東方には大阪府富田林市に現存する古代の池である狭山池より流れ出る東除川・西除川の2河川が註-2北方に向って流れている。周辺には、洪積台地に立地するという悪条件の為に灌漑用として掘削された大小様々な多数の溜池があり、近年まで附近はこれらの溜池が点在するのどかな田園地帯であった。しかし、大阪市の都市的機能の拡大に伴なって、寝屋川市・大東市等に見られる様な急激な宅地開発の波が押し寄せ、現在、急速に変貌しつつある。時の流れの必然である。



第1図 土地条件図・地域概念図



第2図 今池遺跡と周辺遺跡（「大阪府文化財地名表」大阪府教育委員会1977より抜粋）

とはいへ、旧来の地勢が次々と失なわれていくことは様々な意味で非常に残念に思われる。

## 1. 地理的環境（第1図）

今池遺跡は、大和川左岸に位置する。標高は10~11mである。

〔地質〕 西除川左岸の河合から今池に至る線の西南部、東方の新堂から阿保をへて高野大橋に至る線以東は、段丘層によって構成されている。この層は砂レキ、粘土、シルトなどの互層をなす。この両者に挟まれ、北に向かってラッパ状にひろがる低地は、沖積層によって構成されている。沖積層の厚さは、場所によって大きい違いはあるが、平均3~7mである。

〔地形〕 段丘層によって構成されている部分は、段丘（中位段丘）地形をなす。西方の段丘面の標高は、中央環状線付近で約28m、北ないし北西に向かって緩く傾斜している。この段丘面と西除川によってつくられた氾濫原との間に明確なガケは存在しない。これに対し、東部の中位段丘は標高が大きく、中央環状線付近で35m、大和川の左岸堤防付近で約65mとなっていて。この段丘面は、4~5mの比高をもって西方の沖積段丘に移行する。そして沖積段丘の西端は新池（図中一イ）と深瀬池（図中一ロ）を結ぶ線付近である。標高は30~13mで、西方の氾濫原に漸次移行している。

氾濫原の頂部は東新町5丁目（図中一A）付近である。そしてここを境にして、上流部では西除川によって形成された谷底平野が発達する。これに対し、下流部では現在の西除川にそつて自然堤防状の微高地がみられる。谷底平野は、この地域の上昇にともない、西除川が下方侵食を行なった結果つくられたものであり、自然堤防は、西除川の氾濫のくり返しによって形成された。地形の特色から判断すると、従来の西除川は天美南5丁目付近から北に向けて屈曲しながら流れていたものと考えられる。今池遺跡は西南部の段丘と東にひろがる氾濫原の、ちょうど境界部に位置する。（日下）

## 1. 歴史的環境

### 1. 旧石器時代

周辺に存在する遺跡のうち最古の人類の足跡としては、まず尖頭器が出土した堺市百舌鳥本町があげられる。また東では瓜破台地の東端、西除川の形成する微高地上（海拔約11m）に位置する大阪市平野区長原遺跡よりナイフ形石器が発見されている。これによって、この台地における人類の歴史の最初の1ページが旧石器時代に開かれていたことがわかる。

### 2. 繩文時代

北では大阪市西成区岸ノ里遺跡、南では堺市南桜町遺跡、東では前述の長原遺跡があり、それぞれ縄文時代前期から晩期にかけての遺物が出土している。大阪平野では縄文時代後期より

急増するが、この地域の遺跡出現もこれと軌を一にするものであろう。これには河内湾が海退によって縮小し、生活空間が拡大したことが理由の1つに考えられる。しかしながら、上記の遺跡では明確な遺構が確認されていない。また旧石器時代・縄文時代共遺跡の分布は希薄で、この地域で本格的に生活が営まれ始めるのは次の弥生時代を待たねばならない。

### 3. 弥生時代

大阪市域では住吉区西住之江町遠里小野遺跡、住吉区南住吉町住吉第8号地点遺跡、住吉区西住吉町第7号地点遺跡、<sup>註-7</sup>住吉区山之内町住吉第6号地点遺跡、<sup>註-8</sup>住吉区遠里小野町山之内遺跡、<sup>註-9</sup>東住吉区瓜破東之町瓜破遺跡、<sup>註-10</sup>前掲の長原遺跡等がある。<sup>註-11</sup>

このうち遠里小野遺跡は、上町台地の根幹部西側に位置し1938年9月に調査された結果、第1様式の鉢形土器片・サスカイト製打製石器・土師器などのほかに多量の蜻蛉形土器が出土し、海岸に面するという立地などから漁業を中心とする生活遺跡であろうという評価がなされている。その他、瓜破台地先端にある瓜破遺跡でも戦前より調査が行なわれ、新大和川の川床からではあるが弥生時代前期から古墳時代前期にかけての遺物が多数採集されてきた。この中で特に注意を引くものとして弥生式土器と共に採集された王莽の貨泉がある。近年では、瓜破遺跡の北で1975年の阪神高速道路大阪松原線建設工事と、1977年の都市計画道路新庄大和川線共同溝建設工事に伴なう本格的な発掘調査が行なわれ、大溝を周囲に巡らし内側に土塙墓を中心とする墓域をもつ大集落跡が検出され、それに伴なう弥生時代前期から古墳時代前期に及ぶ多量の遺物の出土をみている。また長原遺跡でも大溝（前期及び中期）、土塙墓（中期及び後期）、<sup>註-12</sup>竪穴式住居跡（後期）等が検出されている。<sup>註-13</sup>

堺市域では中田井町田出井遺跡（消滅？）、三国ヶ丘町三国ヶ丘遺跡（全壇）、北花田町北花田遺跡、<sup>註-14</sup>南花田町南花田遺跡、浜寺船尾町四ツ池遺跡等があげられる。<sup>註-15</sup>

しかし前の2遺跡は小数の弥生式土器・石器の出土が伝えられるだけである。北花田遺跡では弥生時代のピットと中世の井戸が検出され、弥生式土器・瓦器・曲物等が出土している。四池遺跡は1967年以来数次に渡って調査され、弥生時代全般を通じて溝・住居跡・井戸・方形周溝墓等豊富な遺構・遺物が検出され、弥生時代のこの地域の中心的大集落であったと考えられている。特に第1様式新段階の上器を周溝内に含む方形周溝墓やツル様の紐をまきつけたままの状態で出土した蜻蛉、多数の木器等貴重な資料が数多く報告されている。また、石津川遺跡等への分村のあともたどられ、弥生時代の社会構成を考える上で重要な資料を提供しているといえよう。

### 4. 古墳時代

大阪市域では住吉区西住吉町第10地点遺跡、住吉区遠里小野町住吉第4地点遺跡、住吉区杉本町住吉第3地点遺跡、<sup>註-20</sup>住吉区遠里小野町住吉第1地点遺跡、<sup>註-21</sup>住吉区山之内町住吉第5地点遺跡<sup>註-22</sup>

跡、東住吉区瓜破東之町花塚山古墳、平野区長吉長原町長原古墳群がある。

註-24 註-25 註-26

このうち長原古墳群は墳丘が削平され、近年まで存在が知られていなかったもので、地下鉄工事に伴なう発掘調査によって約17基の方墳と2基の前方後円墳の存在が確認された。このうちの塚ノ本古墳からは、各種の形象埴輪が出土し、周濠の斜面では5個の埴製円筒棺が発見されている。(『大阪府史』第一巻)。『大阪府史』では、花塚山古墳(墳丘消滅)もこの古墳群に含めている。新たな古墳群が見つかったことによって、この地域に古墳がないといわれていたことがくつがえされ、この地域の古墳文化研究に再考の必要性を生ぜしめた。

堺市域では北三国ヶ丘町田出井山古墳(伝反正陵)、天王古墳(田出井山古墳陪塚)、鈴山古墳、新掘町今池遺跡がある。

註-29 註-30 註-27 註-28

田出井山古墳は全長148m、後円部径76m、前方部幅110mの大古墳で、1重の周濠をもち、左側に造り出しを有する。鈴山古墳は1辺22m、高さ3mの方形墳で1重の周濠をもつ。天王古墳も1辺19m、高さ3mの方形墳である。これらは共に百舌鳥古墳群に属し、その北側に位置する。

今池遺跡は1975年に発掘調査され、6条の大溝と祭祀遺構が検出された。祭祀遺構は、溝肩から底に達する斜面を「コ」の字形に掘削して杭で板を固定した土留を付設し礫を敷いた上に、中央部に土師器・須恵器(6C中葉~後半)を整然と積み上げたもので、これらの遺物と共に荷札状木製品も出土している。遺構の性格については、河川に対する水葬祭祀の跡であると考えられている。農耕儀礼を考える上で重要な遺構といえよう。また、この時期に洪積台地に立地するこの遺跡周辺が開墾されつつあったことを示すものとして非常に興味深い。

松原市域では、松原市上田伝丹比柴窯宮跡、三宅町伝三屯(屯倉)遺跡、上田町上田町遺跡がある。

このうち前二者は推定されているだけで確証はない。上田町遺跡は、1964年と1973年に調査され、第1次の調査で古式土師器が出土して話題を呼んだ遺跡である。しかし第1次調査では、明確な遺跡は発見されなかった。第2次調査では、松原警察署構内で古墳時代のピットと中世の遺構が検出され、須恵器(古墳時代中期)等が出土した。この他弥生式土器・木杭・獸骨等が出土している。古式土師器は、今だ決定的な位置付けがなされておらず、今後もこの遺跡に期待する所は大きい。

以上のように弥生時代から古墳時代にかけて、遺跡数は爆発的に増加する。特に古墳時代は、この地域を挟む様にして、古市・百舌鳥の2大古墳群が営まれ、泉北古窯跡群が営まれるなど目立った動きが見られ、この時代の政治的・経済的な重要地域であったことがいわれており、今後研究が進むにつれてさらに大きな成果が上げられるであろう。

## 5. 古墳時代以降

### 〔遺跡〕

大阪市域では住吉区山之内町住吉第2号地点遺跡（奈良時代～平安時代）、住吉区千林町津守廟跡（奈良時代～鎌倉時代）、東住吉区瓜破東之町瓜破廟寺がある。  
註-34  
註-35

しかし、津守廟跡が1945年代に調査されて一応の確証が得られているだけで、他はまだ不明な点が多い。

堺市域では、新金岡町新金岡町所在遺跡、北三国ヶ丘2丁北三国ヶ丘遺跡がある。新金岡町所在遺跡は、2棟の建物と平行もしくは直角に連結した溝、墓坑、井戸等の遺構が検出され、土師器・須恵器の他に多数の中世遺物（瓦・羽釜・甕・瓦器・陶磁器類等）が伴出している。その結果遺構の年代を13C～14Cに比定し、このうちの墓塚をこの時期に遺跡附近の在地領主と考えられる和田氏に比定するなど、附近の中世史解明への重要な提言がなされている。北三国ヶ丘遺跡では、深さ1m程の南北方向に走る溝と小さな木棺墓等が検出され、溝からは14C末頃の瓦器のほか、瓦・瓦質甕・埴輪等が出土している。溝の年代は、出土した瓦器の年代と考えられ、同時に出土した埴輪はこの遺跡のすぐ西にある田出井山古墳のものが流入したものであると考えられる。埴輪の時代については、田出井山古墳の南南東約3kmに位置するニサンザイ古墳と同時期、すなわち6C初頭であろうと思われる。田出井山古墳の築造年代を考察する上でかかせない資料の1つになろう。

この他に本遺跡のすぐ西側には、堺市常盤町より大阪市住吉区庭井町にかけて古代に存在したと推定される依羅池跡があり、本遺跡の南約1.5kmの所には、藤井寺市国府（古代河内国の国府と推定される）から田出井山古墳（伝反正天皇陵古墳）の北側の方違神社まで一直線に西進する古代の道と推定される長尾街道がある。また本遺跡周辺には、条里制遺構が延々と広がっている。

推定依羅池跡は、「大和川新聞川筋絵図」（依羅池跡新田 大正14年写図）に新田地として開発された姿で描かれている。文献で見ると、『日本書紀』崇神天皇62年10月条に

（是月） 造依羅池。

とあり、また『古事記』崇神天皇条にも

又是之御世、作依羅、亦作輕之洒折池也。

と見える。この他に『日本書紀』推古天皇15年（607）冬条にも、

是歲冬、於倭國、作高市池・藤原池・肩岡池・菅原池。山背國、堀大溝於、栗隈。且河内國、作戸荘池・依羅池。亦每國置屯倉。

とある。従来の記紀研究の結果、応神天皇以前の記事は客観的史実からはほど遠く、以前の記事についても史実としては信憑し難い部分が少なくないことが明らかにされている。この点から考えて、崇神天皇条に見えるこの記事も一概には信じられない。また日本書紀において推古

天皇条に再度依羅（網）池造成の記事が見え、内容が重複することもおかしい。ただ、依羅池推定地には、現在も「依羅」の名のつく池が残り、すぐ傍には大依羅神社が存在する。またこの地は、古代の河内国と推定される範囲内にぎりぎりではあるが入る。その他附近の条里制造構が乱れていることや前掲の絵図などから、成立年代は正確には定められないが、「大阪府史」第1巻で森浩一も述べている様に記紀成立以前にこの推定地域に依羅池が造成され、後新田として開発されたとして誤りないと考える。

大津道については、岸俊男は長尾街道を大津道に比定する説が述べられており、筆者もこの説に従つてよいと考える。註-40 本書ではこの他に難波京の中軸線より松原市と堺市の境界線に至り、長尾街道に達する南北方向のもう一本の古道を想定する意見が出されている。大津道、丹比道に次ぐ第三の古道が存在するとすれば、それは本遺跡の真上を通過することとなる。しかし後に述べる如く、調査の結果現在までの調査地区内にはその痕跡は認められない。

条里制造構は、由井喜太郎によって里・条の起点や坪割が明らかにされている。それによると、丹比郡の条里は里の起点を長尾街道に置き、条の起点を摂津国住吉郡に接する北山・南山・桔木・油上・我堂を含む線に置いて、西南隅より西北隅に數える坪割となるとされる。この条の起点となる線は現在の松原市と堺市の境界線より1町分東にある。また住道附近で住吉郡（現在の住吉区にほぼ相当する）との中間に十二ヶ坪の里外地を有すると述べられている。復元地図をもとにして長尾街道まで里の線をたどると、どこかで1町分余るところがでてくる。条の起点となる線が松原市と堺市の境界線より1町分東にあることも疑問点としてでてくる。というのは、先の古道の復元でもこの境界線を基準にしている様に、従来この境界線は河内国と和泉国の境界に相当すると言われているラインである。由井説に従うと従来の国境説は修正をせまられることとなる。この他、「堺市史」続編第1巻には、由井説の国境の東側、すなわち摂津国大羅郷の長尾街道北側の条里が、いずれも「一ノ坪」から「六ノ坪」までを欠き、また河内国依羅郷に接する南北方向の条里が「六ノ坪」、「七ノ坪」、「十八ノ坪」、「十九ノ坪」、「三十ノ坪」、「三十一ノ坪」を欠くと述べられている。この説として同書では「摂津国大羅郷は『オオヨサミ』と読み、河内国依羅郷とともに、依羅池・依網屯倉のあった地域であり、依羅造・依羅宿禰物部依羅連など、依羅諸族の本貫であり、両郷は極めて共通した性格をもつ地域である。従って、この地域を縦断して摂津国境が設けられたことによって、条里坪付が政策的に不整合なものにされたということができよう。」と説明している。この様な不整合が起り得る原因は他にもある。条里の起点によって左右される場合もあり得る。たとえば八下郷（依羅郷に南接する）の場合、竹ノ内街道（丹比道）を起点とするために北方の長尾街道南側で里外地を生んでいる。この様に、この地域の条里については、まだ不明な部分が多く、これらの点が今後の研究課題として残されるであろう。

### 〔古代氏族〕

この地域の古代氏族として文献上に見えるものに依羅氏がいる。今これを年代順に追ってみると、

#### 史料1、『日本書記』仁徳天皇42年9月条

庚子朔、依羅屯倉阿弭古、捕異鳥、獻於天皇日、臣每張網捕鳥、未曾得是鳥之類、故奇而獻之。天皇召酒君、示鳥日、是何鳥矣。酒君對言、比鳥之類、多在百濟。得馴而能從人、亦捷飛之掠諸鳥。百濟俗号比鳥日俱知、是今時乃授酒君令養馴。未幾時而得馴。酒君則以韋縷著其足、以小鈴著其尾、居腕上、獻于天皇。是日、幸百舌鳥野而遊獵。時雌雉多起。乃放鷹令捕。忽獲數十堆。

#### 史料2、『日本書紀』皇極天皇元年(642)5月条

2未(王日)、於河内國依羅屯倉前、召麁岐等、令觀射獵。

#### 史料3、『西琳寺縁起』養老6年(722)3月23日

##### 一、僧宝等事

天平十五年帳之

僧沙弥並廿二口僧十六僧 見在口之中二僧借住

四不知去三死

僧行會 年五十四 摂津郡住吉郡大國里戸主津云々  
藤舟三 戊申年四月廿八日飛鳥守受或受公驗

(中略)

僧知藏 年五十一 河内國丹比郡余戸郷□□戸主依□白浪男廣鳥  
萬十九 養老六年三月廿三日藥師寺受戒受公驗

(後略)

右四僧不知去

#### 史料4、『統日本紀』神護景雲元年(767)7月条

辛未(24日)、河内國志紀郡人正六位上山川造魚足等九人、賜姓山川連。同國同郡人從六位上依羅造五百世麻呂、丹比郡人從六位下依羅造里上等十一人、依羅連。

#### 史料5、『新撰姓氏錄』引仁6年(815)7月

河内國神別 起蒼生朝臣。 尽等彌直。六十三氏。

天神

(中略)

物部依羅連

神饒速日命之後也

矢田部首

同神六世孫伊香我色雄命之後也。

(中略)

樺多治比宿祢

火明命十一世孫殿諸足尼命之後也。男兄男庶。其心如女。故賜樺為御膳部。次第男庶。

其心勇健。其力足制十子軍衆。故賜號四十千健彦。因負姓樺負。

丹比連

火明命之後也。

史料6、『新撰姓氏錄』弘仁6年(815)7月

河内國諸蕃 超高宿禰。卑伏丸。五十五氏。

漢

(中略)

三宅史

山田宿禰同祖。忠意之後也。

(中略)

依羅連

出自百濟国人素禰志夜麻美乃君也。

山河連

依羅連同祖。素禰夜麻美乃君之後也。

以上となる。史料1、2については、そのまま信じるわけにはいかないが、依羅に屯倉が置かれて依羅氏がその管理にあたっていたことだけは読みとていいと考える。「阿弾古」については直木孝次郎がカバネの一種であるとし、その伝承から大化以前の皇室と密接な関係のあるものが多いとしている。そして、官職としての阿比(弔)古が制定され、機能を発揮した時期を5世紀を中心とする時期だと考えられるとしている。また依羅屯倉については、井上辰雄が「もともと屯倉は、穀靈信仰と顯著に結びついていたであろう。」とし、「屯倉でも開墾地に立つ屯倉として初期に属する点に注目すれば、大王に対する御賛貢獻がほぼ5世紀初頭にすでに成立していたと考えてよいであろう。」としてその性格を説き、「屯倉の管理者は御賛貢獻を最も重要な職掌としていた」と依羅屯倉阿弾古の性格を説明している。これで依羅氏の性格がほぼわかる。

次に出自であるが、史料6では「百濟国人素禰夜麻美乃君也。」とし、史料5では「物部依羅連」としている。屯倉設置に関しては物部・大伴氏が深く関係しているとされるから(前掲書)、「百濟国人云々」はともかくとして物部系の氏族であることが考えられる。そして9世紀

初頭までは、確実に系譜が続いていたと考えられる。

居住地については、正確にはつかめないが、推定依羅池附近より推定依羅屯跡とされる松原市三宅町にかけての一帯であろうと思われる。

史料では、依羅氏の他にこの地域の氏族として矢田部首（大阪市住吉区矢田附近）、三宅史（松原市三宅町附近）、櫛多治比宿祢（丹比郡中）などが見え、このうち矢田部首は物部依羅連と同神をもつから依羅氏と深い関係にある氏族であろうと考えられる。また志紀郡の山川氏も同様であろう。文献上では以上のことことが考えられる。

[式内社]

式内神社は『延喜式』卷九 神祇に以下のように記されている。

神名上 宮中 宮中

五畿内 東海道

(中略)

畿内神六百五十八座 大二百卅一座 小四百廿七座

(中略)

河内国一百十三座

大廿三座 並月次祈嘗。既中、

八座預相當

小九十座

(中略)

丹比郡十一座 大三座 小八座

丹比神社

阿麻美許曾神社

御都

狹山提神社

大。月次

御都

新嘗

大津神社三座

御都

酒屋神社

御都

月次

普生神社

新嘗

御都

田坐神社

櫻本神社

御都

このうち本遺跡近辺のものとしては阿麻美許曾神社があり、大阪市東住吉区矢田枯木町に現存している。また北方には、大依羅神社（同市住吉区庭井町33）がある。（川口）

註-1 大和川は、現在は大阪平野に入ると大阪府柏原市より堺市まで西に直線的に流れている。しかしこれは本来、河内平野は北上して淀川に合流し難波津から大阪湾に注いでいたものであって、現在の流路は元禄十六年（1703）幕府の新大和川付替令によって、翌宝永元年（1704）着工・完成した人工河川である。

『松原市』第五巻 松原市史編さん委員会 1976年3月

『大和川』 藤岡謙二郎 学生社 1972年8月

『大阪編年史』第6巻 大阪府立中央図書館 1977年

註-2 これも元禄九年（1696）の「和泉国分間絵図」では、現在のように松原市天美西町より西方に折れて、大和川に合流せず、そのまま北流している。

- 註-3 「堺市史」第1巻 堀市史編さん委員会
- 註-4 「大阪府史」第一巻 大阪府史編集専門委員会 1977年3月
- 註-5 同上
- 註-6 中西弘光「堺市南櫻町の縄文遺跡」『古代学研究』1号
- 註-7 「大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告」第十二輯 大阪府  
『住吉区誌』 住吉区役所 1953年7月
- 註-8、9 濑川芳則「住吉の古代遺跡」
- 註-10 小林行雄「日本考古学概説」 刊元新社 1951年12月  
瀬川芳則「住吉の古代遺跡」  
『京都大学考古学資料目録』
- 註-11 「大阪府文化財分布図」 大阪府文化財センター 1977年3月
- 註-12 山本博「河内国大和川床出土の弥生式遺物に就いて(1)」『考古学雑誌』第30巻 第11号  
「河内国大和川床出土の弥生式遺物に就いて(2)」『考古学雑誌』第31巻 第2号  
山本博「統大和川床出土の弥生式遺物に就いて」『考古学雑誌』第31巻 第7号  
杉原莊介編「日本農耕文化の生成」 東京堂 1961年3月  
『日本考古学年報』5 1957年
- 註-13 「大阪市土木局の共同溝建設に伴う瓜破北遺跡発掘調査結果について」 大阪市教育委員会 1973年  
12月 現地説明会用パンフレット
- 註-14 註-4 参照。
- 註-15、16 註-3 参照。
- 註-17 整理中。
- 註-18 整理中。
- 註-19 この遺跡は表面採集によって古くより知られており、第2阪和国道建設に伴なって1967年より継続して調査がなされてきている。  
『池上・四ツ池』 第2阪和国道内遺跡調査会 1970年  
『第2阪和国道内遺跡発掘調査報告書』4 第2阪和国道内遺跡調査会 1971年  
『四ツ池遺跡』その7 四ツ池遺跡調査会 1977年  
『四ツ池遺跡調査概要』 堀市教育委員会 1975年
- 註-20～24 註-8 参照。
- 註-27 註-3 参照。他に『古代の日本』5 坪井清足・岸後男編集 角川書店 1970年
- 註-28、29 註-11 参照。
- 註-30 「今池遺跡」一学校建設予定地内発掘調査報告一 今池遺跡調査会・堺市教育委員会 1976年3月
- 註-31 註-11 参照。  
野上丈助「河内の古代遺跡と渡来氏族」 1977年
- 註-32 註-1『松原市史』  
註-11 参照。
- 註-33 原口正三「大阪府松原市上田町遺跡の調査」『大阪府立島山高等学校研究紀要』 復刊3号 1968年

- 「松原市上田町遺跡試掘調査概要」『節・香・仙』第27号 野上丈助・大阪府教育委員会 1973年
- 註-34 註-8 参照。
- 註-35, 36 註-11 参照。
- 註-37 「新金岡町所在遺跡発掘調査抄報」(中世墓地の調査) 堺市教育委員会 1978年3月
- 註-38 註-11 参照。報告書は現在作成中である。
- 註-39 津田左右吉『古事記及び日本書紀の研究』 1924年
- 註-40 「古代の日本」5 近畿 角川書店 1970年
- 註-41 由井喜多郎「河内国条里の研究」『ヒストリア』13号
- 註-42 直木孝次郎「日本古代國家の構造」 1958年
- 註-43 「古代の日本」1 要説 角川書店

### 文化財一覧表 (『大阪府文化財地名表』大阪府教育委員会 1977より抜粋)

#### 大阪市

登録番号	文化財名称	種類	時代	文化財所在地	所有者	地目	立地	備考
66	住吉宮跡			大阪市住吉区 墨江中	国及 住吉大社			史跡
68	住吉第8 地点遺跡	弥生・古墳		大阪市住吉区 西住吉町2丁目	速 利三	畑	台 地	範囲 (N-S 10m E-W 10m) 上 加藤片、須恵器片、石鏃。(我孫子中学校) 半墳
69	住吉第10号 地点遺跡	散布地 古 墓 墓		大阪市住吉区 西住吉町2丁目	大阪市	水 田	低 湿 地	範囲 (N-S 5m E-W 15m) 須 恵器片(我孫子中学校 濑川芳則) 瀬川芳則:住吉の上代遺跡 全墳
70	住吉第7号 地点遺跡	*	弥生・古墳	大阪市住吉区 西住吉町	山本敏男	畑		範囲 (N-S 20m E-W 15m) 石 磚、小型土器(瀬川芳則:我孫子中学校 瀬川芳則:住吉の上代遺跡 全墳)
71	住吉第4号 地点遺跡	住 宅 路 古 墓		大阪市住吉区 速里小野町3丁目	関西電力㈱ その他 川本正一 瀬川 良	畑	台 地	N-S 30m E-W 5m の範囲 須 恵器(縄、甕、壺、透、土器) 韓國土製品 石碑(瀬川芳則 我孫子 中学校) 瀬川芳則:住吉の上代遺跡 半墳
72	住吉第3号 地点遺跡	*	*	大阪市住吉区 杉本町3丁目	山野農事協	宅	台 地	範囲 (N-S 10m E-W 10m) 須 恵器(縄、甕、壺、透、土器) 土師器 (甕、杯) 幾の実駆(瀬川芳則) 瀬川芳則:住吉の上代遺跡
73	住吉第1号 地点遺跡	住 宅 地 ?	*	大阪市住吉区 速里小野町2丁目	関西電力㈱	畑		範囲 (N-S 20m E-W 20m) 須 恵器、土師器、土器、葬状土製品(我孫子 中学校 濑川芳則) 瀬川芳則:住吉の上代遺跡 半墳
74	住吉第2号 地点遺跡	散 布 地		大阪市住吉区 山之内町4丁目	関西電力㈱	宅	台 地	範囲 (N-S 20m E-W 20m) 土器 (我孫子中学校 濑川芳則:住吉の上代遺 跡 半墳 瓦(京瓦→平安)

登録番号	文化財名称	種類	時代	文化財所在地	所有者	地目	立地	摘要
75	住吉第5号地点道路	住居跡 古 墓	古 墓	*	*	原田栄助邸 ほか	*	範囲 (N-S 10m E-W 30m) 旗應 石器、輪状土製品「瀬川芳則・我孫子中 学校」瀬川芳則: 住吉の上代遺跡 全塗
76	住吉第6号地点道路	敷布地 住生・古墳	*	*	(市監査宅)	大阪市		範囲 (N-S 200m E-W 60m) 旗應 石器、輪状土製品、石小刀、石鏟 石斧、輪状石器、京都大学「瀬井英正 遺跡」、近畿大学「瀬井英正遺跡」、 大阪府立近畿考古学研究所「瀬井英正 遺跡」、住生式土器 (中、中 (3-4)) 小林行徳: 日本書古学概述「瀬井英正 遺跡」の上代遺跡 吉井・瀬井古墳群、京都 大学考古学資料月報 (P-228)
79	山之内道路		住生	大阪市住吉区 速里小野町		宅 地		
85	瓜破道路		住生前~後	大阪市東住吉区 瓜破東之町 (大阪市瓜破遺跡)				住生式土器、貨幣、木製品「農耕文化の 生成」
106	津守庵寺跡	寺院跡	奈良~鎌倉	大阪市住吉区 手錠町				昭和20年代に発掘調査 内瓦 土器出土
124	加美北遺跡	住居跡	住生・古墳	大阪市平野区 加美東作1丁目8-5				住生式土器・土器群

## 堺市

登録番号	文化財名称	種類	時代	文化財所在地	所有地	地目	立地	摘要
7	田出井町古跡	住生		堺市中田井町2丁		宅 地	古 地	住生式土器、石器 (石鏟、磨製小石斧) 「先史時代及び歴史時代の遺跡」 全塗と思われる。(堺市史第1章) 見2. 發見
8	田出井山古墳 (反正天皇陵)	前方後円墳	古 墓 中	堺市 北三国ヶ丘町2丁	市 内	(山 林) 堆 積 地	(丘 塵) 台 地	(高堤)、周濠1重、段築、 長軸方向N-S (伝反正天皇陵) 保存良好 (完存)、全長145m 掘徑76m 前方部幅10m
9	大王古墳	(円 墳) 方 形 墳	古 墓 中	堺市 北三国ヶ丘町3丁		山 林	台 地 上 半 部 地	1道13m、反正天皇陵隣接、保存良好
10	鈴山古墳	(古 墓) 方 形 墳	*	*	*	*	*	1道22m、高さ3m、周濠1重、段築、 埴丘保存良好、反正天皇陵隣接、埴丘の 西側濠既存、東、北、南側道路及び空地 のため破壊
18	三国ヶ丘道路		非 生	堺市 三国ヶ丘町底1丁		宅 地	(丘 塚) 台 地 上	弥生式土器、石器 (石臼丁、石鏟、石鋸、 石斧、磨製石斧、土器統織串) 「先史時代及び原始時代の遺跡」(堺市 史第1章) 大13発見
37	南花田遺跡		非 生 中	堺市南花田町			平 地	

道路番号	文化財名稱	種類	時代	文化財所在地	所有者	地目	立地	摘要
39	北花田通路	住居跡	弥生～唐	堺市北花田町		水田・宅地	平地	範囲300×500m 通構大型ピット(弥生)、井戸(縦立)、弥生式土器(壺、たら、壺瓶)、石礫、瓦片(関大考古学研究室)、西除川の流域に位置し、水田耕作のために削りとられ、深いピット状戸等を残す。瓦礫層により堆上されている。破壊の危険性大。
172	北三国ヶ丘通	散布地	古墳～鍾乳	堺市 北三国ヶ丘2丁				スズ山古墳周辺 堺市教育委員会発掘調査、北野俊明 1977
175	方盧神社のくろがねもら			堺市 北三国ヶ丘町2丁82	堺市			府天
179	今池通路	溝	古	堺市 新領町1丁85-2 (通称今池)				森健一「今池通路」堺市教育委員会 1976.3
190	向魚寺路			堺市三国ヶ丘				

### 松原市

道路番号	文化財名稱	種類	時代	文化財所在地	所有者	地目	立地	摘要
2	丹比柴難古跡	古殿跡	古墳後期	松原市上田215	安松産業	耕・宅地	平地	範囲N 1300m E 1000m 宮跡を証明する資料は発見されていない。 大正9年、昭和19年史跡指定
4	上田町通路	集落跡	古墳前期	松原市上田町	郵政互助会	宅地	+	弥生式土器、古式土器、須光器「大阪府立歴史博物館研究紀要」復刊3号(1966)『船・青・仙』第27号(1975)前後円墳「大阪府の歴史」(1975)
8	三宅(毛倉)通	古墳後期	古墳後期	松原市三宅、馬場		+	+	範囲(N S 200 E W 180m) 佐倉を証明する資料は発見されていない。

## 第2章 調査経過

大阪府堺市常盤町から松原市天美西町にまたがる大和川・今池遺跡は従来の堺市、大阪府で作製された分布地図には記載されていなかった大遺跡である。

ところが、昭和52年11月9日、大和川下流西部流域下水道、今池処理場、第1処理棟が堺市側に建設される事になり「堺市宅地開発等指導要綱」に基づき埋蔵文化財包蔵地確認調査を実施した結果、地表下30~50cmに遺物包含層（黒褐色粘質土）が認められた。数ヶ所に試掘調査溝を設定し発掘調査に必要な資料作製を行うと同時に調査会を組織することを決定した。

工事主体である大阪府南部流域下水道事務所と數度協議を重ね、発掘調査、報告書作製、さらには保存及び整備計画について進行させ、同時に本遺跡を「大和川・今池遺跡」と命名した。

発掘調査に伴う費用は大阪府下水道部が負担し、昭和53年4月1日より昭和53年6月14日まで発掘調査を実施した。

遺構の基盤面が粘質土であったことや天候不順なども重なり検出には困難をきわめたが古墳時代の建物、溝、井戸状遺構、不明ピットと後世の井戸、杭列を多数検出した。

その結果を踏まえて、第1地区の遺構についての保存と事後処理について理事会を開催し、同年9月7日まで数回にわたり三者協議を重ねたが諸々の事情から記録保存と決定し、涙をのみキャタピラの下になる遺跡を現場事務所の窓から見ることになった。

遺物整理は現地説明会用にパンフレット「発掘調査資料、その1」を同年7月に作製したのをはじめ、同年12月末までに実測を完了し、昭和54年3月末までトレイス、遺物写真撮影、レイアウト、文書作製と努力をおしまず協力してくれた学生諸君には労苦を多くかけた。

報告書作製中に、合計約15700m<sup>2</sup>の発掘調査を実施したので時間的な制約から十分な報告書作製が出来ず不備な点が多い。

発掘調査で出土した遺物は、整理され現場事務所(プレハブ14×4間2F 4×6間1F)に



第3図 調査風景

保管し写真パネルと同時に展示している。

発掘調査、内業調査には、関係各位から多大な御援助を賜った事を末筆ながら謝意申し上げます。

又、最後ではあるが数次にわたる発掘調査は関連遺跡に先行して発掘調査を実施してきたむきがあるが、下水場計画に先行して大きなブロック毎に発掘調査を進行していく事が出来ればより多くの意義多い古代人の足跡を知る事が出来るものと考えています。

発掘調査の詳細な調査経過は、次の調査日誌抄を参照していただきたい。

#### 調査日誌抄

昭和53年3月15日 キリン草等が繁茂しており、草刈りと廃材処理に3月18日まで手をかけた。

調査区域の設定と、O、Pを第1地区に移設（O、P 10,000mポイントを設定）した。

3月16日 発掘調査の調査方法を決めるため調査員と打ち合せ

平地遺跡であることからみて生活遺構や生産遺構の存在を考慮して精査面を数次にわけて調査する必要あり。

3月18日 空地となって数年を経ていたので湿地化がはげしく湿地用ブルドーザーによって盛土と耕作土を南側に堆積した。南側に2m強の盛土が行われていたので湧き水がひどく堆積に困難し、北東側に排水溝をセットする作業と乾燥に4月3日まで時間を費いやした。

4月4日 水中ポンプ、ローリングタワー等発掘調査資材の搬入。

4月5日 西北隅より10m×10m区画毎に人力掘削開始。

調査前に湿地帯であったが、乾燥すると一転して亀裂が入る悪条件である。

4月7日 A-1 2 3区画のG L-45cmで耕作用の畦に打ち込まれていた杭列検出、土師器、須恵器、瓦器、瓦片、スラッグを検出するが、極めて細片化し保存状態もよくない。

4月8日 B-1区画赤褐色土中より土製メンコ出土。

A、B、C列の掘削範囲について、今池遺跡の遺構保存状態を知るため慎重を期して5cmづつ精査をくり返したのは、包含層がわずか30~40cmという厚さであったからである。

4月10日 南側に押していた堆積を場外処分開始。

A-3包含層下層より大型蛤刃石斧出土。基部中央で欠損しているが保存状態は不良。

4月11日 A-3において溝-1の北端検出--溝の底部かと思われるが、どうも形態、埋土に不心な点があり、周辺調査によって判断したい。須恵器、土師器が含有されているので古墳時代の遺構である事は確認できる。

A-3、溝-1の黒色土中より石蠍出土。

4月18日 建物1、2の柱穴を上面精査によって検出した。

地山の黄褐色粘質土に黒色土の埋土がみられ検出は容易であるが他の面と同じく遺構の保存

状態は悪い。

4月19日 建物一1は試掘調査によって、一部カットされているが、 $2 \times 2$ 間の堀立柱建物であることを確認し、その柱穴内から柱根が認められた。

建物一2は $2 \times 4$ 間の堀立柱建物で、南側の1間分は、他のピットと形態が異なり増築の可能性あり。なおピットの多くは、約 $60 \times 60$ cmの方形柱穴である。

4月22日 細長い不明ピットが南側に連なり一直線に伸びてくる落ち込み遺構は溝であることが明らかとなった。建物一2の東側に径10数cmのピットがあり、建物と対をなす入口部の柵かもしれない。

4月26日 溝一1、2共に上面には、須恵器、土師器片が多いが、下層部にはほとんどみられない。 $1 \times 1$ 間の倉庫らしき建物、建物一3を検出した。

5月1日 井戸状遺構一5は、無遺物であったが建物一2とほぼ同時期に當まれたものと思われる。

掘削完了後、地山の砂土層より水がしみ出してくる。

5月2日 井戸一2(A-6)の埋土の砂を掘り下げていたが、地山が砂土に変化し徳利状になってきたのでGL-2.2mで掘削を中止せざるを得なかった。

井戸底部までGL-4.0m以上と思われる。

5月8日 井戸状遺構一1の上面より須恵器、壺、壺蓋を検出した。

最近、現場は暑くなり悪臭がただよい1時間と外に出る事の出来ない風向きの時がある。

5月13日 井戸状遺構一1の掘り下げ開始、上層でも北側に特に遺物が多く堆積していたようだ。下層からは、須恵器、短頸壺が口縁部を上向け正に置いたかのように出土した。

5月16日 井戸状遺構一1、最下層より、一括して土器が置かれ、土師器壺の中に小さい壺が入れられた状態で出土したものもある。

5月18、19日 連日雨模様がつづき、排水作業が思うように進まず地山の粘質土がヘドロ状になって現場の状況を悪くしている。

乾燥と雨の繰り返しがつづき、遺構の維持状態が悪化しはじめたので調査区域全体にビニールシートをかぶせる事にした。

5月20日 C、P、E-1、2、3写真用精査

5月23日 東柱をもつ建物一5は、整美な掘立柱建物で、各ピットは1辺50cmを計る。建物一5 P-3より有蓋高杯蓋部出土。

5月24日 建物一5の東側地山直上に食い込んで金銅製鉛出土。

周辺に落ち込み等の遺構検出を試みたが不可能であった。

5月25日 溝-2の底部はU字形にはなっておらず凸凹がきわめてはげしい。これは地山の黄褐色粘質土がえぐれたためで、後黒色土が堆積したものであろう。溝-1とともによどみ状に流れていたと思われる。

5月26日 塗はずし開始。建物-7、8、9、10、11、12、13、14はピットの間隔も不ぞろいで、ピットの形も方形を呈さない。その他の建物のピットにも言える事だが、遺物はほとんどみられず時期決定に不安を残す。

5月27日 耕作用に使用された井戸は、各々多少の差はあってもG.L.-1.6m位で湧き水がおこる。現場の上面は亀裂がはげしく写真撮影に苦労する。

建物-14棟すべてが掘立柱建物で、主軸の相違と出土遺物から考えて4期に別かれて建てかえていったようだ。

5月13日 遺構の重複がきほどみられないでP-80、81、43井戸状遺構-3 P-60なども判明しやすく、比較的保存状態もよくピットから出土遺物が認められた。

6月1日 井戸をユンボで掘削し、(4×4×4m) 井戸の湧水構造を地層的に知らべてみた。  
井戸-7は、G.L.-2.6m下で有機質層に達し、流木が食い込んでいた。

6月3日 P-161より砥石を2個検出し、ピットの形態からみて根石に転用されたものとおもわれる。

6月5日 航空測量用の杭打ち開始

6月7日 航空測量用のヘリコプターによって写真撮影

1/100と1/20のスケール図画作製。各検出遺構を数段のビデより上面写真撮影

6月10日 各ピットの写真撮影

6月13日 最終的な調査範囲を1/100スケールで外形測量を行う

6月14日 建物、その他ピットについてメモ作製

6月15~20日 実測図の修正と統一作業、今後内業作業計画打合せ

遺物整理の人員確保と整理場所等に問題はあるが年内中に遺物実測完了を計画し、愛泉短期大学、大阪市立大学、関西大学、佛教大学、関西外語大学学生諸君の協力を要請する。

6月30日、7月1日 両日、現場説明会を実施し約300人の見学者が来られた。

現場の維持管理に問題があったようで保存状態は良くないのでがっかりされたむきがある。

(森村)

## 第3章 調査結果

### 1. 現状と調査方法

#### 現状

先述したように土地条件図や地質調査によって洪積段丘中位として実証されたこの第1地区は、表面観察では周辺も広大な平地として目に入る。

発掘調査に入る前は、堺市西除下水処理場建設工事に伴う盛土が2m強に達し第1地区に湧水がしみ出し、キリン草の繁茂するところとなり、さらに湿地化が著しかった。

用地買い上げ後、数年を経ていたのでゴミや廃物がめだち、中には包含層にも達する大きな掘削が数ヶ所あった。

#### 調査方法

本調査区の土層は大別して、Ⅰ—耕作土、Ⅱ—黒褐色粘質土（遺物包含層）、Ⅲ—地山（黄褐色粘質土）からなっている。遺物を包有し遺構の保全に役立っていた黒褐色粘質土は、約30~40cmと薄く後世の削平、擾乱は否めない。

昨年の試掘資料によって、

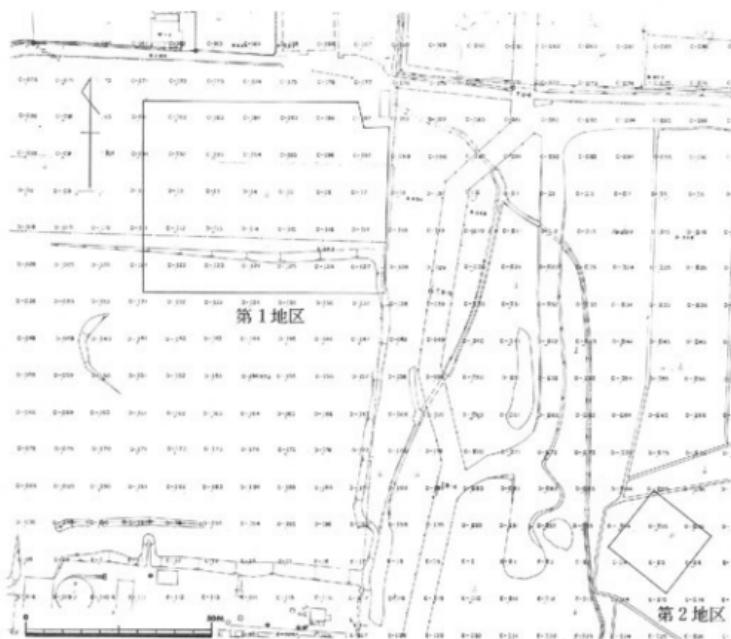
地山までが浅いことや、包含層に含まれる遺物、遺構の濃度を十分考え、10×10m方眼杭を打ち北から南へA、B、C、D、東へ、1~6と番号を打ち調査区のゾーンを設定した。

特に今池遺跡そのものの遺構を知る為に、耕作土の堆土後は5cm毎に下げ、そのつど精査を繰り返し掘り下げた。その結果、古墳時代の遺構面上に、近世の遺構が存在していた。



第4図 第1地区・第2地区位置図

さらに検出した各遺構については1/10スケールで実測し、全体図は1/20と1/100スケールの航空測量図から作製した。それは、時間的制約と精度の2点を考慮したからである。これらの検出



第5図 第1地区・第2地区位置図

した造構の保全と掘削方法を考え、北側に去年の試掘溝を再掘削して(幅50cm、深さ50cm)の排水溝とした。

又、航空測量には、国際航業KKに依頼した。ただ、心残りは、大和川、今池遺跡全体の方眼図を作製した後、調査体制に入れなかった事と、考古学専攻の調査員と調査補助員で組織出来なかった点である。

## 2. 層位 (第7~10図)

東西に幅0.5mの土層観察を行うための畦(A、B、C、D列)を残した。

4列とも層位的には、大きく耕作土、床土、黒褐色粘質土(7.5Y R 1/2)、地山(黄色粘質土、2.5Y 1/2)の4層から成る。ラクダのこぶ状の小さい凹凸がある褐灰色粘質土(7.5Y R 1/2)は上、下層の混入土で、一部遺物を含んでいるが、どうも上層より食い込んできたものと考えられる。地山も褐灰色粘質土と同様にラクダのこぶ状の凹凸があり自然条件と粘質土という条件に起因しているようである。こぶ状の隆起が水田跡の畦という向きもあったがその痕跡は検出されなか



第6図 造構全体図

った。

A列が、他の列よりも地山のこぶ状隆起が激しい。地山のO.Pは10,000m前後で、東西についてはほぼ水平といえる。

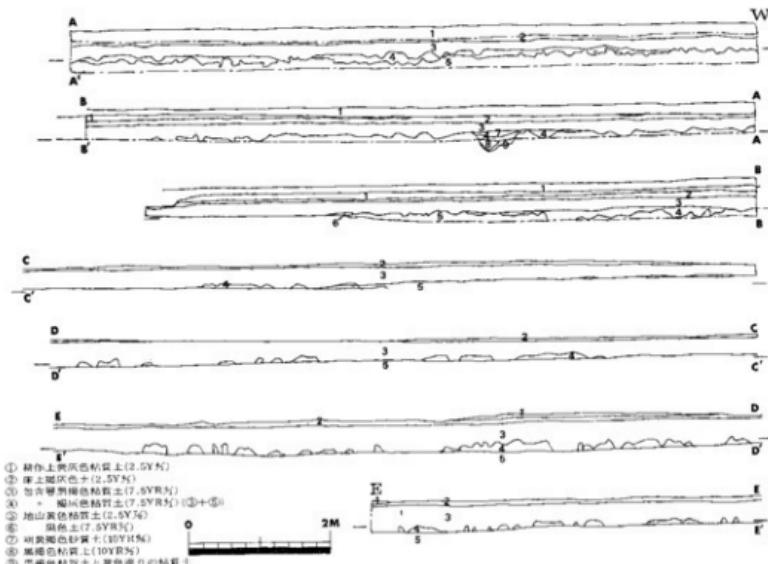
従って、遺構の保存も黒褐色粘質土の20~30cm、耕作土、床土の30~40cmと極めて薄く良好とは言えず、過去の耕作土そして遺物包含層はもちろん、地山そのものも、ある程度削平されている。

B列に他列と共に言える事として水平層の堆積があるが、地山こぶ状の隆起は少くなくなっている。

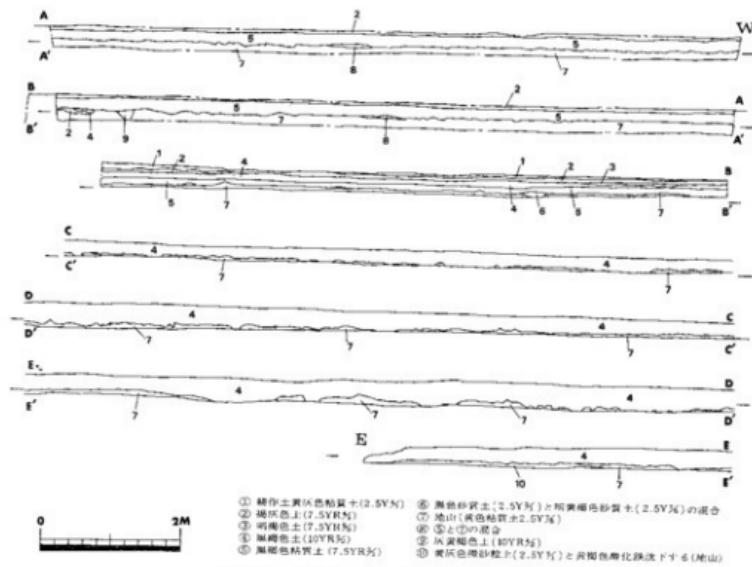
大きく層位に変化はみられないが、ブロックとして明褐色土(3)灰黃褐色土(9)地山と黒褐色粘質土の混入土が入る。

西から20~30mの畦に限り、条件の良い土層観察が出来た。その結果、黒色砂質土と明黄褐色砂質土の混入土(6)のブロックは地山に食い込み、遺物包含層も黒褐色土と黒褐色粘質土に2分でき、厚さも約20~30cmを2層に別けた。

セクション-C列は、東側では地山のこぶ状隆起が多くみられるが、西側ではさほど認められ



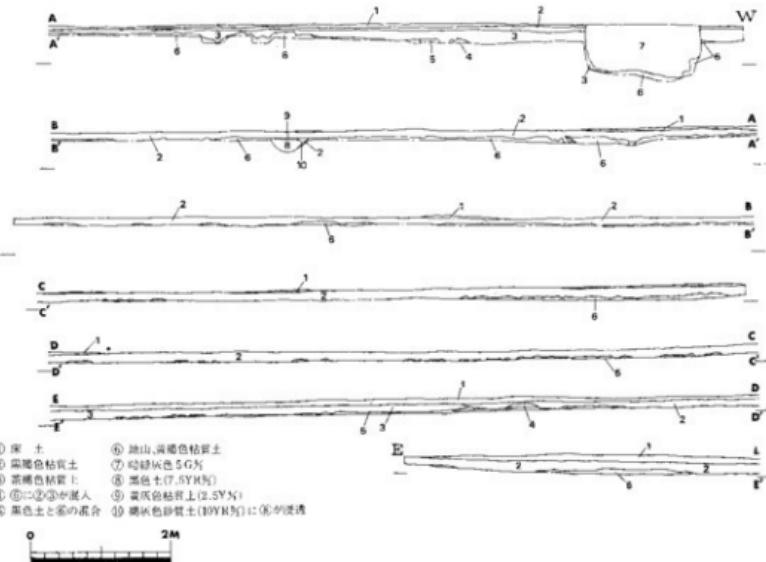
第7図 セクション-A 土層断面図



第8図 セクション-B 土層断面図



第9図 セクション-C 土層断面図



第10図 セクション-D 土層断面図

ない。遺物包含層の黒褐色粘質土は、西よりも東が分厚く堆積し遺物も多く検出された。遺物包含層の厚さは、0.2~0.3mを計る。

セクション-Dの西端は、試掘溝によって擾乱を受けているが20~30cmの包含層は水平層を呈し、地山のこぶ状隆起は少くない。

地山は、西南部が最も高くその他の部分は約30cm位低い。

黒褐色粘質土と地山が粘質土の為、水に対して軟硬が激しく、亀裂が大きく入り土層観察に支障をきたした。

### 3. 溝

当初、不明ビットかと思われていた溝-1は、最終的には溝として一直線上に並ぶこととなつた。溝-1、2はT字形に配されて住居址群と相互関係がみられ、雨水等の排水路として利用されていたらしく、水の流れはゆるやかで、當時よどんでいた事が埋土から推させる。溝の底部しか残存していないので判明しがたいが、溝底部と地山の高さ、溝の形態から考え合わせて、3方に流れ去っていた。すなわち、溝-1は、南から北へ、溝-2は、溝-1の交点から西と東に分流していた。

溝-2の両端に複雑な存在関係にあるのが溝-3、4、5であるが、北端のみで、全容は不明である。

同地区東端には、おそらく、一本の溝としてつながつと思われる溝-6、7、8が東側にみられた。

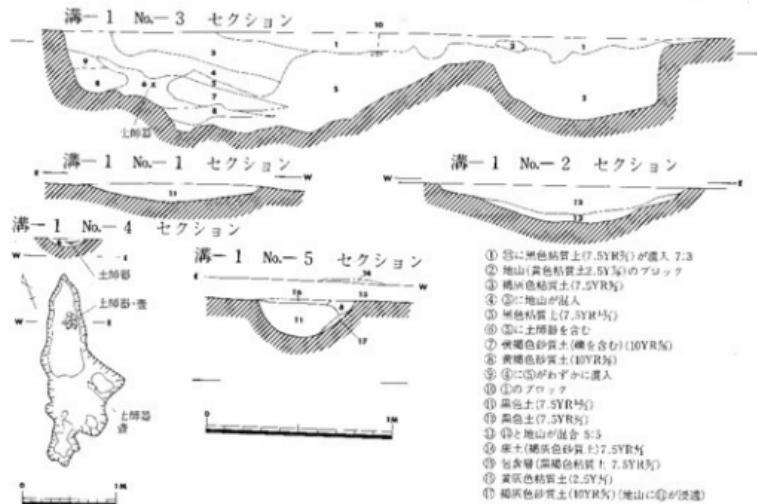
### 溝-1 (第11図、図版-3)

溝-1は、D-2からA-3に向けて流れていたようで溝の広がりも北側で顕著にみられたし、浅い。A-3の造構は、長さ2.9m以上、最大幅0.9m、深さ、0.1mと浅くレンズ状平面をなしておらず、中央底部から弥生時代の石鏃を検出した。北端は、試掘時にカットされていた。

屈曲したB-3の造構は、長さ約4.8m、深さ0.2m、深さ0.2mを計り、浅い摺鉢状の断面となっている。セクションIの埋土は、黒色土(7.5YR<sup>1/2</sup>)のみが堆積していたが、セクション-2は⑩と⑫層の2層が認められ、遺物は土師器の細片が少しみられた。C-2、3にかかる溝底は、溝とはほど遠い形状のものであった。埋土は黒色土のみで遺物は認められない。

D-2の中央にある井戸状と思わせるほどの深い溝は、水が流れて掘削されたえぐれ方とは思えないところがある。須恵器、弥生式土器、土師器片が出土した黒色粘質土を基盤として面倒に褐色粘質土、黒色粘質土、黄褐色砂質土が堆積した後、東側上層の①層がこの造構部分の大半に埋土していた。(セクション-3)

土師器の壺を溝底より検出したD-2南端の造構は、長さ約2.1m、最大幅0.8m、深さ0.1m



第11図 セクション 溝-1 土層断面図及び平面図

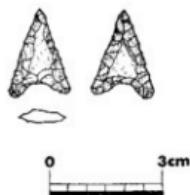
位と浅い。(セクション-4)

長さ約4.2m、最大幅1.0m、深さ0.2mを計測したD-2の溝-1は、細長く南側に深い部分がみられ北側にやや浅くなっている。黒土土を主に⑧、⑯、⑰の3層がブロックとして混入していた。(セクション-5)

#### 石 鎌 (第12図・図版-35)

サスカイト製。(現存長2.35cm、幅1.30cm、厚0.35cm、重量0.90g)

四基式で身部が二等辺三角形をした端正な形の石鎌である。両側面に両面からフリー・フレイキングによる細かな剝離調整を施しており、両面中央には各々直交する方向の大剝離面が三角形状に残存する。基部の加工は最終段階の剝離調整によって施されている。基部に最大厚をもっており、鎌の重心は中心よりやや下方の基部近くにある。尖端は鋭さを残しているが、A面側にやや反っている。



第12図 溝-1 出土石鎌

#### 溝-2 (第13図・図版-4)

D-1からE-4にかけて全長約40mを検出したこの溝は、両端の試掘による擾乱をのぞけば西側の一部で断続する以外は溝底はつながっていた。溝-1と交わった溝-2では西側より西と東に分流していたかのような凸帯がみられた。

この溝の西端は、深さ0.2m弱の断面に黒褐色粘質土と②層(黒褐色粘質土に地山が混入)が混入していた。後述の②層は、ブロック状のもので遺物もきわめて少くない。(セクション-1)

長さ約7m、幅0.5~1.5mの西側溝底は、西よりも東に深く大きく、埋土は黒色土の茶味、黒色土に一部地山混入、黒色土十地山(5:5)の3層に大別でき1部に5層がブロックとして流れ込んでいた。(セクション-2)この遺構の西端、両岸は、20ヶ所程度の0.3×0.1~0.5×0.1mの不明ピットが確認されたが遺物もさほどみられず性格は不明ではあるが、遺構の中度が気になる。溝-1の交叉から東側は、溝底に凹凸があるものの一応通有の溝らしき形態をしている。西から東に向けて溝底は深さ0.3~0.5mに達し、2~3層の水平線によって埋土されていた。

又、溝中の出土遺物は、大半が溝の上層より出土し下層になるにつれて、細片化し量も少くない。

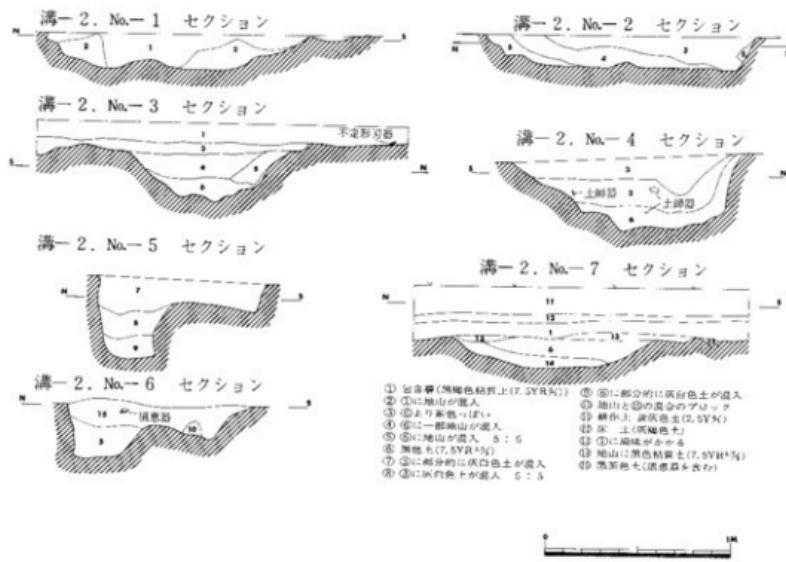
セクション3はU字形の断面を呈し、3、4、6層の水平な堆積に5層がブロックとして入り込む。尚、北側溝肩より半分近く黄褐色粘質土の地山に食い込む状態で不定形刃器が出土している。

いる。北側は直立に、南側は斜めに傾斜し、底部は水平な断面中に、2、3、6層が堆積し、この部分では、幅約1.25m、深さ0.37mを計測出来た。

セクション-5、6は、南側に一段持ち北側できらに一段下がり、北側壁は直立ぎみに成っている。セクション-5の部分では、黒色土を基準層として灰白色土が水平層に混入している。

5層の上層に20~30cmの厚さで堆積した黒茶色土がほぼ水平に認められ、須恵器片が多数出土した。

半月型の断面を尾するセクション7は、東南に向けてやや浅く消滅しそうな感じである。下層から14層と6層の黒色土が検出し、両肩にレンズ状に黒褐色粘質土がみられた。出土遺物は、若干出土したが遺構が浅いためかローリング、細片化が激しい。



第13図 溝-2 土層断面図

#### 溝-2 出土遺物 (第14図・図版-34)

溝-2の上層より出土した土器は大半が破片化しており、完形品はみられなかった。ほとんどが $\times$ 位の残存状態で、それぞれの全容を知るにはほど遠い状況にあるが溝-2の使用時期、検出状況の把握には必要資料といえる。

又、出土土器は須恵器が大部分を占め、土師器の出土もみられたが細片化と風化が顕著で岡化出来る遺物はない。詳細な土器観察は、土器一覧表に述べることにしたい。

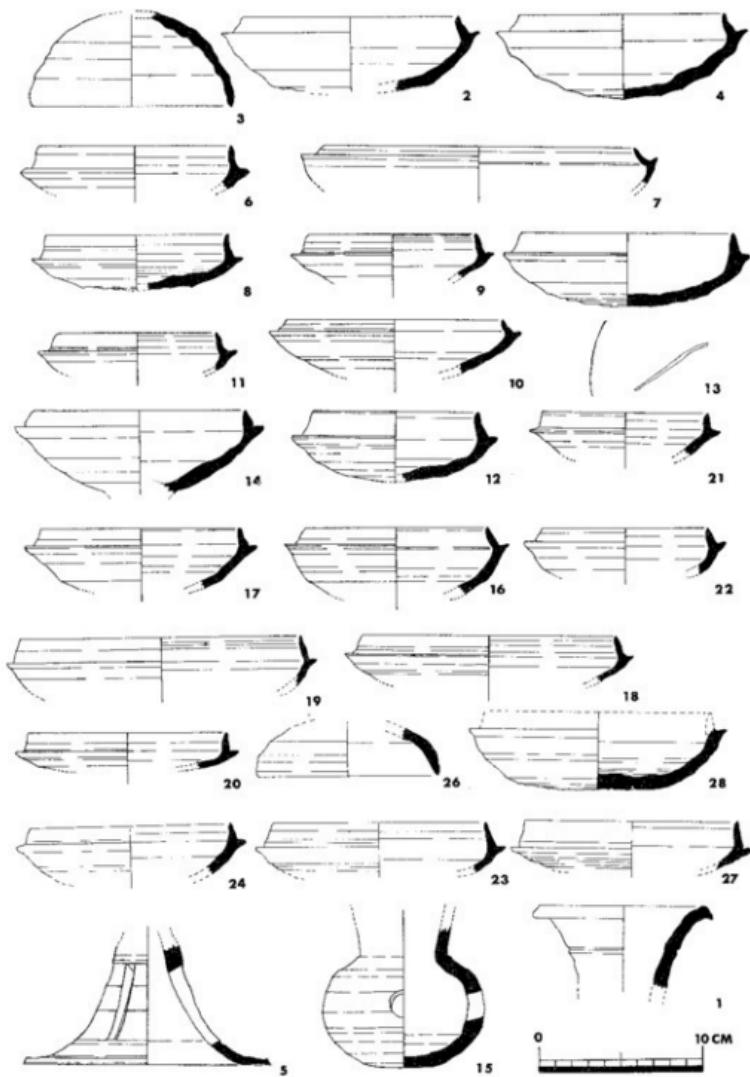
図示したように、6世紀前半から中葉にかけての時期に層する出土土器が多く細片ではあるが5世紀後葉に遡る杯身の検出をみている。しかし、量はごくわずかである。

## 溝一2 出土土器一覧表

種類	経済番号 図版番号	出土場所	法 番 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
共 盤 底	14-1	E-3	口径(推)10.0 残存高 4.8	腹部はわずかに外反しながら上方に伸びる。 上部は強く外反する。 口縁端部は、やや下方に引き出す。 腹部外縁に一束の凹縫を有する。	軸ナダ調整。	胎土、密。3mmの繊を含む。 焼成、やや不良。 色調、内面、10YR 4/4に近い 黄褐色。 外面、10YR 4/4灰白色。
圓 杯 (身)	14-2 34-2	E-2	口径(推)13.1 受部径 15.6 (推) 残存高 4.6	たちあがりは、内傾した後わざかに屈曲して上方に伸びる。 腹部は丸い。 受部は強く、外上方に伸びる。 底部は丸い。	外側底部、回転ヘラケズリ調整。 他は、回転ナダ調整。	胎土、密。3mmの繊を含む。 焼成、不良。 色調、内面、2.5YR 4/4灰白色。 外面、2.5YR 4/4灰白色。
圓 杯 (蓋)	14-3 34-3	E-2	口径(推)11.8 残存高 5.7	口縁部は、内寄し、腹部はやや低い。 天井部は丸い。	外而天井部、回転ヘラスズリ 調整。 他は、回転ナダ調整。	胎土、密。3mmの繊を含む。 焼成、良好。 色調、2.5YR 4/4灰白色。 ひずんでいる。
圓 杯 (身)	14-4 34-4	E-2	口径(推)12.4 受部径 15.2 (推) 残存高 5.2	たちあがりは一度内傾した後、屈曲して上方に伸び、腹部はやや低い。 受け部は薄く外上方に伸び、腹部は低い。 底部は凹レンズ状を呈す。	外而底部、回転ヘラケズリ調整。 内而底部、一方側ナダ調整。 他は、回転ナダ調整。	胎土、密。粗糲を含む。 焼成、不良。 色調、内面、2.5YR 4/4灰白。 外面、2.5YR 4/4灰白。
圓 杯	14-5	E-3	底部径 15.0 (推) 残存高 7.3	脚部上部は、直線的にやや傾くが、腹部はむかみに従って広がりが強くなる。 輪郭付近では、ほぼ水平になり、輪郭に凹縫をもつた。 脚部上端と底部に一束づつの沈継を施す。 三方秀でし。	回転ナダ調整。 内而底部上部にしばり跡が見られる。 透かしはハラによる穿孔。	胎土、密。5mmの繊を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N 4/4灰白。 斷面、N 4/4灰白。 外面、N 4/4灰白。
圓 杯 (身)	14-6	E-4	口径(推)11.6 受部径 13.8 (推) 残存高 2.7	立ち上がりは長く、直直筒形に伸びる。 受け部はやや外下方に伸びる。	回転ナダ調整。	胎土、粗。 焼成、やや不良。 色調、内面、2.5YR 4/4灰白。 外面、N 4/4灰白。 断面、2.5YR 4/4灰白。
杯 (身)	14-7	E-4	口径(推)18.6 受部径 21.5 (推) 残存高 2.2	立ち上がりは外反しながら強く内傾し、脚部は丸い。 受部はふくらみを持ち、外下方に伸びる。 腹部はやや低い。 立ちあがりと受部の境に凹縫を有する。	回転ナダ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面、N 4/4灰白。 外面、N 4/4灰白。 断面、N 4/4灰白。 クロロ回転、右方向。
圓 杯 (身)	14-8 34-8	E-4	口径(推)11.0 受部径 12.8 (推) 残存高 3.4	立ち上がりは内傾した後、中位で屈曲して上方に伸びる。 腹部は丸い。 受部は水平に伸び、腹部は丸い。 底部は浅く水平である。	外而底部、回転ヘラケズリ調整。 他は、回転ナダ調整。	胎土、密。2mmの粗糾を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N 4/4灰白。 外面、N 4/4灰白。 断面、N 4/4灰白。
圓 杯 (身)	14-9	E-1	口径(推)10.0 受部径 12.4 (推) 残存高 2.7	立ち上がりは内傾した後、すぐに内寄しながら上方に伸びる。 腹部は丸い。 受部は水平に伸び、腹部は丸い。 立ち上がりと受部の境に凹縫を有する。	回転ナダ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面、N 4/4灰白。 外面、N 4/4灰白。 断面、N 4/4灰白。
圓 杯 (身)	14-10	E-1	口径(推)13.0 受部径 15.2 (推) 残存高 3.3	立ち上がりはわずかに内傾した後、屈曲して上方に伸びる。 腹部は丸い。 受部は水平に伸び、腹部は丸い。 立ち上がりと受部の境に凹縫を有する。	外而底部、回転ヘラケズリ調整。 他は、回転ナダ調整。	胎土、密。2mmの粗糾を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N 4/4灰白。 外面、5 YR 4/4灰灰。 断面、10 R 4/4灰灰。
圓 杯 (身)	14-11	E-3	口径(推)9.4 受部径 12.0 (推) 残存高 2.3	立ち上がりは内傾した後、内寄しながら上方へ伸びる。 腹部は丸い。 受部は外上方へ伸びる。	回転ナダ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面、N 4/4灰白。 外面、7.5YR 4/4灰暗灰。 断面、2.5YR 4/4灰白。

種類	被用番号 回転基点	出土場所	法盤(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
五 杯 (身)	14-12	E-3	口径(推)10.0 受部径 12.5 (推) 残存高 4.2	立ち上がりは、わずかに内傾した後、 屈曲して上方へ伸びる。 端部は丸い。 受け部は水平に伸び、端部は丸い。 立ち上がりと受け部の境に凹縫を有す る。	外面底部、回転ヘラケズリ調 整。 他は、回転ナナ調整。	胎土、密。細砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰白。 外面、N%灰白。 ロタリ回転、右方向。
	34-12					
直 杯 (身)	14-13	E-4	口径(推)12.8 受部径 15.5 (推) 残存高 4.4	立ち上がりは厚く、垂直気味に上方へ 伸び、端部は丸い。 受け部は厚く水平に伸び、端部は丸い。 底部は浅くやや平腹である。	外曲、底部、回転ヘラケズリ調 整。 内面底部、右方向のナデ。 その他の、回転ナナ調整。	胎土、密。石灰繊を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰白。 外面、N%灰白。 ヘラ記付有り。
	34-13					
高 杯	14-14	E-2	口径(推)12.7 受部径 15.5 (推) 残存高 5.0	杯部立ち上がりは厚く、内傾した後曲 曲し短かく上方へ伸びている。 端部は丸い。 受け部はわずかに外上方へ伸びりく。 端部は丸い。 立ち上がりと受部の境に凹縫を有す。 底部は柳部より内側気味に外傾し受部 に下る。 脚部破損。	外曲底部、回転ヘラケズリ調 整。 他は、回転ナナ調整。	胎土、密。石膏繊を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰白。 外面、N%灰白。 ひずんでいる。
	34-14					
魁	14-15	E-2	体部径 9.9 (推) 残存高 8.6	口部は外傾して上方へ伸び、端部は 破損。 体部内部は外下方へ張り出す。 底部は幅手で、内窓等を内寄せしながら 肩部へ到る。 作部最大径は肩部中位に位置する。 肩部中位に凹縫の空孔がある。	外圓胴部、底部回転ヘラケズ リ調整。 他は、回転ナナ調整。 円形の穿孔はヘラによる。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰白。 外面、N%灰白。 ロタリ回転、右方向。
直 杯 (身)	14-16	E-2	口径(推)11.0 受部径 13.1 (推) 残存高 4.1	立ち上がりは内傾した後上方へ伸びて いる。 端部は丸い。 受け部はやや薄く外上方へ伸びていて。 端部は丸い。 体部はゆるやかに内寄せしている。	回転ナナ調整。	胎土、密。2mmの粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰白。 外面、7.5%有鉛。 外曲、2.5%有鉛。
直 杯 (身)	14-17	E-2	口径(推)12.0 受部径 14.0 (推) 残存高 3.7	立ち上がりは内傾した後上方へ伸びて いる。 端部は丸い。 受け部はほぼ水平に伸び、端部は丸い。 受け部と立ち上がりとの境に凹縫を有 する。 底部はほぼ平坦であり、体部は外傾し ながら受部へ接く。	外曲底部、回転ヘラケズリ調 整。 他は、回転ナナ調整。	胎土、やや粗。2mmの粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰白。 外曲、10%有鉛。 外曲、10%有鉛。
	34-17					
直 杯 (身)	14-18	E-3	口径(推)15.2 受部径 17.4 (推) 残存高 2.8	立ち上がりは内傾した後曲柔らかく、内上 方へ内側気味に伸びる。 端部は丸い。 受部はゆるやか外上方へ伸びる。 端部は丸い。 立ち上がりと受部の境に凹縫を有す る。	回転ナナ調整。	胎土、密。1mmの粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰白。 外曲、10%有鉛。 外曲、10%有鉛。
	34-18					
直 杯 (身)	14-19		口径(推)17.0 受部径 18.8 (推) 残存高 3.1	立ち上がりは、内傾して上方へ伸びて いる。 端部は丸い。 受け部は短かく、水準に張り出していく 。端部は丸い。 立ち上がりと受け部の境に凹縫を有す る。	回転ナナ調整。	胎土、密。1.5mm粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、5 P B 有鉛灰。 断面、5 P B 有鉛灰。 外曲、5 P B 有鉛灰。
直 杯 (身)	14-20	E-1	口径(推)12.0 受部径 13.5 (推) 残存高 2.2	立ち上がりは垂直気味に上方へ伸びて いる。 端部は丸い。 受け部は水平に伸び、端部は丸い。 立ち上がりと受け部の境に凹縫を有す る。	回転ナナ調整。	胎土、密。1.5mmの粗砂を含 む。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰白。 断面、N%灰白。 外曲、N%灰白。
直 杯 (身)	14-21	E-3	口径(推)10.0 受部径 11.6 (推) 残存高 2.6	立ち上がりはほぼ垂直気味に上方へ向 かって伸びていて。 端部はやや丸い。 受け部はわずかに外下方へ伸びていて。 端部は鋭い。	回転ナナ調整。	胎土、やや粗。細砂を含む。 焼成、やや不良。 色調、内面、5 P B 有鉛灰。 断面、5 P B 有鉛灰。 外曲、5 P B 有鉛灰。 ひずんでいる。
直 杯 (身)	14-22	E-3	口径(推)10.0 受部径 12.3 (推) 残存高 2.8	立ち上がりは内傾して、内上方へ伸び ている。 端部はやや丸い。 受部は外上方へ伸びていて、端部は丸 い。	回転ナナ調整。	胎土、やや粗。1mmの粗砂を 含む。 焼成、良好。 色調、内面、5 P B 有鉛灰。 断面、5 P B 有鉛灰。 外曲、5 P B 有鉛灰。

機種	機器番号 回転番号	出上場所	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	下 法 の 特 徴	備 考
蓋 杯 (身)	14-23	E-3	口径(椎)13.0 受部径 15.2 (椎) 残存高 3.1	立ち上がりは内傾して上方へ伸びて いる。端部は丸い。 受け部はほぼ水平に張り出している。 端部は丸い。 立ち上がりと受け部の境に凹縫を有する。	外側底部、回転ヘラケズリ調 整。 他は、回転ナデ調整。	胎土、密。0.5mmの粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、5B汚青灰。 断面、2.5Y汚灰白。 外側、2.5G Y判オリーブ灰。
蓋 杯 (身)	14-24	E-3	口径(椎)12.0 受部径 13.8 (椎) 残存高 3.1	立ち上がりはやや内傾して上方へ伸びて いる。端部は丸い。 受け部は水平に伸びている。端部は丸 い。	回転ナデ調整。	胎土、やや粗。 焼成、やや不良。 色調、内面、N汚灰白。 断面、5B汚青灰。 外側、N汚灰白。
蓋 杯 (身)	14-25	E-3	口径(椎)13.0 受部径 14.7 (椎) 残存高 2.9	立ち上がりは、やや内傾気味に伸びて いる。端部は丸い。 受け部は水平に伸びている。端部は丸い。 立ち上がりと受け部の境に凹縫を有する。	回転ナデ調整。	胎土、密。1mmの粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N汚灰白。 断面、5 B汚青灰。 外側、5 B汚青灰。 クロ回転、左方向。
蓋 杯 (身)	14-26	E-2	口径(椎)11.0 受部径 15.6 (椎) 残存高 2.9	口縫部は内側気味に外下方に向って開 き、端部は丸い。	外側天井部、回転ヘラケズリ調 整。 他は、回転ナデ調整。	胎土、密。5mmの繊を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N汚灰。 断面、N汚灰。 外側、N汚灰。
蓋 杯 (身)	14-27	E-2	受部径 15.6 (椎) 残存高 4.7	立ち上がりは欠損。 受け部は、わずかに外上方へむかって、 伸びる。端部は丸い。 底部は浅く平底である。	外側底部、回転ヘラケズリ調 整。 内側底部、一方向のナデ。 他は、回転ナデ調整。	胎土、粗。白色繊を多く含む。 焼成、不良。 色調、内面、2.5Y汚灰白。 断面、2.5Y汚灰白。 外側、10Y R汚に近い黄橙。 クロ回転、右方向。ヘラ記号。



第14図 溝—2 出土土器

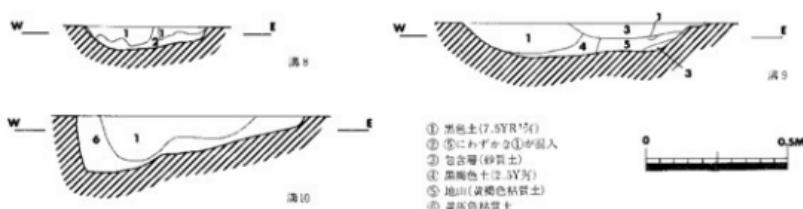
### 溝-3~10

D-1に集中していた溝-3には、黒褐色粘質土と地山、溝-4には、黒褐色粘質土に一部、地山混入。溝-5には、黑色土が埋土としてみられ、それぞれの溝からは、土師器、須恵器片が出土した。流れの方向や溝-2、遺構との関係については、検出面積が少ないので不明である。

溝-6、7、8（第15図、図版17）は、本来、南北に走る1本の溝であり、発掘当時、その底部のみ検出した。幅0.45m、深さ0.7m~1.0mの極めて浅い溝で、黑色土と黑色土+地山の混入土の2層が大半であった。

掘立柱建物-5の南側に接合した溝-9、10（第15図）は、柱穴8、9、10とピット-192、193を結んだ溝状の遺構で柱穴-9などはこの遺構によって大きく欠損を受けていたので建物-5が廃絶後、営まれたものと思われる。溝-9には、黑色土を主として黒褐色砂質土、黒褐色土、地山が含有し、溝-10には、黑色土と黄灰色粘質土の2層が知られた。

両者とも幅80cm前後で、埋土も0.1~0.3mの凹凸が激しいものの、ピット-192に向けて落ち込んでいくような感じがみられた。



第15図 溝-8・9・10 断面図

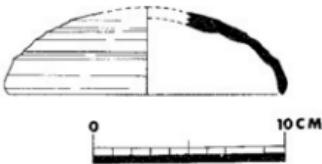
### 溝-9 出土土器（第16図、図版-39）

掘立柱建物-5に隣接して出土している事から溝-9の使用年代もさることながら、建物-5の営まれた時期に近接していると思われる。

杯蓋、口縁部は、内湾し端部は丸い。天井部には回転ヘラケズリを施し、他は、回転ナデ仕上げ。

（推）口径14.4cm、残存高4.3cm、焼成は良好で胎土は疊を含むが密。色調—内外共—5 Y 1/2灰白色。

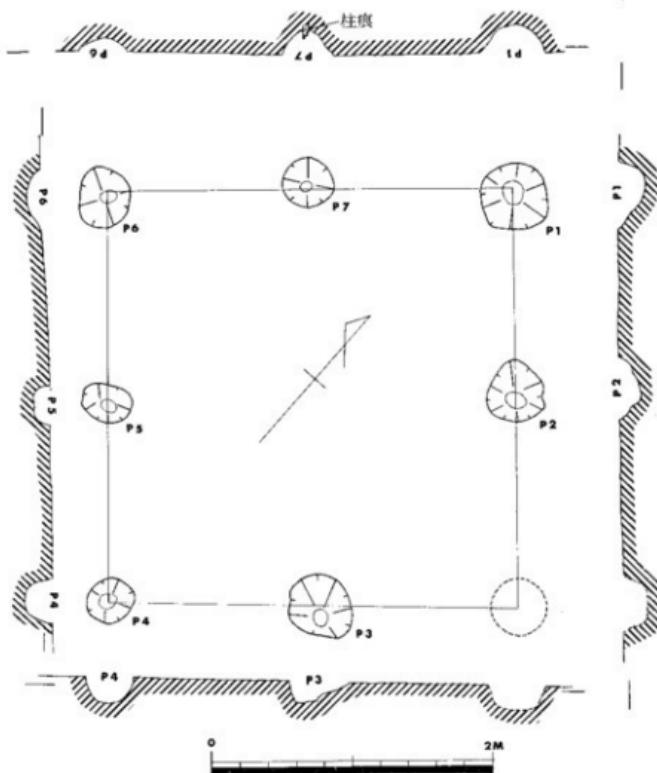
(森村)



第16図 溝-9 出土土器

#### 4. 堀立柱建物

本遺跡から検出された堀立柱建物は、黄褐色粘質土、すなわち地山に營まれていたものであるが、地山上には20~30cmの遺物包含層としての黒褐色粘質土、床土、耕作土が堆積しているにすぎず、遺構の保存状態は良好とはいえず、むしろ、数10cmの削平すら考えさせる状況にある。

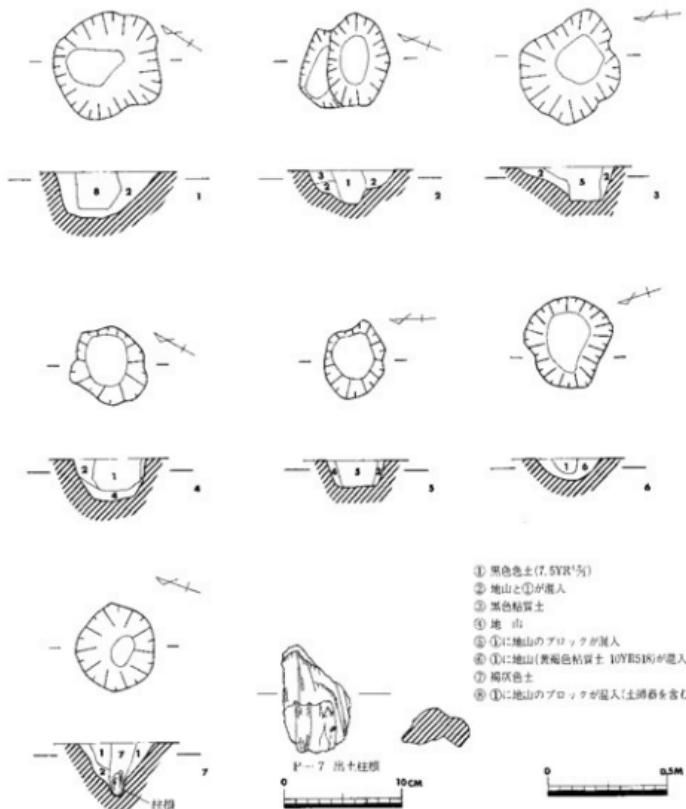


第17図 堀立柱建物一 1 遺構図

前述の状況では、黒褐色粘質土での遺構検出は困難で、地山直上で建物群を検出する事になったが、削平段階において、堅穴式住居跡等の比較的浅い掘り方を有する遺構については、発掘調査当時、すでに削平されていた可能性が十分考えられる。

検出した掘立柱建物-14棟は、発掘調査地点の中央から南にかけて群集し、溝-2より南側では確認されていない。

それは、地山そのものの降下も考えられ、その他の古墳時代に属する遺構も極めて希薄であった。

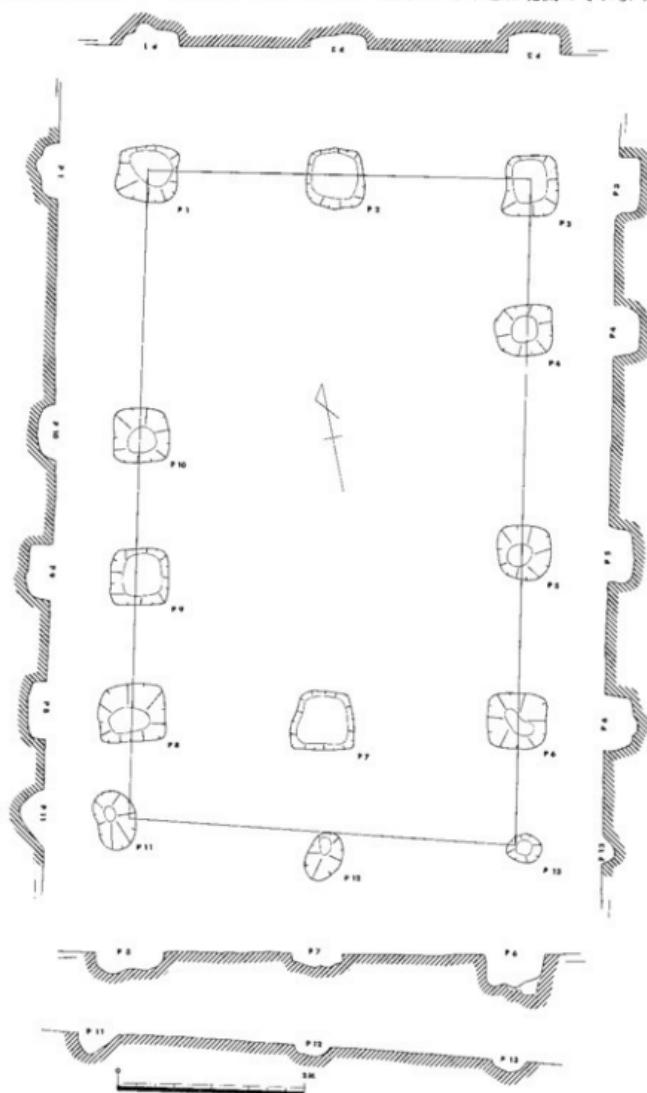


第18図 掘立柱建物-1 各柱穴遺構図

#### 掘立柱建物-1 (第17・18図、図版-5・6)

1地区、中央部の溝-1に近接し、C-3地区に存在する。主軸を西側によせた2間×2間の住居と考えられる建物である。桁行長 2.90m、梁間長2.86mを側る正方形の平面プランを有す。P-7には、柱根を残す。不整形な円形ピットには、柱根を示すように柱穴中の埋土

が柱状に認められる。P—2、3、7は二段底で、南側のピット底は北側のそれよりも浅い。



第19図 据立柱建物—2 遺構図

P-1から7の実測数値は、55.5(長軸)×48.5(短軸)×20cm(深さ) 42.5×38.5×15 50×47×14.5 35.5×29.5×18 35×27.5×11.5 39.5×35×9.5 37.5×33×22を計測した各柱間距離は、1.40~1.56mである。

#### 出土遺物

##### 柱模（第18図）

P-7の褐灰色土中

より検出したもので、

長さ約10cm、幅6cm弱、

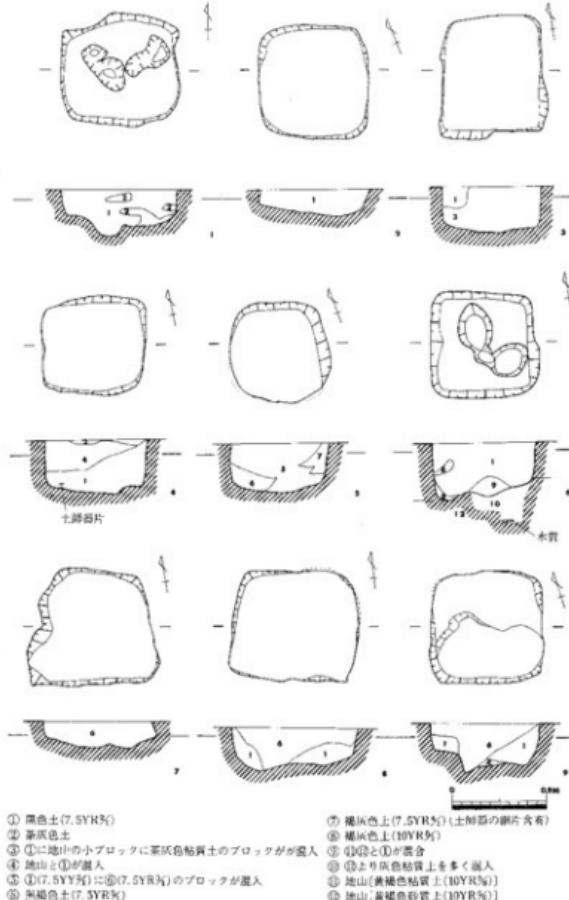
径5cm位のみ残存して  
いた。材質不明。

その他の出土土器と  
して、P-1、4、5  
から須恵器、杯身、土  
師器、甕の細片が少量  
みられたが、時期決定  
や固化できるものはな  
い。

##### 掘立柱建物-2（第 19・20図、図版7・8）

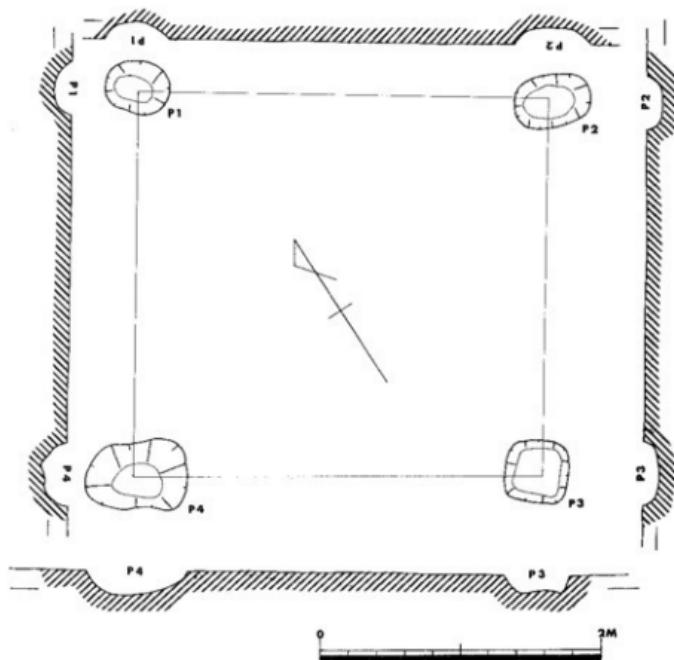
溝-1との2の交差  
地点より北西に接し、  
他の掘立柱建物群とは  
別離した存在位置にあ  
る。主軸は、東により  
溝-1、2にほぼ平行  
している。2間×4間  
の住居と考えられる建

物である。



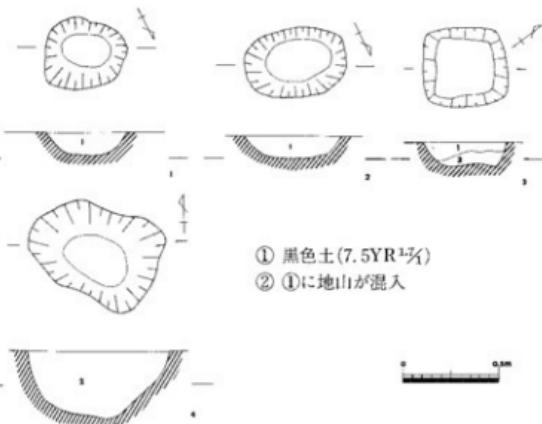
第20図 掘立柱建物-2 各柱穴遺構図

2間(4.22m)×3間(6.97m)の南側に1間の拡張(1.10~1.25m)をもつ建物である。柱間が、  
他のそれよりも幅広い部分があり、入口部の可能性もある。又、東桁行に沿って、径10cm位の



第21図 挖立柱建物-3 遺構図

櫛状のピットがある。柱穴は隅丸正方形の垂直壁で黒色土(7.5 YR 2/1)を基準とした埋土である。P-1、6、8、9では、柱痕を示す土層がみられ、P-1、6、9は、2段底である。P-6の2段底部には、柱根が保存されていた。妻柱穴は、他の柱穴とプランは類



第22図 挖立柱建物-3 各柱穴遺構図

似するが浅い。増築部の掘方は、身舎のものとは異なり、不整橢円形を呈し深さも不定である。

#### 掘立柱建物—3 (第21・22図、図版—9)

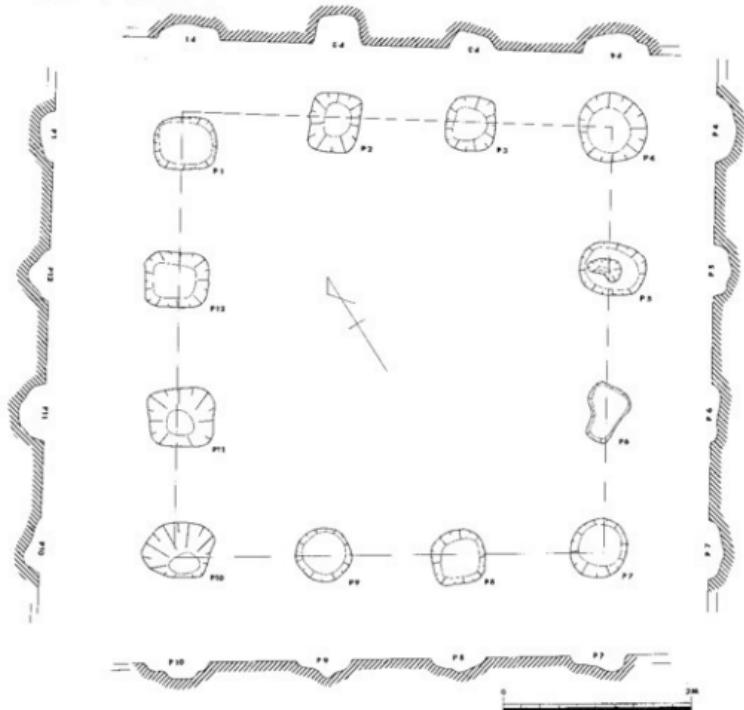
桁行1間(2.9m)×梁間1間(2.75m)の建物で主軸は東側に位置する。

溝—2に接し、北東には建物—8が存在する。4本柱で柱穴は、橢円形か隅丸方形で埋土のほとんどは黒色土であった。柱間は、P-1～P-4へ2.90m、2.65m、2.95m、2.75mと正方形に近いプランをもつ建物である。他より大きく掘り方もやや深い。

柱穴からは、全く遺物は検出されておらず時期を決定する資料に欠ける。

各ピットの実測数値は次のとおり、 $45 \times 42.5 \times 12.5$   $55.5 \times 28 \times 12.5$   $25.5 \times 25 \times 12.5$   $76.5 \times 46 \times 35$ 。

この建物の平均床面積は、 $7.965\text{ m}^2$ である。



第23図 掘立柱建物—4 遺構図

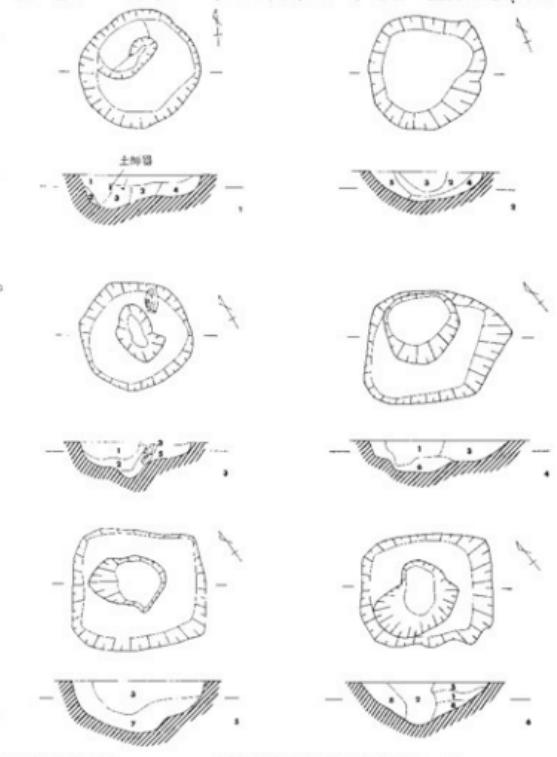
### 掘立柱建物—4 (第23・24図、図版10・11)

D-4、E-4.5にまたがって検出された、溝-2に接して掘立柱建物-5と共に主軸をほぼ平行して整美かつ規則正しい柱穴をもつ3間(4.42m)×3間(4.67m)となり正方形を呈す。棟持柱が検出されず、四注造建物が考えられる。

主軸は東に振り、南側の掘立柱建物-7と重複するが、それよりも後出する遺物ある柱穴には、正方形、不整円形の3種類みられるが、その比率は均等である。

P-8の最大深、P-12の最小深の他は、ほぼ一定の深さではあるが、底部はフラットでない。P-1、3、4、6、7、9、10、11は、掘り方内の柱根位置を示す二段底であり、埋土にもその痕跡をあらわす土層が知られた。尚、柱の抜き取り痕はない。柱間は、1.43～1.74mである。

出土遺物としては、P-1から土師器甕、壺、P-3から土師器、甕、P-4から土師器、甕、P-4



第24図 掘立柱建物-4 各柱穴構造図

須恵器、土師器、P-6から土師器、P-7から須恵器、杯身、蓋、土師器甕、P-9から須恵器、杯蓋、土師器甕、P-10から土師器、須恵器、P-11から土師器、壺、P-12から須恵器・甕、土師器、甕を検出しているが、いずれも実測不可能な大きさであった。しかしP-3柱穴中より須恵器、有蓋高杯、の完形品が柱と同時に埋置されたかのように、地山十黑色土(7.5YR 1.7/1)の混入土中より認められた。これが、各柱穴からの土器片と共にこの建物の時期決定に有力な資料となりえた。

- ① 黒色土(7.5YR 1.5)
- ② 黑色土(7.5YR 1.5)と地山の混合 5:5
- ③ 黑色土(7.5YR 1.5)に地山が混入
- ④ 地山(黄褐色粘質土)
- ⑤ 地山に少し黑色土(7.5YR 1.5)が混入
- ⑥ 地山に黑色土(7.5YR 1.5)が地面上に混入
- ⑦ 地山に黑色土が混入
- ⑧ 黑色土上と地山が混合 2:8

各柱穴サイズは、P-1 から  $64 \times 63 \times 18.5$   $60 \times 59.5 \times 16$   $58.5 \times 58 \times 19.5$   $74 \times 60 \times 17$   
 $82 \times 80 \times 27$   $67.5 \times 61 \times 23$   $78 \times 74 \times 16$   $74.5 \times 73.5 \times 33$   $63.5 \times 62.5 \times 18.5$   $74 \times 69 \times 22.5$   
 $71 \times 67.5 \times 20.5$   $60 \times 35.5 \times 8.5$  となる。

各柱間は次のとおり、P-1 から  $1.50\text{m}$ 、 $1.45\text{m}$ 、 $1.47\text{m}$ 、 $1.52\text{m}$ 、 $1.55\text{m}$ 、 $1.74\text{m}$ 、 $1.43\text{m}$ 、 $1.55\text{m}$ 、 $1.57\text{m}$ 、 $1.45\text{m}$ 、 $1.65\text{m}$ 、P-4～P-10、 $4.60\text{m}$ 、P-1～P-7、 $4.60\text{m}$ 、P-2～P-9、 $4.63\text{m}$ 、P-3～P-8、 $4.65\text{m}$ 、P-11～P-6、 $4.60\text{m}$ 、P-12～P-5、 $4.60\text{m}$ 。

P-1 ほぼ円形で一部2段底になって柱痕を示す。黒色土を基調として地山と同質の土層がみられ特に黒色土中には土師器片が多い。

P-2 不正円形で断面はU字形を呈し柱穴と思われる部分には黒色土と地山の混入土が入る。P-1と同じく地山と同質の④層がみられるが柱穴底に貼り付けた様相あり。

P-3 円形を呈し中央部には柱痕に伴う2段底が見られた。埋土の大部分は黒色土を基盤として地山との混合土を見る。このピットからは、この建物の時期決定に有力な足がかりとなる須恵器・有蓋高杯・蓋部が完形品として出土した。それは、出土状態から柱の埋設と同じに人為的に埋置したものと考えられる。

P-4 ピット北側に偏在した形で柱痕と思われる2段底を示す。他のピットに比して浅い、埋土はやはり黒色土に基づく、平面は不正方形である。

P-5 圓丸正方形に近い平面で中央に2段底となる。北・東壁面は垂直に近い柱穴には、黒色土と地山の混入土を2層に細別した。柱穴は深い。

P-6 正方形に掘り方を設けようとしたが南側は不整形である。断面は浅く6層ものブロック層がみられるが中央部には柱痕らしき埋土あり。

P-7 圓丸正方形に近いが南側はやや歪む。中央部には、柱痕と考えられる2段底と埋土を知る。黒色土と黒色土+地山の混合土が確認されるが黒色土が一部水平層として見受けられたにすぎず他はすべて後者の埋土で占める。断面はV字形となる。

P-8 長方形で整美な凹形の断面を示し壁面は垂直ぎみである。柱穴は、黄褐色粘質土をつき破り下層のオリーブ灰色砂土に達する。黒色土と黒色土+地山と茶褐色土+地山の3層がブロック状に埋土されていた。

P-9 不整形で北側の部分には2段底となる。北・東は垂直壁に近いが他はゆるやか。黒色土が基準で一部ブロックとして壁に沿って地山がみられる。柱穴は比較的深い。一部に土師器片を検出した。

P-10 ほぼ円形で南側よりに2段底となり、黒色土と地山の混入土をU字形に堆積し柱底近くで灰色砂土まで開掘する。

P-11 平面は、東西に長い不整円形、東よりに2段底となり柱痕の埋土が知られた。

P-12 ほぼ正方形の様相を示し断面は浅く東南にかたよって2段底となる。埋土は、黒色土と黒色土+地山の2層に限る。

#### 出土土器

##### 須恵器杯身（第25図・上、図版38）

P-10の底部に接し、地山と黒色土（7.5 Y R1.7/1）の混入土より出土、立ち上がり内傾し端部はやや丸い。受部は外上方にのびて丸い。外面、底部、回転ヘラケズリ、他は回転ナデ、（推）口径12.0cm、残存高4.6cm、底部には「ソ」のヘラ記号がみられる、胎土一密、細砂含む、色調-N7/0灰白色、ロクロ回転、右方向。

##### 須恵器有蓋高杯（第25図・下、図版38）

口縁部は外に広げ、やや平らな天井部には凹型を有するツマミがある。ツマミの端部は、鋭い。ツマミは貼り付け、天井部は回転ヘラケズリ調整、その他の部分は回転ナデ調整、口径（推）17.6cm。

胎土一密、焼成一堅緻、色調-7.5 Y7/1灰白色、ロクロ左方向回転。

#### 掘立柱建物-5（第26～28図、図版10・12）

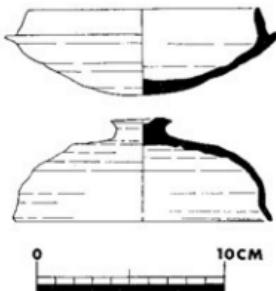
溝-2よりに建物-4に隣接して検出した。桁間3間（4.25m）×梁間3間（3.59m）の束柱をもつ総柱建物である。

柱穴は大形の正方形、不整円形に近いプランをもち、P-10、P-9をのぞけば明確な平面が残存した。

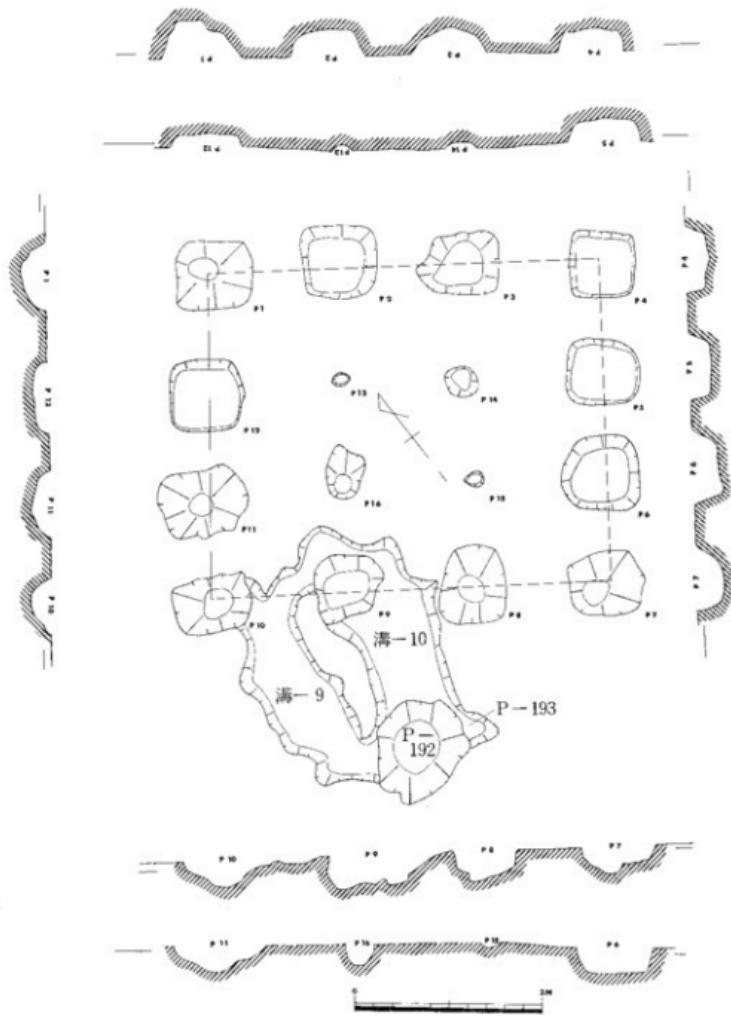
小さな不整円形の束柱は、P-16以外は浅く染行に通っており、倉庫であろう。柱根は残存していないなかつたが、柱穴間の埋土を観察すれば、P-1、2、3、4、7、8、11、12、13に柱の位置を示すものがあり、これらの中には2段底のものもあった。柱間は1.05m～1.53mを測る。掘方は垂直に近い断面で、底部が砂土に達しているピットもある。

建物主軸は、建物-4とほぼ同一方向である。

建て直しや柱の抜取り痕は認められない。尚、この建物に近接するP-191、193、194は、径20cm前後で浅いが、各柱通に一致するので、この建物に関係するものとして、支柱等として考えられる。



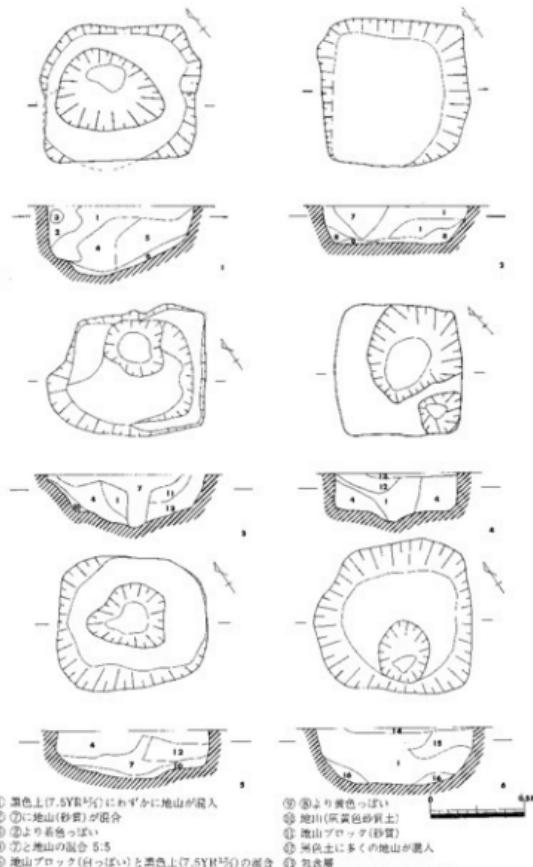
第25図 掘立柱建物-4  
出土土器（上P-10、下P-3）



### 第26図 据立柱建物—5 遺構図

各ピットについて実測すると、P-1から順に 100  
 $\times 91.5 \times 38$  99.5  $\times 94 \times 21$   
 $95 \times 85 \times 28.5$  87  $\times 86.5 \times$   
26.5 87  $\times 86.5 \times 26$  95  $\times$   
94.5  $\times 31$  89.5  $\times 82 \times 30.5$   
94  $\times 88.5 \times 35$  88  $\times 74 \times 40$   
82  $\times 74 \times 28$  100  $\times 99 \times 30$   
92  $\times 91.5 \times 17$  20  $\times 14 \times 3$   
36  $\times 34 \times 4.5$  20  $\times 19 \times 4.5$   
62.5  $\times 43.5 \times 24.5$  を計測した。

各柱間距離は次の通り、  
P-1 から 1.35 m, 1.37 m,  
1.53 m, 1.20 m, 1.35 m,  
1.26 m, 1.41 m, 1.42 m,  
1.26 m, 10.5 m, 1.17 m,  
1.37 m, P-2 ~ P-9,  
3.62 m, P-3 ~ P-8,  
3.72 m, P-12 ~ P-5,  
4.23 m, P-11 ~ P-6,  
4.43 m, P-1 ~ P-7,  
5.43 m, P-4 ~ P-10,  
5.45 m, 東柱 P-13, 14,  
15, 16 間は 1.25 m, 1.07 m,  
1.37 m, 1.17 m である。

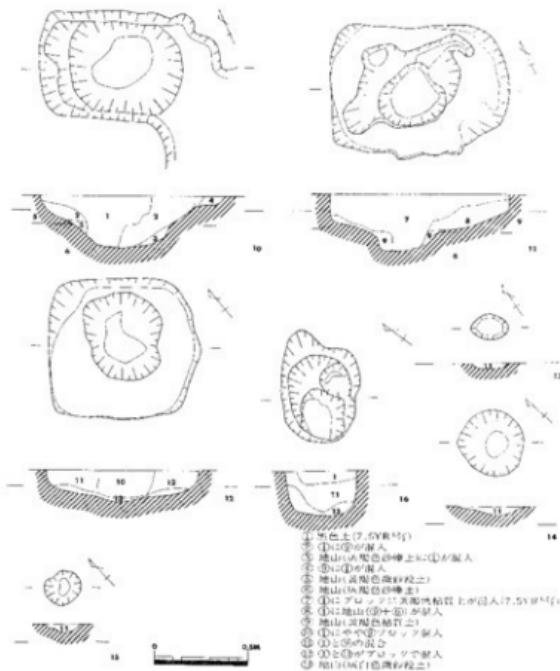


第27図 挖立柱建物-5 各柱穴構造図

尚、隣接する溝-9、10は、建物-5より後出して營まれたものであろう。P-192、193も同様と思われる。

P-1 垂直壁の掘り方でやや重んでいるが正方形に近い平面、6層がブロック状に埋土され、ほぼ中央には、柱痕の二段底となる。

P-2 平面形は正方形で比較的浅く、底部はフラットを呈す。埋土としては、黒色土に一部地山がブロックとして認められた。



第28図 挖立柱建物—5 各柱穴透構図

P-3 東側は、直線的な辺を残存するが他は崩れてる。二段底は、北側にかたより⑦層の埋土が柱底として表われた。断面も東側はともかく他邊は相當に欠損する。

P-4 正に正方形で断面も垂直壁を呈しほぼ中央に柱底である二段底あり。埋土も柱底部分には黒色土が見られたが他は、ブロックとして地山が入る。土師器、須恵器の細片が伴出遺物としてある。

P-5 不整円形で中央に二段底となり、柱穴壁は垂直に迫り、柱底には、灰黄色砂質土(地山)が意識的に貼り付けその上に黒色土と黒色土+地山の2層が基調としてある。

P-6 東側は直線的であるが他邊は歪む。南よりに二段底を確認したが埋土ではさほど頗著ではない。黒色土+地山の混入土が大部分でブロックとしてその他3層ある。断面はU字形で底部はフラット。

P-7 不整な正方形で中央に径15cm位の柱を想定出来る二段底が存在する。柱の設定後に黒褐色粘質土を埋土として認める。

P-8 全体的には長方形であるが西側にひずみあり。中央部には⑧層の埋土と共に二段底と考えて柱痕に誤りない。壁面は垂直に立ち上がり底部近くは灰黄色砂礫土（地山）に達しており水がしみ出してくる。

P-9 溝-9、10によって崩壊しているが西側寄りに柱痕と思われる二段底部分がある。埋土は、黒色土を主としているものの上部では擾乱を受ける。

P-10 東側は、溝-9によって削平されているがピットの全容を知るには気にするほどではない。平面は東西に長いほぼ長方形で、二段底が大きく中央に存在する。黒色土が中心に埋土され他は、地山との混入土がブロックとして知る。柱穴は、地山の黄褐色粘質土と黄褐色微砂粒土さらには灰黄色砂礫土にまで達し水分が多い。

P-11 不正形であるが3辺は直線的に掘削する。中央には二段底が、壁は垂直に近い断面を呈す。崩壊ぎみの辺は、他の柱穴状態とも考えると柱の抜き取り痕かもしれない。埋土は、黒色土と地山の混入土が柱痕状に確かめられ、⑨層は、柱の設置後に人為的に入れたようにみられた。

P-12 やや不整形ではあるが正方形に近い、断面は、ゆるやかに持ち上がりぎみに掘削し、北側よりに二段底がある。⑩層は柱の径が後天出来るぐらい良好に埋土している。底部には地山と同じ灰白色微砂粒土が敷きつめる。

P-13 東柱と呼ばれるもので側柱穴とは形態的にも大きな差異あり、橢円形の平面で浅い断面に黒色土と地山の混入土を見受けた。

P-14、15、ほぼ円形で浅く、埋土は黒色土と地山の混入土あり。

P-16 東柱の他のものより大きく最も深い。平面は不整円形でU字形の断面を示す。埋土の大層に地山の灰白色微砂粒土が敷き、上には①⑪の層が水平層として堆積した。

#### 出土遺物（第29図）

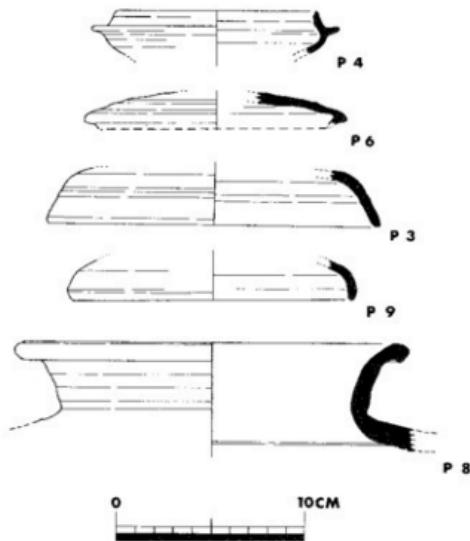
柱穴内から須恵器、杯身、甕、杯蓋、壺、土師器、壺、高杯、甕の破片が検出できた。

#### 杯蓋（P-3出土）

口縁部は外傾し端部は丸い。天井部は偏平になる。天井部は回転ヘラケズリ、他は回転ナデ調整、胎土一粗砂含、焼成一良好、色調—N 7/0 灰白色、断面N 6/0 灰色。

#### 杯身（P-4出土）

たちあがりは内傾し、端部は丸い。受部は水平に引き出し、回転ナデ仕上げ。口径10.4cm、胎土一密、焼成一良好、色調—内面N/0 灰色、外面5 B 4/1 暗青灰色。



第29図 挖立柱建物-5 出土土器

#### 長頸壺、蓋（P-6出土）

ツマミとかえりの壠部欠損、天井部は低い。外面、天井部回転ヘラケズリ、その他については回転ナデ仕上げ、胎土一密、焼成一良好、色調—N 7/0 灰白色、外N 6/0 灰色、ロクロ回転方向、右。

#### 甕（P-8出土）

口縁部はわずかに外弯しながら上方にのびる、端部はやや下向きにし丸い。

口頭部は、クシによるカキ目、内面、同心円文を残す。胎土—白色粗砂を含むが良好、焼成—良好、色調内N 6/0 灰色、外N 3/0 暗灰色、ロクロ回転、左方向、口径—19.6cm。

#### 杯蓋（P-9出土）

(推) 口径14.8cmを計るこの杯蓋は、口縁部を内寄ぎみに丸める。全て、回転ナデ調整、胎土—粗砂含む、焼成—良好、色調—内外面N 6/0 灰色、断面7.5 Y R 5/2 灰褐色。

#### 掘立柱建物-6 (第30・31図、図版5・13・14)

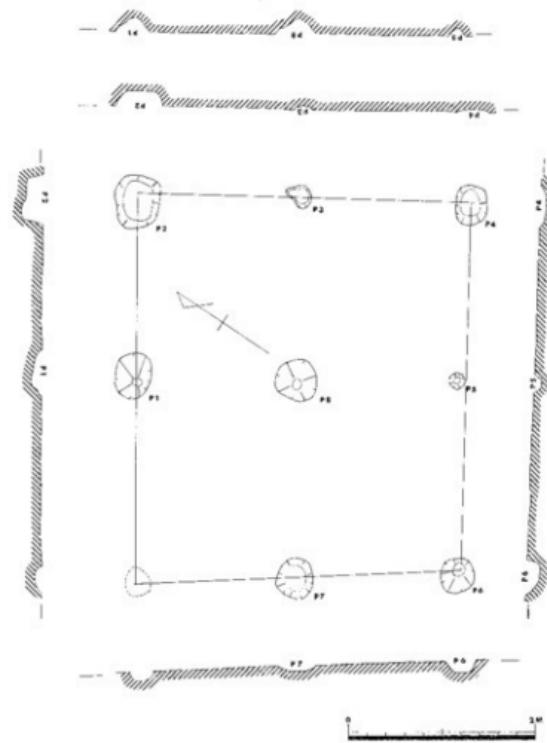
C-4地区の中央部より検出した。西隅の柱穴は、試掘調査時に破壊されたが他の8ヶ所の柱穴は、比較的小さなものである。桁行間2間(3.88m)×梁間(3.50m)の主軸を西に向かた束柱又は、総柱の建物である。柱穴の形態、サイズ共に不揃い。

P-8の東柱にあたる柱穴は、側柱の柱穴と遜色ない。

2段底になっている柱穴はあるが、いずれも柱根は検出されていない。

柱穴のサイズは、P-1より49.5×35.5×12 56.5×44.5×21.5 28.5×20.0×4.5 41.5×32×4.5 16.5×16×7 38.5×36.5×11.5 39×36.5×11.5 39×36.5×8.5 41.5×41×20を測り、埋土の大半は黒色土から形成されている。

出土遺物としては、各柱穴より土師器の細片をみたがローリングを受けていた。



第30図 挖立柱建物-6 造構図

各柱間は次のとおり、P-1から、1.85m、1.75m、1.75m、1.88m、2.00m、1.75m、P-1～P-8、2.20m、P-3～P-8、2.00m、P-5～P-8、1.68m、P-7～P-8、2.02m。

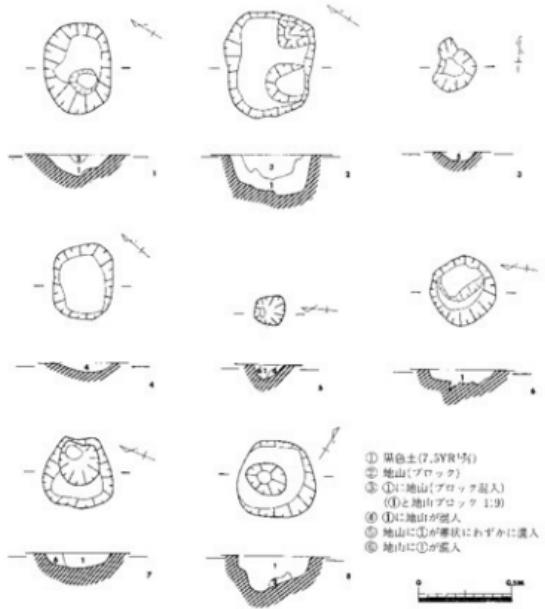
P-1 不整円形でU字形の断面をもつ。南側に寄って二段底あり。

P-2 不整円形で南壁に沿って柱頭となる二段底がみられ柱穴壁もしっかりする。埋土は、P-1と同じく黒色土と地山の黄褐色粘質土の2層のみである。

P-3、P-5と同様で最小で不整形な平面、断面はU字形を示す。埋土としては、黒色土と地山の混入土あり。

P-4 調丸長方形で断面はゆるやかで極めて浅い。黒色土と地山の混入土が埋土中にあり。

P-5 不整形で小さいが埋土は、黒色土と黒色土+地山の混入土の2層を見る。



第31図 挖立柱建物-6 各柱穴遺構図

P-6 ほぼ円形で北寄りに二段底となる。ゆるやかな断面中に、黒色土のみが充填していた。

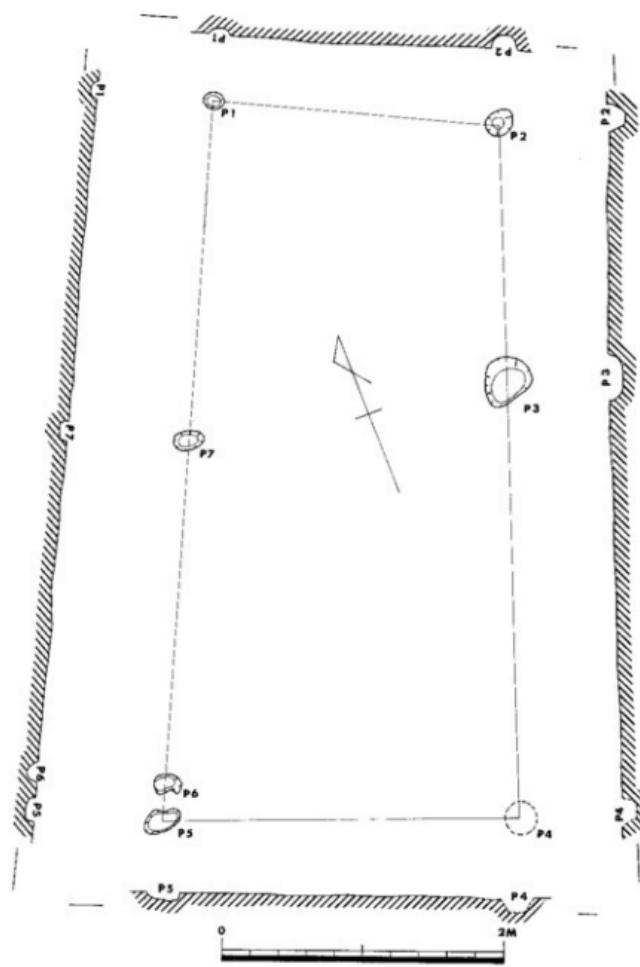
P-7 断面は半月形で北寄りの柱痕である二段底ある。地山のブロックを含む黒色土が一部に認められた以外は、黒色土のみ。

P-8 垂直壁に近い断面には、黒色土が大半を占め底部にブロックとして地山と同質土がある。平面は不整円形でほぼ中央に二段底と成る。

#### 掘立柱建物-7 (第32・33図、図版10・15)

東寄りに主軸をおく南北棟に長いこの建物は、溝-2よりに建物-4と重り合っていた。桁行間1間×2間、実数値として南梁間2.56m、北梁間2.00m、西桁行間4.84m、東桁行間4.87mを測る。全体にいびつで柱穴間も一定でない。柱穴の埋土は黒色土、黒褐色粘質土で、中より遺物は全くみあたらなかった。

柱穴サイズ、形態にも類似性はなく、不整形形が多い。柱穴の最大深は18cm、最小深3cmと極めて浅く、掘り方は長径9~28cmであった。従って、柱根の存在する余地はなかった。尚、



第32図 振立柱建物-7 造構図

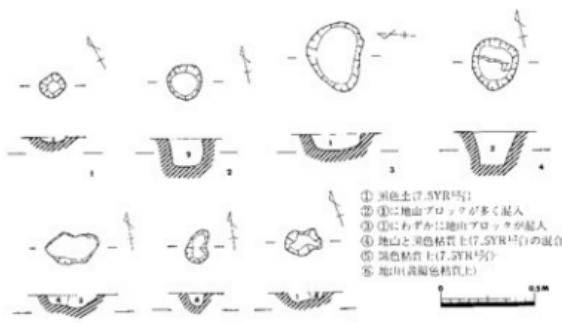
P-5には北に接して、補助柱がある。

各柱間は次のとおり、P-1から、2.00m、1.84m、3.03m、2.55(2.56)m、2.42(2.67)m、  
2.42m、P-7～P-3、2.30m、各柱間はかなり重みがみられるが対角線上の距離にさほど  
差はない。

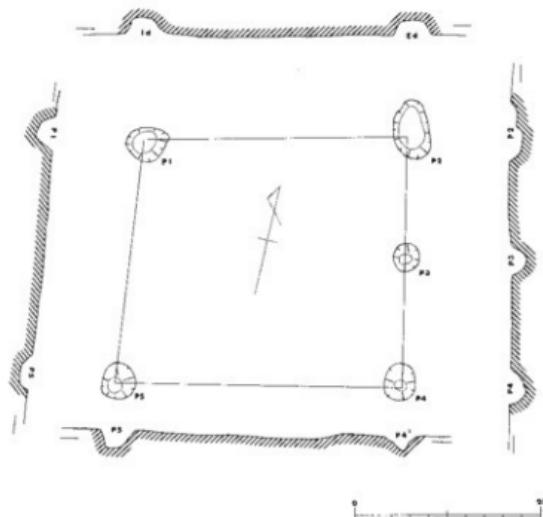
P-1 全体的に小さい柱穴内でも小さい不整円形の平面に半月形の断面を呈す。埋土に黒色土あり。

P-2 柱の大きさだけと思われる柱穴で凹形の断面には、黒色土と地山の混入土がある。

P-3 東西に少し長い不整円形で底部はフラットに近い。埋土は、黒色土の一層のみ。



第33図 掘立柱建物-7 各柱穴遺構図



第34図 掘立柱建物-8 遺構図

P-4 壁面はきつく傾斜し南側で二段底となる。平面は不正円形で黒色土にブロックとして地山の埋土あり。

P-5 正に不整形で浅く黒色粘質土と黒色粘質土と地山の2層がブロック状に入る。

P-6 不整形で最小の平面に地山の黄褐色粘質土と同質の土が挿入する。断面はU字形をなす。

P-7 不整形で浅いが①・④の2層が混入する。

各ピットの数値を次のように計測した。

P-1 から15(長軸長)  
×12(短軸長) × 5(深さ)  
cm, 20×17×10 38×30  
×10 28×16×6 19×  
12×8 21×14×6となつた。

掘立柱建物-8 (第34

・35図、図版9・16)

D-3、4の南側に位

置し建物-3の北東において検出した。桁行長3.00m、梁間長2.70m、1×2間の建物で少し西側に主軸を傾むける。西側の棟持柱は検出できない。この建物の平面は全体に図示したようにややいびつなところがある。柱穴は5ヶ所とも不整形な円形で、黒色土を基準にした埋土を充填していた。P-2、3、4は、2段底となり、内、P-2は、柱の抜き取り痕がある。

各柱穴から次の実数値を測った。P-1から $38 \times 37.5 \times 10$   $67 \times 39 \times 14$   $37 \times 35.5 \times 15$   $46 \times 36 \times 18$   $38 \times 35 \times 21.5$ であった。

出土遺物として、P-3より土師器を出土したが、細片がみられ時期決定の資料とはなり得なかった。

各柱間距離は次のとおり、P-1から2.80m、1.30m、1.40m、3.00m、2.65m、P-1～P-4、3.80m、P-2～P-5、4.10m。

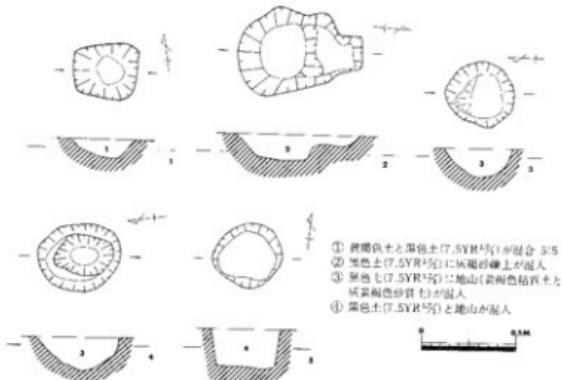
P-1 不整長方形で半月形の断面に黄褐色土と黑色土の混入土あり。

P-2 南北長の不整形ピットで南側に寄って二段底あり。北側のそれは、柱の抜き取り痕かもしれない。埋土として黒色土+灰褐色砂礫土が混入している。

P-3 ほぼ円形で埋土はP-2と同じ、断面は半月形である。

P-4 不整円形の平面中央は2段底と柱痕を示す。黒色土+地山(2層)が混入した埋土を確認した。

P-5 凹形断面はするどく壁を立て黒色土と地山がかたく埋土していた。平面は、ほぼ凹形を示す。



第35図 掘立柱建物-8 各柱穴遺構図

#### 掘立柱建物-9 (第36・37図、図版16)

建物-4と8にはさまれる位置で検出した。柱間に相当な差異があり、少し東側に主軸を振

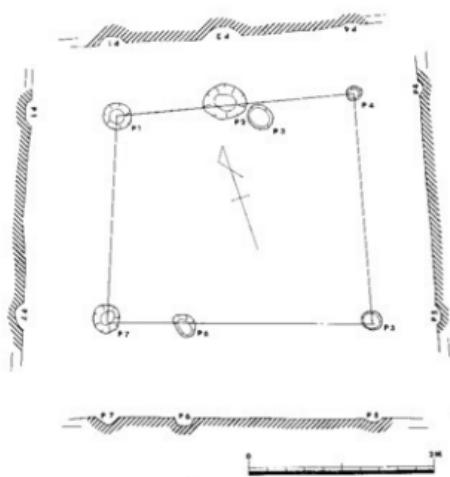
る。桁行間2間、梁間1間、実測値で桁行間2.50~2.80m×梁間2.15~2.45mを測る。柱穴底は、ほぼ同一の高さでP-2のみ二段底である。

柱根や東柱は検出されなかつた。柱穴内の埋土は、黒色土を基調にし地山との混入土がみられた。掘り方は、長径24cm~51cm、短径15.5~40cmとばらつき不整円形プランで浅い。尚、P-3は、P-2の補助柱かもしれない。両棟持柱は、確認されず建物として平面も考えかなり粗雑な感をうける建物である。

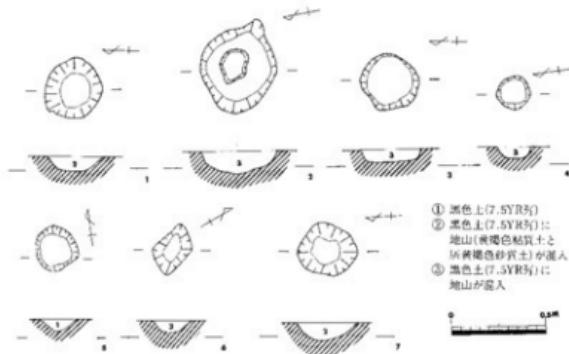
各柱穴とも出土遺物はみられない。各柱間距離は次のとおり、P-1から1.13m、1.37m、2.45m、2.85m、0.85m、2.15m、P-2~P-6、2.50m。

P-1 不整形な円形で、31×27を測り半月形の断面を呈す。埋土は、黒色土に地山混入する。

P-2 不整形でU字形の断面で中央には二段底となる。黒色土と黄褐色粘質土が埋土と



第36図 堀立柱建物-9 遺構図



第37図 堀立柱建物-9 各柱穴遺構図

してみる。45×37×12cmを計測しこの建物中、最大のピットである。

P-3 フラットな底部に比較的急な壁を有し、平面は不整円形を成す。埋土はP-2と同じ、30×24×7cmのピットのサイズあり。

P-4 この建物巾、最小プランの柱穴で18×15×4cmを測る。断面は半月形で埋土はP-2と同じ。

P-5 V字形の断面に黒色土が埋土として入り込む。23×20×6cm。

P-6 不整形な平面に半月形の断面、埋土はP-2と同じだがやや固い。30×21×9cm。

P-7 31×28cmのこの柱穴は不整円形を成しP-1と同一の埋土を見る。断面は半月形を示す。

掘立柱建物-10 (第38・39図、

図版19)

D-5南端とD-5北側にかけて検出した。1間×1間の建物である。主軸は大きく西に寄り、正方形に近く、柱間2.85~3.05mで、床面面積約9m<sup>2</sup>を計測した。掘り方は平面の割に深く、埋土は黒色土(9.5YR7/1)と地山混入土の一層であった。北妻柱部分に棟持柱と思われる柱穴が存在するが確証はない。

各ピットの数値は、次のとおりであった。

P-1 39×37×7.5 P-2、

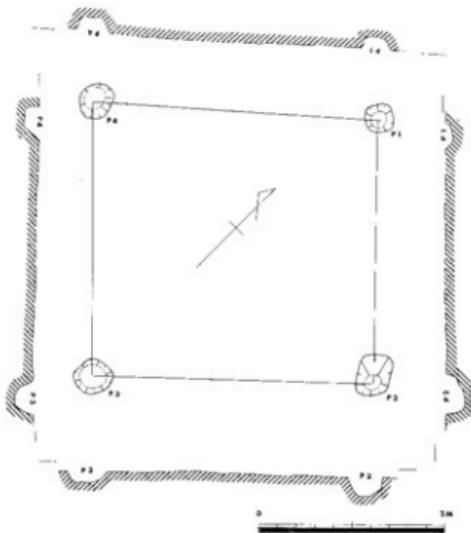
49.5×47×29 P-3、49×48.5×23.5 P-4、41×37.5×18.5

出土遺物としては土師器と分かる程度の土器が検出されたが時期決定資料とするにはほど遠い。

各柱間は次のとおり、P-1から2.85m、3.00m、3.05m、P-1~P-3、4.12m、P-2~P-4、4.25m。

P-1 平面形は不定形で、東壁で段をもって掘り込まれ、梢円形の平坦な底になる。

P-2 平面形は隅丸方形を呈し、掘り方は垂直に近い。尚、南東壁際には尖底状のピット

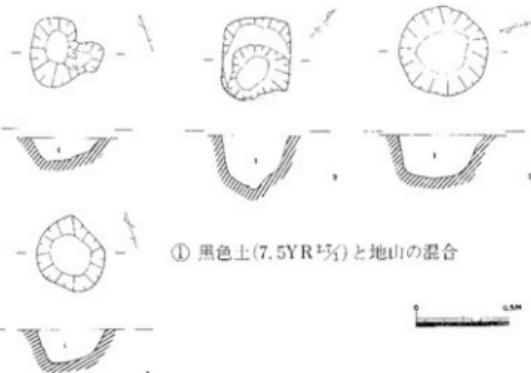


第38図 掘立柱建物-10 遺構図

が存在しており2段底にな

る。

P-3 平面形は円形で、南壁でやや段をもった傾斜面を有し、丸味のある不整円形の底部にいたる。



① 黒色土(7.5YR 4/8)と地山の混合

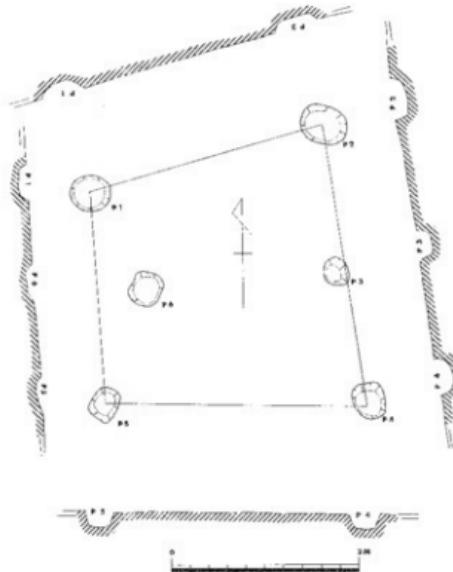
P-4 平面形は不整円形で、掘り方は傾斜する。底は梢円形を呈し、西側へやや傾斜して下がっていく。

各柱穴内の埋土はいずれも黒色土と地山の混合土の單一層である。

第39図 掘立柱建物-10 各柱穴遺構図

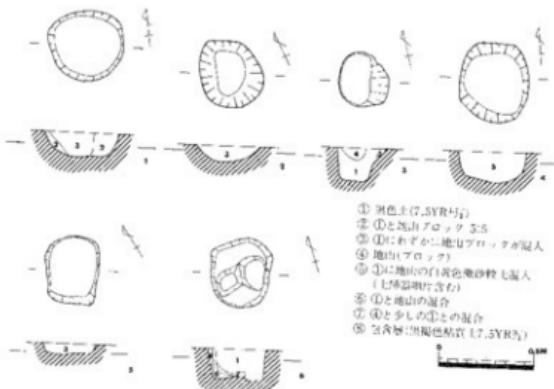
#### 掘立柱建物-11 (第40・41図、図版17)

この第1地区の南東隅より検出しブロックとしてはE-5、6に位置する。やや西側に主軸をおく桁行間1間(2.60~2.80m)×梁行間2間(2.25×3.05m)と相当な重みがみられた。西侧妻柱(P-6)は梁行に通らず東側に大きく入り込んだ位置で検出した四本柱のはば2等分した地点に設定されているので十分、棟木を支えられる柱穴と思われる。掘り方の最大は45.5×40、最小は、31.5×26.5とばかりつきがあり、四本柱はすべてU字形の断面を呈し黒色土を基準とした埋土に充填されていた。



第40図 掘立柱建物-11 遺構図

棟持柱の掘り方は、四本柱よりもしっかりしておりP-6などは2段底の形態を示す。



第41図 挖立柱建物-11 各柱穴遺構図

各ピットについて実数値を求めるとき P-1 から  $40 \times 38.5 \times 13.5$   $40 \times 32 \times 9$   $31.5 \times 26.5 \times 18.5$   $45.5 \times 40 \times 17$   $39 \times 38 \times 6$   $38 \times 37.5 \times 16.5$  となる。尚、P-3、4、6 より、土師器、須恵器、杯蓋片を検出しているが実測図として示すには至らない。

P-1 平面形は円形で、掘り方はやや内湾気味の傾斜。底は若干フラットな部分がある。埋土は中央部で、地山の混入した黒色土が西側で傾斜した柱状に堆積しており、柱根の痕跡をとどめる。

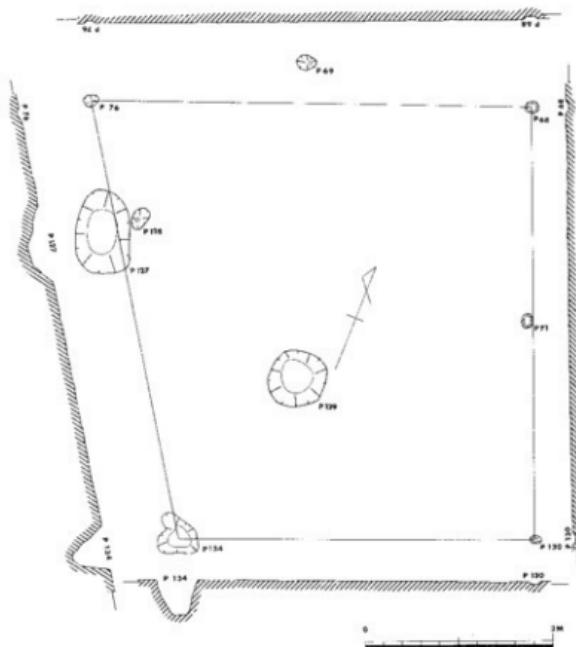
P-2 平面形は梢円形に近く、掘り方はゆるい傾斜を呈し、丸味をもつ底にいたる。埋土黒色土と地山の混合土が単一である。

P-3 平面形は梢円形で、掘り方は東壁上面近くで段をもった傾斜面を有する以外は垂直に近い。埋土は地山（白黄色微砂粒土）を混入させる黒色土の単一層である。

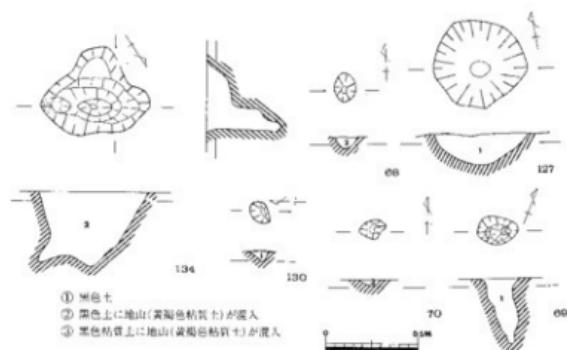
P-4 平面形は隅丸の長方形で、掘り方は摺鉢形に近く、底は若干のうねりを有する。埋土は地山をブロックで混入させる黒色土。

P-5 平面形は隅丸の長方形で、掘り方は摺鉢形に近く、底は若干のうねりを有する。埋土は地山をブロックで混入させる黒色土。

P-6 平面形は隅丸方形に近い梢円形で、掘り方はほぼ垂直になる。底部中央は梢円形の浅い落ち込み 2ヶ所で占められ、2段底を呈する。埋土は西壁側で地山を混入させる以外は黒色土の単一層である。



第42図 挖立柱建物-12 遺構図・柱穴遺構図(上)



第42図 挖立柱建物-12 遺構図(上)・柱穴遺構図(下)

### 掘立柱建物-12 (第42図、図版18一下)

C-D-4にまたがって検出した建物であるが、側柱の通りが悪いものや検出不可能であった柱穴が2ヶ所あるのと同時に平面にやや歪みがめだつ。

主軸を西に振った桁行間1間×梁行間2間、実長3.80~4.70、4.67~4.82を測る。P-69、P-170は多少、柱通からずれるが立派に掘立柱建物を構成できよう。P-130の補助柱として、南側に接してP-131が存在する。

ただP-69は、桁行に向って支えていたことが距離と掘り方の角度から判明される。

柱掘り方は、P-134の52×42×36の他は、長径20cm以下のもので床面積の割には、柱の大きさは認められなかった。

各柱間は次のとおり、P-76~68、4.69m、P-68~71、2.30m、P-71~120、2.37m、P-120~134、3.81m、P-134~127、3.42m、P-76~127、1.39m、P-76~120m、6.68m、P-68~134、6.00m。

P-68 平面形は楕円形で、掘り方は内弯気味の傾斜を呈し丸底にいたる。埋土は地山の混入した黒色土。

P-69 平面形は楕円形で、掘り方はかなりのうねりを有して東側へ傾斜していき、底は尖底しており東壁のほぼ直下に位置する。埋土は黒色土の單一層である。

P-70 平面形は不整楕円形。掘り方はゆるく傾斜して丸底にいたる。埋土は地山の混入した黒色粘質土の單一層である。

P-127 平面形はほぼ円形を呈し、掘り方は内弯気味の傾斜で丸底にいたる。埋土は黒色土の單一層である。

P-130 平面形は楕円形で、南壁で垂直に近い掘り方を呈する。底は尖底である。埋土は黒色土で占められる。

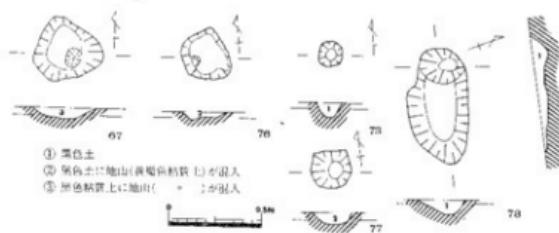
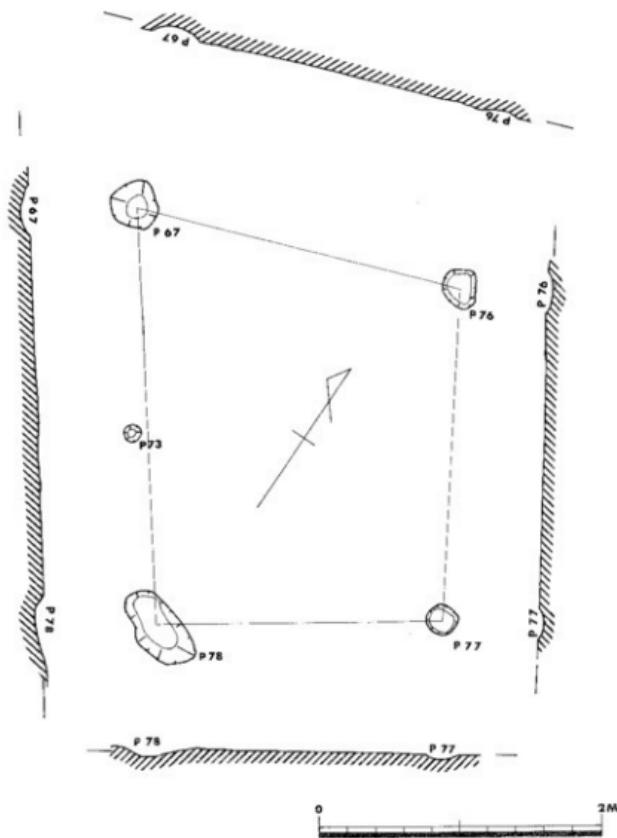
P-134 平面形は不定形(隅丸の凸形に近い)。掘り方は南西壁で2段の段を有し、他は垂直ないし傾斜する。底は中央部に尖底が位置する他、東壁際にピット状のえぐれが存在する。埋土は地山の混入した黒色土である。

### 掘立柱建物-13 (第43図、図版18一上)

掘立柱建物-6と10との間に位置し主軸は、西側にかたよる桁行間1間×梁行間1間の建物である。実数値で2.02~2.35×2.35~2.96mを計測したが北西に著しい歪みあり。西側妻通りには、P-73の柱穴が認められたが対応する柱穴は確認されない。

又P-171は、P-73の補助柱と思われる。

63×34cmが最大掘り方でその他の柱穴は径20~30cm程度で、黒色土を基調とした埋土であ



第43図 挖立柱建物—13 遺構図(上)・柱穴造構図(下)

る。

各ピット共に浅くレンズ状断面を呈する。

各柱間の距離は次のとおり、P-67~76、2.84m、P-76~77、2.36m、P-77~78、2.02m、P-73~78、1.34m、P-67~73、1.62m、P-67~77、3.63m、P-76~78、3.21m。

P-67 平面形は隅丸方形に近く、掘り方はゆるい傾斜でややうねりをもつ丸底になる。底の東壁際には内凹状の浅い落ち込みを有する。埋土は地山の混入した黒色粘質土。

P-73 平面形は円形で、掘り方は平坦な傾斜を呈し、底はやや丸味をもつ。埋土は黒色土の單一層である。

P-76 平面形は隅丸方形で、掘り方は東壁でやや垂直に近い。底は中央部がフラットになる。埋土は地山の混入した黒色土。

P-77 平面形は隅丸方形に近く、掘り方は西壁で内弯気味のゆるい傾斜を有する。底部はやや東壁寄りに位置し、丸味をもつ。埋土は地山の混入した黒色土。

P-78 平面形は長楕円形を呈する。掘り方は南壁側でゆるい傾斜。底は西側へうねりを有して下がり、西壁際は楕円形状に落ち込む。埋土は黒色土の單一層である。

#### 掘立柱建物-14 (第44図、図版19)

ほぼ真北に主軸をおくこの建物は、D-5、6地区の東隅より検出された。1間(2.60~2.78m)×1間(1.86~2.77m)の四本柱建物である。南側の柱通に1個の柱穴(P-154)が検出されたが棟持柱とするには位置的に問題を残すが、この建物に関連する柱穴であると考えられる。

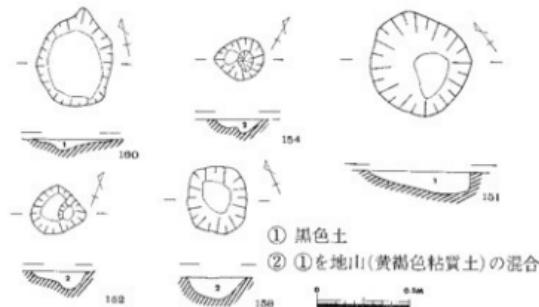
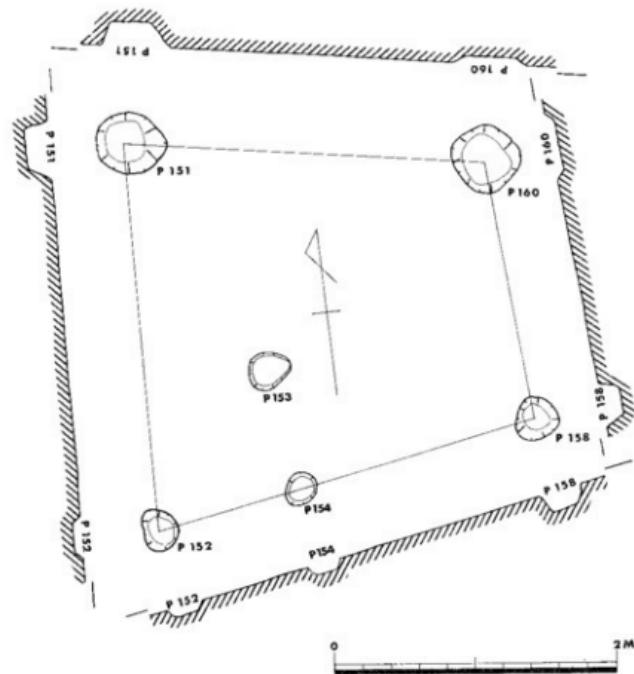
柱掘り方には抜取り痕はなく、大きいもので52×46、小さいもので31×26の平面規模をもち、深さは20cm以下と浅い。埋土は、黒色土と黒色土に地山の混入土の二層である。不整円形の柱穴からは柱根は検出されず、掘立柱建物-12、13と同様に須恵器、土師器の細片はみられたが固化できる遺物は見い出せなかった。

各柱間は次のとおり、P-151~160、2.55m、P-160~158、1.85m、P-158~154、1.73m、P-154~152、1.04m、P-151~152、2.76m、P-151~158、3.50m、P-152~160、3.50m。

平面は盃んでいるが対角線には同一数値が得られる。

P-151 平面形はやや角ばった円形。掘り方は北壁からのゆるい傾斜が垂直に近い急傾斜の南壁までいたり、したがって底部は南壁際のゆるい傾斜面になる。埋土は黒色土の單一層である。

P-152 平面形は隅丸方形に近い。掘り方は西壁から段をもって掘り下げられ、東壁際で丸



第44図 挖立柱建物—14 遺構図・(上)柱穴遺構図(下)

味をもつ2段底を呈する。埋土は地山の混入した黒色土が一層である。

P-154 平面形は不整円形。掘り方は西壁で段を有する傾斜。底はやや東壁寄りに位置する

2段底で丸底を呈し、柱痕をうかがわせる。埋土は地山を混入させる黒色土。

P-158 平面形は隅丸方形で、掘り方は内弯気味ないしは平坦な傾斜面。底は不整梅円形でやや丸底に近い。埋土は地山の混入した黒色土の单一層である。(森村)

## 5. 掘立柱建物について

最近、特に大規模発掘が多く古墳時代の掘立柱建物群が頻繁に報告されつつある。その中で從来より家形埴輪、奈良県佐味田宝塚出土・家屋文鏡、環頭大刀の遺物から掘立柱建物の用途と系譜は指摘されていた。

掘立柱建物が考古学的調査資料として増加するにつれ、これらの建物群が畿内中心に発展し住居、倉庫とそれに付属する建物などが、単なる1棟の建築構造物にとどまらないことは周知の事実である。その有機的関係から1つの集団が集落へと派生しその地域の経済的、社会的情勢の反映として把握することも可能であろう。

第1地区検出の掘立柱建物は、黒褐色粘質土層下に存在し地山（黄褐色粘質土）上面で検出した。その黒褐色粘質土下層には、5世紀後半から7世紀に下る遺物が包蔵されていたが、上下限期の遺物は微量で6世紀前半から中葉にかけて須恵器が大量に検出された。しかし、20~30cmの黒褐色粘質土を数次に分けて精査したが後世の耕作によって、多少の移動や地山そのものの削平が、検出された古墳時代の遺構の遺存状態から十分考えられる。従って、層位からみて掘立柱建物は、6世紀中葉遺物を含有した土層に埋没していたこととなる。

この地区で検出した建物については、一覧表によって明らかにしたい。

1×1間 3棟、1×2間 5棟、2×2間 3棟、2×4間 1棟、3×3間 2棟、の掘立柱建物である。

建物-2は、南側に1間分建て増しこの地区的最大規模をもつ、床面積24.7m<sup>2</sup>の建物である。総柱建物の建物-5、6は、共に比較的柱間の整った建物で平面プランも正方形に近い形態をもち柱穴もしっかりしていた。

検出した14棟の内、7棟は直角形・プランで柱通りや妻柱の検出されないものや位置的にずれている建物もある。

棟持柱を有する建物はなく、建物-7、9、12のように補助柱をそなえているものや建物-5に確認された妻柱通り外に柱穴をもち、かつ桁行通りの線上にのりその建物に関係すると考えられる柱穴も存在した。

先にも述べているが建物全体の平面が直角形、床面積を求める段階においても多少の誤差は生じよう。しかし、一応建物の規模を知る指標となる。

10m<sup>2</sup>以下床面積の建物は、7棟で倉庫と考えられる掘立柱建物は含まれない。

11~20m<sup>2</sup>までの床面積の建物には、掘立柱建物—5、6、7の3棟に限定されて、内2棟が倉庫である。

増築して居住空間を増加せしめた建物—2、正方形の建物—5と建物—12は20m<sup>2</sup>を越し、中でも建物—2は、他の2棟よりも卓越していた。

それらは、築造時期と当時の集団間又は、家族の社会的、経済的要因と大きな関わりをもつ。

又、広瀬和雄氏は「方形掘り方のものは、古墳時代にはない」と触れたが、本遺跡では6世紀中葉に於いて明確に検出されて柱の大形化に伴う技術、建築構造物の変化、さらには、生活空間利用度が増大したことが示される。

しかし、この段階の建物には全てが方形プラン柱穴でなく、同一建物にあっても、約半分位が占めるにすぎないので必ずしも上述の事象を一概に否定できない点もあり過渡期でもある。

掘立柱建物一覧表

番号	規	模	主軸(m)	面積(m <sup>2</sup> )	時 期	備 考
1	2×2間	2.90×2.86	N50°E	8.2		
2	2×4間	4.22×6.97	N58°E	24.7	6世紀中葉	増築1間
3	1×1間	2.95×2.75	N33°5'E	7.9		
4	3×3間	4.72×4.67	N34°	20.6	6世紀中葉	
5	3×3間	4.25×3.59	N38°E	15.2	6世紀中葉	東柱あり
6	2×2間	3.88×3.50	N27°E	13.5		東柱あり
7	1×2間	2.56×4.84	N79°E	12.4		
8	1×2間	3.00×2.70	N22°5'E	8.1		
9	1×2間	2.85×2.45	N48°E	6.9		
10	1×1間	3.05×3.00	N93°5'E	9.1	6世紀中葉(前)	
11	1×2間	3.05×2.80	N71°5'E	8.5	6世紀中葉(前)	
12	2×2間	4.70×4.60	N71°5'E	21.6		
13	1×2間	3.00×2.00	N59°5'E	6.0		
14	1×1間	2.78×2.77	N80°5'E	7.7		

#### 掘立柱建物の構造・用途

基本的には、ここで検出した14棟の掘立柱建物は周知のように切妻式建物である。住居建物では、梁間が2m以上を測るものは少なくなく床面に高低はともかく板を張りわたす事は不可能である。当時の地表面をたたきしめるなり、乾燥させるなりし、その上に木材、葦といった保溫施設を形態として推察できるがこの調査中にはこれらを推しはかる資料は見い出せなかつた。

農業経済を基盤としている以上、余剰生産物を貯蔵する倉庫や納屋、その他付属建物は必然的なものであるが、この地区では東柱をもち総柱として高床式建物—5、6の2棟が倉庫であ

った。

それ以外の建物をここでも納屋等に分別しなければならないのかもしれないが、納屋等の付属建物と住居とを、柱間数とその床面積だけで判別することは賛成できない。

ただ、直な掘立柱建物は、もちろん生活するに不安ではある。直さが頗著な建物—7、8、9、10、12、13、14は、納屋、作業場等と考えられ、特に建物—7は、住居として生活空間利用上において不便を感じさせる。

掘立柱建物—12などは大型規模の建物に入るが、 $20m^2$ を越す他の2棟とは柱穴やプランから考え住居形態からややかけ離れている感さえある。

これがこの集団内の共同作業場、集会場的な建物としてとらえられるなら他の $10m^2$ 以下の直な小規模建物を納屋として片付けられるが建物—7以外は、依然として住居としての性格をもつとの考えを捨てる事ができない点がある。

#### 各柱間にについて

各建物の柱間距離を実施において計測することにより当時の建築構造物の建設に伴う尺度基準、建物相互の企画性、さらに掘立柱建物の建てる基準を見きわめたいと思ったが必ずしも良好な整理結果は得られなかった。

この地区より検出した中で、最も整美な建物—1、2、4の住居について尺度基準をみた。建物—1では、1.40 1.46 1.50 1.56mと最大差16cmを測るが桁行間と梁行間の差は僅か4cmたらざである。

当時の建築技術からしてみれば垂直柱でなくともある程度の整形を施した柱であれば十分その用をたすから5cm内外の誤差は許容範囲といえる。

そうしてみると、建物—2の柱間では、1.10 1.30 1.40 1.55 2.10 2.30 2.40 2.90mと数値のばらつきが認められた。

ところが建物—4においては、1.45 1.50 1.55 1.65 1.75mといった5種の寸法に限られ、3対面の柱間に誤差の少くない柱間もある。その事は、建物—3でも共通する。

建物—5は東柱を有するが各柱間は、1.05 1.20 1.25 1.35 1.40 1.55mにまとめられるが対面柱間に誤差が多い。

建物—6は、西隅柱穴が欠損しているが、1.75 1.85 2.00mに集約されると同時に、対面する柱間に同一数値がめだつ。

色々と数式を設定して試行した結果、尺度と各企画性はみられなかったが、対面する柱間を同一にして建物内でのバランスを計っていることがわかる。

さらに興味ある事実として、四本柱の対角線上距離を計画し、直角に辺を整えている基点が各建物に2~3ヶ所認められて、主軸決定ともからんで一定の規則性をもって掘立柱建物を

築造していることが見い出せる。それは次の資料から促せられるであろう。建物-1 4.1×4.1m 建物-2 7.3×7.3m 建物-3 3.9×3.9m 建物4-6.65×6.45m 建物-5 5.43×5.45m 建物-6 5.25×5.5m 建物-7 5.35×5.25m 建物は比較的整美なプランをもつものであり、派んだ掘立柱建物である建物-8 3.8×4.25m 建物-9 3.5×3.65m 建物-10 4.1×4.3m 建物-11 3.75×3.8m 建物-12 6.65×6.0m 建物-13 3.2×3.6m 建物-14 3.5×3.5m というように、一瞥して並んでいる建物も、対角線上においては、大きな差はみられず主軸と2~3辺の直角どりと合せ掘立柱建物の基準となる基礎的な手段と考えられる。この事は、この種の建物にあっては、使用建築用材の制約は社会的、経済的要因によって建物の所有者の性格付けを推しはかるものとなるが整美な大型建物にあっては、優良な建築用材が、その他の建物では多少の用材のゆがみから出る掘立柱建物の粗雑化は否めずそれが柱穴として表われようし、対角線上におかれた四本柱が優劣のある建物にかかわらず築造の基準とみられる。

### 掘立柱建物の築造段階

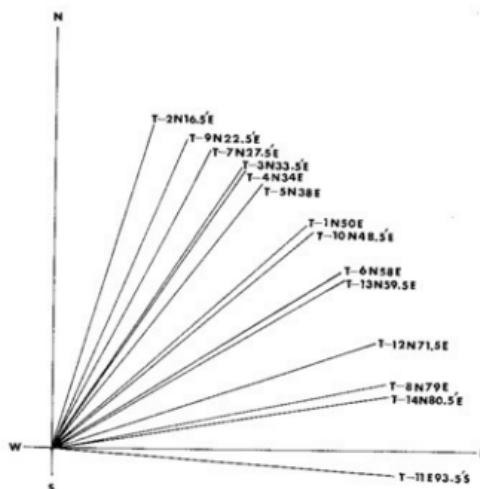
#### 建物主軸・出土遺物

相当な並みのある建物にあっても建物の主軸を知ることは出土遺物と合せて重要な手がかりとなる。当初、西、東側の平行通りを主軸としてグルーピングを試みたが各辺によって主軸が大

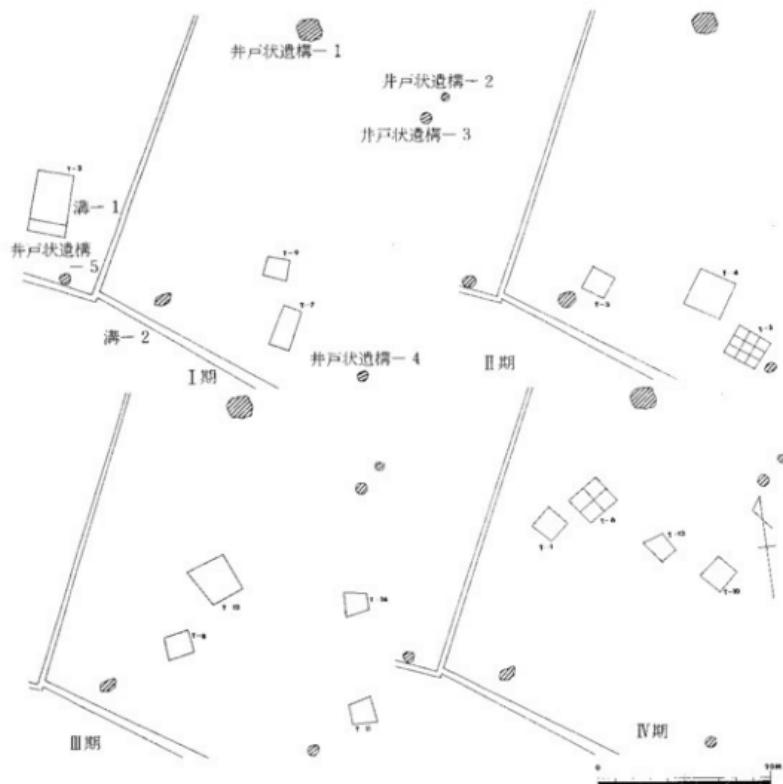
きく差異が認められ、各建物について建物築造時の基準ともなる2~3辺での直角を求め主軸線を決定した。1期では西側に、2期では西と東の2種、3期では南側、4期では東側の平行にそれぞれ主軸を置いたことになる。

出土遺物からその建物の築造時期を決定するにはやはり柱穴中の遺物が妥当であろう。層位からも6世紀中葉を前後する時期に限定されるし、出土遺物もそれを裏付けていた。

建物-4、柱穴-3出土の



第45図 掘立柱建物主軸表



第46図 時期別・掘立柱建物図

有蓋高杯、杯蓋は完形品で、柱の埋設と同時にこの須恵器も埋設したものであろう。

他の柱穴からは、土師器、須恵器の破片が検出されているので、主軸と考え合せて建物築造段階決定の資料としては十分である。

主軸から掘立柱建物を分類するとⅠ期一建物-2、7、9の3棟 N16°5'EからN27°5'Eに集中し、Ⅱ期一建物-3、4、5の3棟からなり、N35°E前後にまとまる。Ⅲ期一建物-8、11、12、14の4棟と増加する。主軸はN71°5'EからN93°5'Sにとやや幅がⅣ期とは明らかに別離する。Ⅳ期一建物-1、6、10、13はⅡ期とⅢ期の中間主軸にかたまり最小角度N48°5'E、最大角度N59°5'Eであった。(第45、46図)

それぞれの時期を須恵器の形式別によって系譜付けるのは土器そのものの使用年代幅等を考慮すると必ずしも実年代でそれらの段階を追求できないが、Ⅰ期を陶邑Ⅱ—3期、Ⅳ期を陶邑Ⅱ—5期とするにとどめたい。土器形成を単純に受け入れて把握したとすればⅠ期、Ⅱ・Ⅲ期、<sup>註-2</sup>Ⅳ期の3段階のみに分類され主軸から追求した段階差とは多少の矛盾が生じるが、諸条件を考え合せ掘立柱建物の有機的機能に言及する時点ではこの3期に視点をしづって考えて行くべきであろう。従って、Ⅱ期とⅣ期とは相前後して建てられ併存していた蓋然性をもつ。

それは出土土器のもつ現段階での弱点でもあり、掘立柱建物について述べる分には多少の危険をおかす寛容範囲内である。

#### 井戸状遺構、不明ピット（落ち込み）掘立柱建物空間について

集落機能を論じるには、建築構造物である掘立柱建物の分析に留めていれば古墳時代の生活構造にせまることはできない。

生活において最も重要な水利用が河川に限らず井戸という水源と掘立柱建物の関係、土括（不明ピット）<sup>註-3</sup>と建物といった有機的関連、さらには居住地域内の空間すなわち「広場」の存在<sup>註-4</sup>が古墳時代の人々の生活機能において複雑な相関関係にあることは言うまでもない。<sup>註-5</sup>

この1地区で検出された井戸状遺構、不明落ち込み（ピット）が建物と隣接した位置に存在し、かつ最小深30cm前後であっても地山の砂地に達して湧水が著しく井戸としての機能を十分発揮した遺構をピックアップし一覧表とした。詳細は後述するのでここでは一応整理するにとどめる。なお、これらの遺構は素掘りの構造で井筒、井戸枠等の施設は検出されなかった。

P-189、163の2ヶ所を除けば不整円形を呈し、上面径を大別すると1m以下、2m以下、2m以上の3分別され深さにも同様のことがいえる。出土遺物は井戸状遺構-1、2、3、4不明ピットP-80、P-81、P-161以外は須恵器、土師器の細片が出土したにとどまったが、それらの多くは6世紀中葉を中心としている。

さて掘立柱建物と井戸状遺構等の配置を判別すると、明らかに建物に隣接しているものと、掘立柱建物群の北側に群集する井戸状遺構-1、2、3 P-80、81に分かれる。

具体的に、時期別遺物と井戸状遺構等をみるとⅠ期には建物-2、井戸状遺構-5、建物-7、9-P-190、Ⅱ期には建物-3-P-189 建物-4、5-P-192、Ⅲ期には建物-12の構造物内にP-129が存在 建物14-P-163 建物-11-P-192、Ⅳ期にはP-80、81 P-161の使用が考えられる位置に存在する。

その他に、掘立柱建物の集中する溝-1、D-2、3は他の溝底よりもはるかに深く井戸状遺構に類するものであろう。

井戸状遺構-1、2、3は、周辺に建物等の遺構を検出されず「広場」としての空間が一見して明らかで井戸状遺構-1と2、3に細別される。

井戸状遺構一1はこの種の遺構内で卓越し、この単位集団統合と同時に労働力の結集として掘削し、集団の廐棄と同時に埋土を底ざらいにした後、3次にわたり「祭祀的儀礼」を行ったのち埋め戻す。同一行為としてP-80、81、161にも観察された。

井戸状遺構一1は単位集団による共同使用、管理をうかがわせ、その他の井戸状遺構等は家族単位の個人管理、使用と見受けられる。それは、家族単位の自立性への発展が促された結果である。しかし、井戸状遺構一1を中心とする掘立柱建物北側に存在する「広場」は、単位集団相互の意識疎通の結集の場、共同作業場、祭祀場として大いに活用されたものであろう。

井戸状遺構、不明ピット一覧表

遺構、番号	平面形	規模(長軸径×短軸径×深さ)cm	構造	出土遺物
井戸状遺構一1	不整円形	292×242×202	素掘り	須恵器、土師器
—2	△△	105×95×85	◆	須恵器、土師器
—3	円形	134×130×123	◆	須恵器、土師器、埴輪
—4	△	126×116×62	◆	須恵器、土師器
—5	△	122×116×37	◆	須恵器、土師器細片
不明ピットP-80	不整円形	84.5×75×75	素掘り	土師器、壺
P-81	△	44×41×81.5	◆	土師器、壺
P-129	△	60×55.5×35	◆	土師器片
P-161	△	72×63×69	◆	瓦石-2、土師器、須恵器
P-163	隅丸長方形	70×47×33	◆	須恵器、土師器、細片
P-189	楕円形	206×120×46	◆	土師器、須恵器、細片
P-190	不整円形	73×65×27	◆	土師器、須恵器、細片
P-192	不整円形	101×92×36	◆	須恵器、土師器、片

#### 溝・掘立柱建物群から

溝は、掘立柱建物の排水機能を果し単位集合関係に少なからず影響を与えていたものである。

溝一1、2共に6世紀中葉を中心としそれ以前、以後の時期に属する出土土器は6世紀中葉期出土上器を凌駕するものではない。蛇足になるが溝内より陶色I-5期に溯る土器も含まれるが微少である。

この地区において検出した溝底で全容を推測できないが、當時、排水は認められず、たえずよどみ状を成し、集落としての機能に終止符をうつ時に日常使用されていた上器類を投棄したものと考えられる。

先に触れた溝と建物配置関係は、ほぼ東西に流れる溝一2に接しつつ溝一1に偏在させていくことに気がつき、建物一2は溝一1に平行する位置にある。さらに興味深い事実として溝一2に直交してN14°5'Eに向けて掘削された溝一1が交り、後日、発掘調査した3地区(1地区の東側)でもN17°5'Eに主軸を置溝を、2地区でもN16°Eに主軸を向けた溝が検出された。

共に溝一2に直交し、溝一1に平行して企画性をもって配置されており、3地区でも6世纪中葉の棟持柱を有する1×1間(3×3m)の掘立柱建物を、また2地区においては、布留式土器を含有する掘立柱建物と井戸状造構をセットとして検出した。

尚、溝一1と3地区検出の溝との幅はちなみに63m、2地区とでは59mを計測し復元された。

古墳時代中期ないし後期においてすでにこの遺跡では建物と溝の企画性が施工され、2地区から1地区への単位集団の推移につながる。

#### 集落として

掘立柱建物が単なる建築構造物にとどまらず集合し、溝、井戸等と密接かつ有機的な関係をしていることは言及するまでもない。それらを管理、構成した人々の人間関係、すなわちこれらの遺構から脈絡する単位集団の動向を把握し、古墳時代の社会、経済性について述べた優れた論述がある。それは、もとより、「集落論」なるものに表記され展開されている。  
註-8

先に、原口正三氏は「畿内で掘立柱建物が一般化するのは6世纪末から7世纪初めの時期らしいということ。」と、触れたが、大園遺跡、百舌鳥陵南遺跡や本遺跡をみると必ずしも率直に信頼出来ないむきがある。

本遺跡については、主軸を中心として判明した建築段階をI~IV期に分類したが、出土土器・遺構の切合関係からみてII・III期は併存期間はほぼ同一である。I期には、建物一2という最大床面積を有し増築することにより居住空間利用度を増して最大規模の住居として卓越し、他の掘立柱建物群とは溝によって区別されていた。小型住居と付属建物が各1棟によって形成される。II・III期は、大型住居一1、小型住居一2、倉庫一1、小型付属建物一2、大型付属建物一1、IV期に至っては、小型住居一2、倉庫一1、付属建物一1である。

和泉における6世纪代の掘立柱建物を検出した遺跡として、堺百舌鳥・陵南遺跡(6世纪前半)、大園遺跡が有名である。これらの遺跡の床面積について比較すると、陵南・大園遺跡とも住居にちらりと見い出されるが、今池遺跡では10m<sup>2</sup>以下の小型住居と20m<sup>2</sup>以上の大型住居にグルーピングでき、倉庫は、10~15m<sup>2</sup>のみの2棟で、上述の2遺跡では散在的である。  
註-10  
註-11

本遺跡では、I期に全時期を通じて超越した住居をもち、単位集団の首長の住居にあて、小型住居とは大きな格差が認識され、経済力の結集としての倉庫はみあたらず経済力の貧弱さが認めだつが、支配者層の存在はすでにこの時期に位置付けられる。II・III期は、住居・倉庫・付属建物を梅円状に配置し、中央に「広場」としての空間が存在する。

倉庫としての建物一5は建物一4に居住する人間によって管理され、他の小型住居と比べて群を抜いており、相互に支配関係が知られ、この時期での社会的・経済的な力が全盛期に入り込んでおり、両面において自立性が集団に萌芽したことが証明され、又、この期には、住居とするには不適当な建物一12は、付属建物中でも優越性が明確で共同作業物としての、蓋然性をも

たせると同時に支配力、労働力の結集も一面にのぞかせる。

円弧状に配したⅣ期に進むと、倉庫を管理する建物—1は、1つの家族と付属建物を支配下に置いていたにすぎず、わずか数十年間での単位集団の消長が明白である。これは、なにも本遺跡にかぎらず、大園・陵南両遺跡にも見受けられる現象であって、各遺跡の単位集団の社会的・経済的動向が如実に現われた結果であろう。こうしてみると本遺跡では、南京の2地区調査によって布留式土器を包蔵した単位集団の存在が確認されているが、各単位集団の自立性は、Ⅱ・Ⅲ期に成立し、Ⅳ期を最後にこの地区から離れていくことが考えられる。

居住に最も大切なメリットを掘立柱建物についてのべたが、彼等の生産基盤としての水田跡は隣接する東側低地に広がることが最近の発掘調査によって実証された。別の機能である墓は、発掘調査継続中であるので住居群の全面的な解明とともに、今後の十分なる発掘調査に期待したい。（森村）

### 参考文献

- 註-1 広瀬和雄「古墳時代の集落類型—西日本を中心として」考古学研究、第25巻、第1号 97  
1978年6月
- 註-2 中村 浩「陶色」大阪府文化財調査報告書 第輯 大阪府教育委員会 1976年 須恵器の技法、形態等についてこの報告書に従った部分が多い。
- 註-3 広瀬和雄「大園遺跡発掘調査概要・Ⅲ」大阪府文化財調査概要、1975年 大阪府教育委員会  
1976年3月
- 註-4 石野博信 関川尚功「趣向」櫛原考古学研究所、昭和51年9月21日
- 註-5 青木遺跡発掘調査「集落論」「青木遺跡発掘調査報告書・Ⅱ」C・D地区 1977年3月
- 註-6 1979年5月 1地区東南、120m地点で発掘調査を実施した。
- 森村健一「大和川今池遺跡」—発掘調査資料その1— 1978年6月 大和川今池遺跡調査会
- 註-8 石野博信「古墳時代の集落構成」考古学研究、第23巻、第4号 92 1977年3月 考古学研究会
- 註-9 原口正二「古代・中世の集落」考古学研究 第23巻、第4号、92 1977年3月 考古学研究会
- 註-10 中村 浩「百舌鳥・陵南遺跡発掘調査概要」一堺市百舌鳥陵南町所在一 大阪府文化財調査  
概要 1974-13 大阪府教育委員会 1975年3月
- 註-11 神谷正弘「大園遺跡発掘調査概要」2、高石市教育委員会、1976年

## 6. 井戸状遺構

井戸状遺構は、5基検出されている。位置を概観すると、井戸状-1、2、3は建物群の北東のはずれにあり、井戸状-4は建物-5の東側に隣接し、井戸状-5は建物-2の南で溝-2に隣接する。建物との関連でこれを見ると、井戸状-4と井戸状-5が建物に近接する。これらはいずれも、井戸枠等の施設をもたず、素掘りであると思われる。規模を見ると、井戸状-1が最大規模をもち、遺物の出土数も最高である。その形態は、平面形で不整円形を呈し、掘り方は一度急角度で傾斜した後、段をなし、中央部がまた急角度で傾斜して底に至るという複雑な形を呈する。これと同形態のものは、後に調査した第2地区（東南約120m、関西電力鉄塔用地内）でも検出され、規模もほぼ同程度であった。但し、埋土に含まれられた遺物は第2地区の方が時期的に古く、両者の関連が注目される。

その他は、井戸状-2・3がほぼ同規模、同形態で平面形は一様に不整円形を呈し、掘り方は上面近くでラッパ状に開き、中程あるいは底近くで1度くびれた後、また膨むというものである。この2者は、位置的にも2.1mしか離れておらず、共通性が強い。ただし、遺物の出土数は井戸状-3の方がやや上回る。

井戸状-4、井戸状-5もほぼ同規模である。ところが、この2者の形状はかなり異なり、井戸状-5が中程で段をなし、底が平坦となるのに対して、井戸状-4はなだらかに弯曲し、浅いU字状を呈する。しかし、遺物の出土を全く見ないことや、建物に近接していること等共通点が多い。

埋土は、いずれも黒色粘質土を基調としており、他の遺構の埋土と共通する。また、いずれも地山の砂層、あるいは砂質土に達するまで掘り下げられており、検出後にかなりの湧水を見た。

遺物は、出土を見ないものを除いてすべて須恵器が含まれており、掘削又は、使用時期は6C前葉から中葉に比定される。

井戸状遺構は、いずれも地山の砂層あるいは砂質土層まで掘り込まれていることから、井戸的機能を持つものと思われる。

### 井戸状遺構-1（第47図、図版-20）

溝-1の東側、建物群の北側に位置する。

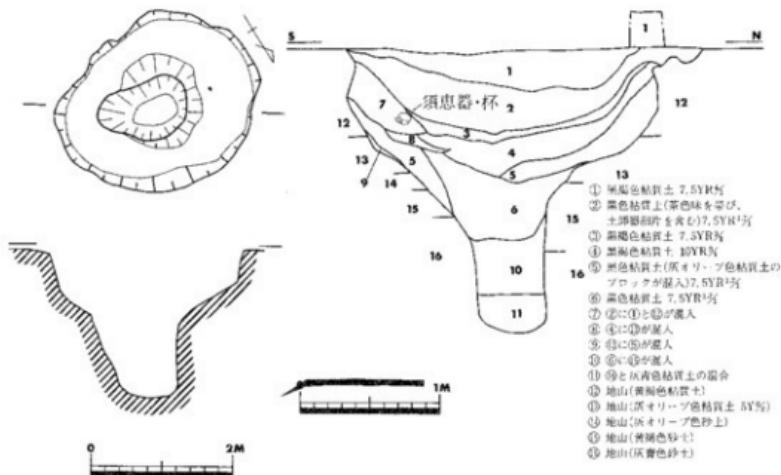
#### 遺構

遺構の形状は、一度急角度で傾斜した後、段をなし、中央部がまた急角度で傾斜して底に至

るという、いわば逆凸状を呈す。これは、長期間の使用と規模の大きさ、さらに地山の黄褐色粘質土が軟弱なため自然崩壊した結果であろう。平面は不整円形を呈し、上面で $2.42m \times 2.92m$ 、中段上面で $1.3m \times 約1.5m$ を測る。深さは、中段上面までが約 $0.8m$ 、底部までが約 $2.0m$ である。構造は、素掘り井戸であると思われるが、段上面縁に板状木製品が貼り付いた様な状態で出土しており、井戸枠の一端あるいは上部施設の一部であった可能性も考えられる。

### 土層

埋土は黒色粘質土を基調とし、11層に分けられる。第1層（黒褐色粘質土層 7.5Y R 1/2）は、地山直上に広がる包含層と同質のものである。第2層（黒色粘質土層+茶色味を帯びる 7.5Y R 1/2）は、後述する土層遺物を包含していた層であり、土師器細片を多く含み、レンズ状に堆積する。茶色味を帯びるのは、鉄分が沈殿しているためである。第7層、第8層、第9層は、それぞれ第2層、第4層（黒褐色粘質土層 10Y R 3/4）、第5層（黒色粘質土層+灰オリーブ色粘質土のブロックが混入 7.5Y R 3/4）に地山が混入したものであり、基本的には黒褐色粘質土に包括される。第6層（黒色粘質土層 7.5Y R 3/4）以下は水平層で湧水によって泥状となっており、掘り下げに非常に困難を伴なった。



第47図 井戸状遺構-1 遺構図

地山は第12層（黄褐色粘質土層 2.5Y 7/6）、第13層（灰オリーブ色粘質土層 5 Y 5/6）が粘質土層で、以下は第19層（灰オリーブ色砂土層）、第15層（黄褐色砂土層）、第16層（灰青色砂土層）といいれても砂土層となる。湧水はこの砂土層から湧出し、空にした状態から約1時間で40cm、24時間で底より90cmの所まで水位が上がった。これが井戸であったならば、当時の地下水の状態が現在と同様であったとはかならずしも言えないが、これによって一応十分機能を果たし得たであろうことが想起される。

#### 遺物出土状態（第48図）

遺物は、出土状態から大別して上層（包含層）、上層、下層、最下層の4群に分けた。

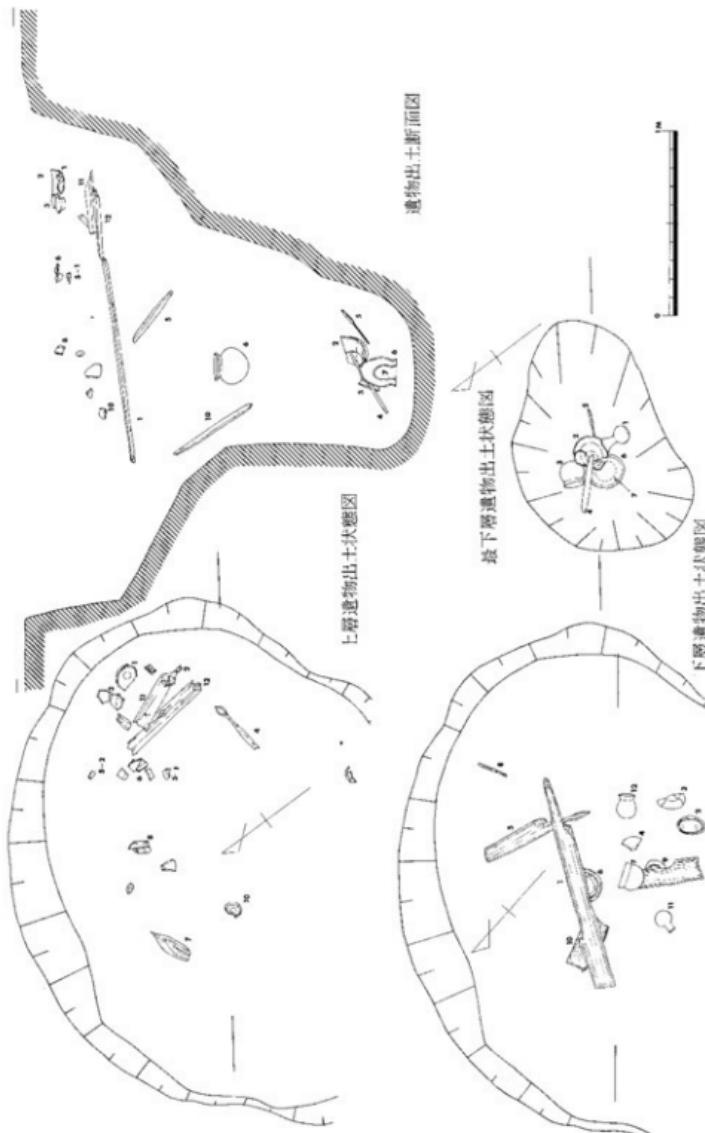
上層（包含層）遺物（第49図）は、第1層中のもので、須恵器杯（身・蓋）・壺・提瓶・甕・憩・土師器壺・甕等相当数のものが出土している。しかし、これらの多くは破片であり、残念ながら図示できるものは少ない。しかしながら、遺構上面にかたまっていたことや数量が多いことから、意識的に散布された可能性があると考える。

上層遺物（第50、51図）は第2層中のもので、須恵器杯（身・蓋）・壺・長頸甕・甕・憩、土師器壺・甕、板状木製品、木片、自然石等の出土を見る。これらも、出土状態は上層（包含層）と同様であり、大部分は東側に集中して出土していて、人為的な埋設を感じさせる。

下層遺物（第52、53図）は、第4層、第5層、第6層中のもので、須恵器杯（身・蓋）・壺・台付長頸甕・甕・土師器甕・小型甕・長頸甕・高杯、板状木製品、刃状木製品等が出土した。土器は完形品が多く、上向きまたは横向きの状態で出土したが多い。特に須恵器甕6は口縁を真上にした状態であった。また板状木製品は、①がほぼ水平、⑤・⑩が中段上面に貼りついた様な状態で、それぞれ出土した。全体としては、ほぼ中央にかたまっていた。これも、完形品が多いことや上向きあるいは横向きになっていたことなどから、意識的に埋設されたような印象を受ける。（図版-21）

最下層遺物（第54図）は第11層（第16層と灰青色粘質土の混合）中のもので、須恵器甕・土師器小型壺・甕・甕底部、板状木製品、不明木製品が出土した。このうち、須恵器甕7、土師器小型壺3は、ほぼ横向きで出土した。また土師器小型甕7は、土師器甕6の中にすっぽりと入っており、両者共口縁を真下に向けた状態であった。これらは、第48図でわかる様に中央部にまとまって出土しており、明らかに意識的に設置したものと思われる。上層遺物から最下層遺物までの土層間に全く遺物が見られないことも、この想定を裏付ける。埋土状態や遺物出土状態を考え合せると人為的に遺物を埋設する行為と埋土を繰り返したものと思われる。

なぜこのような遺物の埋め方をしたのかについては確証がなく、速断できないが、祭祀的性格が考えられる。（図版-22）



第48図 井戸状遺構—1 遺物出土状態図

## 出土遺物

(1)上層包含層出土遺物 (第49図・図版-29)

### 須惠器

#### 壺 (1)

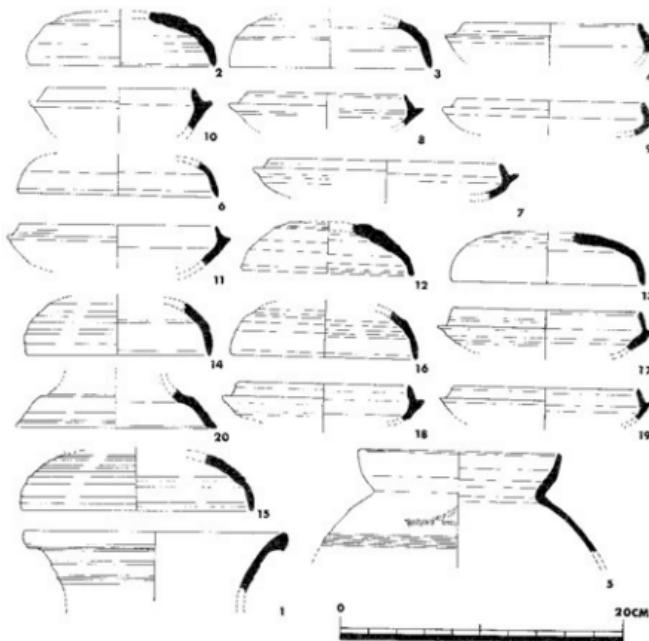
口径 (推) 18.4cm。頸部は外反し、口縁部でさらに強く外反して終る。端部は厚く、ゆるやかなカーブを描く。頸部には、2ヶ所段を有する。回転ナデ調整。胎土一密、3mmの白色礫を含む。焼成一良好。色調一外面N%灰白色、内面N%灰色。

#### 杯蓋 (2、3、6、12、14、15、16)

2. 口径 (推) 13.1cm。口縁部は内寄し、端部は丸い。天井部はやや偏平。外面天井部は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整を施す。ロクロ回転は左廻り。胎土一密、粗砂を含む。焼成一良好。色調一外面5Y%灰白色、内面7.5Y%灰白色。
3. 口径 (推) 12.2cm。口縁部は直線的に外傾し、端部は丸い。天井部はやや偏平。外面天井部回転ヘラケズリ調整、ロクロ回転は右廻り。胎土一密、粗砂を含む。焼成一良好。色調一外面N%灰白色、内面5PB%明青灰色。
6. 口径 (推) 14.0cm。口縁部、器壁は薄く直線的に外傾する。端部はやや鋭い。胎土一密、粗砂を含む。焼成一良好、色調一外面N%灰色、内面N%灰色、断面7.5R%灰赤色。
12. 口径 (推) 12.0cm。口縁部はわずかに内寄し、端部は面をつくる。天井部頂部は平坦に近い。外面天井部頂部は回転ヘラケズリ調整、胎土一密、粗砂を含む。焼成一良好、色調一外面N%灰色、内面N%灰白色、断面N%灰白色。
13. 口径 (推) 13.3cm。口縁部は、わずかに内寄しつつ垂直気味に下降する。端部は、やや鋭い。天井部は偏平。外面天井部回転ヘラケズリ調整、ロクロ回転は左廻り。胎土一密、3mm程度の白色礫を含む。焼成一良好。色調一外面10Y%灰白色、内面N%灰色。
14. 口径 (推) 13.0cm。口縁部は垂直気味に下方にのび、端部は丸い。天井部は丸く、天井部と口縁部の境に凹線を有する。外面天井部回転ヘラケズリ調整。胎土一密、2mm程度の粗砂を含む。焼成一良好。色調一外面、内面共N%灰色。
15. 口径 (推) 16.0cm。口縁部はわずかに内寄しながら下方にのびる。天井部は偏平気味。天井部と口縁部の境に凹線を有する。外面天井部は回転ヘラケズリ調整、他回転ナデ調整。胎土一密、細砂を含む。焼成一良好。色調一外面N%灰色、内面、断面共N%灰色。
16. 口径 (推) 13.0cmを測る。口縁部はわずかに内寄して下方にのびる。端部は丸い。天井部は丸味を帯びる。外面天井部は回転ヘラケズリ調整、胎土一密、細砂を含む。焼成一良好。色調一外面N%灰色、内面N%灰白色、断面7.5R%灰赤色。

杯身（7、8、9、10、11、17、18、19）

7. 口径（推）16.3cm、受部径18.7cm。立ちあがりは直線的に内傾し、端部は丸い。受部は外上方にのびる。立ちあがりと受部の境に凹線を有する。回転ナデ調整。胎土一密、粗砂を含む。焼成－良好、色調－外面N<sub>1</sub>6灰白色、内面10Y<sub>1</sub>7灰白色。
8. 口径（推）11.0cm、受部径13.8cm。立ちあがりは内傾した後、口縁近くでわずかに屈曲して上方にのびる。端部は鋭い。受部はほぼ水平。立ちあがりと受部の境に凹線を有する。回転ナデ調整。胎土一密、粗砂を含む。焼成－良好。色調－外面、内面共N<sub>1</sub>6灰白色。
9. 口径（推）12.9cm、受部径15.1cm。立ちあがりはやや短く、直線的に内傾する。器壁は厚い。受部は上面にふくらみをもち、水平にのびる。端部はやや鋭い。胎土一密、礫を含む。焼成－やや不良。色調－外面、内面共5P<sub>1</sub>B<sub>1</sub>4明青灰色。
10. 口径（推）10.3cm、受部径12.9cm。立ちあがりは厚く、直線的に内傾する。端部は丸い。胎土一密、白色礫を含む。焼成－良好。色調－外面、内面共N<sub>1</sub>6灰白色。



第49図 井戸状遺構－1 上層(包含層)出土土器

11. 口径（推）13.9cm、受部径15.8cm。立ちあがりはわずかに外反しつつ内上方にのび、端部はやや鋭い。受部は水平にのび、端部は丸い。胎土一密、1～2mmの白色粗砂を含む。焼成－良好。色調－外面N%灰色、内面N%灰色。
17. 口径（推）13.0cm、受部径15.3cm。立ちあがりはやや短く直線的に内傾し、端部は丸い。受部は水平にのびる。胎土一密、2mmの粗砂を含む。焼成－良好。色調－外面N%灰白色、内面5PB%明青灰色、断面N%灰白色。
18. 口径（推）11.0cm、受部径14.2cm。立ちあがりはやや厚く、直線的に内傾する。端部は丸い。受部は水平にのび、端部は丸い。胎土一密、細砂を含む。焼成－良好。色調－外面、内面共N%灰色。
19. 口径（推）12.8cm、受部径15.0cm。立ちあがりは直線的に内傾し、端部内側にわずかな面をもつ。受部は薄く。外上方にのびる。端部は丸い。胎土一密。焼成－良好。色調－外面、断面共5PB%明青灰色、内面N%灰白色。

### 高杯(20)

脚部径（推）14.0cm。外反しながら下方に広がった後、屈曲して内弯し、脚端部に至って再びわずかに外反する。端部に面を有する。ロクロ回転は左廻り。胎土一密、細砂を含む。焼成－良好。色調－外面、内面共2.5Y%灰白色。

### 土器器

#### 甕(5)

口径（推）14.1cm。口縁部は内寄しながら外傾し、端部は面をなしたうえ、一条の沈線を廻す。調整方法は、外面では口縁部より肩部にかけて横ナデ調整を施し、他はハケ調整を施す。内面は、口縁部は横ナデ調整。他は剝離激しく不明。ハケ日本数は1cm/8本である。胎土一粗、礫を含む。焼成－良好。色調－外面N%灰色、内面N%灰色、断面7.5R%灰赤色。

#### (2) 上層出土遺物(第50・51・図版-29)

##### 須恵器

###### 杯蓋(1、3、9)

1. 口径13.7cm。口縁部は垂直にのび、端部は丸い。天井部は半円状を呈する。外面天井部は、はっきりした回転ヘラケズリ調整、内面天井部中央は一方向のナデ調整。他は回転ナデ調整。ロクロ回転は左廻り。胎土一密、白色粗砂を含む。焼成－不良。色調－外面、内面共5Y%灰白色。

3. 口径（推）11.7cm。口縁部は内反しながら外傾し、端部は丸い。端部内側に凹面を有する。

外面口縁端部にヘラ状のものによる右上りの施文が見られる。外面天井部回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整。胎土一やや粗、4mm程度の礫を含む。焼成一不良。色調一外面 2.5 Y%灰白色、内面、断面共N%灰白色。

9. 口径（推）14.6cm。口縁部はゆるやかに内弯し、端部は丸い。天井部は半円状。外面口縁部端部に、ヘラ状のものによる右上りの施文が見られる。回転ナデ調整。胎土一やや粗、粗砂を含む。焼成一不良。色調一外面、内面共 7.5Y%灰白色、断面 7.5Y%灰色。

### 壺蓋(10)

口径（推）10.0cm。口縁部はわずかに内弯しながら外傾し、端部は丸い。天井部は平坦気味。天井部と口縁部の境に明瞭な稜をもつ。外面天井部中央に未調整部分が残る。この部分にヘラおこし痕が顕著に残る。調整方法は、外面天井部は回転ヘラケズリ調整、内面天井部中央は一方向のナデ調整、他は回転ナデ調整。ロクロ回転は左廻り。胎土一密。焼成一良好。色調一外面、内面共N%灰色。

### 杯身(2、5-1、5-2)

2. 口径（推）11.7cm、受部径14.3cm。立ちあがりは短く直線的に内傾し、端部はやや鋭い。受部は外上方にのび、端部は丸い。回転ナデ調整。胎土一密。焼成一良好。色調一外面、内面共N%灰色、断面 5 R%赤灰色。

5-1. 口径（推）10.0cm、受部径12.2cm。立ちあがりは内傾した後中位で屈曲し、上方にのびる。受部はやや外上方にのび、端部は丸い。回転ナデ調整。胎土一密。焼成一良好。色調一外面、内面共N%灰色。

5-2. 口径（推）13.5cm、受部径15.8cmを測る。立ちあがりは中位にふくらみをもち、内傾する。端部はやや鋭い。受部はわずかに外下方にのび、端部はやや鋭い。胎土一密。焼成一良好。色調一外面 7.5Y%灰白色、内面N%灰白色。

### 平瓶 (6)

体部最大径12.8cm、残存高 4.2cm。肩部はゆるやかに内弯し、胴体部に至る。底部はほぼ平坦。口部は中央よりにつくものと思われる。全体的に整ったつくりである。外面底部回転ヘラケズリ調整、他回転ナデ調整。ロクロ回転は左廻り。胎土一やや粗、礫を含む。焼成一良好。色調一外面N%灰色、内面N%灰白色。

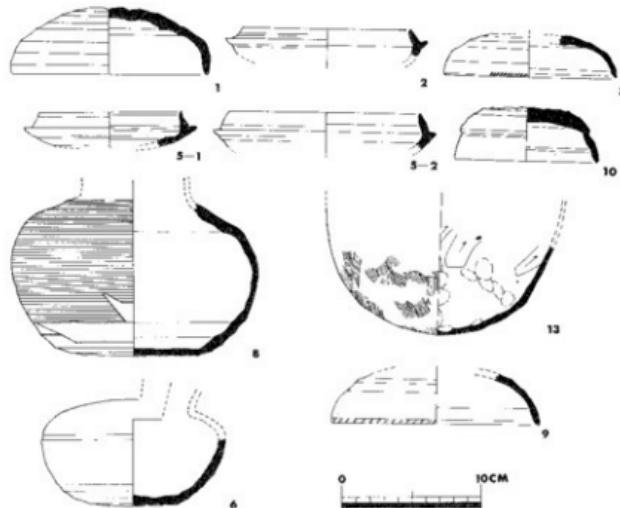
### 長頸壺 (8)

体部最大径17.3cm、残存高10.6cm。肩部はうねりながら内湾する。胸部は、中位より少し上に最大径がくる。底部はほぼ平坦。外面肩部、胸部、回転横ハケ調整。胴部下半、底部回転ヘラケズリ調整。底部中央は不定方向のヘラナデ調整。底部中央に指圧痕が残る。ロクロ回転は左廻り。胎土一密、礫を含む。焼成一良好。色調一外面N%灰色、内面N%灰白色、断面7.5Y%灰赤色。

### 土師器

#### 壺(13)

残存高 6.5cm。ゆるく窪む底部である。外面底部はほぼ一方向のハケ調整、胴部は縦方向のハケ調整となり、内面底部は指圧による調整、胸部は右上りのヘラケズリ調整。ハケ目本数は、1cm/11本を数え、ハケ幅は約2.0cm。胎土一密。焼成一良好。色調一外面7.5YR%明褐色、内面7.5YR%黒褐色。



第50図 井戸状遺構-1 上層出土土器

木製品、木片(第51図、4、7、11、12、14)

4. 長さ13.0cm、最大幅1.5cm、厚さ0.8cm。木器であるかどうかは不明。加工痕は全く認められない。

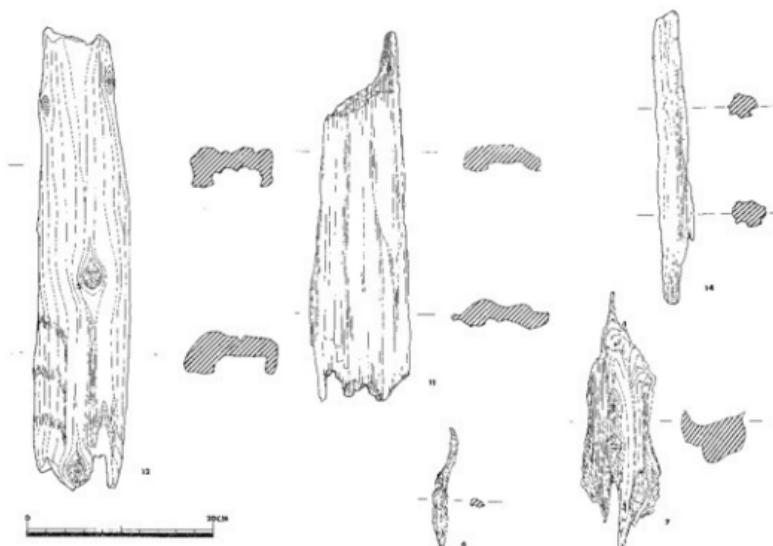
7. 長さ 28.0cm、最大幅 6.6cm、厚さ 4.2cm。樹幹部分。加工痕は認められない。
11. 板状木製品。長さ 39.5cm、最大幅 10.5cm、厚さ 2.8cm。断面凹状を呈す。両端は欠損。加工痕は不明。
12. 板状木製品。長さ 49.6cm、最大幅 9.7cm、厚さ 4.5cm。断面浅い凹状を呈す。両端は欠損。加工痕は不明。
14. 長さ 31.5cm、最大幅 3.6cm、厚さ 2.7cm。板状。加工痕は不明。

(3) 下層出土遺物(第52、53図、図版-30・31)

須恵器

杯身 (2)

口径 12.4cm、受部径 14.8cm、高さ 3.9cm。立ちあがりは短く内傾し、中位で屈曲して上方に



第51図 井戸状遺構-1 上層出土木製品

のびる。端部は丸い。受部は外上方にのび、端部は丸い。底部は浅く窪む。外面底部は回転ヘラケズリ調整。内面底部中央は 2 方向のナデ調整、他は回転ナデ調整。ロクロ回転は左廻り。胎土一密、2mmの粗砂を含む。焼成一良好。色調—外面 N%灰色、内面 N%灰白色、断面 N%灰色。

### 壺 (6)

口径15.3cm、器高14.8cm。口縁部は直線的に外上方にのび、口縁端部でさらに強く外反する。端部は丸い。頸部は、明瞭にくびれる。また頸部接合時の粘土の広がりが確認できる。この部分の器壁が一番薄く、6mm弱。肩部は、わずかに内弯しながら下方にのびる。胴部は、ゆるやかに内弯して底部に至る。底部は、やや偏平気味。最大径は、胴部中位よりやや上。外面底部より胴部中位にかけて、回転ヘラケズリ調整を施す。内面底部は、ほぼ一方向のナデ調整。他、回転ナデ調整。口頸部と体部の接合はハリツケ。内面口縁部、底部と外面肩部に自然釉がかかる。胎土—密、白色礫を含む。焼成—良好。色調—外面、内面共N%灰色。

### 台付長頸壺 (9)

体部最大径15.7cm、残存高11.9cm、肩部は、直線的に外下方にのびる。胴部は、ゆるやかに内弯しながら底部に続く。底部は丸い。台部は破損しているが、ヘラ痕が残り、三方透しであったことがわかる。外面肩部は回転ハケ調整。胴部より底部にかけては回転ヘラケズリ調整。内面底部はほぼ一方向のナデ調整、他は回転ナデ調整。体部と台部の接合は、ハリツケによる。胎土—密、礫を含む。焼成—良好、堅緻。色調—N%灰色。

### 甌(15)

口径（推）18.8cm、残存高27.6cm。口縁部内面に凹線を有し、外面は下方にわずかにつまみおろす。端部は丸い。肩部は、わずかに内弯しながら胴部に続く。胴部最大径は、中位より上にくる。外面は頸部より肩部にかけてカキ目調整、肩部より下はタタキ目が観察される。また所々右上りのカキ目調整が見られる。内面は、肩部より下に同心円文が見られる。口縁部は内外共回転ナデ調整。口縁部内側と肩部に自然釉がかかる。胎土—密。焼成—良好。色調—外面、内面共7.5Y%灰色。

### 土師器

#### 壺(3)

口径（推）15.0cm、残存高18.7cm。口縁部は垂直気味に直線的にのび、端部は丸い。体部ははっきりした肩部をもたず、ゆるく内弯する。最大径は、ほぼ中位にくる。頸部不明瞭。外面頸部より胴部にかけては縦方向のハケ調整。底部は不定方向のハケ調整。内面胴部は、指圧及び指によるナデ上げ整形と幅の狭い右上りのナデ調整。頸部より口縁部中位までは、ハケ調整。内面口縁部中程より外面口縁部にかけては、右廻りの横ナデ調整。ハケ日本数は、1cm/9~12

本を数える。胎土一密、細砂を含む。焼成一良好。色調一外面10Y R 1/2灰黄褐色、内面5Y R 1/2灰褐色。

#### 小型壺(7、12)

大きさや調整方法はほぼ同じであるが、頸部と胴部の形態がやや異なり、2種に分けられる。この2種は最下層出土土器群にも見られる。いずれも胎土はよく精製され、焼成も良好である。

7. 口径11.8cm、器高12.4cmを測る。口縁部は垂直気味に外反しながらのびる。頸部は、はっきりしない。胴部はやや細長の球形を呈し、中位に最大径がくる。器壁は12に比べやや厚い。外面胴部は、板状施具による調整の後、丁寧なナデ調整を施し、肩部には指圧痕が残る。口縁部は、内外面共横ナデ調整。内面底部には指圧痕が残る。胴部は、右上りのナデ調整。胎土一密。焼成一良好。色調一外面、内面共10Y R 1/2に近い黄橙色。
12. 口径11.9cm、器高12.9cm。口縁部は直線的に外上方にのび、端部でわずかに内傾する。胴部は球形を呈す。頸部は、はっきりとくびれる。外面底部は、不定方向の荒いハケ調整。端部は、細かいハケ調整。肩部と口縁部は右廻りの横ナデ調整。内面底部は、不定方向のナデ調整。底部と胴部の境付近には、指圧痕が残る。胴部は右上りのナデ調整。口縁部は横ナデ調整。ハケ日本数は、1cm/12本を数える。胎土一密、わずかに金雲母を含む。焼成一良好。色調一外面、内面共2.5Y R 1/2灰黄色。

#### 高杯(4)

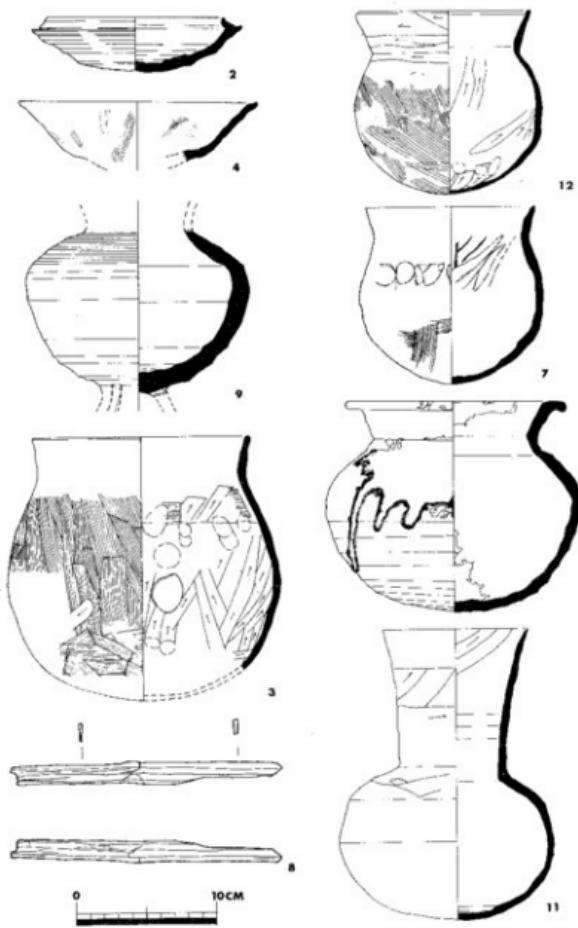
口径(推)16.6cm。杯部底部は平坦。口縁部は強く外反して終る。外面は縦方向のハケ調整の後、横ナデ調整、内面は不定方向のハケ調整の後、横ナデ調整。ハケ日本数は、1cm/7本を教える。胎土一密。焼成一やや不良。色調一外面、内面共5Y R 1/2灰白色。

#### 長頸壺(11、13、14)

11. 口径10.2cm、器高20.6cm。口頸部はわずかに外反しながらのび、端部は鋭い。体部は梢円形で、ほぼ中位に最大径がくる。調整は、底部が不定方向のナデ調整によってなされている他は横ナデ調整による。胎土一密。焼成一良好。色調一外面、内面共10Y R 1/2灰白色。

13. 口径(推)9.2cm。口頸部、わずかに内弯しながら外上方にのび、端部は鋭い。調整は残存部分内外面共横ナデ調整による。胎土一密。焼成一やや不良。色調一外面、内面共7.5Y R 1/2灰白色、断面2.5Y R 1/2に近い橙色。

14. 口径(推)8.6cm。口頸部、うねりながら外上方にのび、端部は鋭い。端部内側にわずかな段を有する。調整は内外面共横ナデ調整。胎土一密、黒色粗砂を含む。焼成一良好。色調一



第52図 井戸状遺構-1 下層出土土器

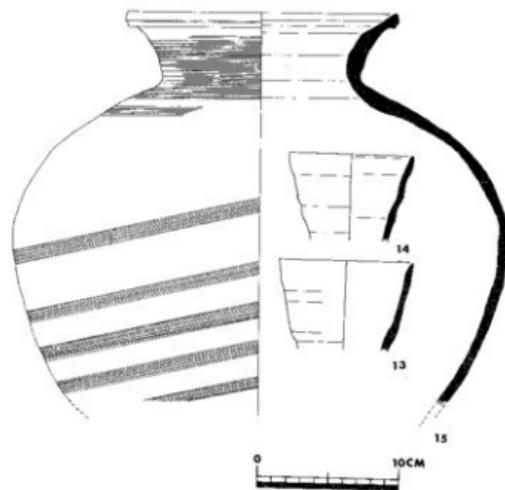
外面 7.5Y R 5/4 浅黄橙色、内面 N 5/4 灰色。

### 木器

#### 刀形木製品(8)

残存長19.2cm、最大幅 1.3cm、最大厚 0.2cm。図左方欠損。左方は幅広く直線的で、断面は

楔形を呈し、下辺は刃部を表現する。上方は面をなし、背刃の関、茎と思われる部分も現している。刀子を用いたものらしく、いずれの面も鋭い角を呈す。また表面も滑かで、精巧さを感じさせる。杉材。



第53図 井戸状遺構-1 下層出土土器

(4) 最下層出土遺物(第54図、図版-32)

須恵器

甕(1)

体部最大径10.2cm、残存高12.9cm。口頸部は外反しながら上方にのび、口縁部近くでより強く外傾する。胴部は、やや強く内寄する。体部最大径は、ほぼ中位にある。調整方法は、胴部より底部にかけては回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整。ロクロ回転は左廻り。胎土一密、礫を含む。焼成-良好、堅緻。色調-外面、内面共N5%灰色。

土師器

甕(2、6)

2. 底部のみ残存。浅くゆるやかなカーブを描く。外面はほぼ一方向のハケ調整。内面は右上りのナデ調整で、底部に指圧痕がみられる。ハケ目本数は、1cm/12本。胎七一密、石英、わずかに金雲母を含む。焼成-良好、色調-外面 7.5Y R %灰褐色、内面10Y R %灰黄色。

6. 口径16.0cm、器高19.3cm。口縁部はやや短く外反する。体部は、ゆるやかに内湾しながら底へと続く。底部中央部でわずかに平坦気味になる。調整方法は、外面では底部はほぼ一方のハケ調整（口縁部に続く）、口縁部は左上りのハケ調整。内面では、底部は不定方向のハケ調整、胴部は右上りのハケ調整、肩部は横方向の左廻りのハケ調整、口縁はわずかに左上りのハケ調整。ハケ目本数は、外面で1cm/4~8本、内面で1cm/7~10本。また、外面胴部に炭素が付着する。胎土一密、細砂を含む。焼成一良好、色調一外面7.5YR 5/6灰黄色、内面10YR 5/6にぶい黄褐色。

#### 小型壺(3、7)

(3)下層出土遺物で述べた様に、形態の異なる2個体である。ともに残りは非常によい。

3. 口径12.5cm、器高13.4cm。口縁部はほぼ直線的に外上方にのび、端部は丸い。頸部は、あまり明瞭でない。体部はあまり張りがない。調整方法は、外面の底部はほぼ一方のハケ調整、底部と胴部の境は左上りのハケ調整、肩部と胴部は縱方向のハケ調整となり、内面の胴部は右上りのナデ調整となっている。指圧痕が残る。口縁部は、内外面共横ナデ調整となっている。ハケ目本数は、1cm/8本を数える。胎土一密、粗砂を含む。焼成一良好。色調一外面、内面共10YR 5/6にぶい黄橙色。

7. 口径11.5cm、器高12.2cm。口縁部は、わずかに内湾しながら外上方にのび、口縁端部は丸い。頸部は、明瞭にくびれる。体部はほぼ球形。調整方法は、外面では底部がほぼ一方のハケ調整、胴部が縱方向のハケ調整の後ナデ調整。肩部より口縁部にかけては右廻りの横ナデ調整。内面では底部に指圧痕が残り、底部上半より胴部下半にかけては横方向の調整、胴部上半は上方への板状施具による調整、口縁部は横ナデ調整。ハケ目本数は、1cm/11本を数える。胎土一密、金雲母を含む。焼成一良好。色調一外面、内面共10YR 5/6にぶい黄橙色。

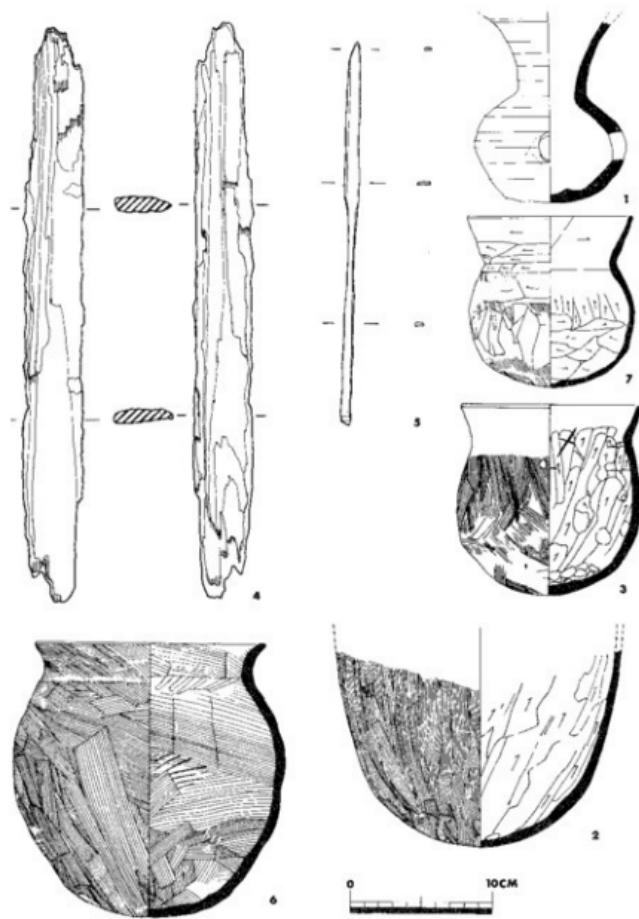
#### 木製品

##### 板状木製品(4)

長さ40.9cm、最大幅4.0cm、最大厚0.9cmを測る。両端は欠損。両面は、平滑である。

##### 不明木製品(5)

長さ27.2cm、最大幅0.6cm、厚さ0.2cm。上部は幅広く、岡左侧は斜めにカットされて刃を思われる。先端は山形にカットされ尖っている。下部は一度細くなったあと、わずかに広くなる。下端は、折れている。これも鋭くカットされている。全体の整形には、鋭利な利器が使用されており、どの面も鋭いカット面を残す。用途不明。



第54図 井戸状遺構-1 最下層出土土器・木製品

井戸状遺構-2 (B-6) (第55・56図)

遺構

遺構の形狀は、平面形で不整円形を呈し上部でラッパ状に開いた後、一度くびれ、下半で膨らみを持つ掘り方である。數値は、上面の徑約0.95m～1.05m、深さ0.85mを測る。構造は、他の井戸状遺構同様、特別施設らしきものはなく、素掘りであると思われる。

## 土層

埋土は4層に分けられるが、第3層（黒色粘質土 7.5YR 1.7V）が大部分を占める。第2層は第3層に第6層白黄色粘質土地山が混入したものであり、基本的には第3層に含めて考えてよい。第4層も同様である。地山は3層に分けられる。このうち、上2層は粘質土であるが、第7層は微砂粘土であり、底はこの層に達して終る。

## 遺物出土状態

遺物は、大別して上層、下層の2群に分けられる。共に層位は第3層である。上層からは、須恵器杯（身・蓋）・高杯、土師器壺・高杯・甕、木器、木片等が出土している。下層からは、須恵器杯（身・蓋）・長頸壺、土師器壺・高杯・小型丸底壺・甕等が出土している。

この他近くには蔓状植物遺体、ヒヨウタン等の有機物が堆積していた。

## 出土遺物

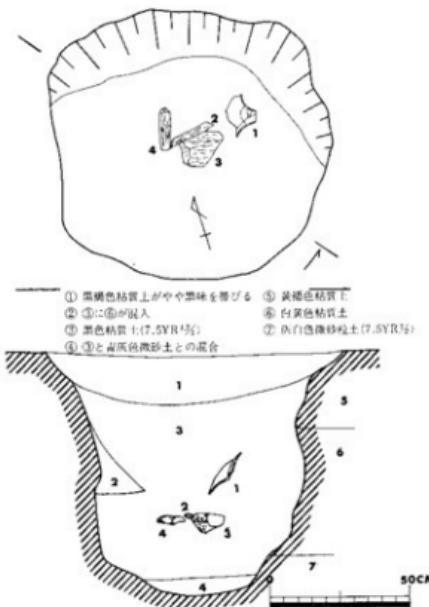
出土遺物の総数は、須恵器杯身2、杯蓋1、高杯1、不明7、土師器高杯3、甕3、小型丸底1、不明60となり、井戸状遺構の中では少ない部類に入る。このうち、図示できるものはさらに少ない。

### (1) 上層出土遺物(第56図、図版-33)

#### 土師器

##### 壺(1)

口径（推）16.3cmを測る。口縁部は直線的に外傾し、内側に段を有する。端部は丸い。頭部



第55図 井戸状遺構-2 遺構図及び出土遺物

は、面をなす。肩部は、ゆるく内弯しながら下方に張る。調整方法は、外面体部はやや荒い横方向のハケ調整、内面体部はわずかに右上りの板状施具による調整、口縁部は内外面共横ナデ調整となっている。胎土一密、粗砂を含む。焼成一良好。色調—外面10Y R 1/2にぶい黄褐色、内面10Y R 1/2灰黄褐色。

#### 不明木製品(2、3、4)

2. 長さ27.0cm、最大幅2.7cm、最大厚1.1cm。細長い板状のもので、図下方ではやや細くなる。上端は欠損。A面は、フラットに、B面は、カマボコ形に加工している。
3. 長さ19.0cm、最大幅14.3cm、最大厚13.2cmを測る。樹幹部分で、図上方の尖った部分に加工痕が見られる。斜め下方から中心に向けて利器が削いており、形状からして、ここに続く部分を切り離したのであろうと思われる。図下方には、焼成痕が見られる。
4. 長さ16.0cm、最大幅5.7cm、最大厚2.5cmを測る。半分欠損。全体は円筒状で、両端は切断してある。中央部分に、一周する凹面をもつ。機能については、ツチノコあるいは浮き等が考えられる。

#### (2) 下層出土遺物(第56図、図版—33)

##### 須恵器

###### 杯身(1)

口径(推) 11.8cm、受部径13.6cmを測る。立ちあがりは内傾した後屈曲し、外上方へのびる。端部は、やや鋭い。受部はわずかに外下方に向ってのび、端部は丸い。調整は、外面底部回転ヘラケズリ調整、他回転ナデ調整となっている。ロクロ回転は左廻り。胎土一やや粗、細砂を含む。焼成一不良。色調—外面、内面共5P B 1/2明青灰色。

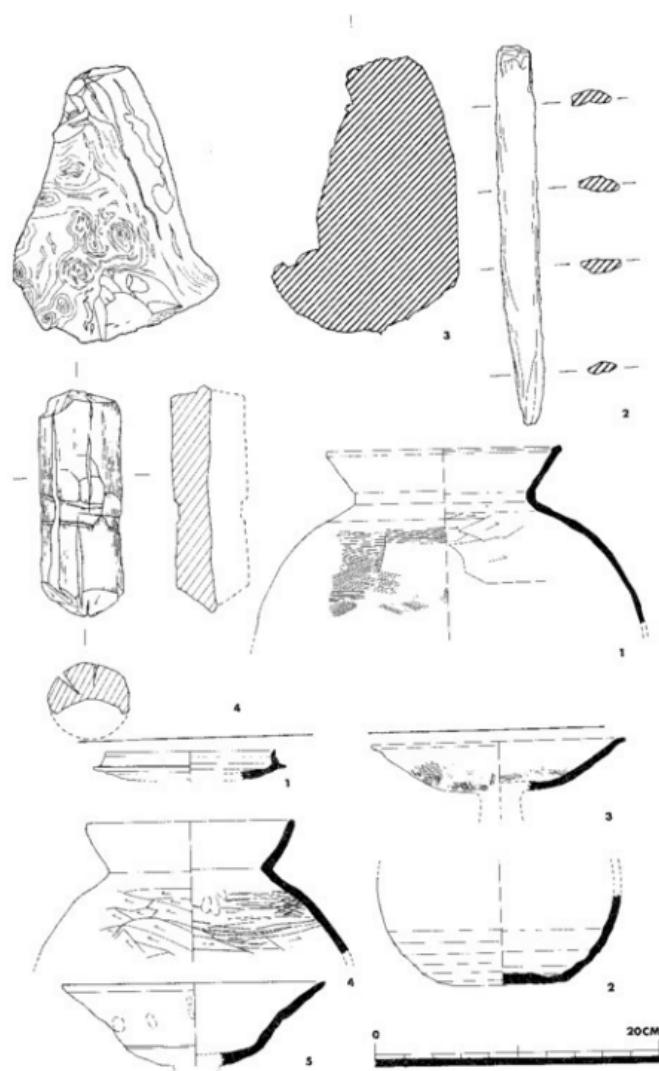
###### 長頸壺(2)

底部のみ残存。底部径9.0cm、残存高6.1cmを測る。底部はほぼ平坦。体部は丸く内弯する。調整は、外面体部及び底部回転ヘラケズリ調整、底部中央は指圧調整、内面底部中央一方向のナデ調整、他回転ナデ調整となっている。ロクロ回転は右廻り。胎土一密、白色粗砂を含む。焼成一やや不良。色調—外面7.5Y R 1/2褐灰色、内面7.5Y R 1/2灰白色。

##### 土師器

###### 高杯(3、5)

3. 口径(推) 17.3cm、残存高 3.5cmを測る。杯部のみ残存。杯底部はほぼ平坦で、わずかに



第56図 井戸状遺構-2 上層・下層出土土器・木製品

内弯しながら外上方に向う。口縁部は、屈曲して水平気味になって終る。端部は丸い。調整方法は、外面体部ハケ調整、内部体部ハケ調整の後横ナデ調整、口縁部横ナデ調整となっている。ハケ目本数は、1cm/13本を数える。胎土一密、白色粗砂を含む。焼成一良好。色調一外面2.5Y 1/2灰白色、内面2.5Y 1/2浅黄色。

5. 口径（推）18.5cm、残存高 5.8cmを測る。杯部のみ残存。杯底部はわずかに浅く窪み、段をなして屈曲し外上方にのびた後、さらに屈曲して強く外傾し口縁部に至る。端部は丸い。調整は、外面に指圧痕が残る他は剥離激しく不明である。胎土一密。焼成一良好。色調一外面、内面共 5 Y R 1/2にぼい橙色。

#### 壺(4)

口径（推）14.5cm、残存高 9.7cmを測る。口縁部は内弯しつつ外上方にのび、端部は丸い。肩部は内弯気味に張り出す。調整方法、口縁部より肩部にかけては内外面共横ナデ調整、外面肩部以下はヘラケズリ調整、内面肩部は右方向の水平な櫛目調整の後、指ナデ調整。それより下方はヘラケズリ調整となっている。全体的に造りが荒く、調整痕をよく残す。胎土一密、細砂を含む。焼成一良好。色調一外面 2.5Y 1/2灰白色、内面10Y R 1/2灰白色。

#### 井戸状遺構-3(B-6~C-6)(第57図)

##### 遺構

平面形は円形で径1.30~1.34m、深さ1.23mを測る。断面は、上面より急角度で傾斜した後、一度くびれ、底部で小さく膨む。底部は、ほぼ平坦である。

##### 土層

埋土は、上層から5層を数える。第1層は包含層が落ち込み、これに第2層（黒色土 7.5Y R 1.7/4）が混入したものである。第2層は埋土の大部分を占める。第3層（黄褐色粘質土に第2層が混入）は、壁面に貼り着けた様な状態であり、壁面のくずれを防ぐために意識的に貼り着けた可能性がある。

##### 遺物出土状態

遺物は上面に散在するものが多く、埋土内から出土したものは少なかった。総数を列記すると次の様になる。須恵器杯身20、杯蓋13、甕10、豆3、高杯1、摺鉢1、提瓶2、不明47。土師器高杯26、甕10、壺30、不明195、瓦器9、朝顔形埴輪1、羽釜形土器3、土師質土器壺5、不明6、瓦1。瓦器や羽釜など時期の新らしいものは、すべて上面より出土したものであり、

埋土中のものは古墳時代に限られる。このうち、底部近くからは布留式土器壺片が出土している。総数は、井戸状遺構-1に次いで多いが、いずれも細片で図示できなかった。

### 遺物（第57図、図版

-39)

#### 須恵器

##### 杯身

上面より出土。口径

(推) 11.0cm、受部径

13.5cmを測る。立ちあ

がりは直線的に内傾し、

底部は丸い。受部は水

平にのび端部は丸い。

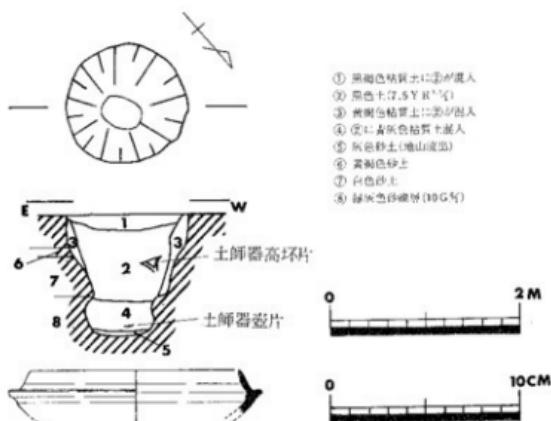
調整方法は、残存部分

すべて回転ナデ調整に

よる。胎土一密、1.5mm

の粗砂を含む。焼成一

良好。色調一外面N%灰色、内面N%灰色、断面N%灰色。



第57図 井戸状遺構-3 遺構図及び出土遺物

### 井戸状遺構-4(E-5)(第58図)

#### 遺構

平面は不整円形を呈し、浅くU字状に掘り込んだものである。数値は、直径約1.16~1.26m、深さ約0.62mを測る。

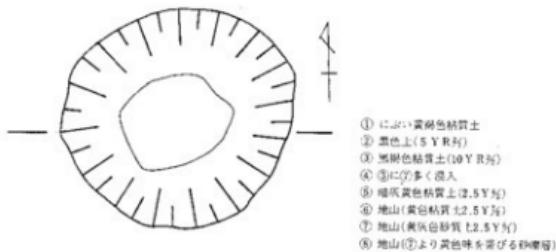
#### 土層

埋土は上層より5層を数える。第1層(にぶい黄褐色粘質土10Y R 5%)は、上面の包含層が落ち込んだもので、変色しているのは場所によって自然的条件が相違しているためであろう。第2層以下は、先に見られた黒色土とほぼ同質のもので、第2層は黒褐色上層5Y R 5%、第3層は黒褐色粘質土層10Y R 5%となっている。第4層は、第3層に第7層(地山、黄灰色砂質土層2.5Y 5%)が混入したもので、基本的には第3層に包括される。第5層は第3層に第8層(地山)が混入したもので、これも同様である。地山は、上層より第6層黄色粘質土層2.5Y 5%。第7層黄灰色砂質土層、第8層第7層より黃色度の強い砂礫層となる。埋土を掘り上げた時点で、第7層・第8層からかなりの湧水をみた。

### 遺物（第58図、図版

-39)

遺物は、第1層包含層より若干細片の須恵器・土師器が出土しただけで、第2層以下からは全く出土しなかった。

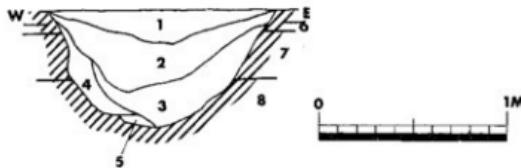


### 井戸状遺構-5(E-2)

(第59図)

#### 遺構

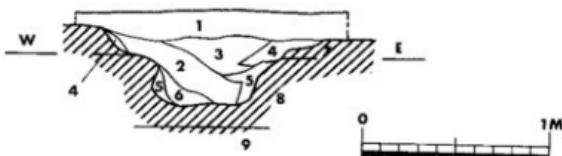
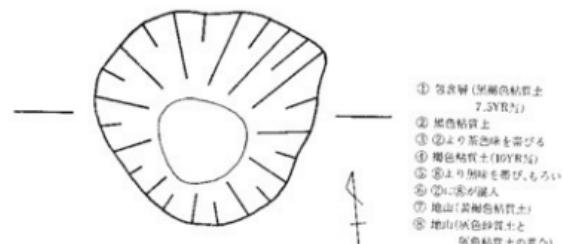
平面形は不整円形で、掘り方は上面で極端に浅く広がり、中央部からは垂直に下がる。底面はほぼ平坦である。数値は、上面で  $1.22 \times 1.16\text{m}$  深さ約  $0.37\text{m}$ 、底径約  $0.5\text{m}$  を測る。



第58図 井戸状遺構-4 遺構図及び出土遺物

#### 土層

第1層は包含層である。第2層は他の井戸状遺構に見られるのと同様の黒色粘質土である。ここでも、これが基調となっている。第3層、第6層もこれに包括される。第4層は、第7層(黄褐色粘質土)が流入し、変色したものである。第5層は、第2層が第8層(灰色砂質土)と灰色粘質土の



第59図 井戸状遺構-5 遺構図

混合)に混入したものである。地山は第8層、第9層が砂質土となっており、この2層から湧水を見る。

#### 遺物

出土遺物は、時期を知り得る資料となるものはなかった。尚、後になったが井戸状遺構の周辺には上部構造を把握する資料は検出されなかつことを付記しておく。(川口、森村)

### 7. 不明落ち込み

検出された落ち込み遺構は総数 189ヶ所を数える。各々の落ち込み間、あるいは建物や溝など他の遺構との明確な関連性は見い出されず、その性格に不明瞭な点を残す。落ち込み内から遺物が出土する例は少なく、時期を把握できるものも極めて少ない。しかし、これらの落ち込みには包含層上面から掘り込まれているものと地山表面に落ち込みの上面をもつものの2種類があり、前者は中世以降、後者は古墳時代にほぼ属すると考えられる。

#### 中世以降の落ち込み

7ヶ所を確認しており、地区の北西端の一画、A・B～1・2に集中して検出された。同地域にある抗列と接近して存在するがそれとの関連性については不明である。この落ち込みはいずれも、古墳時代・中世の遺物が混入した包含層の上面から掘り込まれており、少なくとも中世以降、とりわけ近世に属する可能性が強い。

平面形は円形ないし梢円形を呈し、長軸(径) 30～60cmを測り、深さで53・34cm程を測る2ヶ所以外は、ほとんど10cm内外の浅いものである。掘り方は傾斜しており、ほぼ平坦な底面に至る。埋土に単一層は少なく、包含層・耕作土の混入がみられる堆積層が多い。

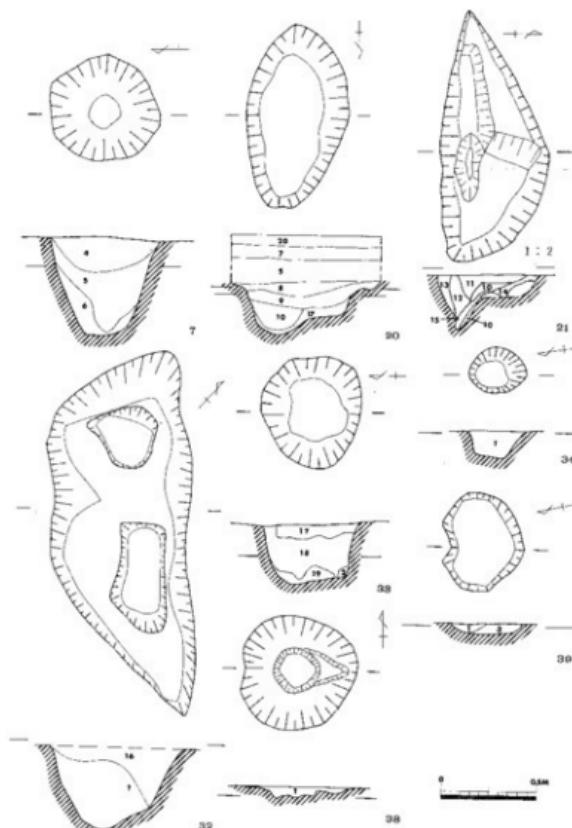
#### P-7(第60図-7)

A-1の北東隅に位置する。平面形はやや角ばった円形で、径約55cm、深さ53cmを測る。壁面は傾斜をもって掘り込まれている。底面は径約17cmを測る小さい円形で、ほぼ平坦である。埋土は3層に分けられ、上から暗灰黄色粘質土、黒褐色粘質土、明黄褐色粘質土で、特に中・下層は上面から底部にかけて大きく落ち込んで堆積していた。

#### P-33(第60図-33)

B-2の南西隅に位置する。平面形は梢円形を呈し、長軸61cm、短軸50cm、深さ34cmを測

る。壁面は急傾斜をもつ。底面は径30cm程のいびつな円形状で、平坦である。埋土は上層・褐色土と下層・黄褐色砂土の薄い層の間に暗オリーブ灰色砂土が厚く堆積していた。遺物は土師器・須恵器片10数点、羽釜・瓦器（椀）片各1点が出土している。



- |                                        |                               |
|----------------------------------------|-------------------------------|
| (1) 黒色土 7.5YR 5%                       | (11) 黒色粘質土                    |
| (2) 黄褐色粘質土 2.5YR 5% (地山)               | (12) にかい黄褐色粘質土 10YR 5%        |
| (3) 地山に黒色土の混入                          | (13) にかい黄褐色粘質土 10YR 5%        |
| (4) 暗褐色粘質土 2.5YR 5% (灰褐色粘質土に耕作しが入ったもの) | (14) ③に地山がわざかに混入(やや黄色気味)      |
| (5) 黑褐色粘質土 7.5YR 5% (苔含蓄)              | (15) ④に地山がわざかに混入              |
| 無機褐色粘質土 10YR 5% (⑤と地山との混合)             | (6) 黑褐色粘質土 10YR 5%            |
| (7) 黑褐色砂質土 7.5YR 5%                    | (7) 黑色土 2.5YR 5%              |
| (8) 黄褐色砂質土 10YR 5% (灰色)                | (8) 暗オリーブ灰色砂土 5GY 5%          |
| (9) 黑褐色粘質土                             | (9) 黄褐色砂土 10YR 5% (砂土と地山との混合) |
| (10) 黑褐色砂質土 10YR 5%                    | (10) 耕作土 (オリーブ褐色土 2.5YR 5%)   |

第60図 不明落ち込み遺構図

### 古墳時代の落ち込み

182ヶ所検出した。ほぼ地区全体に散在するが、北側および溝一2以南地域では極めて少なく、建物周域で最も多く確認された。

平面形は必ずしも一定形ではないが、橢円形を呈する例が最も多くついで円形、隅丸方形などがあり、いわゆる不定形に掘り込まれている例は少ない。平面規模において、その長軸の長さを基準に計測値50cm以内一小型、50~100cm一中型、100cm以上一大型として分類した時、最も多いのは小型で137例に及び、とりわけ30~40cmを測るもののが頗著で、あと中型23例、大型21例で各々少ない。掘り方は壁面に30°~60°の傾斜角度をもって掘り下げられる。その多くは平坦な傾斜面であるが、中には段をもつたり、内湾気味を呈する場合があり、他に垂直ないしそれに近い掘り方をする例もわずかではあるがみられた。底面の形については上面の平面形に準ずる小規模のものが多く、平坦ないし丸味をもつ。丸底を呈する例もかなりあり、さらに稀ではあるが尖底する例がある。また底面に小さな凹みが1~2ヶ所存在する落ち込みも数ヶ所認められた。

埋土は黒色土、あるいは黄褐色粘質土（地山）の混入した黒色土の單一層が最も一般的である。中・大型においては、黒色土・黒褐色粘質土・灰褐色粘質土等による複数の堆積層を観察できるのがあった。

落ち込み内より遺物が出土する例は少なく、その上時期を比定できるほどの遺物を検出したのはごく稀で、遺物をもってして時期を推定できた落ち込みは数ヶ所にすぎない。

### P-20(第60図-20)

平面形は橢円形で、(長軸98×短軸54×深さ28) cmを測る。西壁が2段の段をもっている他は、傾斜して掘り込まれている。底は不定形で丸い。埋土は4層あるが、3層目は最も厚く黒褐色有機層である。

### P-21(第60図-21)

井戸状造構-1の北東に隣接してある。(268×112×24) cmを測る細長い大きな規模のものである。北側壁に段をもった掘り方である。底面は平坦であるが、南壁寄りに(70×26×32) cmのピットが存在する。埋土は上層に黒色粘質土、黒褐色有機層の堆積をはじめ、傾斜した堆積状態で5層ある。

### P-32(第60図-32)

(190×70×44) cmを測り、細長い台形状を呈する。掘り方は傾斜する。底面は丸底であるが、

(36×33) cmで円形状、(58×30) cmで長方形状のいずれも浅い凹みを有する。埋土は灰黄褐色粘質土と黒色土の2層が傾斜して堆積していた。

P-38(第60図-38)

平面形は円形で、径約60cm、深さ6cmの浅い凹みである。段をもったゆるい傾斜の掘り方である。底面は径25cmの円形と長辺約20cmの三角形の凹みが接合した形状を呈す。埋土は黒色土の單一層である。遺物に土師器片、須恵器(壺)片を出土した。

P-39(第60図-39)

楕円形で(54×38×6) cmを測る。内窓気味に傾斜して掘り込まれる。平坦な底面は、上縁の平面形を小さくした楕円形である。埋土は黒色土1層であるが、黄褐色粘質土(地山)の混入がみられる。

P-42(第61図-42)

B-6のはば北東隅に位置する。平面形は楕円形で(54×44×4) cmを測る。掘り方は西壁で丸味をもって傾斜する。底面は楕円形に近く、(31×23) cmで西壁へ傾斜していく。埋土は黒色と黒褐色の粘質土2層である。

P-44(第61図-44)

C-1のやや南側に位置する。平面形は不定形で(75×40×7) cmを測る。掘り方は東側で一部段をつけて傾斜する。底は上縁と同じく不定形で丸味をもつ。埋土は黒褐色土と褐色土で、東西で分離していた。

P-50(第61図-50)

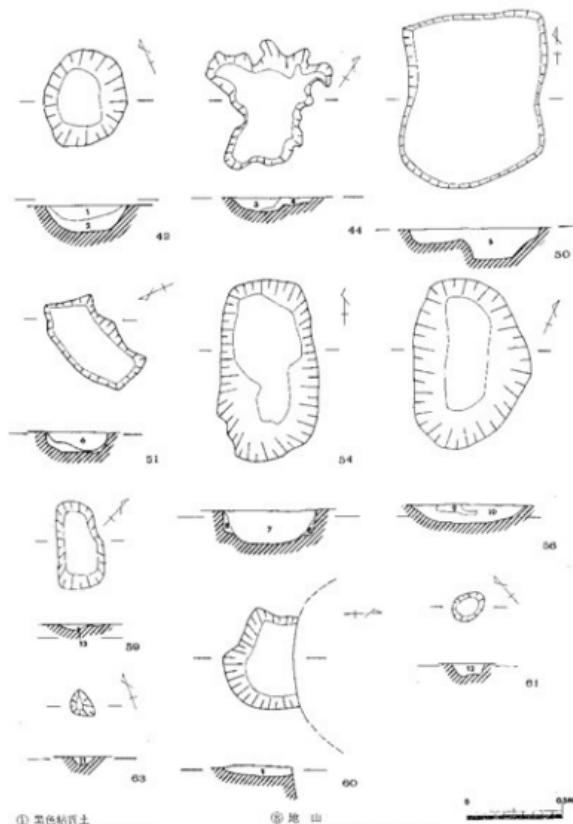
C-2の北東隅に位置する。平面形は隅丸方形に近く(90×70×16) cmを測る。掘り方は一8cmまで内窓気味に傾斜した後、西側で長さ25cm程の段を保ち以下外窓気味に下がる。底は平坦である。埋土は地山が大量に混入した黒色土である。

P-51(第61図-51)

C-3溝-1の西側に位置する。平面形は弯曲した長方形で、(61×27×11) cmを測る。掘り方は一部で傾斜をもつがほぼ垂直に近い。底の平面形も上縁と同じで平坦な面である。埋土は黒色土に地山がブロックで混入していた。

P-54(第61図-51)

C-3の溝-1の東側に位置する。平面形は隅丸の長方形に近く、(97×54×19) cmを測る。掘り方は内弯気味に傾斜する。底面は不整楕円形に近く、ほぼ平坦である。埋土は黒褐色土に地山がブロックで混入していた。



- ① 黒色粘質土
- ② 黒褐色粘質土(10YR 4/2)
- ③ 黑褐色土(10YR 4/2)
- ④ 黑褐色土
- ⑤ 地山(2.5Y 3/2)に黒色土(7.5YR 4/2)が混入
- ⑥ 黑色土(7.5YR 4/2)に地山が多く混入
- ⑦ 黑褐色土(10YR 4/2)に地山が混入
- ⑧ 地 山
- ⑨ 黑褐色土(地山同質)ブロック
- ⑩ 黑褐色土(7.5YR 4/2)
- ⑪ 黑色土に地山が混入
- ⑫ 黑色土に地山が多く混入
- ⑬ 黑色土

第61図 不明落ち込み遺構図

P-56(第61図-56)

T-1の南西側に近接する。平面形は梢円形で(91×60×10)cmを測る。掘り方はゆるくやや内寄気味に傾斜する、底は(60×22)cmの長方形に近く平坦である。埋土は黒褐色土で、上面に黄褐色土がブロックで入り込む。

P-59(第61図-59)

P-54の南西側に近接する。平面形は隅丸の長方形に近く(47×25×3)cmを測る極めて浅いものであり、上面削平の可能性がある。掘り方は弯曲する。底は上縁の形と同じで規模を小さくし、丸味をもつ。埋土は黒色土の單一層。

P-60(第61図-60)

井戸-7と切り合って存在する。平面形は不明で、1軸57cm、深さで5cmを測る。掘り方はゆるく傾斜していく、底面との界は判別しにくい。底はゆるく内寄する。埋土は黒色粘質土である。

P-61(第61図-61)

T-6の柱穴P-1の北西側に隣接する。平面形は梢円形で(19×14×7)cmを測る。掘り方は梢円形に近い。底面も(12×9)cmの梢円形で、中央部はフラットになる。埋土は黒色土と地山による半々程度の混合土である。

P-63(第61図-63)

T-6のプラン内、柱穴P-1の南西側に隣接する。平面形は隅丸の三角形状を呈し、(16×11×4)cmを測る。掘り方は南壁で長い傾斜面を有する。底面は梢円状で、西壁へやや傾斜していく。埋土は黒色土と地山の混合土である。

P-64(第62図-64)

平面形は隅丸方形で、(20×14×12)cmを計る。東側壁はほぼ垂直に掘り込まれる。底面は東壁寄りに位置し、隅丸方形で(12×8)cmを測る。埋土は黄褐色粘質土(地山)の混入した黒色土一層である。

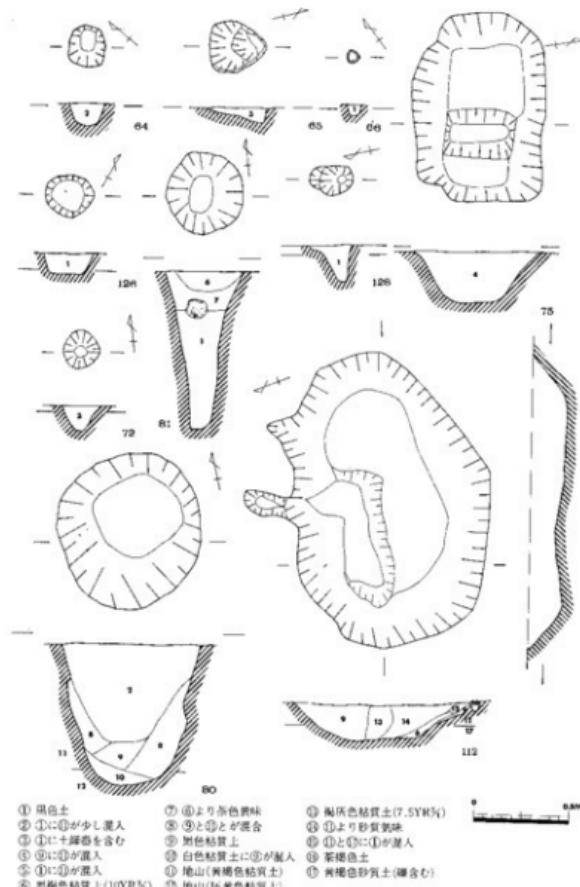
P-65(第62図-65)

T-13の北東部約1mに位置する。平面形は隅丸の三角形状に近く、(31×27×8)cmを測る。

南側からゆるく傾斜して、垂直な北壁まで掘り込まれており、底面の判別は困難である。埋土は土師器を包含した黒色土1層である。

P-66(第62図-66)

T-6の南東部に近接して存在する。平面形は隅丸三角形で、一辺の長さ8cm、深さ6cmを



第62図 不明落ち込み遺構図

測る極めて小規模のものである。掘り方は垂直で、三角形の底面はやや丸味をもつ。埋土は黒色土1層である。

P-72(第62図-72)

T-13の南西側に近接する。円形状の平面形を呈し、(21×18×13) cmを測る。壁面は一様に傾斜して掘り込まれる。底面は径7cm程の円形を呈し平坦である。埋土は黒色土1層であるが、上師器片を含む。

P-75(第62図-75)

C-5の北東隅に位置する。平面形は隅丸の長方形で、(106×66×15~20) cmを測る。掘り方は45°の傾斜角度をもつ。底面も長方形で(75×40) cmを測り、平坦である。底面の東寄りには(37×27×8) cmを測る長方形の落ち込みがある。埋土は黒褐色粘質土の単1層で、部分的に黄褐色粘質土(地山)の混入がある。

P-80(第62図-80)

C-6の北東側に位置する。平面形は梢円形で、(85×74×75) cmを測る。掘り方は-20~-30cmまで傾斜した後、内窓して掘り下げられるが、北壁は垂直に近い。したがって底面は北壁寄りに位置し、(45×40) cmの隅丸方形でやや丸味をもつ平底である。埋土は3層に分かれ、-50cmまで黒色土、-20cmから底部止までは大きく弯曲して黒色粘質土(駆面寄りに地山混入)、底部に白色粘質土(上層混入)がみられた。黒色土上層から土師器(小壺)が口縁を上に向かた状態で検出した。この落ち込みでは湧水をみており井戸の機能を有していた可能性がある。とすれば内窓した掘り方には、湧水による壁面崩壊が考えられる。

P-81(第62図-81)

C-6の北東部、P-80の南側に位置する。平面形はほぼ円形で、(43×40×85) cmを測り、かなりの深さを有する。掘り方は-40cmまで急傾斜し、その後垂直に近い壁面を残す。底面は丸底に近く、(20×12) cmを測る梢円形である。埋土は20cmまで黒褐色粘質土、以下底までは黒色土1層であった。遺物に上師器(楕形上器)1個体が、黒色土中に半分埋まって横に立てた状態で検出された。上器は保存状態が悪く、取り上げ時に細片となってしまったのがおしまれる。P-80と同様に湧水が得られており、近接した井戸の存在が想定できるのではないか。

P-112(第62図-112)

D-2の中央部、溝1に接して存在する。平面形は梢円形状で、(317×210×40) cmを測る。

ゆるい傾斜の掘り方である。底面も梢円形で(230×140)cmを測り、中央はややフラットになるとともに、北壁寄りには(150×50)cmの浅い落ち込みを有する。埋土は垂直に近い堆積で、北側に黒色粘質土、褐灰色粘質土、南側は黄褐色砂質土等5層に分かれるが地山の混入が多くみられた。

#### P-122(第63図-122)

D-3の北東部に位置する。平面形は隅丸方形で、(19×16×4)cmを測る。掘り方は弯曲気味に傾斜する。底面は梢円形で(11×9)cmの丸味をもつ平底である。埋土は黒色土と黄褐色粘質土(地山)の混合土一層である。

#### P-125(第65図-125)

D-3の東端に位置する。平面形は梢円形で、(28×19×7)cmを測る。壁面は傾斜する。底面も梢円形(18×14)cmの平坦で、南壁側に小さな凹みをもつ。埋土は地山が多く混入した黒色土の単一層であった。

#### P-126(第62図-126)

T-3の北西側に接して存在する。平面形は円形で、(23×27×12)cmを測る。掘り方は垂直に近い。底面は径約18cmの円形で平坦を呈す。埋土は黒色土の単一層である。

#### P-129(第64図-129)

T-12プラン内のほぼ中央に存在する。平面形は梢円形に近く、(60×55.5×35)cmを測る。掘り方は東壁面で段をつけて傾斜する。底面は(23×19)cmの梢円形で丸味をもつ。埋土は黒色粘質土一層である。遺物に土師器片数点が検出された。

#### P-131(第63図-131)

T-12のP-130に隣接して存在する。平面形は不定形で、(14×8×5)cmを測る。掘り方は南側からゆるく傾斜して、垂直な北壁まで至る。底はやや尖底状である。埋土は黒色土である。

#### P-132(第63図-132)

P-131の南東側に並列する。平面形はほぼ円形で、(33×29×6)cmを測る。壁面は30~60度の傾斜角を有する。底面は不整梢円形で(20×15)cmを測り、南壁へ傾斜する。埋土は黒色

粘質土の單一層である。

#### P-133(第64図-133)

P-131の南側に位置する。平面形は円形で、径23~25cm、深さ10.5cmを測る。掘り方は東壁で垂直を呈すほかは傾斜している。底面は隅丸方形に近く、(15×14)cmを測り、東壁へやや傾斜していく。埋土は黒色粘質土一層である。

#### P-135(第64図-135)

D-4に位置し、T-8とT-12の中間に存在する。平面形は梢円形で、(20×15×6)cmを測る。壁面は傾斜する。底面は(13×9)cmを測る梢円形で、東壁へ傾斜気味である。埋土は地山の混入した黒色土である。

#### P-136(第63図-136)

D-4の中央に存在する。平面形は不定形で、(40×28×7)cmを測る。上面の北部には浅い凹みが付帯する。壁面は傾斜をもつ。底面は隅丸方形に近く(24×21)cmを測り平坦である。埋土は地山の混入した黒色土一層である。

#### P-137(第63図-137)

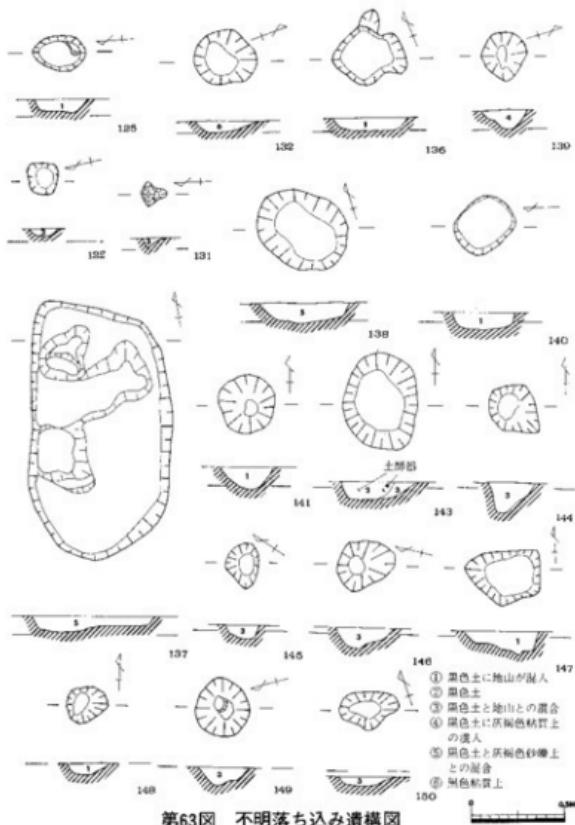
D-4の中央に存在する。平面形は隅丸の長方形に近く、(135×75×5)cmを測る。掘り方は外湾気味に傾斜する。底面は上縁の平面プランとほぼ変らず、ややうねりをもつがほぼ平坦である。底面の北西半分は-2~3cmの浅い凹み3ヶ所で占められる。埋土は黒色土と灰褐色砂礫の混合層が單一であった。

#### P-138(第63図-138)

T-8・9の中間に位置する。平面形は梢円形で、(50×40×11)cmを測る。掘り方はゆるい傾斜で、南壁は垂直に近い。底面は中央部がくびれた梢円状で(35×25)cmを測り、底面中央へ凹む。埋土は地山の混入した黒色土一層である。

#### P-139(第63図-139)

D-4・P-137の東側に隣接する。平面形は梢円形状で、(26×23×23)cmを測る。掘り方は内湾気味に傾斜する。底は細長い丸底である。埋土は灰褐色粘質土が混入した黒色土の單一層である。



第63図 不明落ち込み遺構図

#### P-140(第63図-140)

D-4 の中央部、T-9・10の中間地点に存在する。平面形は隅丸方形で、(33×27×9.5) cm を測る。掘り方は垂直に近い傾斜をもつ。底面も隅丸方形を呈し、ほぼ平坦である。埋土は地山の混入した黒色土である。

#### P-141(第63図-141)

T-9 の柱穴 P-4 の東側に近接する。平面形は円形で、径約30cm、深さ12cmを測る。掘り方は内弯して傾斜させる。底面は丸い。埋土は黒色土で、地山の混入がみられる。遺物にわず

か一点であるが土師器片を検出した。

#### P-143(第63図-143)

T-13の南東側に存在する。平面形は楕円形で、(53×40×10)cmを測る。壁面は傾斜ないし、ゆるい内湾を呈す。底面も楕円形で、(37×23)cmを測り、平坦である。埋土は黒色土一層であるが、東壁寄りには地山の混入が多くみられた。尚、黒色土中より土師器片数点を検出した。

#### P-144(第63図-144)

D-5の北西隅に位置する。平面形は隅丸方形に近く、(33×25×16)cmを測る。掘り方は北東壁で垂直に近く、東西壁で内湾気味に段をもって傾斜する。底面は北東壁寄りに存在し、楕円形で(14×10)cmを測り平坦である。埋土は黒色土と地山の混合土である。

#### P-145(第63図-145)

D-5・P-144の南西側に近接する。平面形は楕円形で、(24×17×7.5)cmを測る。壁面は傾斜するが、南壁で垂直に近い。底面は南壁寄りにあり、(12×8)cmの楕円形で丸味をもつ。埋土はP-144と同一である。

#### P-146(第63図-146)

D-5の北端に存在する。平面形は楕円形状で、(32×23×11)cmを測る。掘り方はやや内湾するが、南壁に段がある。底面は(10×8)cmの楕円形で丸く、北壁寄りに位置する。埋土は黒色土と地山の混合土の單一層である。

#### P-147(第63図-147)

P-146の南西側に近接する。平面形は隅丸方形に近く、(40×27×12.5cm)を測る。掘り方は西壁で傾斜するほかは垂直に掘り込まれる。底面は(26×19)cmの隅丸方形を呈し、凹凸が著しい。埋土は地山の混入した黒色土一層である。

#### P-148(第63図-148)

T-10の柱穴P-4の南西側に存在する、平面形は楕円形状に近く、(22×18×6)cmを測る。掘り方は東壁面でとりわけゆるく傾斜する。底面は西壁寄りに位置し、(13×7)cmの楕円形でほぼ平坦である。埋土は地山の混入した黒色土である。遺物に須恵器(杯蓋、蓋)片、土師器(壺)片を検出した。

P—149(第63図—149)

P—148の南側にT—10と隣接する。平面形は楕円形で、(31×28×10)cmを測る。掘り方は西壁に段をもって傾斜する。底は円形の凹みである。埋土は黒色土と地山の混合土。遺物は土師器片数点が出土した。

P—150(第63図—150)

T—10プラン内に存在する。平面形は楕円形に近く、(32×21×5)cmを測る。掘り方はゆるく傾斜させる。底面も楕円状で(17×9)cmを測る平底である。埋土は黒色土と地山の混合土の單一層である。

P—155(第64図—155)

T—14の南側に位置する。平面形は隅丸の三角状を呈し、(20×13×5)cmを測る。掘り方はやや内寄り気味に傾斜する。底面も上縁と同じく三角形状で、丸味をもつ。埋土は黒色土と地山の混合層である。

P—156(第64図—156)

P—155の南東側に存在する。平面形は不定形の楕円状で、(28×22×6)cmを測る。掘り方は傾斜する。底面は(22×17)cmの楕円形で平坦を呈し、南壁寄りには径12cm程の円形状の浅い凹みがある。埋土は黒色土(地山混入)の單一層である。

P—157(第64図—157)

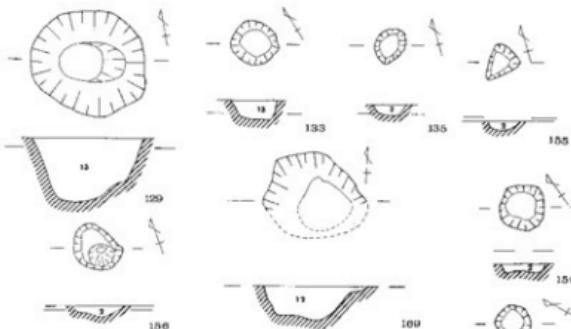
D—6の南西隅に存在する。平面形は楕円形で、(40.5×33×15)cmを測る。掘り方は西側壁でゆるく傾斜していく段をもつ。底は南壁寄りに位置し、(19×15×7)cmのピット状を呈する。埋土は黒色土と地山の混合土一層である。

P—159(第64図—159)

T—14の東側に存在する。平面形は隅丸方形に近く、(26×23×5)cmを測る。掘り方はやや垂直に近い傾斜である。底面は径17cm程の不整円形で、凹凸を有する。埋土は黒色土と地山の混合層である。

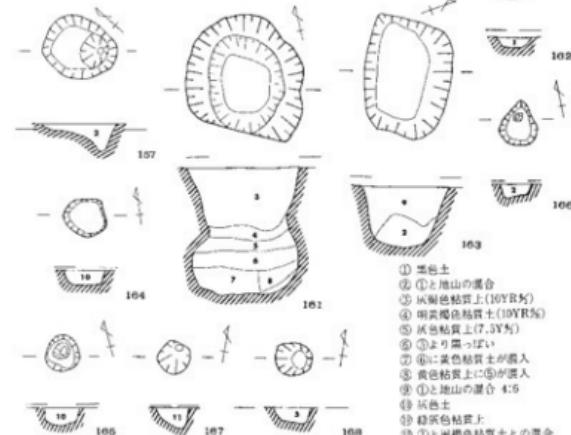
P-162 (第64図-162)

D-6の北東隅に存在する。平面形はやや角ばった円形で、(19.5×17×6) cmを測る。壁面は傾斜する。底面は隅丸方形に近く(12×10) cmを測りほぼ平坦である。埋土は黒色土の單一層である。



P-163 (第64図-163)

P-162の南西側に隣接する。平面形は隅丸の長方形で、(70×47×33) cmを測る。掘り方は急傾斜する。底面も隅丸の長方形で(47×27) cmを測る丸味をもつ底である。埋土は黒色土と地山の混合層で、上層での地山混入が多い尚、湧水をかなりみており井戸といえるほど深さはないが、水が得られる井戸的機能をもっているようである。



- ① 黒色土
- ② ①と地山の混合
- ③ はく剥色粘質土(10YR 5/6)
- ④ 明滅褐色粘質土(10YR 5/6)
- ⑤ はく剥色粘質土(7.5YR 5/6)
- ⑥ ③より黒っぽい
- ⑦ ⑥に某色粘質土が混入
- ⑧ 黄色粘質土に凸が混入
- ⑨ ①と地山の混合 4:5
- ⑩ 灰色土
- ⑪ 暗褐色粘質土
- ⑫ ⑪と某褐色粘質土との混合
- ⑬ 黑色粘質土

第64図 不明落ち込み遺構図



P-164 (第64図-164)

D-6の東端に位置する。平面形は隅丸方形に近く、(23×20×8) cmを測る。掘り方は垂直に近い傾斜をもつ。底面も隅丸方形で(20×19) cmを測り、平坦である。埋土は灰色土一層である。

P-165 (第64図-165)

P-164の南側に近接する。平面形は円形状で、径18~19cm、深さ9.5cmを測る。掘り方は垂直に近い。底面は隅丸三角形に近く（15×13）cmで、中央部には楕円状で（9×8）cmの小さな凹みがある。埋土は灰色土一層である。

#### P-166(第64図-166)

平面形は楕円形を呈し、（24×19×7.5）cmを測る。掘り方は傾斜する。底面は（18×13）cmの楕円状で、西壁へやや傾斜していく。底面北端には楕円状で（6×4）cmの凹みがある。埋土は黒色土と地山の混合層である。

#### P-167(第64図-167)

D-6の東端に存在する。平面形は隅丸方形に近い円形で、径16~18cm、深さ11cmを測る。掘り方は南壁面の傾斜が、垂直な北壁まで至る。底部は北壁直下に位置しほぼ尖底を呈する。埋土は緑灰色粘質土一層である。

#### P-168(第64図-168)

P-167の西側に並列する。平面形は楕円形に近く、（21×17×9）cmを測る。東壁面で垂直に近い掘り方である。底面も楕円形を呈し、東壁側へ傾斜していく。埋土は灰色粘質土一層である。

#### P-169(第64図-169)

D-6の大きな方形の凹みと切り合って存在する。完全な平面形は不明で、長軸55cm、深さ18.5cmを現存値として測る。掘り方は東壁で段をもち、内湾気味に傾斜する。底面は東壁側へ落ち込む。埋土は黒色土と黒褐色粘質土の混合土一層である。遺物に須恵器（杯身）片、土師器片を検出した。

#### P-170(第65図-170)

D-7の西端に位置する。平面形は円形で、径約44cm、深27.5cmを測る。上縁の北西部には、楕円形状で（15×10）cmの浅い凹みが付帯する。掘り方は東壁で段をもって傾斜する。底面は径8cm程の円形で、平坦である。埋土は黒色土と地山の混合土一層である。

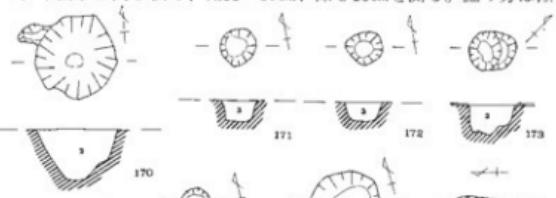
#### P-174(第65図-174)

P-173の南西側に存在する。平面形は隅丸形で、（33.5×26×7.5）cmを測る。掘り方は傾斜

させる。底面も隅丸方形に近く、(23×15)cmを測り、中央はややフラットになる。埋土は黒色土一層で、地山の混入がみられる。

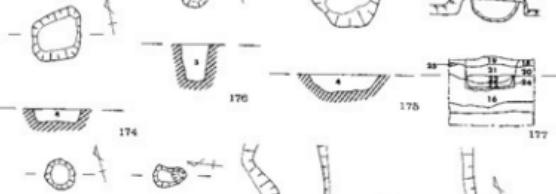
#### P-175(第65図-175)

D-7の北東隅に位置する。平面形は円形状で、径33~37cm、深さ10cmを測る。掘り方は傾斜する。底面は楕円形で(24×14)cmを測り、やや凹凸した面である。埋土は地山の混入した黒色土一層である。



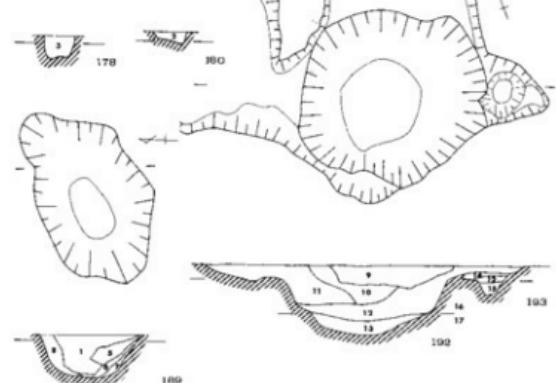
#### P-178(第65図-178)

D-6の南西隅に位置する。平面形で、径15~17cm、深さ12.5cmを測る。掘り方はほぼ垂直である。底面も円形で径10cm程で、中央はフラットになる。埋土は灰色粘質土一層である。



#### P-180(第65図-180)

E-6の北西隅にある。平面形は楕円状で、(18×9×6.5)cmを測る。掘り方は傾斜する。底面も楕円形で、南壁へ傾斜していく。埋土は黒色土と地山の混合である。



- |                      |                      |                      |
|----------------------|----------------------|----------------------|
| ① 黒色土                | ② 底面色微細質土            | ③ ④より赤っぽい            |
| ② ①と地山の混合            | ④ より濃い               | ⑤ 黑褐色粘質土             |
| ③ 灰色粘質土              | ⑥ 黑褐色粘質土 (10YR 3/2)  | ⑥ 黑褐色砂質土             |
| ④ ①に地山が混入            | ⑦ 黑褐色粘質土 (2.5YR 3/2) | ⑦ 黑褐色砂質土             |
| ⑤ 黑褐色土 (10YR 3/2)    | ⑧ より赤色多い             | ⑧ 黑褐色砂質土 (2.5YR 3/2) |
| ⑥ ⑤より茶色っぽい           | ⑨ 黄褐色粘質土 (2.5YR 3/2) | ⑨ 黄褐色砂質土 (2.5YR 3/2) |
| ⑦ ①と地山との混合 (砂質)      | ⑩ 黄褐色砂質土             | ⑩ 黑褐色砂質土             |
| ⑧ ⑤より地山上を多く含む粘質土     | ⑪ 黄褐色砂質土             | ⑪ 黑褐色砂質土             |
| ⑨ に赤褐色粘質土 (10YR 3/2) | ⑫ 黄褐色砂質土             | ⑫ 黑褐色砂質土             |

#### P-189(第65図-189)

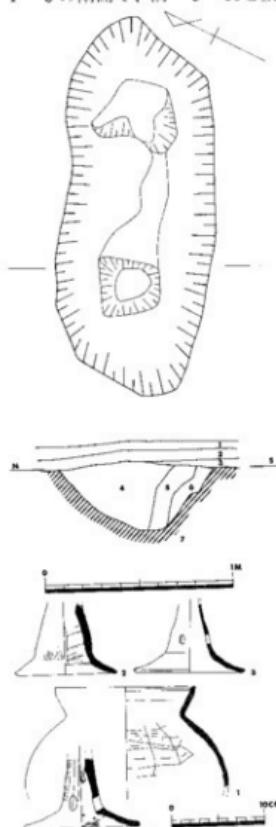
T-3の南西側に存在する。平面形は不整な楕円形で、(206×120×46)cmを測る。壁面はゆ

第65図 不明落ち込み遺構図

るくうねって傾斜する。底面は橢円形で(34×20)cmを測り、平坦である。埋土は黒色土が最も大量で、壁面際から底にかけては灰黄褐色土、黒色土に地山の混入した粘質土ないし砂質土がみられた。遺物に土器細片を検出した。尚、しみ出す程度ではあるが湧水があり、貯水が可能な落ち込みといえる。

#### P-192(第65図-192)

T-5の南側で、溝-9・10と重なって存在する。平面形は円形で、(101×92×36)cmを測る。



掘り方は中位に段をもって傾斜する。底面は(50×43)cmの橢円形で、丸味をもつ。埋土は、溝-9・10から流れ込んだ状態の黒っぽい灰褐色微砂質土、黒褐色粘質土がみられた。溝-9・10と同時期で、少なくともT-5(6C中頃)よりも新しい造構である。遺物に土器細片をみた。灰褐色砂質土より大量の湧水が得られ、井戸の機能を十分果たせそうである。

#### P-43(第66図)

平面形は長楕円形を呈し、(193×84×35)cmを測る。掘り方はややうねりを有してゆるく傾斜し、一部に段をもつ。底面は細長い丸底で、東西端に(44×44)cm、(31×30)cmを測る不定形と隅丸方形の浅い落ち込みがある。埋土は底部に垂直に近い堆積状態で、黒色土、灰色粘質土、同黄色粘質土(地山)混入の3層がみられた。また上層には炭の堆積が認められた。

#### 出土遺物(図版-40)

黒色土の中層より、土器器(高杯脚部-3個体、壺底部欠損-1個体)を検出した。高杯は杯部を欠いた脚部残存で、それが意識的か否かは不明。壺は口縁部が外向気味にのび、口縁端部内側に段をもつ特徴を有しており、5世紀前半の時期に属すると思われる。

第66図 P-43 造構図及び出土土器

- |                  |               |               |              |
|------------------|---------------|---------------|--------------|
| ① 黒土 楊柳色土 7.5VRH | ② 黒褐色土 7.5VRH | ③ 黄褐色土が混入     | ④ 黑色土 7.5VRH |
| ⑤ ⑦に粘土帯びる        | ⑥ 黑色粘質土 5V%   | ⑧ 黄色粘質土 2.5V% |              |

排列番号	出土場所 土	法 径(cm)	形態の特徴	手 法の特徴	備 考
66-1 40-1	P-43 黑色土	(推)口径14.6 残存高 10.8	口縁部は外寄り味に外上方にのびた後、口縁部で内傾する。口縁部内側にわずかに段をもつ。体部はゆるやかに内凹する。	外面体部冠方向のハケ調整の後、横方向のナダ調整。内面、底部方向の根状隆起による調整。頭部ハケ調整。口縁部は内外面共構ナダ調整。	胎土、泥。 焼成、良好。 色調、内10YR R5/2灰褐色。 外10YR R5/2に近い黄褐色。 クロロ回転、左方向。
66-2 40-2	P-43 黑色土	(推)底部径10.6 残存高 7.4	脚部上端は太く、中段にふくらみをもって外下方にのび、彎曲して短く外反する。端部に凹む。 端部はやや鋭い。	外面、ハケ調整後ナダ調整。 内面、脚部構ナダ調整。脚部ヘラケズリ削除。	胎土、泥。 焼成、良好。 色調、内5YR R5/2灰褐色。 外7.5YR R5/2に近い橙褐色。 クロロ回転、右方向。
66-3 40-3	P-43 黑色土	(推)底部径11.2 残存高 7.3	脚部上端は細く、中段でわずかにふくらんで、外下方にのび、彎曲して外反しながら脚部に至る。端部はやや鋭い。 脚部中位に二方透しをもつ。	外面、脚部端部、横ナダ調整地、糸開消し不明。透しはヘラによる。	胎土、泥。 焼成、やや不良。 色調、内7.5Y R5/2に近い橙褐色。 外7.5Y R5/2灰褐色。
66-4 40-4		(推)底部径11.7 残存高 7.3	脚部上端は細くほとんど広がらずにはざかに外寄りながら下方にのび、彎曲して脚部に至る。脚部端部は丸い。底部より馬蹄の所に二方透しをもつ。	外面、縦方向のヘナナデ、脚部はナダ調整。内面、脚部はハケ調整、脚部はヘラケズリ調整、上端にしばり目が残る。	ハケ本数、5~7本。 胎土、泥。 焼成、やや不良。 色調、10YR R5/2に近い黄褐色。

### P-123(第67図)

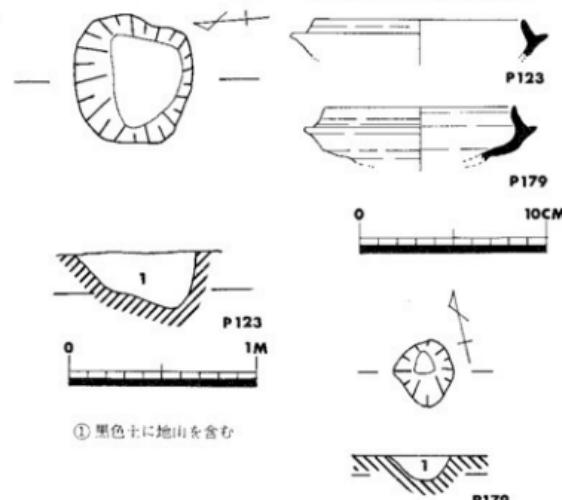
D-3の北東端に位置する。平面形は隅丸方形に近く、(38×32×12)cmを測る。掘り方は南北側で垂直に近く、北壁側で傾斜する。底部は北壁から連続した傾斜面である。埋土は地山の混入した黒色土一層である。

遺物に須恵器(杯身)

1個体が出土した。

推口径11.0cm、推受部

径13.6cmを計る。たちあ  
がりは外反気味に内傾し、  
端部は丸い、受部は外上  
方にのび、端部はやや丸  
味をもつ。胎土一密、白  
色粗砂を含む。焼成良好。  
色調—灰白色(N% )。時  
期は6世紀中頃が考えら  
れる。



第67図 P-123・P-179 遺構図及び出土土器

P-179(第67図)

D-6の東西隅に位置する。平面形は橢円形状で、(18×14×6)cmを測る。掘り方は傾斜する。底面は三角形状で、丸底を呈する。埋土は黒色土に地山を含んでいた。

遺物に須恵器(杯身、底部欠損)を検出した。口径(推)10.0cmを計る。たちあがりは内傾してのび、口縁部でやや外反する。受部は外上方にのび端部はやや鋭い。底部中位は外反する。胎土は密、細砂を含む。焼成良好。色調—外灰(N%)、内、灰(N%)、断・赤灰(7.5R%)。

P-161(第64図—161)

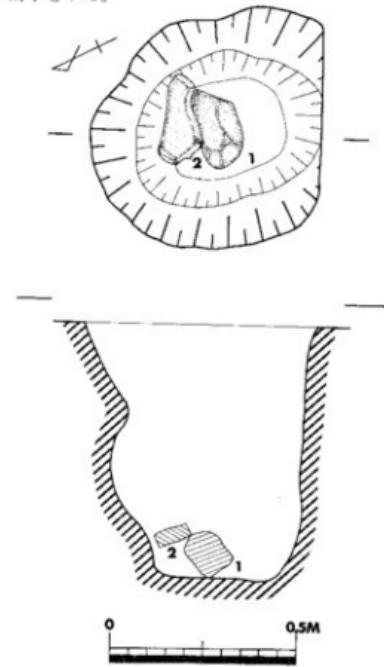
C-6の南西端に存在する。平面形は橢円形に近く、(72×63×69)cmを測る。掘り方は-20~30cmまで傾斜した後、大きく内弯して掘り込まれる。底面は隅丸方形で(30×25)cmを測り平坦である。埋土は基本的に4層で、灰褐色粘質土、明黄褐色粘質土、灰色粘質土、灰色粘質土と地山の混合土がみられる。遺物に底部から砥石—2個を検出したのをはじめ、土師器片、須恵器片が多く出土した。また底部直上付近より湧水をみた。

出土砥石(第68図、図版-28)

ピットの底部から北側壁面にたてかけるようにして、あたかも根石を想定させる状態で検出した。砥石の下には灰色(N%)粘土を敷き詰めてたてかけの状態を安定させており、この砥石が単純に放置されたものではなく意識的にピットの中に安置したものであることを示している。砥石を安置したP-161の意味目的は不明であるが、ピットの南側には建物が2棟(T-10、14)ありそれと何らかの関連性をもつているかもしれない。湧水を得ていることから、井戸的機能を行っていたことも考えられる。

砥石-1(第69図-1)

当遺跡から出土した石製品の中で最大重量を計る。自然礫を利用したもので、4面に著しい磨滅痕がみられ、いずれの面も擦り減って凹んでおり、集中した線条痕を残し相当の使用をう

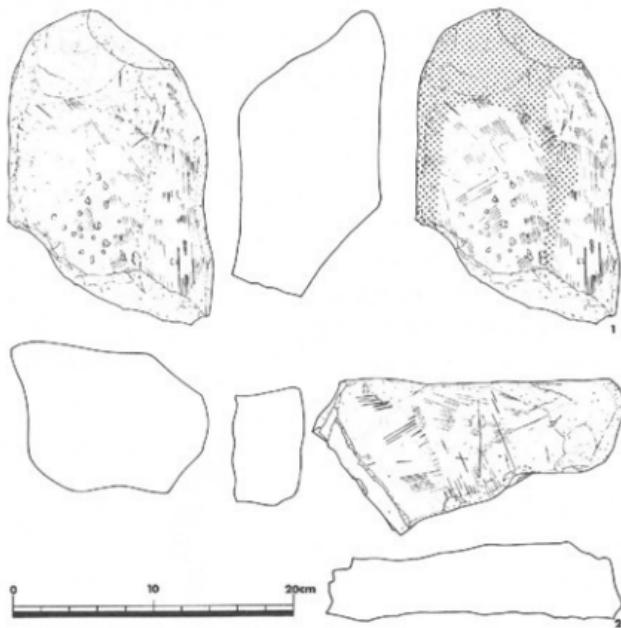


第68図 P-161 遺構図及び遺物出土状態

けたことをうかがわせている。A面の最も広い使用面には10数ヶ所に及ぶ、尖器状のもので敲打されたと思われる細かな凹みが認められる。さらに左侧面と上方を中心に黒色の焼成痕を残しており、炉石への転用の可能性を示している。

#### 砥石-2(第69図-2)

平面体を呈する石材の最も広い表裏の2面を砥ぎ面として利用。A(表)面の使用が最も著しく、表面は磨滅しており、線条痕の集中した擦痕が特に目立つが、石材がやや硬質のため顕著な擦り減りは認められない。擦痕の方向は必ずしも一定ではないが、長軸に対してやや左傾傾斜とほぼ垂直な方向の例が多い。中央部には細かな敲打痕が残っている。B面はA面ほどの使用はうけていないが、長軸に平行な擦痕が著しく認められる。



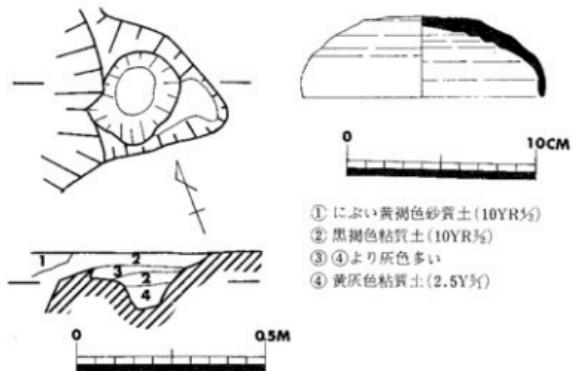
第69図 P-161 出土砥石

#### P-193(第65図-193×70図)

P-192の東側に接し、上面を溝-9に削平されている。平面形は橢円形で、現存で(27×20)×15.5)cmを測る。掘り方は段をもって傾斜する。底面も橢円形で(13×10)cmを測り、西壁

へ傾斜気味である。埋土は黒褐色ないし黄灰色の粘質土である。

遺物に須恵器（杯蓋）を出土した。（第70図・図版-39）、口径（推）12.6cm、器高（推）4.3cm。口縁部は内湾しながら垂直に下り、縫部は丸い。天井部はゆるやかな凸レンズ状を呈し、外面中央部は平らである。胎土・密。焼成・良好。色調・外・褐灰（5 YR 5/6）、内・灰白（N 5/6）。



第70図 P-193 遺構図及び出土土器

以上、「不明落ち込み」として概観してきた遺構の中に、「井戸的機能」を想定できる例があった。P-80・81・129・161・163・189・190・192の8ヶ所で、井戸状遺構ほどではないにしろ、いずれも湧水を得ており十分な貯水が可能な落ち込みである。特にP-80・81・161における上器・砾石の検出状況は意識的な遺物の埋設とも思われ、井戸状遺構-1の「祭祀的儀礼」に準じる行為として興味深い。

他の落ち込みに対しては以前として、「不明」としての見地を脱し得ず、その存在意味に不明瞭な点が残る。その規模・形態に規則性、(可能性として)付属施設痕跡などは見出されず、それが故に主要ともいえる建物・溝などの遺構との関連が認めがたい。しかし伴出遺物による時期比定によれば6世紀中頃を中心とした建物群との並行した、また建物・溝に近接して集中した200ヶ所近い存在状況を見る限り、主要遺構との有機的関連性は断言できないにしても、少なくともそれらを中心とした生活と密接な関係をもつた必要性を内在させていることは明らかであり、その点で「不明落ち込み」をも含めた生活風景の復元に努めることを今後の課題として留めておきたい。

(古園)

## 8. 包含層出土遺物

### 層位

先述した様に、層位は大きく耕作土・床土・遺物包含層（黒褐色粘質土 7.5Y R 3/1）、地山の4層から成る。遺物包含層の厚さは20cm～30cmで、i地区全体にわたって地山直上に広がる。全体で見ると、東側域がやや厚い。それに比例して、遺物の包含率も高い。包含層自体は、セクションBの東側域では黒褐色土(10Y R 3/2)と黒褐色粘質土(7.5Y R 3/1)に細分できたが、他では細分困難であった。

### 遺物

遺物は、弥生時代～磨製太形蛤刃石斧、石鐵不定形刀器、土器（器種不明）古墳時代～須恵器杯（身・蓋）、高杯・壺・甕・器台・鉢・匙、土師器高杯・壺・甕、平安時代～鎌倉時代～瓦、瓦器、青磁、白磁、搗鉢、三足器、羽釜型土器、陶器等が出土している。數量的に見ると古墳時代の遺物が圧倒的に多い。須恵器の総数は9,704個である。種別の内分けは伴別できるものだけをとりあげて記すと、杯身992、杯蓋383、高杯205、甕7、匙7、壺6、器台2、鉢2となる。土師器は総数9,377個である。内分けは高杯175、甕5、壺2、碗1であり、他は細片で器種不明である。この他弥生時代の遺物19（前述の石器以外は土器であるが、器種不明）、瓦器1,863、瓦116、羽釜型土器12、白磁17、青磁25、陶器15、搗鉢3、三足器6、土鍤1がそれぞれ出土している。（川口）

### 石製品

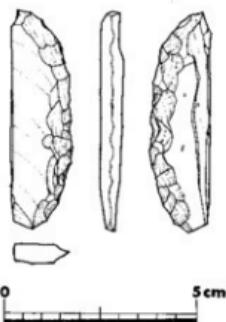
不定形刀器（E-3、溝-2・No.3セクション黒褐色粘質土出土、  
第71図・図版-35）

溝-2（E-3、No.3セクション）の北側 0.8mの地点において、地山（黒褐色粘質土）に半分埋まった状態で検出した。

現存長5.90cm、幅2.65cm、厚0.55cm、重量8gを計る。

ナイフ形石器状の刀器で、サヌカイト製であるが風化が著しく表面は灰白色に変色している。綫長剣刃を素材としており、側刃から末端にかけての両面にやや粗雑なステップ・フレイキングによる剣刃調整を施し、外彎する薄い刃部を厚みの中央軸につくりだしている。刃縁は一様に磨滅がみられ、一部に刃こぼれと思われる細かな剝離痕が数ヶ所に観察できる。尖先はわずかに欠損している。

・大型蛤刃石斧（A-3出土、第72図-1・図版-35）



第71図 不定形刀器

現存長9.32cm、幅6.90cm、厚4.25cm、重量43.850gを計る。石材は玢岩と思われる。

B面からの加撃によって基部のほぼ中央で真横に破損し、刃部にかけて残存。風化が著しく研磨痕はまったく残っておらず、石材のあらい結晶が全面にわたって露出している。残存部分でみると基部中央に最大幅をもち、やや狭ましながら円刃の刃先を形づくる。断面は梢円形状を呈している。刃先は鋭く、刃つぶれが残るほどの著しい使用痕や破損後の敲打器への転用の痕跡は認められない。

不定形刃器（A-3出土、第72図-2・図版-35）

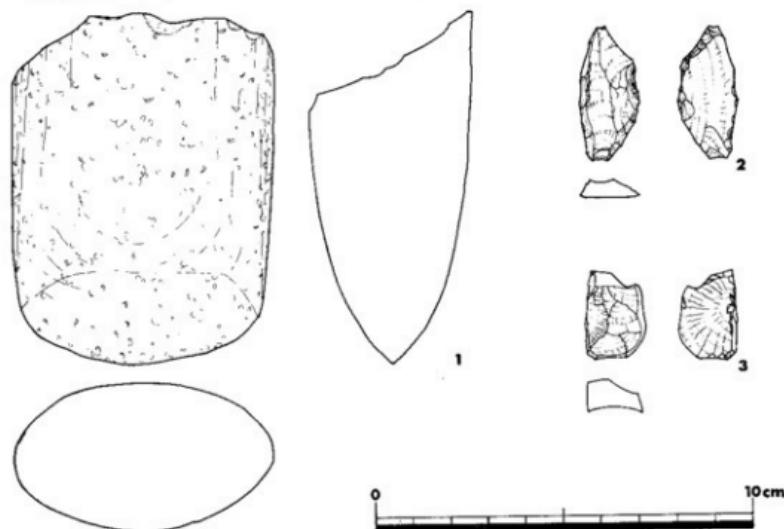
片面に縦長方向の調整剝離痕を残す横長剝片の頂部と側辺に、連続する三辺の刃部をもつ。側邊につくられた刃部は、互いに相対する片面からの細かい剝離調整を施して片刃を呈し、中央の刃部は剝片の頂部側に一部省略を除いて両面に細かい剝離を施し内擱する短い両刃状を呈する。上端は尖がっていたと思われるがわずかに欠損している。

現存長3.60cm、幅1.58cm、厚0.50、重量3.80gを計る。サヌカイト製。

石屑（B-1出土、第72図-3・図版-35）

細かな剝離調整を施された石核から剥ぎ取られたもので、剝離面にはネガティブな大剝離面を全面にそのまま残しており、打面には数カ所の打撃痕が認められる。

現存長2.35cm、幅1.40cm、厚0.80cm、重量4.85gを計る。サヌカイト。（古國）



第72図 石器類

### 杯蓋（第73・74図）

1地区、出土の須恵器は、総数 9,704個体の内、杯蓋は 383個体を数えたが杯身の約1/3である。団化した土器の大半が約1/8-1/4と破片化がめだつ。

周知のとおり、6世紀代に須恵器が大衆化し、大量生産化に伴う土器の粗雑化と製作技法のバラエティーによって土器の規格性に欠ける点は、本遺跡出土須恵器にも言える事である。それに、必要消費にせまられた大量生産化に起因する工人の増加が、技法の不統一なり個性として土器製作にも現われている。これは何も杯蓋に限らず、後述するその他の須恵器にも同様の事である。杯蓋を特徴ある技法から観察して、10類に細分したが、一概に形式的に記述できることを付記したい。

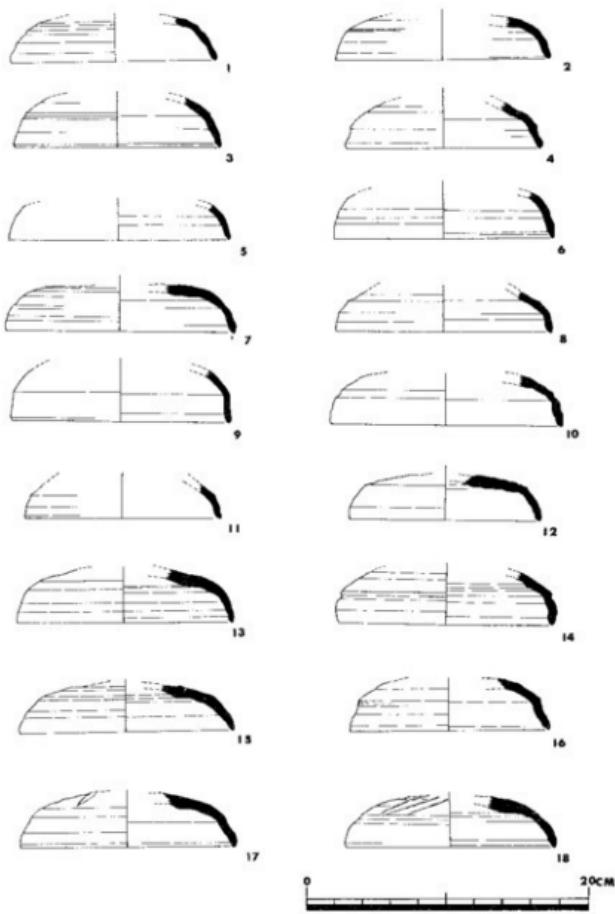
(22) は、天井部と口縁部の境に明瞭な稜をもち、直下に下る口縁部からやや外に引き出した端部がある。天井部は、やや腰高さが残る。(14)、(3) には、口縁部との境に凹線をめぐらし、(3) の方がやや明確に表現している。(14) は、口縁部が外彎し、端部は内側に丸める。(3) は、外にふんばった口縁部の端部内面に凹線を有す。(18)、(24) には、もはや凹線を欠き器高も低い。(18) は、天井部から口縁端部に向けて外彎し尖がる。口縁端部は、丸く、粘土紐痕がめだつが、外彎ぎみのタイプは(24) である。(31) のように、天井部から口縁端部へ「ハ」の字形に呈するもの、この種の土器には(27) のように、稜下に凹線をもつものもある。

(20)(23) は、形態的には酷似するが口径が異なり、(20) は、左下がりの刻目状描目がある。この描目は、(21) にも見られる。天井部は高く、平滑、口縁端部へと大きく外彎する。

(34) は、器高は低く、口縁端部内面には、罐部と水平なかえりをつくり出す。(35) 以下は、共に、天井部に偏平なツマミをもつ土器で、(35) は、口縁端部はシャープである。胎土は、全般的に良好であるが、多くは1~4mmの礫を含む。色調は、通有の須恵器にみる明青灰色、灰色、灰白色、青灰色、明緑色がある。

(12) のやや不良をのぞけば、焼成は、すべて良好さが認められ、数個体には、堅緻な土器があった。尚、(17) には杯蓋を数個体重ね焼きした痕跡があり、(18) には「川」のヘラ記号が天井部外面に知られた。

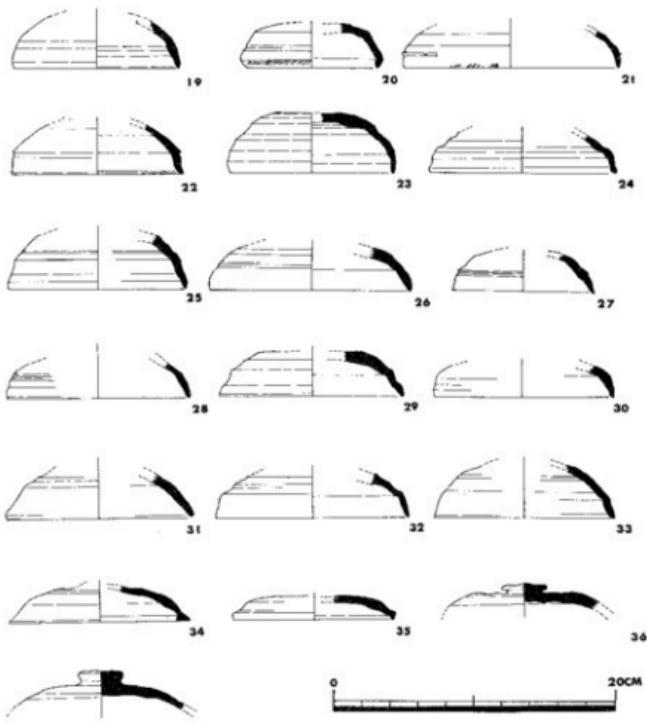
ロクロの回転は、製品の状態で右まわりのものは、5個体。左まわりの土器は13個体であった。口径は、推定径になるが、一応の目安として、11.5cm~15.5cmと幅がみられ、15.0cmが最も多い。最小口径10.0cm、最大口径が16.5cmの土器があった。もちろん、ロクロ、口径共に形式差とも相関関係にあろう。（森村）



第73図 黒褐色粘質土 出土須恵器 杯蓋(1~18)

杯身(第75~83図、図版-37)

1地区出土土器について相対的な個数を把握するためにカウントした結果、総土器約9,704個体の内、杯身は、922個体と約1割である。保存状態が必ずしも良好とは言えない資料であるが、杯身の全般的なプロポーションなり、立ち上がり、受部といったポイント部分について十分観察した結果、技法的バラエティーは多種多様で工人差も思わせる技法差が表出されていた。



第74図 黒褐色粘質土 出土須恵器 杯蓋(19~37)

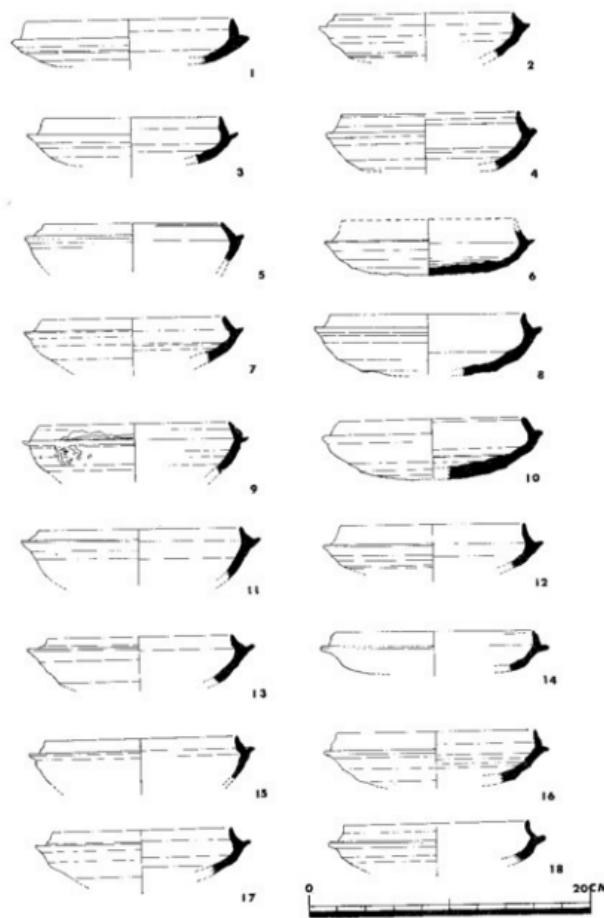
図示したように、181個体の土器について概むね10数種の傾向が知れよう。

(21)(38)(134)は、比較的立ち上がりがめだち、受部は、やや外上方に引き伸ばす。この時期の特長を良く残し、底部は丸く深い。(34)は、受部近くまでヘラ削りを施す。(21)には、内外ともに細かい粘土紐痕が存在し、調整の丁寧さに欠ける。

次期の傾向として立ちあがりについてみると、(1)の直立ぎみのもの、(10)に内傾しながらやや外縁、(18)内傾の後、直立するように引き上げた土器、(30)のように内傾と外縁が同居するタイプ、(54)の直線的な内傾、(119)では、やや細部すぎるが受部から内傾し外縁の丸味をもたらせると同時に端部できらに内側に丸めたもの等がある。当然のことながら、これらの土器の口縁端部内面に凹線ではなく丸味調整し、受部は、水平、外上方と様々な角度に引き出している。前段階の土器に比して口径が大きく、器高も低いことに気がつく。この段階の土器について立

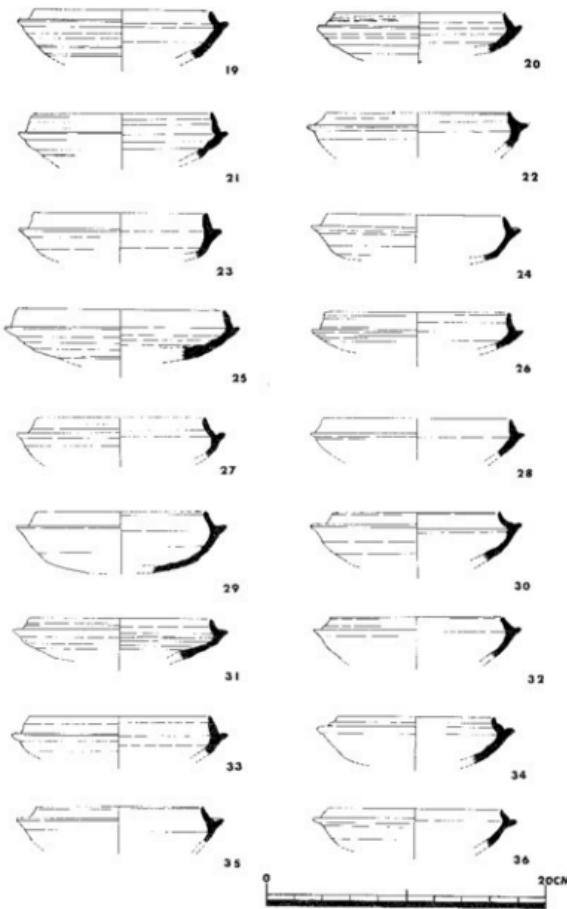
ちあがり、受部の2点について観察すると、(71)のように受部は水平で立ち上がりは直立て短い。これは、この段階における立ち上がりの特長ともとらえられよう。

(66)は内傾の後、やや直立ぎみに引き上げ、端部は丸い。(105)(176)は、直線的に内傾させ



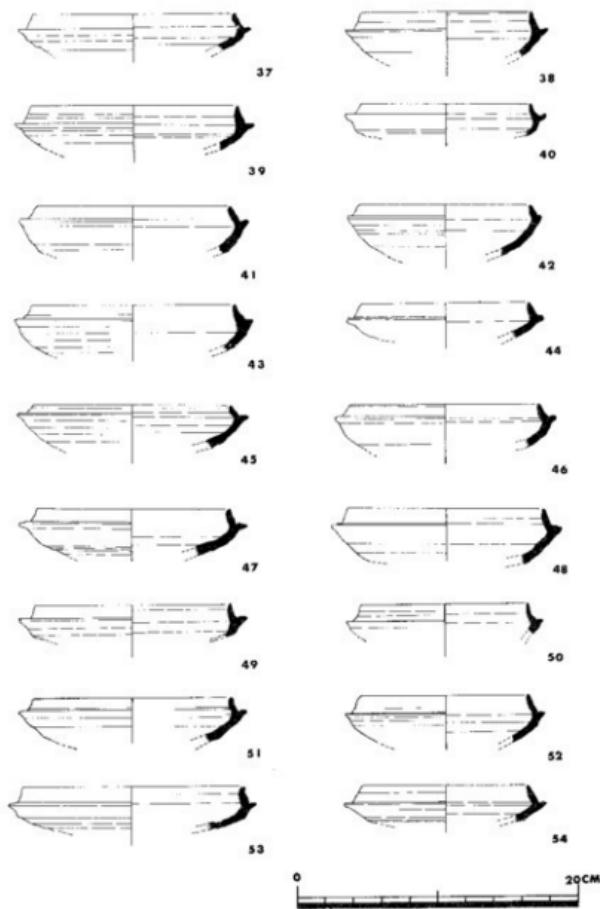
第75図 黒褐色粘質土 出土須恵器 杯身 (1~18)

た土器。(174)の土器は、内側に仕上げ、端部を上方に引っ張り上げている。受部もシャープに欠けて丸味がある。ただ、(174)(176)は端部は尖る。又、(174)は、他に比して器壁も薄い。



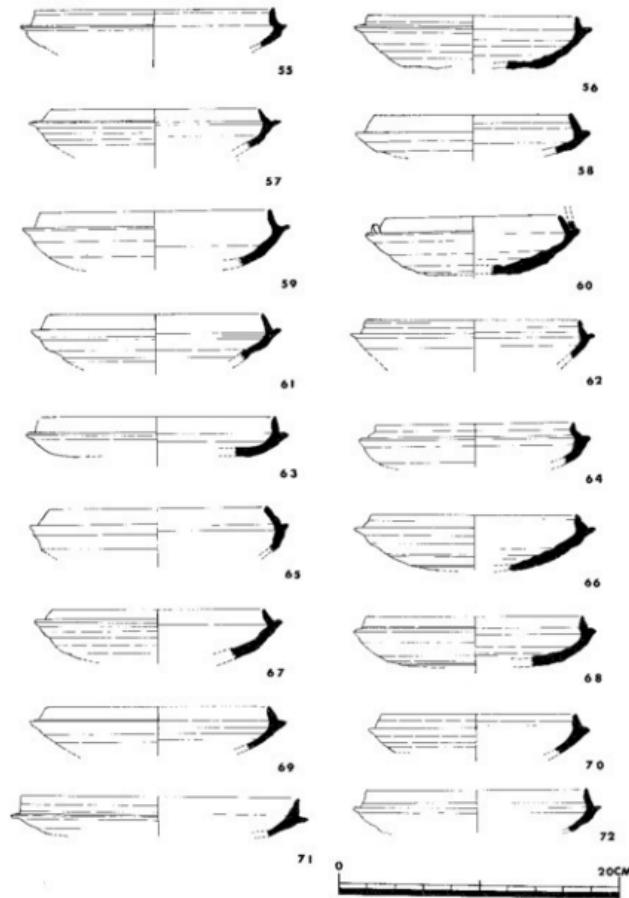
第76図 黒褐色粘質土 出土須恵器 杯身(19~36)

立ち上がり、受部は極めて短かく、形式化されたこの段階の土器には、その2点が消滅する前段階の様相を示す。口径も小さく浅く、平滑な底部にむかって逆「ハ」字形に製作され、立ち上がり基部に明白な凹線がめぐる。



第77図 黒褐色粘質土 出土須恵器 杯身(37~54)

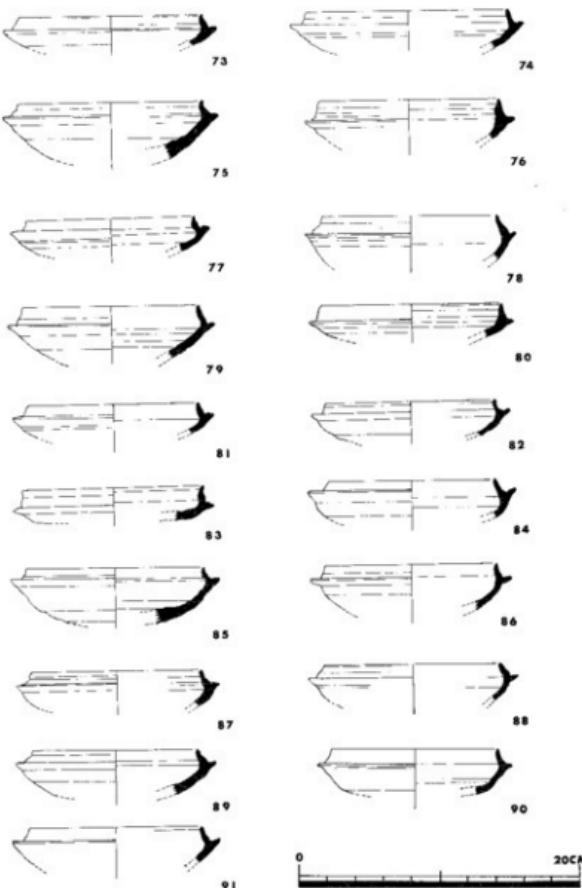
(112)は、立ち上がりと受部がセットに仕上げられ「くじら」の尾状を思わせる形態。  
(144)のように立ち上がりを内側のすえ直上に粘土を引き出したタイプは、(181)に類似する。  
(172)の土器は、立ち上がり基部から分厚く内傾させた後、シャープに尖がりぎみにする。7



第78図 黒褐色粘質土 出土須恵器 杯身(55~72)

世紀代の土器は5個体程度で、高台の貼り付け位置からみて、(186)から(187)への推移がある。ただ、全体の形態については、底部のみで不明である。

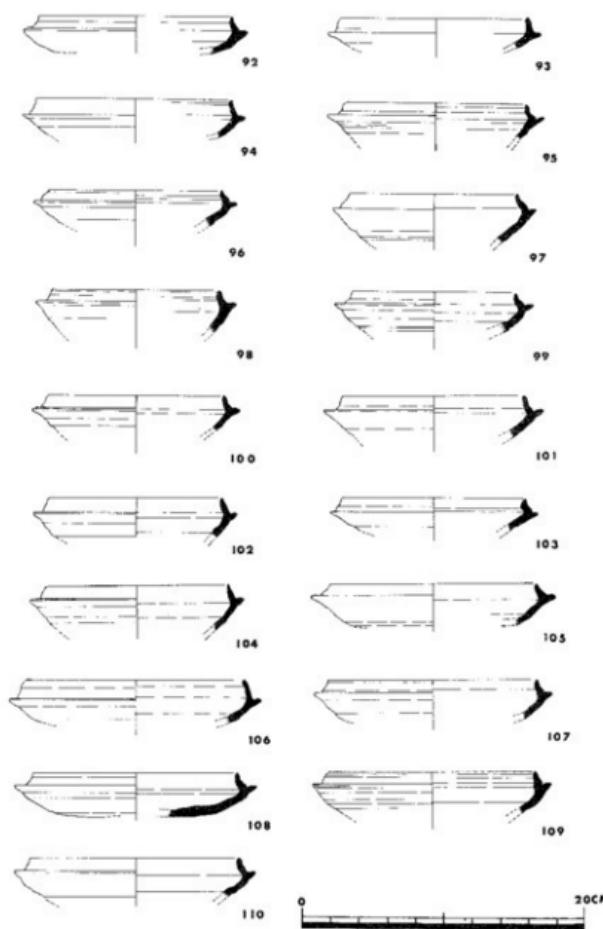
胎土は、密であるがやはり礫を含有する土器が多い、(11)(60)は雲母を含む。



第79図 黒褐色粘質土 出土須恵器 杯身(73~91)

これらの土器は、灰白色、灰色、青灰色、褐灰色、明青灰色、青灰色、灰黄色、紫灰色といった灰色を基調とした良好な焼成になっていた。

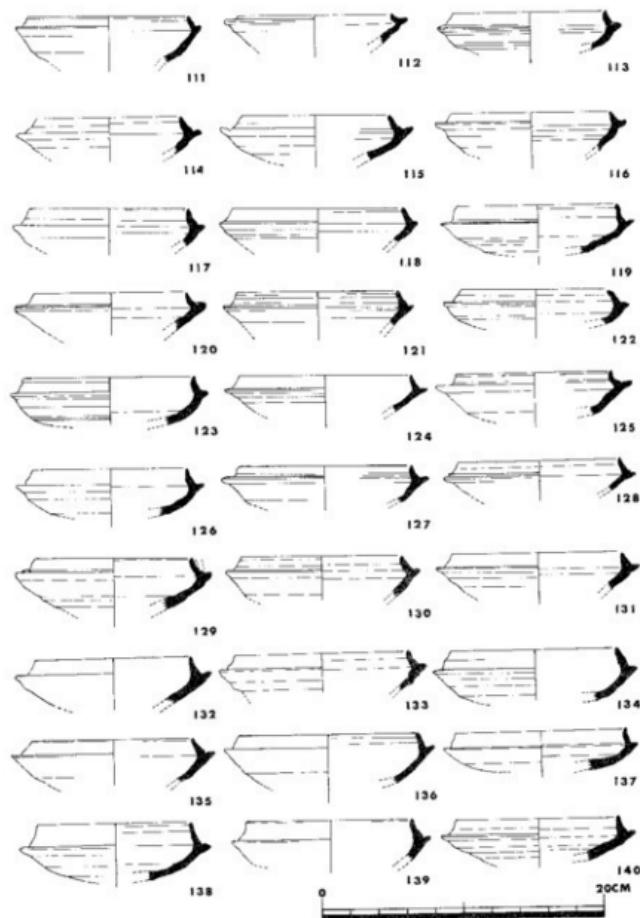
この種の土器のロクロ回転を観察すると右まわり39個体、左まわり30個体を数えた。形式的な



第20図 黒褐色粘質土 出土須恵器 杯身(92~110)

指標の一つとなりうる口径は、10.0cm～14.5cmが普通的であり、12.0～12.5cm前後が最も多くを占める。

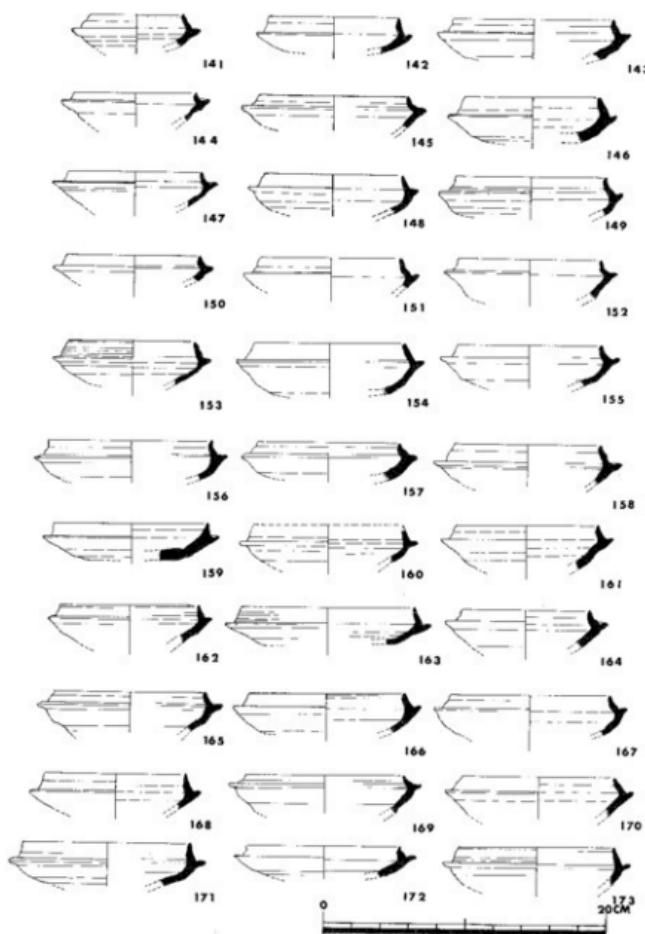
(9)(60)(129)(143)には、杯身と蓋をセット焼成した痕跡が立ち上がり基部に良く残る。蓋・



第81図 黒褐色粘質土 出土須恵器 杯身(111～140)

口縁端部の欠損したものが付着し窯入れ状態を知る手がかりである。

外面、底部に「1」「11」のヘラ記号をもつ土器として(2)(8)(77)(94)(114)(148)(154)が上げられるが、各々の土器について形式的なことによるプロポーションの共通性がみられるが細部での技法差は、明確である。(森村)



第82図 黒褐色粘質土 出土須恵器 杯身(141~173)

# 須恵器一覧表

## 蓋杯(蓋)

種別番号	出土場所 土質	法量(cm)	形態の特徴	寸法の特徴	備考
73-1		(推)口径14.6 残存高 3.2	口縁部は、外下方に開き端部は丸い。 縁は凹凸を有し鋸い。	回転ナゲ調整。	胎土、密。1~2mmの砂粒を含む。 焼成、良好。 色調、内面、5PB有明青灰。 外面、5PB有明青灰。
73-2	A-3 黒褐色粘質土	(推)口径15.1 残存高 3.0	口縁部は内傾したのち、外下方に向く。 縁部はやや鋸い。	回転ナゲ調整。	胎土、やや小石含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、N灰色。 ロクロ回転、左方向。
73-3	K-3 黒褐色粘質土	(推)口径14.3 残存高 3.6	口縁部は内窓気味に外下方に開き、端部に圓錐を有する。 縁は凹凸を有し鋸い。	回転ナゲ調整。	胎土、密。4mmの釋を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N灰色。 外面、N灰色。
73-4	B-4 黒褐色粘質土 下層	(推)口径14.0 残存高 2.5	口縁部は外下方に開き、中位で屈曲して、 端部に丸い。	天井部は、回転ヘラ削り。 他は、回転ナゲ調整。	胎土、密。白色粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、灰灰白。 外面、灰灰白。
73-5		(推)口径15.4 残存高 3.2	口縁部は内窓気味に外下方に開き、端部は丸い。	回転ナゲ調整。	胎土、やや粗。小石を含む。 焼成、良好。 色調、内面、純灰。 外面、N灰色。
73-6	C-2 黒褐色粘質土	(推)口径16.0 残存高 3.3	口縁部は外下方にわずかに開き、屈曲して端部に丸い。	回転ナゲ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面、N灰色。 外面、N灰色。
73-7	B-6 黒褐色粘質土 下層	(推)口径15.0 残存高 3.0	口縁部は内窓気味に外下方に開き、屈曲してから外方に開く。 天井部はほぼ平ら。	天井部、回転ヘラ削り調整。 内面中央部、不整方向ナゲ調整。 他は、回転ナゲ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、2.5YR有明灰白。
73-8	K-2 黒褐色粘質土	(推)口径15.2 残存高 3.8	口縁部は、内窓気味にわずかに外下方にのみ、端部は丸い。	回転ナゲ調整。	胎土、密。1mmの白色粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N灰色。 外面、N灰色。
73-9	K-5 黒褐色粘質土	(推)口径16.3 残存高 3.5	口縁部は、ほぼ直角に下り、端部近くでわずかに外下方に開く。 端部は丸い。	回転ナゲ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面、5PB有明青灰。 外面、5PB有明青灰。
73-10	A-5 黒褐色粘質土	(推)口径13.6 残存高 2.5	口縁部は、中位で屈曲し、外下方に向く。 端部は丸く、内側に凹凸がある。 縁は鋸く、凹面をなす。	回転ナゲ調整。	胎土、密。1~3.5mmの白色粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内、10B G有明綠灰。 外、5G有明綠灰。
73-11	A-3 黒褐色粘質土	(推)口径13.6 残存高 2.5	口縁部は、凹凸して外下方に開き、端部は丸い。	回転ナゲ調整。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、N灰色。 ロクロ回転、左方向。

井河善介	出土場所 層	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
73-12	E-2 黒褐色粘質土	口径(推)13.4 残存高 3.1	口縁部は、内寄しながら外下方に開き、端部は丸い。 天井部はほぼ平ら。	天井部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。	胎土、密。3mmの擦を含む。 焼成、やや不良。 色調、内面、N%灰白。 外面、7.5YR%灰白。 擦面、2.5YR%灰白。 ロクロ回転、右方向。
73-13	E-4 黒褐色粘質土	口径(推)15.0 残存高 3.8	口縁部は、内寄して外下方に開き、端部は丸い。	天井部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。	胎土、密。白色擦を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰白。 外面、N%灰白。 ロクロ回転、左方向。
73-14	E-6 黒褐色粘質土	口径(推)15.4 残存高 3.8	口縁部は内寄し、端部付近から直角に下る。 端部は丸い。 縁は回転を有し鈍い。	回転ナデ調整。	胎土、密。白及び黒の粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰白。 外面、N%灰白。
73-15	H-4 黒褐色粘質土	口径(推)14.9 残存高 3.3	口縁部は、内寄がみに外下方に開き、端部は丸い。	天井部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。	胎土、密。白色粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰白。 外面、N%灰白。
73-16	C-2 黒褐色粘質土	口径(推)14.2 残存高 3.4	口縁部は外寄し、中位で屈曲して、外下方に開く。 端部は丸い。 縁は鈍く、凹面を成す。	天井部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、N%灰白。
73-17	A-4 黒褐色粘質土	口径(推)15.0 残存高 3.8	口縁部は外寄し、中位で屈曲して、直角に下る。 端部は丸い。	天井部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、N%灰白。 ロクロ回転、右方向。 天井部に重ね燒痕有り。
73-18	E-4 黒褐色粘質土	口径(推)14.8 残存高 3.6	口縁部は、内寄しながら外下方にのび、端部は丸い。	天井部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。	胎土、密。1~2mmの白色砂粒を含む。 焼成、良好。 色調、N%灰白。
74-19	E-5 黒褐色粘質土	口径(推)11.5 残存高 3.7	口縁部は肥厚で、外下方にわずかに開く。 端部は丸い。	回転ナデ調整。 天井部	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面、10YR%灰白。 外面、7.5YR%灰白。 ロクロ回転、左方向。 ヘラ記号「」有り。
74-20	C-5 黒褐色粘質土	口径(推)10.0 残存高 3.1	口縁部は、外下方に開いたものと屈曲して大きくなり、端部に至る。端部は比較的鋭く、内側に凹線を有する。 口縁外側には刻み目を有する。 天井部と口縁部との間に凹線を有する。	天井部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面、5G%焼締灰。 外面
74-21	B-3 黒褐色粘質土	口径(推)15.0 残存高 2.7	口縁部は、わずかに外寄したもの、内寄氣味に外下方に開く。 端部は丸く、外側には刻み目を有する。	回転ナデ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰白。 外面、N%灰白。 擦面、N%灰白。 陰側底下に重ね燒痕有り。
74-22	B-2 黒褐色粘質土	口径(推)11.9 残存高 3.5	口縁部は外寄し、端部に至る。 端部は、比較的鋭く、内側に凹線を有する。 縁は短く鋭く、口縁部との境で凹線を有する。	回転ナデ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面、5B%焼締灰。 外面、ロクロ回転、左方向。
74-23	E-2 黒褐色粘質土	口径(推)11.3 残存高 4.3	口縁部は、内寄しながら端部にがる。 端部は丸い。 天井部は、深い凹面を成す。	天井部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。	胎土、密。白色粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰白。 外面、ロクロ回転、右方向。

井田番号	出土場所 上層	法 畳 (cm)	形 状 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
74-24	E-3 黒褐色粘質土	口径(推) 15.0 残存高 2.8	口縁部は、まっすぐ外下方にのび、端部付近で、頭曲してさらに外下方に聞く。端部は丸い。	回転ナダ調整。	胎土、密。粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面 N%灰白。 外面 N%灰白。
74-25	A-5 黒褐色粘質土	口径(推) 12.6 残存高 3.8	口縁部は、わずかに外齊したのち中位で屈曲して、外下方に聞く。 端部は丸い。 縁は鋭い。	回転ナダ調整。	胎土、密。白色粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、N%灰白。
74-26	E-3 黒褐色粘質土	口径(推) 14.0 残存高 3.1	口縁部は外下方に開き、わずかに屈曲して、端部に丸る。 端部は丸い。	大井部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナダ調整。	胎土、1~3mmの粗粒を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰白。 外面、5 B 5明青灰。 ロクロ回転、左方向。
74-27		口径(推) 10.0 残存高 2.7	口縁部は、外下方に開き、端部は鋸く、内側に凹痕を有する。 縁は、比較的鋸く、底下に凹痕を有する。	回転ナダ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰白。 外面、N%灰白。
74-28	C-2 黒褐色粘質土	口径(推) 12.8 残存高 2.6	口縁部は、外下方に開き、端部は丸い。 縁は鋸く、凹痕を有する。	回転ナダ調整。	胎土、密。 焼成、良好、堅密。 色調、N%灰白。 ロクロ回転、左方向。
74-29	C-1 黒褐色粘質土	口径(推) 13.0 残存高 3.2	口縁部は、外下方に開き、中位で屈曲して端部に至る。 端部は丸い。 天井部は肥厚。	大井部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナダ調整。	胎土、密。2mmの粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰白。 外面、5 B 5明青灰。 断面、5 YR 5明灰白。
74-30	A-3 黒褐色粘質土	口径(推) 12.5 残存高 2.2	口縁部は、内面気室内に外下方に開き、端部は丸い。	回転ナダ調整。	胎土、密。 焼成、良好、堅密。 色調、内面、5 P B 5明青灰。 外面、N%灰白。 断面、5 P B 5明青灰。 ロクロ回転、左方向。
74-31	C-2 黒褐色粘質土	口径(推) 13.2 残存高 3.1	口縁部は、直線的に外下方に開き、端部に至る。 端部は丸い。	回転ナダ調整。	胎土、密。やや硬を含む。 焼成、良好、堅密。 色調、内面、N%灰白。 外面、N%灰白。 断面、5 P B 5明青灰。 ロクロ回転、左方向。
74-32	C-2 黒褐色粘質土	口径(推) 13.4 残存高 3.0	口縁部は、直線的に外下方に開き、端部はやや鋸い。	回転ナダ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、5 H 5明青灰。
74-33	A-3 黒褐色粘質土	口径(推) 12.7 残存高 3.8	口縁部は、中位で折曲して外下方に聞く。 端部はやや鋸い。	回転ナダ調整。	胎土、密。粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、N%灰白。 ロクロ回転、左方向。
74-34	C-1 黒褐色粘質土	口径(推) 11.0 残存高 2.5	口縁部は、外反して端部に至る。 端部は鋸い。 内面に鋸いかえりを有する。	内面中央部、不整方向ナダ調整。 口縁部と内面は、回転ナダ調整。	胎土、密。1~2mmの白色砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰白。 外面、5 P B 5明青灰。
74-35	A-3 黒褐色粘質土	口径(推) 11.3 残存高 1.7	口縁部は外反したのち、垂直に下って端部に至る。 端部は比較的鋸い。 天井部は平ら。	天井部、回転ヘラ削り調整。 内面中央部、不整方向ナダ調整。 他は、回転ナダ調整。	胎土、密。1~2mmの白色砂を含む。 焼成、良好。 色調、N%灰白。

辨認番号	出土場所層	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
74-36	C-3 黒褐色粘質土	つまみ高 0.8 (推) つまみ径 3.2	天井部は平らで、のちながらかに下る。 天井部中央に擬宝珠様のつまみを有する。	つまみは、ハリツケている。 天井部、回転ヘラ削り調整。 内面中央部、不整方向ナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	胎土、密。1~2mmの白色砂粒を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰白。 外側、5%灰青灰。 ロクロ回転、右方向。
74-37	B-5 黒褐色粘質土下層	つまみ高 0.9 (推) つまみ径 3.2	天井部はなだらかに下る。 天井部中央に、中心が凹面を呈するつまみを有する。	つまみはハリツケしている。 内面中央部は不整方向のナデがあるが、つまみの部分は消えている。 他は、回転ナデ調整。	胎土、密。1~3mmの砂粒を含む。 焼成、良好。 色調、内面、灰灰。 外側、5%灰青灰。 ロクロ回転、左方向。

## 蓋杯(身)

辨認番号	出土場所層	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
75-1	B-6 黒褐色粘質土下層	高径(推)14.5 受部径 16.7 (推) 残存高 3.2	たちあがりは、わずかに内傾して上方にのび、端部は丸い。 受部は水平にのび、断面三角形状を呈し、端部は丸い。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。	胎土、密。白色粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰白。 外側、N%灰。
75-2	B-3 黒褐色粘質土	口径(推)12.6 受部径 14.9 (推) 残存高 3.2	たちあがりは短く内傾したち外方して上方にのび、端部は丸い。 受部は短く上外方にのび端部は丸い。	回転ナデ調整。	胎土、密。白色粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、N%灰。 底部にヘラ記分有り。
75-3	C-1 黒褐色粘質土	口径(推)12.4 受部径 14.8 (推) 残存高 3.3	たちあがりは内傾し、中位で屈曲して、上方にのびる。 端部は、やや覗い。 受部は上外方にのび、端部は丸い。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。	胎土、密。白色粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面 N%灰。
75-4	D-5 黒褐色粘質土	口径(推)12.5 受部径 14.8 (推) 残存高 4.1	たちあがりは内傾し、端部近くで屈曲して重疊ぎみに立ち上がる。 受部は、水平に近く、上外方にのび端部はやや覗い。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。	胎土、密。白色砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、5%B%灰灰。 外側、N%灰。 断面、7.5%R%灰。
75-5	E-3 黒褐色粘質土	LJ径(推)12.2 受部径 15.4 (推) 残存高 2.7	たちあがりは内傾してまっすぐにのび、端部は丸い。 受部は上外方にのび、端部は丸い。 たちあがりと受部の間に凹面を有する。	回転ナデ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面、5%G%明青灰。 外側、N%灰白。 断面、5%P%灰青灰。 ロクロ回転、右方向。
75-6	C-2 黒褐色粘質土	口径(推)12.4 受部径 14.8 (推) 残存高 3.2	たちあがりは、端部は欠損しているが、端部は外寄気味に内傾している。 受部は薄く、上外方にのび、端部は比較的覗い。 たちあがりと受部との間に凹面を有する。 端部は浅く平底で、内寄して受部に引る。	底部、回転ヘラ削り調整。 内面中央、不整方向ナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	胎土、やや粗。4mm以下の砂粒を多く含む。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰白。外側、N%灰白。 断面、N%灰白。N%灰白。 ロクロ回転、左方向。
75-7	C-2 黒褐色粘質土	口径(推)12.7 受部径 15.4 (推) 残存高 3.2	たちあがりは、まっすぐに内傾し、中位からゆっくり上外方にのびる。 受部は上外方にのび、端部は丸い。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、N%灰白。
75-8	E-5 黒褐色粘質土	口径(推)13.6 受部径 16.1 (推) 残存高 4.3	たちあがりは内傾したち、外反して上方に立ち上がる。 端部は丸い。 受部は上外方にのび、端部は丸い。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。	胎土、やや粗。白色砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰白。
37-8	黒褐色粘質土	(推) 残存高 4.3			
75-9	D-1 黒褐色粘質土	口径(推)13.4 受部径 16.0 (推) 残存高 3.7	たちあがりは、内傾しながら上方にのび、端部はやや覗い。 受部は上外方にのび、短く薄い。	回転ナデ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰白。 外側、N%灰。 ロクロ回転、右方向。 ヘラ記分あり。

標因番号	出土場所層	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
75-10 .37-10	E-1 黒褐色粘質土	口径(推)13.2 受部径 15.6 (推) 残存高 4.3	たちあがりは、内傾して上方にのび、端部は丸い。 受部は、表面三三角形を呈し、端部は丸い。 底部は浅く、平底を呈する。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナダ調整。	胎土、密。白色粗砂を含む。 焼成、やや不良。 色調、内面、N%灰白。 外面、10YR5/灰白。 ロクロ回転、左方向。
75-11	C-2 黒褐色粘質土	口径(推)14.1 受部径 16.8 (推) 残存高 3.7	たちあがりは、外寄気味に上方にのび、端部は丸い。 受部は、表面三三角形を呈し、端部は丸い。 たちあがりと受部の間に凹面を有する。	回転ナダ調整。	胎土、密。黒土を含む。 焼成、やや不良。 色調、内面、N%灰白。 外面、7.5YR5/灰白。 ロクロ回転、左方向。
75-12	C-2 黒褐色粘質土	口径(推)13.0 受部径 15.6 (推) 残存高 3.2	たちあがりは、内傾したのち屈曲して上方に立ち上がる。 端部は丸い。 受部は上方方にのび、端部はやや丸い。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナダ調整。	胎土、密。白色粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰白。 外面、N%灰白。
75-13	P-1 黒褐色粘質土	口径(推)12.8 受部径 16.0 (推) 残存高 3.5	たちあがりは、内傾したのち屈曲して上方に立ち上がる。 端部は丸い。 受部は上方方にのび、端部は丸い。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナダ調整。	胎土、密。3mmの粗粒を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰白。 外面、10YR5/灰。
75-14	B-2 黒褐色粘質土	口径(推)14.1 受部径 16.3 (推) 残存高 2.9	たちあがりは、内傾して端部に至り、端部は丸い。 受部は上方方にのび、端部は丸い。 たちあがりと受部の間に凹面を有する。	回転ナダ調整。	胎土、密。 焼成、良好、堅密。 色調、N%灰白。 ロクロ回転、右方向。
75-15	B-4 黒褐色粘質土 下層	口径(推)13.6 受部径 15.9 (推) 残存高 2.9	たちあがりは、内傾したのち中位で垂直に立ちあがり、端部は鋭い。 受部は近く水平にのび、端部はやや锐い。 たちあがりと受部の間に凹面を有する。	回転ナダ調整。	胎土、わざかに白色の塵を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰白。 外面、N%灰白。
75-16	C-3 黒褐色粘質土	LJ径(推)14.0 受部径 16.0 (推) 残存高 3.7	たちあがりは短く、わずかに内傾したのち、大きめ外寄氣味に傾斜する。 受部は、上方方にのび、端部は丸い。 たちあがりと受部の間に凹面を有する。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナダ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面、5B4/明青灰。 外面、5B5/青灰。 ロクロ回転、右方向。
75-17	C-2 黒褐色粘質土	口径(推)12.4 受部径 15.1 (推) 残存高 3.3	たちあがりは、内傾したのちわざかに直立し、端部は比較的鋭い。 受部は上方方にのび、端部は比較的丸い。 たちあがりと受部の間に凹面を有する。	回転ナダ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、7.5Y5/灰。 底部外面の崩落はされている。
75-18	A-5 黒褐色粘質土	口径(推)13.0 受部径 15.4 (推) 残存高 2.8	たちあがりは薄く、内傾したのち、垂直に立ち上がる。 受部は上方方にのび、端部は丸い。 たちあがりと受部の間に凹面を有する。	回転ナダ調整。	胎土、白色粗砂を含む。 焼成、やや不良。 色調、内面、N%灰白。 外面、N%灰白。 ロクロ回転、左方向。
76-19	C-5 黒褐色粘質土	口径(推)12.4 受部径 14.9 (推) 残存高 3.4	たちあがりは内傾し、上方に立ち上がる。 端部は丸い。 受部は上方方にのび、端部は丸い。 たちあがりと受部の間に凹面を有する。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナダ調整。	胎土、密。砂粒を含む。 焼成、良好。 色調、N%灰白。 ロクロ回転、右方向。
76-20	B-3 黒褐色粘質土	口径(推)12.4 受部径 14.8 (推) 残存高 2.9	たちあがりは内傾し、中位で屈曲して上方に立ち上がる。 端部は丸い。 受部は、上方方にのび、端部は丸い。 たちあがりと受部の間に凹面を有する。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナダ調整。	胎土、1~3mmの粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、10BG5/青灰。 外面、10BG5/青灰。 ロクロ回転、左方向。
76-21	D-5 黒褐色粘質土	口径(推)12.4 受部径 14.8 (推) 残存高 3.4	たちあがりは薄く、内傾して上方にのび、端部は丸い。 受部は近く、水平にのび、端部は丸い。 たちあがりと受部の間に凹面を有する。	回転ナダ調整。	胎土、密。粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、N%灰白。 ロクロ回転、右方向。

屏阿番号	出土場所	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
76-22	E-2 黒褐色粘質土	口徑(推)12.3 受部径 15.7 (推) 残存高 2.5	たちあがりは、内傾したのち上方にのび、端部は比較的鋭い。 受部は水平にのび、端部は丸い。	回転ナガ調整。	粘土、密。粗砂を含む。 焼成、やや不良。 色調、内面、N 5R 向青灰。 外面、7.5YR 向褐灰。 底部外縁の唇面があれている。
76-23	C-2 黒褐色粘質土	口徑(推)12.5 受部径 14.3 (推) 残存高 3.2	たちあがりは、わずかに内傾してのび、端部は丸い。 受部は水平にのび、端部は丸い。 たちあがりと受部の境に凹面を有する。	回転ナガ調整。	粘土、密。やや砂粒を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N 5R 向白。 外面、7.5YR 向灰白。 底部外縁の唇面があれている。
76-24	E-3 黒褐色粘質土	口徑(推)12.4 受部径 14.8 (推) 残存高 3.1	たちあがりは、内傾してのび、端部は鋭い。 受部は上外方にのびる。	回転研磨のため調整不均。	粘土、密。白色雫を含む。 焼成、不良。 色調、内面 } 5Y 5R 向白。 外面 }
76-25	E-1 黒褐色粘質土	口徑(推)14.5 受部径 16.5 (推) 残存高 3.6	たちあがりは、外寄り味に内傾してのび、端部は鋭い。 受部は上外方にのび、端部は鋭い。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナガ調整。	粘土、やや粗。粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面 } N 5R 向白。 外面 } リクロ同組、左方向。
37-25					
76-26	C-3 黒褐色粘質土	口徑(推)13.0 受部径 14.8 (推) 残存高 2.6	たちあがりは、内傾したのち垂直に立ち上がり、端部はやや鋭い。 受部は水平にのび、端部は丸い。 たちあがりと受部の境に凹面を有する。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナガ調整。	粘土、密。 焼成、良好。 色調、内面 } N 5R 向白。
76-27	E-3 黒褐色粘質土	口徑(推)11.9 受部径 14.7 (推) 残存高 2.8	たちあがりは、大きく内傾して立ち上がり、端部は丸い。 受部は上外方にのび、端部は丸い。 たちあがりと受部の境に凹面を有する。	回転ナガ調整。	粘土、密。0.2~1mmの白色粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N 5R 向白。 外面、N 5R 向白。
76-28	C-3 黒褐色粘質土	口徑(推)13.4 受部径 15.2 (推) 残存高 2.7	たちあがりは、わざかに内傾して上方にのび、端部は鋭い。 受部は水平にのび、端部は比較的鋭い。 たちあがりと受部の境に凹面を有する。	回転ナガ調整。	粘土、密。粗砂を含む。 焼成、やや不良。 色調、7.5Y 5R 向白。 リクロ同組、左方向。
76-29	A-2 黒褐色粘質土	口徑(推)12.0 受部径 14.9 (推) 残存高 4.4	たちあがりは、内傾して上方にのび、端部は丸い。 受部は上外方にのび、端部は丸い。 端部は渋く、底面を差し、内傾したのち、外反して受部に引る。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナガ調整。	粘土、密。粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面 } N 5R 向白。 外面 } リクロ同組、右方向。
37-29					
76-30	C-5 黒褐色粘質土	口徑(推)11.7 受部径 14.9 (推) 残存高 3.4	たちあがりは、外寄して、大きく内傾し立ち上がり、端部は丸い。 受部は、断面三角形状を呈し、端部は丸い。 たちあがりと受部の境に沈積を有する。	回転ナガ調整。	粘土、密。白色粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、外面 } N 5R 向白。 底部外縁の唇面は、あれている。
76-31	C-2 黒褐色粘質土	口徑(推)12.8 受部径 15.2 (推) 残存高 2.9	たちあがりは、内傾したのち上方にのび、端部は鋭い。 受部は水平にのび、端部はやや鋭い。 たちあがりと受部の境に凹面を有する。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナガ調整。	粘土、密。粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、N 5R 向白。 リクロ同組、左方向。
76-32	B-5 黒褐色粘質土	口徑(推)12.1 受部径 14.7 (推) 残存高 2.9	たちあがりは、内傾したのち屈曲して上方へのび、端部は丸い。 受部は上外方にのび、端部は丸い。 たちあがりと受部の境に凹面を有する。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナガ調整。	粘土、密。 焼成、良好。 色調、外面、N 5R 向白。 断面、N 5R 向白。
76-33	H-3 黒褐色粘質土	口徑(推)12.6 受部径 15.3 (推) 残存高 2.7	たちあがりは、内傾してのび、端部はやや鋭い。 受部は、水平にのび、端部は丸い。 たちあがりと受部の境に凹面を有する。	回転ナガ調整。	粘土、密。 焼成、良好。 色調、内面、N 5R 向白。 外面、N 5R 向白。

排回番号	出土場所 層	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
76-34	B-3 黒褐色粘質土	口径(推)11.0 受部径 14.0 (推) 残存高 3.2	たちあがりは、内傾したのち屈曲して、端部にせり上がり、丸い。 端部は無い。 受部は水平にのび、端部は丸い。 たちあがりと受部の境に凹面を有する。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナガ調整。	胎土、密。白色粗砂を含む。 焼成、やや不良。 色調、内面 } N灰色白。 外面 } 外面
76-35	D-1 黒褐色粘質土	口径(推)11.8 受部径 14.6 (推) 残存高 2.5	たちあがりは、内傾したのち上方にのび、端部は丸い。 受部は上外方にのび、端部は丸い又、端部上面に凹面を有する。 たちあがりと受部の境に凹面を有する。	回転ナガ調整。	胎土、やや粗。 焼成、やや不良。 色調、内面 } 2.5YR灰色白。 外面 } 断面、2.5YR灰色白。
76-36	E-3 黒褐色粘質土上	口径(推)12.2 受部径 14.5 (推) 残存高 3.7	たちあがりは、内傾したのち上方にのび、端部は丸い。 受部はわずかに上外方にのび、端部は丸い。 たちあがりと受部の境に凹面を有する。	回転ナガ調整。	胎土、密。白色粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面 } N灰色白。 外面 }
77-37	C-2 黒褐色粘質土	口径(推)14.3 受部径 16.4 (推) 残存高 2.6	たちあがりは、内傾したのち上方にのび、端部は丸い。 受部は上外方にのび、端部はやや弧い。 たちあがりと受部の境に浅い凹面を有する。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナガ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、10B G灰色灰。
77-38	B-5 黒褐色粘質土下層	口径(推)12.0 受部径 14.4 (推) 残存高 3.2	たちあがりは、内窓気味に内傾したのち、端部は丸い。 受部は上外方にのび、端部は丸い。 たちあがりと受部の境に凹面を有する。	回転ナガ調整。	胎土、やや粗。2mmの粗砂を多く含む。 焼成、良好。 色調、内面 } N灰色白。 外面 } 断面 } N灰色白。
77-39	C-2 黒褐色粘質土	口径(推)14.5 受部径 16.9 (推) 残存高 3.1	たちあがりは、わずかに内傾したのち、端部に立ち上がる。 端部は丸い。 受部は水平にのび、端部は丸い。 たちあがりと受部の境に凹面を有する。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナガ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面 } N灰色白。 外面 } N灰色。
77-40	B-3 黒褐色粘質土上	口径(推)12.0 受部径 14.2 (推) 残存高 2.3	たちあがりは、外窓気味に内傾したのち、端部に立ち上がる。 端部は丸い。 受部は内側して上外方にのび、端部は丸い。	回転ナガ調整。	胎土、密。白色粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面 } N灰色白。 外面 } X灰色。 断面 } N灰色白。
77-41	C-2 黒褐色粘質土	口径(推)13.5 受部径 16.2 (推) 残存高 3.3	たちあがりは、内傾して立ち上がり、端部は丸い。 受部は上外方にのび、端部は丸い。 たちあがりと受部の境に凹面を有する。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナガ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面 } N灰色白。 外面 } 7.5YR灰色。
77-42	E-6 黒褐色粘質土	口径(推)12.1 受部径 13.8 (推) 残存高 3.6	たちあがりは、外窓気味に内傾し、端部は比較的低い。 受部は丸く、上外方にのび、端部は丸い。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナガ調整。	胎土、密。やや粗砂を含む。 焼成、良。 色調、N灰色白。
77-43	E-1 黒褐色粘質土	口径(推)14.4 受部径 16.8 (推) 残存高 3.4	たちあがりは、瓶く内傾したのち、外窓気味に立ち上がり、端部は丸い。 受部は断面三角形を呈し、端部上面に凹面を有す。 たちあがりと受部の境に凹面を有する。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナガ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面 } N灰色白。 外面 } N灰色。 断面 } N灰色白。
77-44	C-3 黒褐色粘質土	口径(推)11.8 受部径 14.0 (推) 残存高 2.4	たちあがりは、内傾したのち上方にのび、端部は無い。 受部は上外方にのび、端部は丸く、端部上面に沈痕を有する。 たちあがりと受部の境に凹面を有する。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナガ調整。	胎土、密。縦を含む。 焼成、良好。 色調、内面 } N灰色。 外面 } 5YR灰色。
77-45	B-3 黒褐色粘質土	口径(推)14.0 受部径 16.9 (推) 残存高 3.0	たちあがりは内傾したのち、端部で扭曲して立ち上がり、端部は比較的低い。 受部は水平にのび、比較的低い。 たちあがりと受部の境に凹面を有する。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナガ調整。	胎土、密。粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、5BG X明青灰。 ロクロ回転、左方向。

掲示番号	出土場所 土層	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
77-46	C-6 黒褐色粘質土	口径(推)13.5 受部径 15.7 (推) 残存高 3.1	たちあがりは、内傾したのち、上方に立ち上がり、端部は比較的低い。 受部は上外方にのび、端部は丸い。 たちあがりと受部の境に凹縫を有する。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナダ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、N%灰白。
77-47	B-4 黒褐色粘質土 下層	口径(推)13.7 受部径 15.1 (推) 残存高 3.2	たちあがりは、内傾したのち直進に近く上方にのび、端部は比較的低い。 受部は水平にのび、端部上面に凹縫を有する。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナダ調整。	胎土、密。白色粗糹を含む。 焼成、良好。 色調、内面、2.5%灰白。 外側、N%灰白。
77-48	B-6 黒褐色粘質土	口径(推)13.3 受部径 16.3 (推) 残存高 3.9	たちあがりは、内傾して上方にのび、端部は丸い。 受部は短く、水平にのび、端部は丸い。 たちあがりと受部の境に凹縫を有する。	底部外側は未調整。 他は、回転ナダ調整。	胎土、やや粗。白色糸を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰白。 外側、ロクロ回転、右方向。
77-49	B-5 黒褐色粘質土 下層	口径(推)13.8 受部径 16.2 (推) 残存高 2.4	たちあがりは、内傾して上方にのび、端部は丸い。 受部は断面三角状を呈し、端部は丸い。 たちあがりと受部の境に凹縫を有する。	回転ナダ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰白。 外側、N%灰。
77-50	C-3 黒褐色粘質土	口径(推)11.8 受部径 14.0 (推) 残存高 2.2	たちあがりは、外側寄味に立ち上がり、端部に至る。 端部は鋭い。 受部は短く、断面三角状を呈し、端部は鋭い。 たちあがりと受部の境に凹縫を有する。	回転ナダ調整。	胎土、密。やや粗糹を含む。 焼成、良好。 色調、N%灰白。
77-51	A-4 黒褐色粘質土	口径(推)14.1 受部径 16.0 (推) 残存高 3.1	たちあがりは、内傾したのち直進に立ち上がり、端部は丸い。 受部は水平にのび、端部は丸い。 受部外側に浅い凹縫を有する。 たちあがりと受部の境に凹縫を有する。	回転ナダ調整。	胎土、密。白色粗糹を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰白。 外側、N%灰。
77-52	E-3 黒褐色粘質土	口径(推)11.8 受部径 14.1 (推) 残存高 3.3	たちあがりは、内傾して上方にのび、端部は丸い。 受部は水平にのび、端部はやや低い。 たちあがりと受部の境に凹縫を有する。	回転ナダ調整。	胎土、密。糸糸を多く含む。 焼成、不良。 色調、10%R灰白。 ロクロ回転、右方向。
77-53	B-2 黒褐色粘質土	口径(推)15.6 受部径 17.5 (推) 残存高 3.1	たちあがりは、内傾したのち、屈曲して上方に開く。端部は丸い。 受部は水平にのび、端部は丸い。 たちあがりと受部の境に凹縫を有する。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナダ調整。	胎土、密。2mmの白色粗糹を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰。 外側、N%灰。
77-54	C-2 黒褐色粘質土	口径(推)11.7 受部径 14.3 (推) 残存高 2.6	たちあがりは、内傾して、ほぼ直進的にのび、端部に至る。 端部は丸い。 受部は上外方にのび、端部は比較的低い。	回転ナダ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、N%灰白。
78-55	C-2 黒褐色粘質土	口径(推)16.7 受部径 18.8 (推) 残存高 2.8	たちあがりは、短く内傾したのち直進に立ち上がり、端部は丸い。 受部は、端部は丸い。 受部上面に沈縫がある。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナダ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰白。 外側、N%灰。 底部外側の滑苔はある。
78-56	A-5 黒褐色粘質土	口径(推)14.8 受部径 16.9 (推) 残存高 3.8	たちあがりは短く、外側寄味に内傾して立ち上がり、端部は比較的低い。 受部は、断面三角形状をなし、端部は丸い。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナダ調整。	胎土、密。 焼成、不良。 色調、内面、N%灰白。 外側、N%灰。 ロクロ回転、右方向。
37-56	A-5 黒褐色粘質土	口径(推)14.8 受部径 17.8 (推) 残存高 7.8	たちあがりは、内傾して上にのび、端部は鋭い。 受部は長く、水平にのび、端部は鋭い。 たちあがりと受部の境に凹縫を有する。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナダ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面、5.5%集束質。 外側、N%灰。 腹面、N%灰白。 ロクロ回転、左方向。
78-57	A-5 黒褐色粘質土	口径(推)14.8 受部径 17.8 (推) 残存高 7.8	たちあがりは、内傾して上にのび、端部は鋭い。 受部は長く、水平にのび、端部は鋭い。 たちあがりと受部の境に凹縫を有する。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナダ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面、5.5%集束質。 外側、N%灰。 腹面、N%灰白。 ロクロ回転、左方向。

種別番号	出土場所 上	法 距 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	圖 示
78-58	K-2 黒褐色粘質土	口徑(推)13.9 受部径 16.0 (推) 残存高 2.8	たちあがりは、内傾して上方にのび、端部 は丸い。 受部は水平にのび、端部は丸い。 たちあがりと受部の境に凹凸を有する。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナナ調整。	胎土、密。白色糊を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N系灰白。 外面、5T-B系灰白。 表面、N系灰白。 ロクロ回転、左方向。
78-59	E-2 黒褐色粘質土	口徑(推)16.1 受部径 16.8 (推) 残存高 3.9	たちあがりは、わずかに外寄気味にの び、端部は丸い。 受部は上方方にのび、端部は丸い。 受部上面に沈殿を有する。	回転ナナ調整。	胎土、やや粗。白色糊を含む。 焼成、良好。 色調、内面、5T-B系灰白。 外面、N系灰白。 表面、N系灰白。 ロクロ回転、左方向。
78-60	A-5 黒褐色粘質土	口徑(推)12.4 受部径 15.2 (推) 残存高 4.2	たちあがりは、内傾して上方にのび、端 部は丸い。 受部は上方方にのび、端部は丸い。	底部外気、器面があれています ため調整不良。 内部中央、不整方向ナナ調整。 他は、回転ナナ調整。	胎土、やや粗。糊母を含む。 焼成、良好。 色調、内面、5T-B系灰白。 外面、N系灰白。 ロクロ回転、左方向。 セッティング痕を有する。
78-61	C-2 黒褐色粘質土	口徑(推)15.0 受部径 17.7 (推) 残存高 3.4	たちあがりは、内傾して上方にのび、端 部は丸い。 受部は上方方にのび、端部はやや粗い。 たちあがりと受部の境に凹凸を有する。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナナ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面、N系灰白。 外面、N系灰白。 表面、2.5YR系灰。
78-62 <sup>a</sup>	A-5 黒褐色粘質土	口徑(推)15.0 受部径 17.3 (推) 残存高 2.7	たちあがりは、内傾したのち直進に近く 立ち上がり、端部は丸い。 受部は上方方にのび、端部は丸い。 たちあがりと受部の境に凹凸を有する。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナナ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面、N系灰白。 外面、N系灰白。 ロクロ回転、左方向。
78-63	E-3 黒褐色粘質土	口徑(推)16.6 受部径 18.5 (推) 残存高 2.8	たちあがりは、わずかに内傾して上方に のび、端部は比較的丸い。 受部は水平に近くのび、端部は丸い。 たちあがりと受部の境に凹凸を有する。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナナ調整。	胎土、密。白色糊を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N系灰白。 外面、N系灰白。 ロクロ回転、左方向。
78-64	C-3 黒褐色粘質土	口徑(推)14.6 受部径 16.4 (推) 残存高 2.7	たちあがりは、内傾したのち外反して端 部に平ら。	回転ナナ調整。	胎土、密。白色糊を含む。 焼成、良好。 色調、5YR系灰白。
78-65	C-2 黒褐色粘質土	口徑(推)15.4 受部径 18.3 (推) 残存高 3.1	たちあがりは、内傾したのち外反して端部 に平ら、端部は丸い。 受部は断面二角形状を呈し、端部は丸 い。 たちあがりと受部の境に凹凸を有する。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナナ調整。	胎土、密。2 mmの白色糊を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N系灰白。 外面、5YR系灰白。 ロクロ回転、左方向。
78-66	E-2 黒褐色粘質土	口徑(推)14.5 受部径 17.0 (推) 残存高 4.0	たちあがりは、内傾したのも屈曲して、 直進に近く立ち上がる。 受部は上方方にのび、端部は丸い。	底部、回転ヘラ削り調整。 底部内側中央、不整方向のナ ナ調整。 他は、回転ナナ調整。	胎土、密。白色糊を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N系灰白。 外面、2.5YR系灰。
78-67	C-6 黒褐色粘質土	口徑(推)15.0 受部径 17.6 (推) 残存高 3.5	たちあがりは、外寄氣味に内傾して上方 にのび、端部はやや粗い。 受部は上方方にのび、端部は丸い。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナナ調整。	胎土、密。白色糊を含む。 焼成、良好。 色調、N系灰。
78-68	B-4 黒褐色粘質土 下層	口徑(推)15.3 受部径 17.2 (推) 残存高 3.5	たちあがりは、わずかに内傾したのち、 直進に近く立ち上がり、端部は丸い。 受部はわずかに上方方にのび、端部は丸 い。	器面摩滅のため調整不良。	胎土、やや粗。白色糊・粗糸 を含む。 焼成、不良。 色調、内面、2.5YR系灰。 外面、N系灰。
78-69	D-1 黒褐色粘質土	口徑(推)15.7 受部径 18.1 (推) 残存高 4.1	たちあがりは、内傾して上方にのび端部 は丸い。 受部は断面三角形状を呈し、端部は丸い。 たちあがりと受部の境に凹凸を有する。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナナ調整。	胎土、やや粗。白色糊・粗糸 を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N系灰。

種別番号	出土地所	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
78-70	E-3 黒褐色粘質土	口径(推)13.8 受部径 15.2 (推) 残存高 2.8	たちあがりは、わずかに内傾して上方にのび、端部は丸い。 受部は断面三角形状を呈し、端部は丸い。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナダ調整。	胎土、やや粗。白色粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N5%灰白。 外面、N5%灰。
78-71	A-5 黒褐色粘質土	口径(推)13.9 受部径 21.1 (推) 残存高 2.7	たちあがりは、上外方にのび、端部は丸い。 受部は上方方にのび、端部は丸い。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナダ調整。	胎土、素。白色粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N5%灰。 外面、N5%灰。
78-72	C-6 黒褐色粘質土	口径(推)15.4 受部径 17.6 (推) 残存高 3.0	たちあがりは、内傾したのち上方にのび、 端部はやや弧形。 受部は短く、水平にのびる。	回転ナダ調整。	胎土、素。 焼成、良好。 色調、内面、N5%灰。
79-73	C-2 黒褐色粘質土	口径(推)14.7 受部径 15.1 (推) 残存高 2.2	たちあがりは、外寄気味に内傾してのび、 端部は丸い。 受部は上方方にのび、端部は丸い。 たちあがりと受部の境に凹縫を有する。	回転ナダ調整。	胎土、密。白色粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N5%灰白。 外面、N5%灰。
79-74	E-2 黒褐色粘質土	口径(推)14.0 受部径 16.5 (推) 残存高 2.8	たちあがりは、内傾して上方にのび、端部は丸い。 受部はわずかに上方方にのび、端部は丸い。 たらあがりと受部の境に凹縫を有する。	回転ナダ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、N5%灰白。 ロクロ回転、右方尚。
79-75	C-6 黒褐色粘質土	口径(推)13.0 受部径 15.2 (推) 残存高 4.0	たちあがりは、内傾したのち屈曲して外 反し、端部に丸。 端部は弧形。 受部は水平にのび、端部は丸い。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナダ調整。	胎土、やや粗。 焼成、やや不良。 色調、N5%灰白。 受部外側に自然縫がかかる。
79-76	C-2 黒褐色粘質土	口径(推)11.1 受部径 13.1 (推) 残存高 3.0	たちあがりは、外寄ぎみに内傾し、端部 は丸い。 受部はほぼ水平にのび、その上面に沈殿 を有する。端部は丸い。	回転ナダ調整。	胎土、素。網跡を含む。 焼成、やや不良。 色調、内面、N5%灰白。 外面、N5%灰。 ロクロ回転、右方尚。
79-77	E-6 黒褐色粘質土	口径(推)11.9 受部径 14.1 (推) 残存高 2.4	たちあがりは短く、内傾したのち垂直に 近く立ち上がる。 端部はやや弧形。 受部はほぼ水平にのび、端部は丸い。 たちあがりと受部の境に凹縫を有する。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナダ調整。	胎土、密。白色粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N5%灰白。 外面、N5%灰。 底部にヘラ記月有り。
79-78	C-3 黒褐色粘質土	口径(推)12.2 受部径 14.9 (推) 残存高 3.2	たちあがりは詰く、内傾したのち上方に 立ち上がる。 端部は丸い。 受部は上方方にのび、端部は丸い。	回転ナダ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面、N5%灰白。 外面、N5%灰。 断面、N5%灰白。
79-79	A-2 黒褐色粘質土	口径(推)12.4 受部径 14.6 (推) 残存高 3.7	たちあがりは、内傾したのち上方に立ち 上がり、端部は丸い。 受部は上方方にのび、端部は丸い。 たちあがりと受部の境に凹縫を有する。	回転ナダ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面、N5%灰白。 外面、N5%灰。 ロクロ回転、右方尚。
79-80	E-3 黒褐色粘質土	口径(推)12.7 受部径 14.3 (推) 残存高 2.4	たちあがりは、外寄気味に上方にのび、 端部は丸い。 受部はわずかに外下方にのび、端部は丸 い。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナダ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面、7.5%灰白。 外面、%灰。
79-81	E-6 黒褐色粘質土	口径(推)12.0 受部径 14.3 (推) 残存高 2.4	たちあがりは短く、外寄気味に上方にの び、端部は丸い。 受部は断面三角形状を呈し、端部は丸い。 たちあがりと受部の境に凹縫を有する。	回転ナダ調整。	胎土、密。白色粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、5 P B5%灰白。 外面、N5%灰。

標本番号	出土場所層	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
79-82	E-3 黒褐色粘質土	口徑(推)11.8 受部径 14.0 (推) 残存高 2.6	たちあがりは、内傾して上方にのび、端部は丸い。 受部は上外方にのび、端部は丸い。	回転ナダ調整。	胎土、素。白色細砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N5灰白。 外面 7.5YR灰白。 2.5YR灰灰。
79-83	B-5 黒褐色粘質土 下層	口徑(推)12.8 受部径 14.3 (推) 残存高 2.4	たちあがりは、内傾したのち上外方にのび、端部は丸い。 受部はわずかに外下方にのび、上面に沈みを有する。 窓部は丸い。 たちあがりと受部の境に凹縫を有する。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナダ調整。	胎土、素。 焼成、良好。 色調、N5灰白。 外面、7.5YR灰白。
79-84	D-1 黒褐色粘質土	口徑(推)11.6 受部径 14.7 (推) 残存高 2.7	たちあがりは、内傾して上方にのび、端部は丸い。 受部は上外方にのび、端部は丸い。 たちあがりと受部の境に凹縫を有する。	回転ナダ調整。	胎土、粗。細砂を多く含む。 焼成、良好。 色調、内面、N5灰白。 外面、7.5YR灰白。
79-85	C-2 黒褐色粘質土	口徑(推)12.6 受部径 14.8 (推) 残存高 3.9	たちあがりは細く、内傾したのち直面に立ち上がり、端部は丸い。 受部は上外方にのび、端部は丸い。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナダ調整。	胎土、素。 焼成、やや不良。 色調、内面、2.5YR灰黄。 外面、7.5YR灰。 ロクロ回転、右方向。
79-86	C-6 黒褐色粘質土	口徑(推)12.0 受部径 14.4 (推) 残存高 2.6	たちあがりは、内傾したのち屈曲して上方にのび、端部はやや尖る。 受部は上外方にのび、端部は丸い。	回転ナダ調整。	胎土、素。 色調、内面、7.5R灰青赤。 外面、5B灰青灰。
79-87	C-2 黒褐色粘質土	口徑(推)12.0 受部径 14.4 (推) 残存高 2.6	たちあがりは、内傾したのちくびれて、立ち上がりに上方にのびる。 端部は丸い。 受部は水平にのび、端部は丸い。	回転ナダ調整。	胎土、素。 焼成、良好。 色調、N5灰。
79-88	C-2 黒褐色粘質土	口徑(推)12.4 受部径 14.7 (推) 残存高 2.6	たちあがりは、内傾して上方にのび、端部は丸い。 受部は上外方にのび、端部は丸い。	回転ナダ調整。	胎土、素。 焼成、良好。 色調、N5灰。 ロクロ回転、右方向。
79-89	D-1 黒褐色粘質土	口徑(推)11.6 受部径 14.2 (推) 残存高 3.2	たちあがりは、内傾したのち、直面に近く立ち上がり、端部は丸い。 受部は上外方にのび、端部は丸い。	回転ナダ調整。	胎土、素。櫻を含む。 焼成、不良。 色調、内面、7.5YR灰白。 外面、2.5YR灰黄。 器底の擦痕が著しい。
79-90	A-4 黒褐色粘質土	口徑(推)11.8 受部径 13.7 (推) 残存高 3.7	たちあがりは、外寄気味に上方にのび、端部は尖る。 受部は丸い。 受部は上外方にのび、端部は丸い。 たちあがりと受部との境に凹縫を有する。	窓加、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナダ調整。	胎土、やや粗。粗砂を含む。 焼成、やや不良。 色調、内面、N5灰白。 外面、2.5YR灰白。
79-91	A-4 黒褐色粘質土	口徑(推)12.1 受部径 14.8 (推) 残存高 2.6	たちあがりは、内傾して上方にのび、端部は丸い。 受部は上外方にのび、端部は丸い。 たちあがりと受部の境に凹縫を有する。	回転ナダ調整。	胎土、素。1~2mmの白色粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N5灰白。 外面、5B灰青灰。 断面、10YR灰白。
80-92	D-1 黒褐色粘質土	口徑(推)13.6 受部径 15.8 (推) 残存高 2.6	たちあがりは、内寄したのち屈曲して上方に立ち上がり、端部は丸い。 受部は水平にのび、端部は丸い。	回転ナダ調整。	胎土、粗。 焼成、不良。 色調、内面、5YR灰黄。 外面、N5灰白。 ロクロ回転、右方向。
80-93	C-2 黒褐色粘質土	口徑(推)13.1 受部径 14.9 (推) 残存高 2.1	たちあがりは、わずかに内傾して上方にのび、端部は丸い。 受部は水平にのび、端部は丸い。	器面摩滅のため調整不明。	胎土、粗。 焼成、不良。 色調、内面、5YR灰白。 外面 10YR灰白。

標団番号	出土地所層	法盤(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
80-94	C-2 黒褐色粘質土	口径(推)13.7 受部径 15.7 (推) 残存高 2.6	たちあがりは、内傾して上方にのび、端部は深い。 受部は水平にのび、端部は丸い。	回転ナゲ調整。	胎土。密。 焼成、良好。堅強。 色調、N%灰。 ロクロ回転、右方向。 ヘラ記号あり。
80-95	C-2 黒褐色粘質土	口径(推)12.6 受部径 15.1 (推) 残存高 2.5	たちあがりは、内傾したのち屈曲して、 垂直に立ち上がり、端部は丸い。 受部は上方方にのび、端部は深い。 たちあがりと受部の境に凹面を有する。	回転ナゲ調整。	胎土。密。 焼成、良好。 色調、内面 N%灰。 外面、N%灰。 外側、N%灰。
80-96	B-3 黒褐色粘質土	口径(推)12.2 受部径 14.4 (推) 残存高 2.5	たちあがりは短く、内傾したのも端部近くで屈曲して、 垂直に立ち上がる。 受部は水平にのび、端部は丸い。 たちあがりと受部の境に凹面を有する。	回転ナゲ調整。	胎土。密。白色粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰白。 外面、N%灰。
80-97	D-6 黒褐色粘質土	口径(推)11.6 受部径 14.2 (推) 残存高 3.5	たちあがりは、内傾したのも上方に立ち 上がり、端部は丸い。 受部は上方方にのび、端部は深い。	回転ナゲ調整。	胎土。密。2mmの繊を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰白。 外面、5P B%青灰。 断面、N%灰白。
80-98	B-6 黒褐色粘質土	口径(推)11.8 受部径 14.1 (推) 残存高 3.0	たちあがりは、内傾したのも上方にのび、 端部は丸い。 受部は上方方にのび、端部は丸い。	回転ナゲ調整。	胎土。密。 焼成、良好。 色調、内面 N%灰。 外面、ロクロ回転、右方向。
80-99	B-3 黒褐色粘質土	口径(推)11.5 受部径 13.9 (推) 残存高 2.8	たちあがりは短く、内傾したのも直面に 立ち上がり、端部は深い。 受部は上方方にのび、端部は丸い。	回転ナゲ調整。	胎土。密。 焼成、良好。 色調、N%灰白。
80-100	E-2 黒褐色粘質土	口径(推)12.4 受部径 14.8 (推) 残存高 2.4	たちあがりは、内傾して上方にのび、端 部はやや深い。 受部は水平にのび、端部は丸い。 たちあがりと受部の境に凹面を有する。	回転ナゲ調整。	胎土。密。粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、5B%青灰。 外面、N%灰。 ロクロ回転、右方向。
80-101	B-3 黒褐色粘質土	口径(推)12.6 受部径 15.4 (推) 残存高 2.9	たちあがりは、内傾したのも上方にのび、 端部は丸い。 受部は上方方にのび、端部は丸い。 たちあがりと受部の境に凹面を有する。	回転ナゲ調整。	胎土。密。 焼成、良好。 色調、内面、10B G%青灰。 底部外側の断面はあれでいる。
80-102	B-3 黒褐色粘質土	口径(推)12.2 受部径 14.4 (推) 残存高 2.7	たちあがりは、内傾して上方にのび、端 部はやや深い。 受部は上方方にのび、端部は丸い。 たちあがりと受部の境に凹面を有する。	回転ナゲ調整。	胎土。密。繊を含む。 焼成、良好。 色調、5 B%青灰。
80-103	E-2 黒褐色粘質土	口径(推)12.8 受部径 14.5 (推) 残存高 2.2	たちあがりは、内傾したのも上方方に立 ち上がる。端部は深い。 受部はわずかに上方方にのびる端部は鋸 い。	回転ナゲ調整。	胎土。密。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰。 外面、N%灰白。 断面、5 V%オリーブ 灰。
80-104	D-3 黒褐色粘質土	口径(推)12.9 受部径 15.1 (推) 残存高 3.2	たちあがりは、内傾して上方にのび、端 部は深い。 受部は上方方にのび、端部は丸い。	底部、回転ヘリ削り調整。 他は、回転ナゲ調整。	胎土。密。繊を含む。 焼成、良好。 色調、N%灰。
80-105	C-2 黒褐色粘質土	口径(推)14.4 受部径 17.1 (推) 残存高 2.7	たちあがりは、内傾して上方にのび、端 部は深い。 受部は上方方にのび、端部は丸い。	底面、回転ヘリ削り調整。 他は、回転ナゲ調整。	胎土。密。繊を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰。 外面、5 D%青灰。 ロクロ回転、左方向。

地図番号	出発場所	法 距 (cm)	形 積 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
80-106	A-6 黒褐色粘質土	口径(推)15.4 受部径 17.7 (推) 残存高 3.0	たちあがりは、内寄気味に上方にのび、端部は丸い。 受部はわずかに上方方にのび、端部は丸い。	底部、回転ヘタ削り調整。 他は、回転ナダ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、N%灰白。
80-107	E-1 黒褐色粘質土	口径(推)14.6 受部径 16.7 (推) 残存高 2.8	たちあがりは、内積したのち直立に立ち上がり、端部は丸い。 受部は水平にのび、端部は丸い。 たちあがりと受部の境に凹縫を有する。	回転ナダ調整。	胎土、密。 焼成、やや不良。 色調、2.5Y灰白。 ロクロ回転、左方向。
80-108	D-5 黒褐色粘質土	口径(推)14.3 受部径 17.0 (推) 残存高 3.1	たちあがりは、内傾したのち直立に立ち上がり、端部は丸い。 受部は上方方にのび、端部は丸い。 たちあがりと受部の境に凹縫を有する。 底部は浅く平ら。	底部、回転ヘタ削り調整。 底部内面中央、不整方向ナダ調整。 他は、回転ナダ調整。	胎土、やや粗。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰白。 外沿、5PB%青成。 ロクロ回転、左方向。
80-109	C-3 黒褐色粘質土	口径(推)14.4 受部径 16.7 (推) 残存高 2.9	たちあがりは、内傾して上方にのび、端部は丸い。 受部は上方方にのび、端部は丸い。	回転ナダ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面、7.5Y灰白。 外沿、N%灰白。 ロクロ回転、右方向。
80-110	E-2 黒褐色粘質土	口径(推)14.8 受部径 16.9 (推) 残存高 2.7	たちあがりは、外寄気味に上方に立ち上がり、端部は丸い。 受部は上方方にのび、端部は丸い。	回転ナダ調整。	胎土、粗。 焼成、やや不良。 色調、2.5Y灰白。 ロクロ回転、左方向。
81-111	E-6 黒褐色粘質土	口径(推)11.2 受部径 13.0 (推) 残存高 3.3	たちあがりは短く、内傾したのち端部近くで屈曲して側面にのびる。 端部はやや穂い。 受部は上方方にのび、端部は丸い。	回転ナダ調整。	胎土、粗。 焼成、やや不良。 色調、内面、3.5B%青灰。 外沿、N%灰白。 側面、10R%赤灰。 底部外周の擦痕はあれている。
81-112	A-3 黒褐色粘質土	口径(推)10.7 受部径 12.9 (推) 残存高 2.1	たちあがりは短く、内傾して上方にのび、端部は穂い。 受部は上方方にのび、端部は丸い。	底部、回転ヘタ削り調整。 他は、回転ナダ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、N%灰白。 ロクロ回転、左方向。
81-113	E-3 黒褐色粘質土	口径(推)10.8 受部径 13.1 (推) 残存高 2.7	たちあがりは、外寄気味に内傾して、端部はやや穂い。 端部はやや穂い。 受部は斜面三三角形状を呈し、端部は丸い。 たちあがりと受部の境に凹縫を有する。	器底摩滅のため調整不明。	胎土、やや粗。 焼成、不良。 色調、内面 3 Y%灰白。 外沿 10R%赤灰。
81-114	B-3 黒褐色粘質土	口径(推)10.0 受部径 13.0 (推) 残存高 2.6	たちあがりは、内傾して上方にのび、端部は丸い。 受部は上方方にのび、端部は丸い。 たちあがりと受部の境に凹縫を有する。	回転ナダ調整。	胎土、密。1.5~2mmの粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、N%灰白。 ロクロ回転、右方向。 底部外周にヘタ跡另有り。
81-115	A-3 黒褐色粘質土	口径(推)12.0 受部径 13.5 (推) 残存高 3.2	たちあがりは、内傾して上方にのび、端部は丸い。 受部は上方方にのび、端部は丸い。 たちあがりと受部の境に凹縫を有する。	回転ナダ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面 N%灰白。 ロクロ回転、左方向。
81-116	B-3 黒褐色粘質土	口径(推)11.1 受部径 13.5 (推) 残存高 2.8	たちあがりは、外寄気味に内傾して立ち上がり、端部は穂い。 受部は上方方にのび、端部は丸い。	底部、回転ヘタ削り調整。 他は、回転ナダ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、N%灰白。 ロクロ回転、右方向。
81-117	E-4 黒褐色粘質土	口径(推)11.2 受部径 13.5 (推) 残存高 2.7	たちあがりは、内傾したのち直して裏面に立ち上がり、端部は丸い。 受部は水平にのび、端部は丸い。 たちあがりと受部の境に凹縫を有する。	回転ナダ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、N%灰白。 ロクロ回転、右方向。

標本番号	出土場所	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
81-118	B-3	L1径(推)11.9 受部径 13.9 残存高 2.4 黒褐色粘質土	たちあがりは、内傾して上方にのび、端部は丸い。 受部は解剖三角形状を呈し、端部は丸い。	回転ナガ調整。	胎土、やや粗。粗めを含む。 焼成、良好。 色調、7.5YNG灰白。 ロクロ回転、右方向。
81-119	A-5	L1径(推)11.3 受部径 13.6 (推) 残存高 3.5 黒褐色粘質土	たちあがりは、内傾したのち屈曲して、 内弯気味に立ち上がる。 端部は丸い。 受部は上外方にのび、端部は丸い。 たちあがりと受部の境に凹面を有する。	底盤、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナガ調整。	胎土、密。白色粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、5PBNG青灰。 外面、N5灰白。 ロクロ回転、右方向。
81-120	C-4	L1径(推)10.8 受部径 13.4 (推) 残存高 2.8 黒褐色粘質土	たちあがりは、内傾して立ち上がり、端部はやや鋭い。 受部は上外方にのび、端部は丸い。 たちあがりと受部の境に凹面を有する。	回転ナガ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、JBG NG青灰。 ロクロ回転、右方向。
81-121	C-2	L1径(推)11.4 受部径 13.3 (推) 残存高 2.4 黒褐色粘質土	たちあがりは、内傾して上方にのび、端部は丸い。 受部は上外方にのび、端部はやや鋭い。	回転ナガ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面、N5灰白。 外面、7.5RNG灰白。 ロクロ回転、右方向。
81-122	C-2	L1径(推)10.2 受部径 13.0 (推) 残存高 2.4 黒褐色粘質土	たちあがりは、内弯して端部に至り、端部は丸い。 受部はわずかに外下方にのび、端部は丸い。	回転ナガ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面、N5灰白。 外面、7.5YNG灰白。
81-123	H-3	L1径(推)11.9 受部径 13.8 (推) 残存高 3.3 黒褐色粘質土	たちあがりは、外弯気味に上方にのび、 端部は丸い。 受部は水平にのび、端部は丸い。	底盤、回転ヘリ削り調整。 他は、回転ナガ調整。	胎土、密。白色粗砂を含む。 焼成、不良。 色調、内面、7.5YNG灰白。 外面、5YNG灰白。
81-124	K-2	L1径(推)12.0 受部径 14.3 (推) 残存高 2.6 黒褐色粘質土	たちあがりは、内傾して上方にのび、端部は鋭い。 受部は水平にのび、端部は丸く、上面に 凹面を有する。 たちあがりと受部の境に凹面を有する。	回転ナガ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面、N5灰白。 外面、7.5RNG灰白。
81-125	C-3	L1径(推)11.0 受部径 13.7 (推) 残存高 3.1 黒褐色粘質土	たちあがりは、内傾したのち直立に立ち 上がり、端部は鋭い。 受部は上外方にのび、端部は丸い。 たちあがりと受部の境に凹面を有する。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナガ調整。	胎土、やや粗。 焼成、良好。 色調、内面、N5灰白。 外面、7.5YNG灰白。
81-126	井列柱付?	L1径(推)10.8 受部径 13.2 (推) 残存高 3.3 黒褐色粘質土	たちあがりは、内傾したのち直立に立ち 上がり、端部は鋭い。 受部は上外方にのび、端部は丸い。	底盤、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナガ調整。	胎土、やや粗。 焼成、不良。 色調、内面、2.5YNG灰白。 外面、2.5YNG灰白。 ロクロ回転、左方向。
81-127	C-2	L1径(推)12.0 受部径 14.6 (推) 残存高 2.7 黒褐色粘質土	たちあがりは、内傾したのち直立に立ち 上がり、端部は鋭い。 受部は上外方にのび、端部は丸い。	回転ナガ調整。	胎土、密。白色粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、2.5YNG灰白。 外面、2.5YNG灰白。 底部外面の凹面はあれている。
81-128	C-6	L1径(推)11.4 受部径 13.6 (推) 残存高 2.3 黒褐色粘質土	たちあがりは、外弯気味に内傾して立ち 上がり、端部は鋭い。 受部は水平にのび、端部は丸い。	回転ナガ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面、5BNG青灰。 外面、5BGNG青灰。 セッタ焼成窓を見る。
81-129	A-5	L1径(推)11.0 受部径 13.8 (推) 残存高 3.7 黒褐色粘質土	たちあがりは、内傾して上方にのび、端部は丸い。 受部は上外方にのび、たちあがりとの境 に凹面を有する。 又、たちあがり外側下方に凹面を有する。	底部、器面があれいるが回 転ヘラ削り調整を施す。 他は、回転ナガ調整。	胎土、やや粗。質感を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N5灰白。 外面、N5灰白。 ロクロ回転、右方向。 セッタ焼成窓を見る。

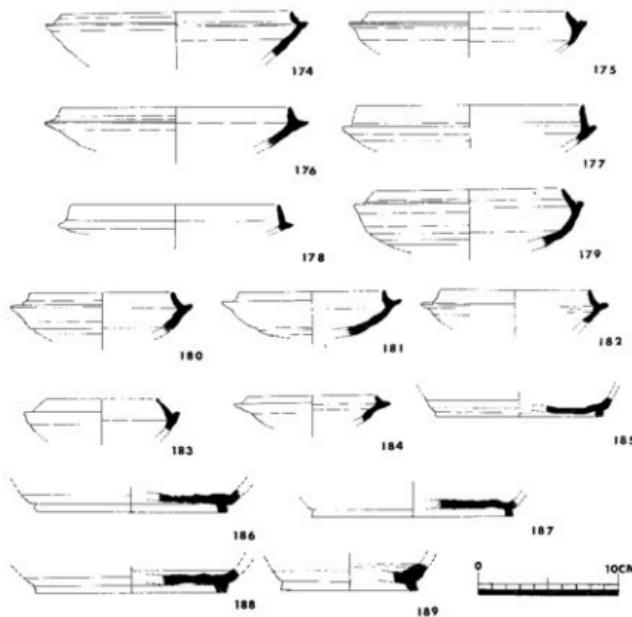
種類番号	出土場所 土層	法 畳 (cm)	形態の特徴	手 法 の 特 徴	備 考
81-130	B - 5 黒褐色粘質土 下層	口徑(推)11.3 受部径 13.7 (推) 残存高 2.8	たちあがりは、外刃気味に内傾し、端部 はやや鋭い。 受部は水平にのび、端部は丸い。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナガ調整。	胎土、やや粗。細砂を多く含む。 焼成、不良。 色調、内面、5.5P B河原青灰。 外面、7.5Y 白灰白。 底部外面の沿面はあれれる。
81-131	D - 1 黒褐色粘質土	口徑(推)12.0 受部径 14.4 (推) 残存高 2.7	たちあがりは、内傾したのち垂直に立ち 上がり、端部は丸い。 受部は上外方にのび、たちあがりとの境 に凹縫を有する。 端部は丸い。	回転ナガ調整。	胎土、密。端を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰白。 外面。
81-132	C - 3 黒褐色粘質土	口徑(推)10.9 受部径 14.0 (推) 残存高 3.3	たちあがりは、わずかに内傾して上方に のび、端部は锐い。 受部は上方方にのび、端部は丸い。	表面の厚底が著しいが、回転 ナガ調整を施している。	胎土、密。白色粗砂を含む。 焼成、やや不良。 色調、内面、2.5Y 白灰白。 外面、ロクロ回転、右方向。
81-133	C - 3 黒褐色粘質土	口徑(推)12.2 受部径 14.5 (推) 残存高 2.7	たちあがりは、内傾したのち上方にのび、 端部は丸い。 受部は断面三角形状を呈し、端部は丸い。	回転ナガ調整。	胎土、やや粗。端を含む。 焼成、良好。 色調、内面、長灰灰白。 外面、N%灰白。
81-134	E - 1 黒褐色粘質土	口徑(推)11.5 受部径 14.5 (推) 残存高 3.6	たちあがりは、内傾して立ち上がり、端 部は丸い。 受部は断面△角形状を呈し、端部は丸い。	回転ナガ調整。	胎土、密。白色粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰白。
81-135	E - 3 黒褐色粘質土	口徑(推)11.3 受部径 14.3 (推) 残存高 2.9	たちあがりは、内傾して上方にのび、端 部は锐い。 受部は上外方にのび、上面に凹縫を有す る。 たちあがりと受部の境に凹縫を有する。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナガ調整。	胎土、密。白色粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰白。
81-136	B - 4 黒褐色粘質土 下層	口徑(推)12.5 受部径 14.7 (推) 残存高 3.6	たちあがりは、わずかに内窪したのち、 上方に立ち上がり、端部は丸い。 受部は近く、上外方にのび、端部は锐い。 たちあがりと受部の境に凹縫を有する。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナガ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面、5.5P B河原青灰。 外面、N%灰白。
81-137	E - 3 黒褐色粘質土	口徑(推)12.0 受部径 13.8 (推) 残存高 2.8	たちあがりは、内傾したのち外上方にの び、端部は锐い。 受部は水平にのび、端部は丸い。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナガ調整。	胎土、密。端を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰白。
81-138	A - 2 黒褐色粘質土	口徑(推)10.7 受部径 13.5 (推) 残存高 3.9	たちあがりは、内傾して上方にのび、端 部は丸い。 受部は水平にのび、端部は丸い。 たちあがりと受部の境に凹縫を有する。	回転ナガ調整。	胎土、密。端を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰白。 ロクロ回転、右方向。
81-139	出土不明 黒褐色粘質土	口徑(推)11.5 受部径 14.0 (推) 残存高 3.0	たちあがりは、内傾したのち垂直に立ち 上がり、端部は丸い。 受部は上外方にのび、端部は丸い。	回転ナガ調整。	胎土、やや粗。白色粗砂を含 む。 焼成、やや不良。 色調、内面、N%灰白。 外面、N%灰白。
81-140	D - 5 黒褐色粘質土	口徑(推)12.0 受部径 13.7 (推) 残存高 3.1	たちあがりは、内傾したのち垂直に立ち 上がり、端部は丸い。 受部は上外方にのび、たちあがりとの境 に凹縫を有する。 端部はやや鋭い。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナガ調整。	胎土、密。細砂を含む。 焼成、良好。 色調、N%灰白。 ロクロ回転、右方向。
82-141	E - 3 黒褐色粘質土	口徑(推) 6.5 受部径 10.0 (推) 残存高 2.4	たちあがりは、内傾して上方にのび、端 部は丸い。 受部は水平にのび、端部は丸い。 たちあがりと受部の境に凹縫を有する。	回転ナガ調整。	胎土、密。 焼成、やや不良。 色調、内面、2.5Y 白灰白。 外面。

検査番号	出土場所 土	法 尺 (cm)	形 態 の 特 徴	合 法 の 特 徴	備 考
82-142	B-5 黒褐色粘質土 下層	口徑(推) 9.0 受部径 10.9 (推) 残存高 2.5	たちあがりは、内傾したのち垂直に近く のび、端部はやや深い。 受部は上外方にのび、たちあがりとの境 に凹面を有する。	回転ナガ調整。	胎土、密。 焼成、やや不良。 色調、内面、N等灰白。 外面、5 Y等灰。 底部外縁は凹面がれている。 セッティングが直り。
82-143	C-2 黒褐色粘質土	口徑(推) 11.2 受部径 13.5 (推) 残存高 2.7	たちあがりは、内側弧線に内傾したのち、 上方に立ち上がる。 端部は丸い。 受部は断面三角形状を呈し、端部は丸い。	回転ナガ調整。	胎土、密。 焼成、やや不良。 色調、内面、N等灰白。 外面、5 Y等灰。 底部外縁は凹面がれている。 セッティングが直り。
82-144	E-1 黒褐色粘質土	口徑(推) 8.6 受部径 10.4 (推) 残存高 2.0	たちあがりは軽く、外寄して立ち上がり、 端部は綻び。 受部は上外方にのび、端部は丸い。 たちあがりと受部の境に凹面を有する。	回転ナガ調整。	胎土、密。 焼成、やや不良。 色調、N等灰。
82-145	C-2 黒褐色粘質土	口徑(推) 14.0 受部径 12.9 (推) 残存高 2.6	たちあがりは、外寄して上方にのび、端 部はやや深い。 受部はわずかに上外方にのび、端部は丸 い。	回転ナガ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、N等灰。
82-146	C-2 黒褐色粘質土	口徑(推) 9.5 受部径 11.9 (推) 残存高 3.2	たちあがりは、内傾して上方にのび、端部は丸 い。 受部は上外方にのび、端部は丸い。	回転ナガ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、N等灰。
82-147	T-5 P-4		たちあがりは、外寄して上方に立ち上 り、端部は丸い。 受部は上外方にのび、端部は丸い。	回転ナガ調整。	底部外縁は凹面がれている。
82-148	E-3 黒褐色粘質土	口徑(推) 9.8 受部径 12.0 (推) 残存高 2.8	たちあがりは、内傾して上方にのび、端 部はやや深い。 受部はわずかに上外方にのび、端部は丸 い。	回転ナガ調整。	胎土、密。黑色粗砂を含む。 焼成、不良。 色調、内面、7.5 Y等灰白。 外面、2.5 G Y等明灰オリ ーブ灰。 底面にヘラ跡が見られる。
82-149	D-1 黒褐色粘質土	口徑(推) 10.6 受部径 13.0 (推) 残存高 2.7	たちあがりは、内傾したのち上外方に開 く、端部は丸い。 受部は上外方にのび、端部は丸い。	回転ナガ調整。	胎土、密。白色粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N等灰白。 外面、N等灰。
82-150	C-2 黒褐色粘質土	口徑(推) 9.2 受部径 11.1 (推) 残存高 1.8	たちあがりは、外寄して上方にのび、端 部はやや深い。 受部は水平にのび、端部は丸い。	回転ナガ調整。	胎土、密。2 mmの白色粗砂を 含む。 焼成、良好。 色調、内面、10 B G等明灰。 外面、5 B G等青灰。 断面、5 B G等青灰。
82-151	B-4 黒褐色粘質土	口徑(推) 9.8 受部径 12.3 (推) 残存高 2.0	たちあがりは、内傾したのち屈曲して上 方にのび、端部は丸い。 受部は上外方にのび、たちあがりとの境 に凹面を有する。 端部は丸い。	回転ナガ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面、N等灰。
82-152	D-2 経作小中	口徑(推) 10.0 受部径 12.2 (推) 残存高 2.9	たちあがりは、内傾したのち垂直に近く のび、端部は丸い。 受部は上外方にのび、たちあがりとの境 に凹面を有する。	回転ナガ調整。	胎土、密。1~2 mmの白色粗 砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、10 H G等青灰。 外面、5 B G等青灰。
82-153	H-5 黒褐色粘質土 下層	口徑(推) 8.8 受部径 11.1 (推) 残存高 3.0	たちあがりは、内傾して上方にのび、端 部は丸い。 受部は上外方にのび、端部は比較的綻 び。	回転ナガ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面、N等灰。 外面、N等灰。

検査番号	出土地所 上	法 線 (cm)	形 異 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
82-154	C-2 黒褐色粘質土	口徑(無) 10.6 受部径 13.2 (無) 残存高 3.6	たちあがりは、内傾して上方にのび、端部は丸い。 受部は上外方にのび、端部は丸い。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナガ調整。	胎土、粗。繊を含む。 焼成、不良。 色調、N%灰。 底部にヘラ印記有り。
82-155	E-6 黒褐色粘質土	口径(無) 10.1 受部径 12.6 (無) 残存高 2.9	たちあがりは、内外気味に上方にのび、端部は丸い。 受部は上外方にのび、端部は丸い。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナガ調整。	胎土、やや粗。 焼成、不良。 色調、N%灰白。
82-156	E-4 黒褐色粘質土	口径(無) 11.6 受部径 13.6 (無) 残存高 2.8	たちあがりは、内傾したち上方に開き、端部は丸い。 受部は断面三角形状を呈し、上面に沈線を有する。	回転ナガ調整。	胎土、密。白色細砂を含む。 焼成、良好。 色調、N%灰。 ロクロ回転、右方向。
82-157	D-2 緑赤土中	口径(無) 10.0 受部径 12.4 (無) 残存高 2.4	たちあがりは、内傾したち上方にのび、端部は弧状。 受部はわずかに上外方にのび、端部は丸い。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナガ調整。	胎土、粗。白色細砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰白。 外面、N%灰。
82-158	C-2 黒褐色粘質土	口径(無) 10.4 受部径 13.1 (無) 残存高 2.6	たちあがりは、内傾したち上方にのび、端部は丸い。 受部は極く上外方にのび、端部は丸い。	回転ナガ調整。	胎土、密。やや細砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰白。 外面、R%において横幅、ロクロ回転、右方向。
82-159	B-3 黒褐色粘質土	口径(無) 10.8 受部径 12.3 (無) 残存高 2.6	たちあがりは、内側氣味に上方にのび、端部は丸い。 受部は上外方にのび、端部は丸い。	回転ナガ調整。	胎土、やや粗。繊を多く含む。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰。 外面、N%灰白。 断面、R%において横幅、ロクロ回転、左方向。
82-160	D-3 黒褐色粘質土	口径(無) 11.6 受部径 12.5 (無) 残存高 2.6	たちあがりは、内傾して内上方へ伸び、端部は丸い。 受部はわずかに上外方へ伸び、端部は丸い。 たちあがりと受部の境に回縫を有する。	回転ナガ調整。	胎土、密。細砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、5 P B%灰白灰。 外面、5 Y R%灰白。
82-161	D-1 黒褐色粘質土	口径(無) 10.0 受部径 12.2 (無) 残存高 3.1	たちあがりは、内傾した後屈曲して上方へ伸びる。端部は丸い。 受部は上外方へ伸び、端部は丸い。 たちあがりと受部の境に回縫を有する。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナガ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、N%灰白。
82-162	E-2 黒褐色粘質土	口径(無) 9.6 受部径 11.5 (無) 残存高 2.6	たちあがりは、内傾した後屈曲して上方へ伸びる。端部は丸い。 受部は上外方へ伸び、端部は丸い。 たちあがりと受部の境に回縫を有する。	回転ナガ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面、5 P B%灰白灰。 外面、N%灰白。 ロクロ回転、左方向。
82-163	E-3 黒褐色粘質土	口径(無) 12.1 受部径 14.4 (無) 残存高 2.6	たちあがりは、内傾して内上方へ伸び、端部は丸い。 受部は外上方へ伸び、端部は丸い。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナガ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰。 外面、N%灰白。
82-164	C-2 黒褐色粘質土	口径(無) 8.9 受部径 11.4 (無) 残存高 2.6	たちあがりは、内傾した後、屈曲して上方へ伸びる。端部は丸い。 受部は外上方へ伸び、端部は丸く立ち上がりとの境に回縫を有する。	回転ナガ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰。 断面、N%灰白。
82-165	E-2 黒褐色粘質土	口径(無) 10.6 受部径 13.0 (無) 残存高 2.8	たちあがりは内傾した後、屈曲して上方へ伸びる。端部は丸い。 受部は外上方へ伸び、端部は丸い。 たちあがりとの境に回縫を有する。	回転ナガ調整。	胎土、やや粗。粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰。 外面、N%灰。

検査番号	出土場所 層	法 異 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
82-166	D-1 黒褐色粘質土	口徑(推)11.0 受部径 13.3 (推) 残存高 2.7	たちあがりは、内傾して内上方へ伸びる。 端部は丸い。 受け部は外上方へ伸び、端部は丸い。	回転ナガ調整。	胎土、密。白色粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰白。 外羽、S-B%灰灰。 ロクロ回転、右方向。
82-167	E-4 黒褐色粘質土	口徑(推)11.2 受部径 13.5 (推) 残存高 2.8	たちあがりは、内傾して内上方へ伸びる。 受け部は外上方へ伸び、端部は丸く、たちあがりとの境に凹凸を有する。	回転ナガ調整。	胎土、密。細砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、7.5Y%灰白。 外羽、2.5Y%青黄。 ロクロ回転、右方向。
82-168	E-2 黒褐色粘質土	口徑(推)9.9 受部径 12.1 (推) 残存高 2.5	たちあがりは、内傾して内上方へ伸びる。 端部はやや緩い。 受け部は外上方へ伸び、端部は丸い。	回転ナガ調整。	胎土、やや粗。細砂を多く含む。 焼成、やや不良。 色調、内面、10Y%灰白。
82-169	C-5 黒褐色粘質土	口徑(推)11.0 受部径 13.8 (推) 残存高 2.6	たちあがりは、内傾して内上方へ伸び、 端部は薄くやや緩い。 受け部は薄く、外上方へ伸び端部は丸い。	回転ナガ調整。	胎土、粗。白色粗砂を含む。 焼成、やや不良。 色調、内面、2.5G Y%明オーリーブ灰。 外羽、5Y%灰白。
82-170	A-4 黒褐色粘質土	口徑(推)10.7 受部径 13.2 (推) 残存高 2.8	たちあがりは、内傾した後やや上方へ伸び、 端部は丸い。 受け部は外上方へ伸び、端部は丸い。	回転ナガ調整。	胎土、密。やや粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰白。 外羽、N%灰。
82-171	E-1 黒褐色粘質土	口徑(推)11.0 受部径 12.8 (推) 残存高 3.1	たちあがりは、内傾した後曲し、垂直 気味に上方へ伸びる。 端部は丸い。 受け部は外上方へ伸び、端部は丸く、たち あがりとの境に凹凸を有する。	底部、回転ハラ削り調整。 他は、回転ナガ調整。	胎土、やや粗。 焼成、やや不良。 色調、内面、N%灰白。 外羽
82-172	C-2 黒褐色粘質土	口徑(推)11.2 受部径 12.7 (推) 残存高 2.2	たちあがりは頗く、内傾した後曲して 外上方へ伸び、端部は傾く。 受け部は外上方へ伸び、端部は丸い。	回転ナガ削り。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰白。 外羽
82-173	C-2 黒褐色粘質土	口徑(推)10.7 受部径 13.2 (推) 残存高 2.6	たちあがりは、内傾し内上方へ伸びる。 端部はやや緩い。 受け部は外上方へ伸び、端部は丸く、たち あがりとの境に凹凸を有する。	回転ナガ調整。	胎土、密。粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰白。
83-174	C-2 黒褐色粘質土	口徑(推)16.2 受部径 18.4 (推) 残存高 3.2	たちあがりは、内傾した後上方へ伸び、 端部は丸い。 受け部は外上方へ向かって伸び、端部は丸く、上縁に回転を有し、たちあがりとの 境に凹凸を有す。	回転ナガ調整。	胎土、密。白色粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、外羽、N%灰。
83-175	B-5 黒褐色粘質土 下層	口徑(推)14.0 受部径 16.8 (推) 残存高 2.8	たちあがりは、内傾し内上方へ伸び、端 部は丸い。 受け部はやや外上方へ伸び、端部は丸く、た ちあがりとの境に凹凸を有す。	回転ナガ調整。	胎土、密。2mmの粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、外羽、N%灰白。
83-176	D-1 黒褐色粘質土	口徑(推)16.1 受部径 18.4 (推) 残存高 2.8	たちあがりは、内傾して内上方へ伸び、 端部は丸い。 受け部はやや外上方へ伸び、端部は丸い。	回転ナガ調整。	胎土、密。白色粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰。 外羽、N%灰白。
83-177	E-6 黒褐色粘質土	口徑(推)16.0 受部径 18.0 (推) 残存高 2.5	たちあがりは、内傾した後曲して上方 へ伸び、端部は丸い。 受け部は外上方へ伸び、端部は丸く、た ちあがりとの境に凹凸を有す。	回転ナガ調整。	胎土、粗。 焼成、不良。 色調、内面、2.5Y%灰白。 外羽、2.5Y%灰白。

検査番号	出土場所 土	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
83-178	黒褐色粘質土	口径(推)14.7 受部深 16.6 (推) 残存高 1.9	たちあがりは、内傾して伸び、端部は丸い。 受部は水平方向へ伸び、端部は丸く、たちあがりとの境にわずかな凹部を有す。	回転ナガ調整。	胎土、密。 焼成、不良。 色調、2.5G Y 10Mオリーブ 灰。
83-179	E-2 黒褐色粘質土	口径(推)13.3 受部深 16.2 (推) 残存高 3.9	たちあがりは、内傾して伸び、端部はやや丸い。 受部は外上方に伸び、端部は丸く、たちあがりとの境に凹部を有す。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナガ調整。	胎土、密。白色糊を含む。 焼成、良好。 色調、外面 1.5 P B 5 M 青灰。 ロクロ回転、右方向。
83-180	C-6 黒褐色粘質土	口径(推)10.2 受部深 12.8 (推) 残存高 2.8	たちあがりは、内傾した後わずかに屈曲し内上方へ伸びる。端部は丸い。 受部は外上方へ伸び、端部は丸く、たちあがりとの境に凹部を有す。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナガ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、外面 N 5 M 黄白。 外面、N 5 M 黄白。
83-181	B-5 黒褐色粘質土 下層	口径(推)10.2 受部深 12.6 (推) 残存高 3.2	たちあがりはやや切く、内傾した後、上方へ伸びる。端部は丸い。 受部は、やや薄口で外上方へ向かって伸び端部は丸い。	底部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナガ調整。	胎土、密。3 mm の繊維を含む。 焼成、良好。 色調、外面 N 5 M 黄白。 外面、5 P B 5 M 青灰。 ロクロ回転、右方向。
83-182	A-3 黒褐色粘質土	口径(推)10.6 受部深 13.3 (推) 残存高 2.8	たちあがりは、内傾して伸び、端部は丸い。 受部は、やや外上方へ伸び、端部はやや丸く、たちあがりとの境に凹部を有する。	回転ナガ調整。	胎土、密。 焼成、良好。堅穀。 色調、外面、N 5 M 黄白。 外面、N 5 M 黄白。
83-183	A-1 黒褐色粘質土	口径(推)7.8 受部深 10.9 (推) 残存高 2.3	たちあがりは薄く、内傾して伸び、端部は丸い。 受部は外上方へ伸び、端部はやや丸く、立ち上がりとの境に凹部を有する。	回転ナガ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、N 5 M 黄白。
83-184	C-6 黒褐色粘質土	口径(推)8.8 受部深 10.9 (推) 残存高 1.9	たちあがりは短く、内傾して伸び、端部は丸い。 受部はほほ水平に伸び、端部は丸い。	回転ナガ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、N 5 M 黄白。
83-185	A-4 黒褐色粘質土	高台径 11.8 (推) 高台高 0.3 残存高 1.2	高台は、底面部にやや外傾気味につく。 底部は平肌であり、側部は底面部から外傾して外上方へ伸びる。 たちあがりと受部は欠損。 脚部上部、欠損。	回転ナガ調整。	胎土、密。1 mm の粗糾を含む。 焼成、良好。 色調、N 5 M 黄白。
83-186	C-5 黒褐色粘質土	高台径 13.6 (推) 高台高 0.6 残存高 1.2	高台は、底面部にやや外傾気味につく。 底部は平肌であり、側部は底面部から外傾気味で外上方へ伸びる。 脚部上部、立ち上がり、受部は欠損。 高台底面に凹部を有す。	外側底部中心部附近、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナガ調整。	胎土、密。 焼成、良好。堅穀。 色調、2.5Y 5 M 黄白。
83-187	B-6 黒褐色粘質土 下層	高台径 14.1 (推) 高台高 0.5 残存高 0.7	高台は、底面部に外傾気味につく。 底部は平肌である。 脚部以上は欠損。	回転ナガ調整。	胎土、密。白色粗糾を含む。 焼成、良好。 色調、内面 10 H G 5 M 青灰。 外面、10 H G 5 M 青灰。 断面、7.5Y R 5 M にま い推。
83-188	C-4 黒褐色粘質土	高台径 13.5 (推) 高台高 0.6 残存高 1.3	高台は、底面部に外傾気味につく。高台底面は、凹部を有する。 底部は半球であり、底部端より脚部は外傾して伸びる。 脚部中部には欠損。	底部中心部、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナガ調整。	胎土、密。3 mm の繊維を含む。 焼成、良好。 色調、N 5 M 黄白。
83-189	C-5 黒褐色粘質土	高台径 9.5 (推) 高台高 0.6 残存高 1.7	高台は、底面部に外傾気味につく。底部は平肌であり、側部は底面部より外傾して外上方へ伸びる。	回転ナガ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面、5 P B 5 M 青灰。 外面、5 P B 5 M 青灰。



第83図 黒褐色粘質土 出土須恵器 杯身(174~189)

#### 壺(第84・85図)

杯類に次いで多く検出しているのが、壺であるが、口縁部のみで全体を知る資料には、めぐまれなかった。

大きく口縁部の特長から2類に分けた。(25)は直口壺、(28)はいわゆる卅と呼ばれているものである。直口壺は「く」字形に断面を作り出し、端部近くにシャープな凸線があぐる。

(28)の卅は、直立の口縁部が特長的である。

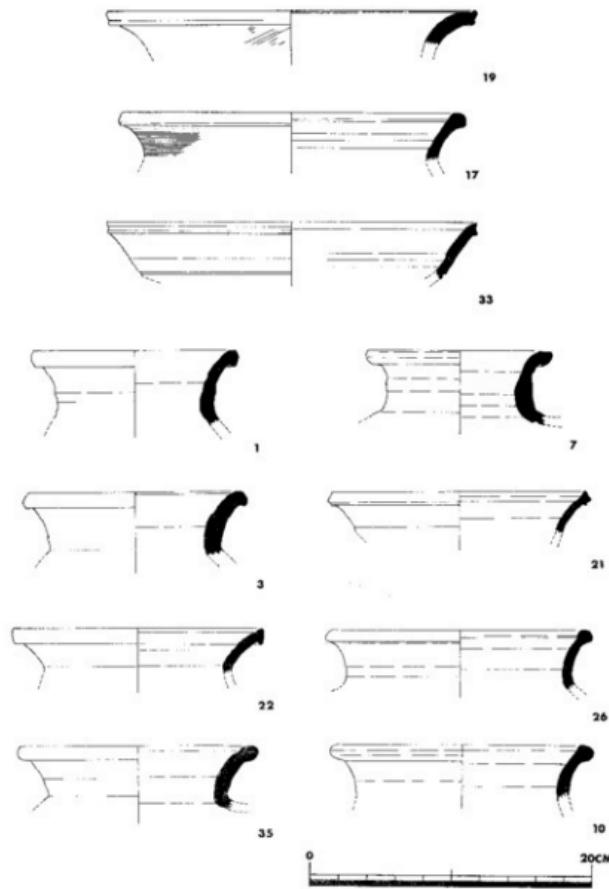
一方の類は、通有な壺で、口縁端部の詳細な観察から次のようなタイプ差がある。

(34)は、頸部から大きく外反し、端部近くに鮮明な凸線と波状文を走らす。(19)も同じく外反するが、端部を少し上に引き出したため、内面端部に凹線状を呈す。(33)は全体的な製作がシャープで細部にまでそれがみられる。尖型の端部、凸带、凹線が、鮮明さをよく残す。

(21)は、特に器壁がうすく、端部を「ハ」の字形に引き出す。

この4点は、後述の壺よりも先行するらしく、焼成、胎土にも差異が認められることは、優良な点といえる。

頸部から短かく外反する(3)(22)(7)(5)(30)は、口縁端部を丸く調整していることに共通点が見い出される。(3)は下方に、(22)は、さらに面取りぎみに下方へ、(7)は水平方向へ、(30)はやや外上方へと引っ張り出すといった、細部の変化がみられる。(5)は、うすい器壁で他とイメージを異にするが端部は丸い。尚、口縁部は、かなりバラエティーに富み、粘土紐

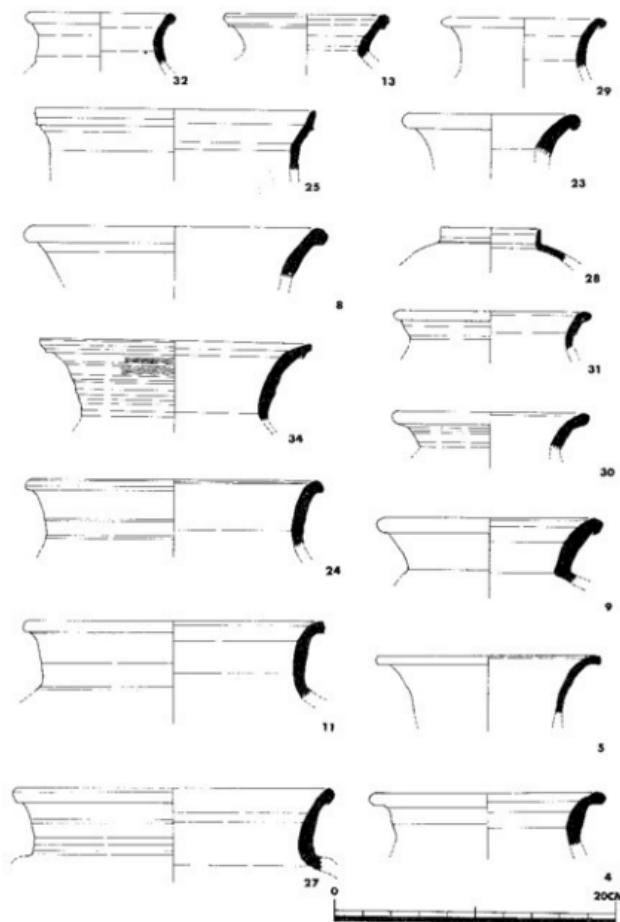


第84図 出土須恵器 壺

痕さえ残す土器がある。

(1)(3)(19)(21)の緻密な胎土をもつ土器以外は、密で礫を含む。焼成は一般的に良好で灰色、灰色、黒褐色、明青灰色、青灰色、明黄褐色といった色調に焼き上がっていた。

付記すべきこととして、(28)の肩部には、他の土器を同時焼成した痕跡がある。 (森村)



第85図 出土須恵器 壺

# 須恵器一覧表

壹

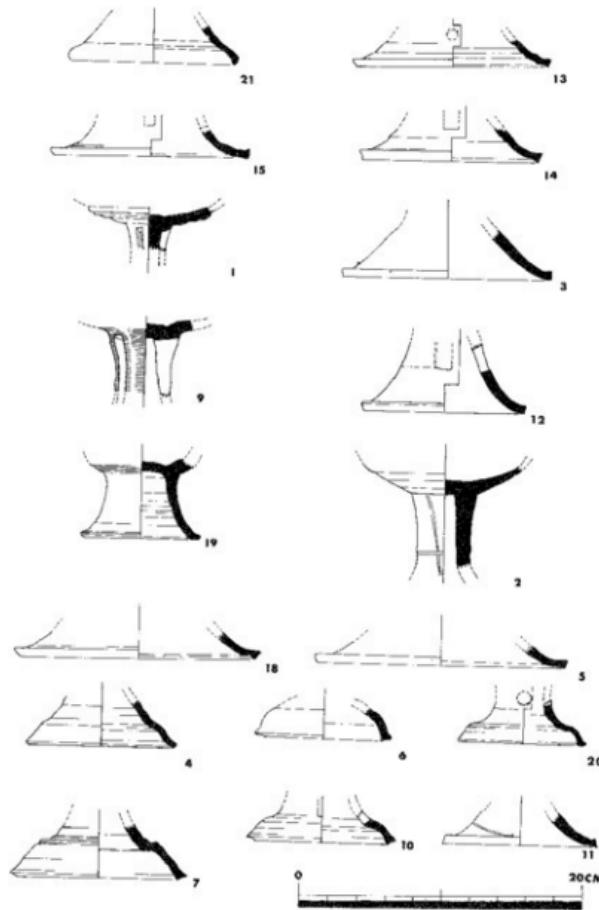
採集番号	出土場所	法 番 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	質 考
84-1	B-3 地山直上	(推)口径14.2 残存高 5.3	口縁部は外寄して外上方へ伸び端部に剥る。端部は下へ近く張り出しが多い。端部と口縁部端との境に凹縫を有する。 口縁部は基部より外反して口縁部へ続く。 体部欠損。	回転ナダ調整。	胎土、緻密。一部焼合む。 焼成、良好。 色調、内面、N灰白。 外面、N灰白。
2	E-1 黒褐色粘質土	(推)口径14.3 残存高 4.3	口縁部は基部より直立しすぐ外反して端部へ弧る。端部は丸く、下部に張り出しが多め。 口縁部の境に凹縫を有す。	背部内面、同心円文が見られる。 他、回転ナダ調整。	胎土、緻密。粗砂含む、一部 焼合む。 焼成、良好。 色調、N灰白。
84-3	E-6 黒褐色粘質土	(推)口径15.5 残存高 3.7	口縁部は基部から外上方へ外傾した後、弧曲して外水平に伸びる口縁部へ続く。 端部は丸い。 体部欠損。	回転ナダ調整。	胎土、密。一部焼合む。 焼成、良。 色調、内面、N灰白。 外面、N灰白。
85-4	B-040 黒褐色粘質土	(推)口径15.5 残存高 4.1	口縁部は外寄しながら外上方へ伸び、口縁部は脱型して、水平に伸びて端部に剥れる。 体部欠損。	回転ナダ調整。	胎土、密。0.5~2.5mmの白色 砂粒を含む。 焼成、良好。 色調、N灰白。
85-5	C-2 黒褐色粘質土	(推)口径13.6 残存高 5.2	口縁部は、基部よりほぼ垂直に立ち上がり、そのまま外傾し、口縁部は水平に伸びる。 端部に剥る。 端部は丸く、下部は引き立し口縁部外側との境に弱い凹縫をなす。 体部以下欠損	回転ナダ調整。	胎土、密。1mm以下の粗砂を 含む。 焼成、良。 色調、内面N灰白。 外面、N灰白。 断面、N灰白。
6	A-5 黒褐色粘質土	(推)口径19.9 残存高 3.5	口縁部は外傾し、外上方に伸び端部に剥る。端部は丸く下方に張り出しがある。	回転ナダ調整。	胎土、密。砂粒含む。 焼成、良。 色調、N灰白。
84-7	E-2 黒褐色粘質土	(推)口径14.7 残存高 4.5	口縁部は基部より外寄気味に外上方へ伸び、端部に剥る。 端部は丸く下部に張り出しが有する。 体部以下欠損。	体部内面同心円文が見られる。 他、回転ナダ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面N灰白。 外面、N灰白。
85-8	B-6 黒褐色粘質土	(推)口径16.6 残存高 3.6	口縁部は外反して外上方に伸び端部に剥る。 端部は丸く、下部に張り出しが有し。 口縁部に凹縫を有す。 体部以下欠損。	回転ナダ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面10B G N灰白。 外面、10B G N灰白。
85-9	C-2 黒褐色粘質土	(推)口径20.8 残存高 5.5	口縁部は、わずかに外傾し上方へ伸び回曲して強く外寄し、端部に剥る。端部は丸く、下部に張り立しを有し、外側に凹縫を有す。	回転ナダ調整。	胎土、密。1mm以下の白色粗 砂粒を含む。 焼成、良好。 色調、内面2.5Y N灰白。 外面、N灰白。 断面、N灰白。
84-10	C-3 黒褐色粘質土	(推)口径11.2 残存高 3.0	口縁部は、外傾して外上方へ伸び端部へと続く。端部はやや深く下部に張り出しが有し、端部外側と張り出しがとの境に凹縫を有する。端部上面は平坦。	回転ナダ調整。	胎土、密。1mm以下の粗砂含 む。 焼成、良。 色調、内面、N灰白。 外面、N灰白。 断面、N灰白。
85-11	A-5 黒褐色粘質土	(推)口径23.4 残存高 3.5	口縁部は外傾してのび、端部は丸い。	口縁部外側、カキ目調整。 他、回転ナダ調整。	胎土、密。1mm以下の粗砂含 む。 焼成、良。 色調、内面、5 P B N灰白。 外面、N灰白。 断面、N灰白。

探査番号	出土場所 上層	法 量 (cm)	形 独 の 特 徴 :	手 法 の 特 徴	備 考
12	B-3 黒褐色粘質土	(推)口径25.5 残存高 2.4	口頭部は外寄したのち、水平にのび、端部で屈曲して上方にのびる。端部は面をなし、回線を有する。	回転ナゲ調整。	胎土、緻密。粗糸を含む。 焼成、良好。 色調、内面、5 P B 分明灰。 外面、N 5%灰白。 ロクロ回転、左方向。
85-13	C-6 黒褐色粘質土	(推)口径 9.3 残存高 2.9	口頭部は、外傾してのびたのも、さらに外傾し、口縁部は内寄気味にのびて端部に至る。	口頭部外面、カキ目調整。 他、回転ナゲ調整。	胎土、緻密。 焼成、良好。 色調、内面5%灰白。 外面、灰暗灰。
14	E-6 黒褐色粘質土	(推)口径17.4 残存高 3.0	口頭部は短く直立したのち、外寄気味にのび、端部は丸い。	回転ナゲ調整。	胎土、 焼成、良好。 色調、5 B 分明灰。
15	E-1 黒褐色粘質土	(推)口径11.2 残存高 3.1	口頭部は、外傾したのちさらに外反して端部に至る。 端部は丸い。	回転ナゲ調整。	胎土、密。3 mm以下の纖維を含む。 焼成、良好。 色調、内面、7.5 YR 5%灰。 外、外皮、N 5%灰白。
16	B-3 黒褐色粘質土	(推)口径19.8 残存高 4.7	口頭部は、内傾したのち、上外方にのび、端部は丸い。	回転ナゲ調整。	胎土、密。 焼成、良。 色調、内面、N 5%灰白色。 外皮、N 5%灰色。 断面、5 P B 分明灰。
84-17	D-6 黒褐色粘質土	(推)口径19.4 残存高 4.1	口頭部は、直立したのち、上外方へのび、凹面を成す。 端部は、短い面を成す。	回転ナゲ調整。	胎土、密。3 mm以下の砂粒を含む。 焼成、良好。 色調、N 5%灰。 一部灰分。
18	C-4 黒褐色粘質土	(推)口径17.8 残存高 4.2	口頭部は、短く直立したのち、外寄して上方にのびる。 端部は外傾する平面を成す。	回転ナゲ調整。	胎土、密。1 mm以下の黑色粗糸を含む。 焼成、良。 色調、N 5%灰白。
84-19	B-3 地山土上	(推)口径22.0 残存高 5.8	口頭部は、基部より直立し、さらに外傾してのびる。 端部は丸い。	回転ナゲ調整。	胎土、密。2 mm以下の粗糸を含む。 焼成、良。 色調、N 5%灰白。 断面、にいわば色 7.5 Y R 3%。
20	B-3	(推)口径 7.0 残存高 2.3	口頭部は、基部より直立してのび端部は丸い。 肩部は内側して外下方に下る。	回転ナゲ調整。	胎土、密。 焼成、良。 色調、N 5%灰白。 肩部にセッタ焼成痕を有する。
84-21	E-5 黒褐色粘質土	(推)口径10.4 残存高 3.5	口頭部は内傾したのち、外傾しきらに外傾して端部に至る。 端部は丸い。	回転ナゲ調整。	胎土、密。1.5 mm以下の白色・暗灰色粗糸を含む。 焼成、良。 色調、N 5%灰白。
84-22	B-3 黒褐色粘質土	(推)口径14.0 残存高 2.6	口頭部は、外反したのち、さらに外反して端部に至る。 端部は丸い。	回転ナゲ調整。	胎土、密。0.5 mm以下の細糸を含む。 焼成、良。 色調、内面、N 5%灰白。 外面、N 5%灰。
86-23	E-6 黒褐色粘質土	(推)口径13.2 残存高 2.7	口頭部は、直立したのち、外反してのび、端部は丸く、内側で接地する。	回転ナゲ調整。	胎土、密。1 mm以下の白色・暗灰色粗糸を含む。 焼成、良。 色調、N 5%灰白。 断面、N 5%灰白。

検査番号	出土場所 層	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
86-24	E-5 黒褐色粘質土	(推)口径 9.8 残存高 3.8	口縁部は外寄気味に内傾したのち、外反し、端部に至る。 縫部は丸い。	回転ナデ調整。	胎土、密。2mm以下の白色粗砂を含む。 焼成、良。 色調、7.5YR 4/8灰白。
86-25	B-5 黒褐色粘質土	(推)口径 26.0 残存高 3.9	口縁部は内寄気味にのびたのち外上方にたちあがる。 縫部は直を成し、凹線を有する。	回転ナデ調整。	胎土、密。2mm以下の細砂を含む。 焼成、良。 色調、内面、N 5%灰。 外面、B 5%青灰。 断面、75R 5%明青灰。
86-26	C-1 黒褐色粘質土	(推)口径 19.0 残存高 5.5	口縁部は上外方へのび、中位で一条の凸線を有し、端部近くで外反して、凹面を成す。縫部は丸い。 内縫上部には2条の沈線を模として、上に1条5本、下に1条5本の波状文を有する。	回転ナデ調整。	胎土、密。2mm以下の粗砂を含む。 焼成、良。 色調、内面、N 5%灰白。 外面、5PB 5%明青灰。
86-27	E-2 黒褐色粘質土	(推)口径 16.0 残存高 4.5	口縁部は外寄して上方にのび縫部は丸い。	肩部内面、同心円タキ。 他、回転ナデ調整。	胎土、密。2mm以下の白色粗砂を含む。 焼成、良。 色調、10B G 5%青灰。 断面、10B G 5%明青灰。
86-1	E-1 黒褐色粘質土	(推)基部径 3.4 残存高 3.0	軸部底部は平担に近く、口縁部との境に、二条の凹線によって前り出された凸線を有する。 縫部はゆるく外反して下り、三方の長方形スカシを有する。	軸部内面中央部、不整方向のナデ調整。 他、回転ナデ調整。	胎土、細密。白色粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、N 5%灰。
86-2	C-1 黒褐色粘質土	(推)基部径 4.6 残存高 7.1	杯部底部は内寄して立ち上がる。脚部は外寄気味に下る。脚部下位に一条の沈線がめぐる。	脚部、カキ呂調整。 他、回転ナデ調整。	胎土、密。1mm位の白色粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N 5%灰。 外面、5B G 5%青灰。 クロロ回転、左方向。
86-3	C-3 黒褐色粘質土	(推)口径 14.6 (推)基部径 14.4 残存高 4.7	脚部は外寄気味に外下方に下り縫部と至る。 縫面は凹線を有する。	回転ナデ調整。	胎土、致密。白色粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、N 5%灰。
86-4	C-6 黒褐色粘質土	(推)口径 9.9 (推)基部径 11.0 残存高 3.3	脚部は外反したのち、内寄気味に外反し、さらに外寄して外下方に下って縫部に至る。 縫面には凹線を有する。	回転ナデ調整。	胎土、密。1mmの白色粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N 5%灰。 外面、N 5%灰白。 クロロ回転、左方向。
86-5	A-5 黒褐色粘質土	(推)口径 17.4 (推)基部径 17.2 残存高 1.5	脚部は、外下方に下り縫部近くで水平に近くのひる。縫部は極内傾する。	表面摩滅のため調整不明。	胎土、密。1~2mm程度の白色粗砂を含む。 焼成、不良。 色調、内面、2.5YR 5%灰白。 外面、5YR 5%灰白。
86-6	E-6 黒褐色粘質土	(推)口径 8.0 (推)基部径 8.0 残存高 2.3	脚部は外寄したのち、基曲し、内寄して下る。	回転ナデ調整。	胎土、密。 焼成、良。 色調、内面、N 5%灰。 外面、N 5%灰白。 断面、N 5%灰。
86-7	B-5 黒褐色粘質土	(推)口径 11.2 (推)基部径 11.1 残存高 3.8	脚部は外寄したのち、段を成し、内寄して外下方に下る。	回転ナデ調整。	胎土、密。1mmの白色粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、5 YR 5%オリーブ黒。

高杯（第86図）

完形品は検出していないので、脚部、基部についてのみ図化し観察できる範囲を広げた。脚部は、ラッパ状に大きく開くものとしっかりとふんばる2タイプに分類される。さらに、細見



第86図 出土須恵器 高杯

# 高 杯

押出番号	出 土 所	法 量 (cm)	形 細 の 特 徵	手 法 の 特 徵	備 考
86-8	E-4 黒褐色粘質土	(推) 基部径 5.3 残存高 5.3	脚基部より、外寄りに外下方にのびる。細い長方形のスカシを三方に穿つ。	杼部内面中央、不整方向ナダ調整。 脚部外面、カキ目調整。 他、回転ナダ調整。	胎土、緻密。白色粒含む。 焼成、良好。 色調、内面、N 5%灰白。 外面、N 5%灰。 ロクロ回転、左方向。
86-9	B-1 黒褐色粘質土	(推) 口径 9.2 (推) 底部径 9.2 残存高 2.5	脚部は内寄して下る。	回転ナダ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面、N 5%灰白。 外面、N 5%灰。 ロクロ回転、左方向。
86-10	C-6 黒褐色粘質土	(推) 口径11.0 (推) 底部径10.9 残存高 2.4	脚部は外下方にのび、端部近くで内寄する。	回転ナダ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面、5 P B 5%青灰。 外面、N 5%灰白。 ヘラ記分状の溝有り。
86-11	C-5 黒褐色粘質土	(推) 口径11.1 (推) 底部径 11.0 残存高 4.9	脚部は外寄気味に外下方へのび、端部は凹面を成す。 三方のスカシを穿つ。	回転ナダ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面、5 P B 5%青灰。 外面、N 5%灰。
86-12	C-2 黒褐色粘質土	(推) 口径13.4 (推) 底部径 13.4 残存高 1.9	脚部は、凹をなしながら外下方にのび、端部近くで、外反する。端部は内寄し、凹面を成す。 円筒スカシがわずかに残る。	回転ナダ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、N 5%灰。
86-13	B-5 黒褐色粘質土	(推) 口径12.3 (推) 底部径 12.0 残存高 2.3	脚部は内寄したのち、外寄して外下方にのび、又端部近くで内寄してのびる。 方形スカシがわずかに残る。	回転ナダ調整。	胎土、密。 1 mm の白色粗砂を含む。 焼成、良。 N 5%灰白。 10 Y 5/4は脚部一部、灰。
86-14	B-2 黒褐色粘質土	(推) 口径12.9 (推) 底部径 12.7 残存高 1.9	脚部は外下方にのびたのち大きく外方にひき、端部でわずかに内寄する。	回転ナダ調整。	胎土、緻密。 2 ~ 3 mm の確合む。 焼成、良好。 色調、内部と口縁部N 5%灰白。 口縁部の底部10 Y 5/4暗緑線。 口縁部の一部10 Y 5/4灰。脚部部5 R 5/4灰。
86-15	C-2 黒褐色粘質土	(推) 口径18.4 (推) 底部径 16.4 残存高 2.9	脚部は外寄気味に外下方にのび、端部近くで内傾する。	回転ナダ調整。	胎土、緻密。 焼成、良好。 色調、内面、10 R 5/4赤灰。 外面、N 5%灰。 脚部、5 R 5%赤灰。
86-16	C-2 黒褐色粘質土	(推) 脚部高 4.5 (推) 底部径 8.1 残存高 5.6	脚部は外寄して外下方に開き、端部近くで水平にのびる。端部は丸い。 軽部は欠損しているが、脚部基部と杼部との境に2条の凹線を有する。	回転ナダ調整。	胎土、良好。 焼成、良好。 焼成、良好、微堅型。 色調、N 5%灰。 ロクロ回転、右方向。
86-17	A-3 黒褐色粘質土	(推) 底部径 8.2 残存高 3.0	脚部は大きく外寄したのも凹曲して、外下方に内寄してのび、又、端部近くで外反する。 わずかに円筒スカシがこる。	回転ナダ調整。	胎土、良好。 焼成、良好。 焼成、良好、微堅。 色調、N 5%灰。 内部、N 5%灰。 ロクロ回転、右方向。
86-18	A-5 黒褐色粘質土	(推) 口径11.3 (推) 底部径 11.2 残存高 2.7	脚部は、外寄気味に外下方にのび、端部近くで組曲して、垂直に下り脚部に至る。	回転ナダ調整。	胎土、緻密。 焼成、良好。 色調、内面、脚部 N 5%灰白。 外面 N 5%灰。

すると（5）のように端部を丸めているもの、（14）の土器のように、下方と上方に粘土を引き出し凸帯を成すもの、（21）のように端部を下方のみに丸く押えているもの等がある。

（6）（7）（10）（20）は、短脚で底部径は小さくしっかりふんばる形態で、一応、段らしきものでそれをよりつよく表わす。脚端部に丸く凹線をめぐらすもの（6）（20）と、するどく、内外に引き出した（7）（10）に分けることさえできよう。ラッパ状脚部の有蓋高杯とすれば、短脚のこれは、無蓋高杯かもしれない。基部から大半が長方形透しで、（13）（20）は、円形透しである。（2）は透しを簡略化し、縦にヘラによる線刻を施しているにとどまる。

緻密と良好な胎土によって良好、又は、堅密に焼成され、灰白色、青灰色、オリーブ黒色、明青灰色、赤茶色、灰色にと教種に発色している。

（11）の裾部には「フ」状のヘラ記号がみられ調整直後に記入された粘土のはじきが認められた。（森村）

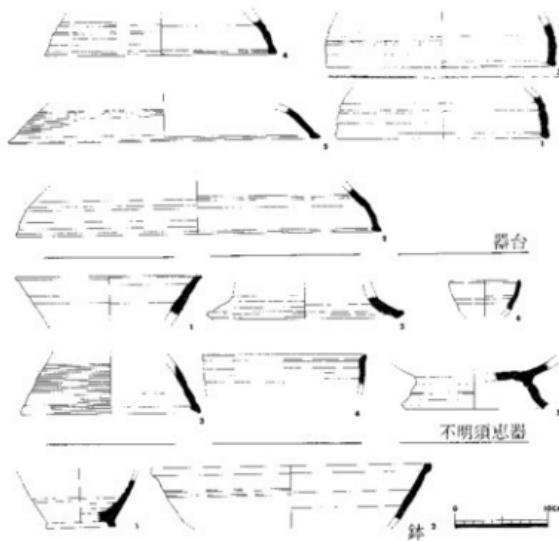
## 器 台

共通番号	出土場所 層	法 番 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
87-1	B-2	(推) 脚部径 22.2 残存高 4.5	脚部は内寄して外下方にび端部は丸い。 又、脚部下位に二条の凹線を有する。	回転ナダ調整。	胎土、密。白色粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰。 外面、N%灰白。 ロクロ回転、右方向
40-1	黒褐色粘質土				
40-2	A-2	(推) 脚部径 38.3 残存高 4.7	脚部は外反したのち、内寄して外下方に下り、端部近くで外寄する。端部は凹面有する。	回転ナダ調整。	胎土、密。2mmの白色粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰。 外面、N%灰。 断面、N%灰。
40-2	黒褐色粘質土				
40-3	C-3	(推) 脚部径 24.2 残存高 4.8	脚部は内寄して下方にび、端部近くでわずかに外寄する。端部は面をなし、浅い凹線を有する。	回転ナダ調整。	胎土、密。白色砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰白。
40-3	黒褐色粘質土		脚部下位に二条の凹線を有する。		外面、N%灰白。
40-4	A-3	(推) 脚部径 24.8 残存高 3.1	脚部は内寄して下り、端部近くでわずかに外寄する。 端部は面をなし凹線を有する。 脚部下位に二条の凹線を有する。	回転ナダ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面、N%灰。
40-4	黒褐色粘質土				
40-5	B-3	(推) 脚部径 32.2 残存高 3.4	脚部は内寄気味に、大きく外下方に開き、端部近くで外反する。	脚部外面、カキ目調整。 他、回転ナダ調整。	胎土、密。2mmの白色粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、2.5G Y%オリーブ灰。 外面、2.5G Y%オリーブ灰。 断面、5R%赤灰。
40-5	黒褐色粘質土				

### 器台、不明器種、鉢（第87図、図版40）

器台の脚部は（1）（3）のしっかり安定性が高く、端部を丸めたもの、外面には、数状のにぶい凹線がみられる。（2）（4）は、よく似た方向に脚を広げ、端部は丸い。（5）はさらに、脚を広げ、水平面に引き出す。焼成は実に良好といえるが、胎土には粗砂、礫を含み、必ずしも優品ではない。

不明器種の内、（2）（5）は、技法もすぐれ丁寧な仕上げがみられ、胎土、焼成にもめだつ点がある。鉢（1）としたこの土器は、やや時期が下るもので、「ハ」字形のはりつけ高台を有す。又、器種は、水瓶かもしない。（森村）



第87図 出土須恵器 器台・不明須恵器・鉢

## 不明須恵器

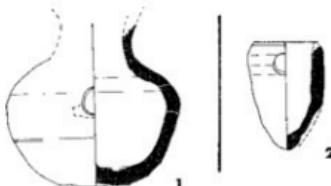
推測番号	出土場所 土 壤	法 量 (cm)	形 異 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
87-1	A-5 黒褐色粘質土	(推)口径19.8 残存高 4.4	口縁部は、上外方にのび、端部近くで外反する。 端部は丸い。	回転ナデ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面 2.5YR灰白。 外面 7.5YR灰白。 外面に自然難かかる。
87-2	A-3 黒褐色粘質土	(推)脚部径 19.7 残存高 2.5	外下方に開き、さらに外反して端部に至る。 端部は凹面をなす。	外面、カキ目調整。 他、回転ナデ調整。	胎土、密。礫を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N 5%灰白。 外面、N 5%灰。
87-3	A-4 黒褐色粘質土	(推)脚部径 19.2 残存高 5.3	外下方に開き端部は丸い。 口縁内面に段を有する。	外面、カキ目調整。 他、回転ナデ調整。	胎土、密。礫を含む。 焼成、良好。 色調、内面 1/2 B 5%灰白。 外面、N 5%灰白。 断面、N 5%灰。
87-4	E-6 黒褐色粘質土	(推)口径17.4 残存高 3.4	口縁部はまっすぐ上方にのびたのち、外反する。 端部は丸い。	内・外面とも回転ナデ調整。	胎土、密。1~2mmの白色粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、N 5%灰白。
87-5	C-1 黒褐色粘質土	(推)脚部径 14.6 脚部高 3.0 残存高 5.0	脚台部は外下方に開き、端部は凹面を成す。	回転ナデ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内面、N 5%灰白。 外面、N 5%灰。
87-6	E-6 黒褐色粘質土	(推)口径 7.4 残存高 3.3	口縁部は、外反したのち、内弯して上方にのびて端部に至る。 端部は丸い。	外面、カキ目調整。 内面、回転ナデ調整。	胎土、密。粗砂を含む。 焼成、良好。 色調、内面、N 5%灰。 外面、7.5GYH暗緑。
87-1 40-1	D-1 黒褐色粘質土	(推)高台径 7.5 高台高 6.0 残存高 5.0	底部はほぼ平らで、体部との境に外方にひく高台をつくる。端部は外折する平面をなし、凹線を有する。 体部は、内弯して上方にのびる。	内・外面とも回転ナデ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、内・断面、N 5%灰白。 外面、N 5%灰。
87-2 40-2	A-4 黒褐色粘質土	(推)口径29.6 残存高 6.0	口縁部は上外方にのび、端部で外反する。 口縁下に二条の凹線を有する。	内・外面とも回転ナデ調整。	胎土、密。5mm以下の礫を多量に含む。 焼成、良好。 色調、内・断面 N 5%灰白。 外面、7.5YR灰白。

### 趣 (B-6 出土、第88図-1 図版-38)

推定底部径 3.5cm 残存高 8.4cm を計る。内外面 N 5% 灰色、断面 N 5% 灰白色の密ながら白色の礫を含む焼成良好にして堅緻な胎土から成る。底部は平底に近く中央部をくぼませ、底部から立ち上がった器壁は内弯して体部最大径を体部上位にもつ体部を形づくり、頸部から上は外傾して上方にのびる。器体面は左方回転のロクロにより、底部外面には回転ヘラ削りの後ハケ目調整を施し、その他の面には回転ナデ調整を行っている。

**蛸壺 (A-3、C-2出土、第88図-2、3図版38)**

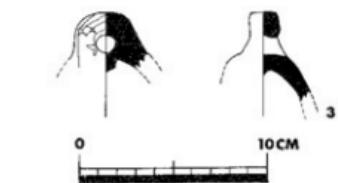
2は土師質のもので、推定口径 3.3cm残存高 5.6cmを計る。体部は砲弾型をし、口縁部がわずかに内傾し端部は丸い。口縁下に円孔を外側から斜め上方に穿っている。胎土はあらく白色礫と黒色粗砂を含み、内面は 5 YR 5/4の淡橙色・外面は 10 YR 5/2の黄褐色を呈し断面も 5 YR 5/4淡橙色である。焼成はやや不良といえる。3は須恵質のものである。釣り手部分とその周辺のみが遺存していた。胎土は密で内面 N 5%の灰白色、外面は N 5%の灰白色を呈し、焼成も良好である。



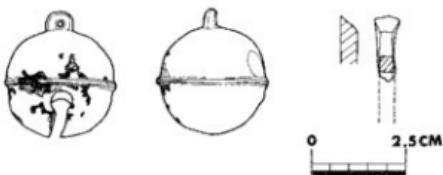
**鉈 (E-5出土、第89図 口絵参照)**

建物-5の柱穴4より約東へ 2.5m離れた地点で、地山にややくこんだ状態で出土した。遺存状態は良好、地金には青銅を用た全体に金メッキを施していたと思われ今もメッキが部分的に残っている。形状は直径30mmの球形で、上

下半球を打ち出したのち、それぞれを合せるための腹帶を有する。鉈は幅 7.5mm高さ 6mm厚さ 3.5mmの非常にしっかりしたものである。類例としては、兵庫県城崎町の二見谷4号墳、静岡註-1市財機山古墳出土のものがある。出註-2  
土状態、形状、類例等から考察して製作時期は6世紀前半と思われる。こうした鉈の着装例は、古墳出土の人物埴輪や動物埴輪などから知ることができるが、本遺跡が生活遺跡であることや鉈が小型であることを考



第88図 出土須恵器 鉈・蛸壺・土師質蛸壺



第89図 第1地区 金銅製鉈・鉄製釘

註-1 「二見谷古墳群」城崎町教育委員会 1975年

註-2 「静岡財機山古墳」静岡県教育委員会 1953年

**不明鉄器 (B-1出土 第89図)**

残存長17.5mmを計る。端部を斜めに切った角柱状を呈し遺存状態は良好であった。形状から

して鉢ではないかと思われる。

土師質土器 (A-5-6 B-1-2 C-1-6 E-6出土 第90図-1~13)

壺 (1), (4), (5), (8), (10), (11), (13)は口径 (推) 約10~16cmを計り、形態の特徴をみると、(4)と(13)は口頭部が基部から外反してたちあがり端部は丸くおさめるという似かよったところがあり、(1)は同じく基部から口頭部が外反するが端部に面をもち、体部の高い位置で肩が張っている。(8)と(11)もまた良く似た形をしているが、(8)が口頭端部を丸くしているのに対し(11)は端部に面をもち口縁も鋭い。また(11)には肩部に稜を成している。(1)は体部がやや内湾した後、口頭部が大きく外反し口径は体部の最大径よりも大きいと思われる。(5)は口頭部が直立してのび端部で外反する。磨滅が著しく断定はできないが、端部に面をとっていたと思われる。時期は、ともに中世のものと考えられる。

(1). 口径-(推) 15.8cm

胎土-密・2mm位の礫を多く含む、焼成-良好、色調-外・2.5YR 1/4にぶい赤褐色、内・7.5YR 4/4にぶい橙色

(4). 口径-(推) 13.5cm

胎土-密・1.5mm位の礫を含む、焼成-良好、色調-5YR 5/6橙色

(5). 口径-(推) 13.0cm、胎土-密・こまかい礫を含む、焼成-良好、色調-外・5YR 5/6明赤褐色、内・7.5YR 5/6明褐色

(8). 口径-(推) 9.9cm、胎土-粗、焼成-良、色調-7.5YR 5/6明褐色

(10). 口径-(推) 13.4cm、胎土-密・1mm位の礫を含む、焼成-良、色調-外・10YR 5/6明黄色、内・10YR 4/4にぶい黄橙色

(11). 口径-(推) 11.0cm、胎土-密・3mm位の砂礫を多量に含む。焼成-良好、色調-5YR 5/6橙色

甕 (2), (3), (6), (7), (9), (12)、は口径(推)約16~29cmを計る。形態の特徴として特筆すべきものは(6), (7), (9), (12)で、(6)は6個の遺物の中でも口径が一番大きく(推) 29.1cmを計り、体部最大径35cm前後、器高55cm前後を推測する大型甕であったと思われる。(7)は口頭部が肥厚で内傾した後大きく外反し端部に至って面をなしている。(9)は内湾しながらのびてきた体部の端を外側に折りまげ口縁としている。また折り返した部分の器内面をヘラ削りしたと思われる。(12)は甕(5)と似ており体部が内湾してのび肩部を形成した後口頭部が直立して上方にのびるが、甕(5)のそれより口頭部全体がこころもち外傾している。端部は甕(5)同様面をなしている。時期的には中世のものとみられる。

(2). 口径-(推) 22.8cm、胎土-密・2~4mm角の礫を多く含む、焼成-良好 (保存状態不

良)、色調—7.5Y R %明褐色

- (3). 口径—(推) 20.4cm、胎土—密・1~3mm程度の白色礫を含む、焼成—良、色調—7.5Y R %明褐色
- (6). 口径—(推) 29.1cm、胎土—密・0.5~2mmの粗砂、3mm角の礫を含む。焼成—良、色調—7.5Y R %橙色
- (7). 口径—(推) 19.2cm、胎土—密・1~3mm位の礫を多く含む、焼成—良、色調—外・2.5 Y %にぶい黄色 内・2.5Y %黄灰色
- (9). 口径—(推) 25.0cm、胎土—密・1~2mmの灰色礫を含む、焼成—良好、色調—7.5Y R %黄橙色
- (12). 口径—(推) 16.0cm、胎土—密・1~4mm程度の礫を含む、焼成—良色調—7.5Y R %明褐色、断面5Y R %暗赤褐色

#### 青磁碗 (A—2~4出土、第91図—1~5)

口縁部のみの(1)、(3)、(4)は共によく似た蓮弁文を浮き彫りにし、釉薬の発色度合も似ている。大きさは(1)、(3)が口径(推)13cm前後、(4)が約15cmである。底部のみが遺存していた(2)、(5)は発色が似かよっており、高台は削り出したうえ高台底面をヘラ削りしている。(1~4)は中国宋、元、明代にわたる龍泉窯系、(5)は同安窯系のものであり、ともに13~14世紀ごろのものと思われる。

(1) 口径(推)13.2cmを計る。体部はごくゆるやかに内湾しながら上外方にび、口縁端部で内面のみやや外反する。体部外面には、錦蓮弁文を浮き彫りする。釉薬はあつくかつては良好なガラス状であったと思われるが、現在はかなり磨耗している。胎土—密、10Y R %灰白色、焼成—良好、色調—外・5G Y %オリーブ灰色、内・7.5G Y %明緑灰色

(2) 高台径(推)6.3cm、高台高0.8cm、高台が外踏んぱりで、そのつけ根の部分に鋭い削り込みがある。また、底部・高台底面にヘラ削りを施している。釉薬は比較的薄く、高台底面・底部外面にはまったく釉はみとめられない。

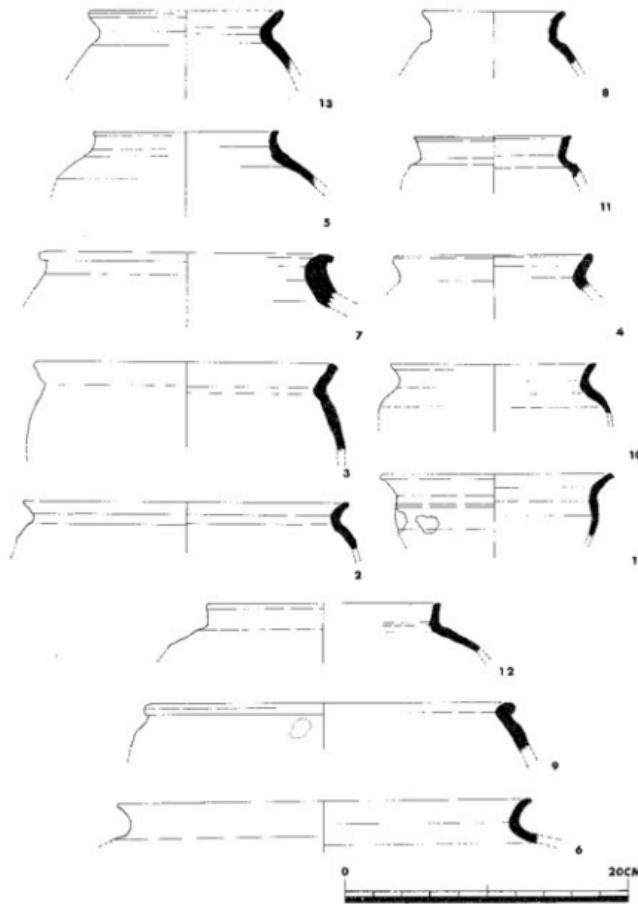
胎土—密、10Y R %灰白色、焼成—良好、色調—5G Y %明緑灰色

(3) 口径(推)12.8cm、体部は若干内湾気味にし、口縁部に向って薄く引き上げている。体部外面には(1)同様錦蓮弁文を施している。釉薬は厚く良好なガラス状を呈し、(1)よりもはるかに良好な遺存状態である。

胎土—密、7.5Y R %明褐色、焼成—良好、色調—内外共 2.5G Y %オリーブ灰色

(4) 口径(推)15.0cm、口縁部のみを残す点の内で最っとも大きい。わずかに内湾して上外方に向ってのび、口縁部でやや外反する。体部外面には錦蓮弁を彫りつけている。内外面と

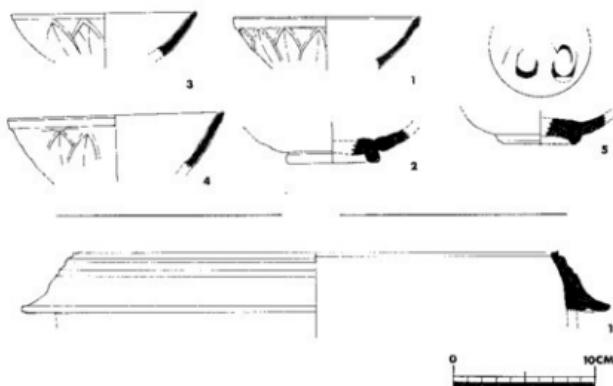
も厚く施釉し良好なガラス状を呈しているが、表面にかなりのスリキズをうけ残っている。  
胎土一密、10Y R 有灰白色、焼成一良好、色調一内外共 7.5G Y 有明綠灰色



第90図 土師器・土師質壺

(5) 高台径（推）5.0cm、高台高0.6cm、高台部はヘラ削りし、内面には回転痕が残っている。また見込み部分には蓮花文の一部とみられるアルファベットの「C」をくみ合せたような文様が片彫りされている。施釉状態は内面に比して外面がやや厚めであり、推測するに体部外面も良好なガラス状を呈していたと思われる。さらに(2)とは異なり、施釉が高台部までおよんでいるがやや粗雑である。

胎土—密 7.5Y R 有明褐灰色、焼成—良好、色調—内外共 5 G 有明綠灰色



第91図 青磁・羽釜形土器

#### 羽釜型土器 (A-3出土、第91図-1 図版38)

口径（推）33.7cm、口頸部は内傾してのび端部は面をなし、さらに外面には三条の凹線を施している。つばは下向きにつけられている。内面・外面・つばともに横ナデ調整を行っている。

胎土—やあらく、礫を含む、焼成—良好、色調—内 5 Y 有灰白色、外 7.5Y 有灰白色  
瓦器 (A-1.2 B-1.4 E-6出土 第92図-1~5、図版-39-1~5)

小皿 (1)は口径（推）8.5cmを計り、平坦な底部からゆるやかに内寄しながら立ちあがる。口縁部内・外面とも横ナデ調整を施し、内面はナデ、底部外面は指押えのままである。(5)は口径（推）8.9cmを計る。1同様平坦な底部からゆるやかに立ち上がるが、そのカーブはややきつい。底部外面の指調整の他は横ナデ調整である。

- (1). 胎土—密・1mm以下の粗砂を含む、焼成—良好、色調—内外共N%灰色 断面N%灰白  
(5). 胎土—密・細砂を含む、焼成—不良、色調—内・7.5Y%灰色 外・N%灰色

椀 (2)は口径（推）15.8cmを計る椀で、口縁部外面と内面に横ナデを施し、残りの面は

指押えのままである。口縁部は内湾気味に上方へのびる。暗文はみとめられない。(3)は底部からゆるやかなカーブで立ち上がるが体部は欠損している。器面は磨滅が著しく調整法は不明である。底部高台径 4.6cmを計る。(4)は内湾しながらゆるやかに立ち上り端部近くでやや外反する椀である。器面は口縁部外面および内面を横ナデ調整し、他は指押えのままである。口径(推)

14.4cm

(2). 胎土一密、1mm以下粗砂を含む、焼成一良好、色調

—内・N%灰白色 外・N%灰色 断・N%灰白色

(3). 胎土一密、礫を含む、焼成一良好、色調—内外面とも

7.5Y R %灰白色

(5). 胎土一密、2mm程度粗砂を含む、焼成一良好、色調

—内・N%灰白色 外・N%灰色 断 7.5Y R %灰白色

土製メンコ (B-1出土 第92図-6図版38)

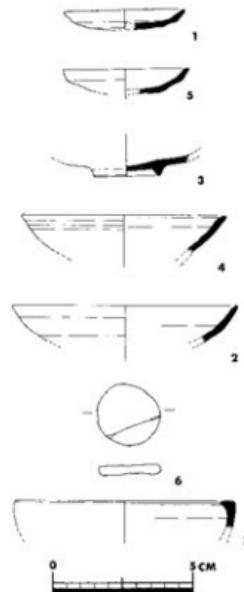
直径 4.4cm 厚さ 0.7cmを計る。上面10Y R %褐灰色、下面7.5Y R %灰褐色を呈するやや礫を含む密な胎土で片面に沈線状のすじが入っている。また面全体に指押えのあとが残っている。焼成は良好である。

不明陶器 (A-4出土、第92図-7図版-38)

推定口径 6.9cmを計る。焼成状態良好は胎土で、内側に水平に張り出す口縁をもつ器種・窯の不明な陶器である。内外面とも 2.5Y %のぶい黄色を呈する釉がかかっており、口縁下の内外面に灰白色の釉が帯状にかかっている。

瓦 (A-3.5 B-3、4、5 C-4.6 D-1、5 6  
出土 第93図-1~13)

平瓦 (1)は厚さ 2.1cmを計り側面は箆でまっすぐに切られ、端面は箆で面取りされている。上面に布目痕を有し、下面には繩目痕を残す。(2)は厚さ 2.0cmを計り、側面は箆でまっすぐに切られている。上面に布目痕を残す。(3)は厚さ 2.1cmを計り、側・端面とも箆で切られている。上に指圧痕・下面に繩目痕を残す。(4)は厚さ 2.6cmを計り、上面に布目痕を残し下面に格子叩きの痕がある。(6)は、厚さ 2.4cmを計る。側面は箆によって切られ下面に繩目痕を有する。(7)は厚さ 1.8cmを計る。端面は箆で面取りし、一条の沈線が横に走る。上面に布目痕を有する。(8)は厚さ 2.6cmを計り、側面は箆で知る。上面には布目痕、下面には繩目痕を有する。(9)は厚さ 2.4cm。側面は箆で切り、上面に布目痕を下面には繩目痕を残す。(10)は厚さ 1.2cmを計り、下面に繩目痕を残す。(12)は厚さ 2.1cmを計り、上面に布目痕が有り、下面には繩目痕が施されて



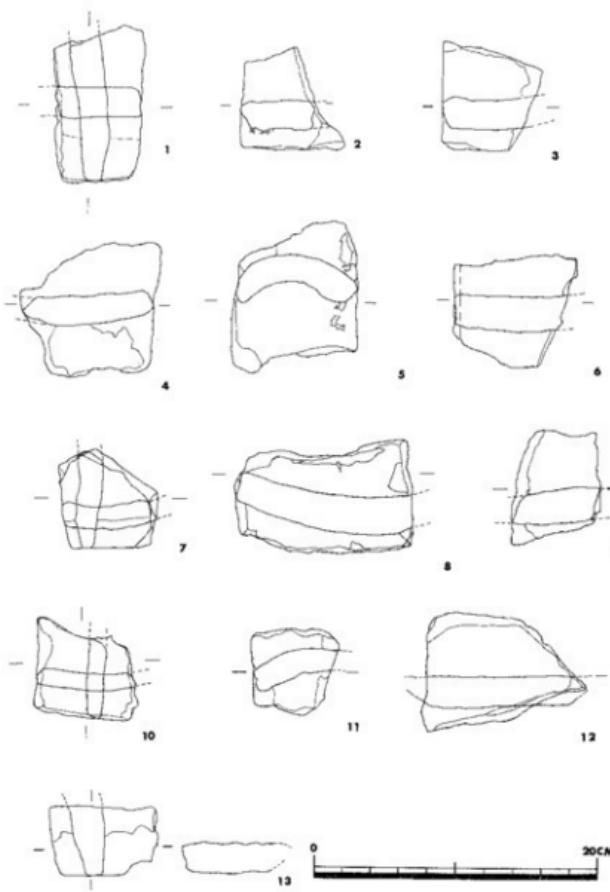
第92図 出土、瓦器・土製メンコ・不明陶器

いるがその端は箆で消されている。(3)は厚さ 2.0cmを計る。側面は箆で切られ端面は箆で面取りされている。

- (1). 胎土一密、細砂を含む、焼成一良好、色調—N%灰色
  - (2). 胎土—2~3mmの灰白色礫を含む。焼成一やや不良、色調—上下 2.5Y%灰白色 断10 Y R %黄褐色
  - (3). 胎土一密、4mmの礫を含む。焼成一良好、色調—上N%灰色 下N%灰色 断 2.5G Y %灰白色
  - (4). 胎土—0.5~2mmの粗砂を含む、焼成一良好、色調—上10Y R %明黄褐色 下10Y R %明黄褐色
  - (5). 胎土一やや粗、礫を含む、焼成一やや不良、色調—上 5Y %灰色 下N%灰色
  - (7). 胎土一粗、2~3mmの礫を多く含む、焼成一やや不良、色調— 2.5Y %灰白色
  - (8). 胎土一密、白色粗砂を含む。焼成一良好、色調—上 2.5Y %にぶい黄、下10Y %灰白色
  - (9). 胎土一密、1mmの白色粗砂を含む、焼成一良好、色調—上 5Y %灰 下10Y R %にぶい黄橙
  - (10). 胎土一密、白色粗砂を含む、焼成一良好、色調—N%灰色
  - (12). 胎土一密、1~2mmの白色粗砂を含む、焼成一良好、色調—上 7.5Y %灰 下10B G %青灰色
  - (13). 胎土一密、礫を含む、焼成一良好、色調—上下10B G %青灰 断10B G %明青灰色
- 丸瓦 (5)は厚さ 1.9cmを計る。側面を箆で切り、上面に布目痕を有し下面に刷毛目を施している。(11)は厚さ 1.8cmを計る。側面を箆で切り一条の沈線を走らせてある。上面には布目痕を残している。
- (5). 胎土一密、2~5mmの礫を含む、焼成一やや不良、色調—上N%灰白色、下 7.5Y %灰白色
  - (11). 胎土一密、2mm程の粗砂を含む、焼成一良好、色調—上 2.5G Y %灰白色 下N%灰白色 断N%灰白色

#### 摺鉢 (A-4 B-2, 3, 4出土 第94図-1~4、図版-38)

(1)は推定口径25.6cmを計る。胎土は内面 5B %青灰色、外面N%の青灰色を呈し、やや粗く黒色砂粗を含む須恵質であり、焼成状態はやや不良であった。また口縁端面には自然釉がかかり5G %暗緑灰色を呈す。回転方向左のロクロを用いて外面に回転ナデ調整を施し、また口縁部を上外方に開き端部に凹面を形成している。内面は不整方向のナデ調整を行っている。(2)も須恵質の摺鉢であり、推定口径は22.4cmを計る。5P %明紫灰色を呈する口縁部は、焼成がやや不良な白色の粗砂を含む緻密な胎土からなり、凹凸をなしながら外弯気味に上外方にのび端



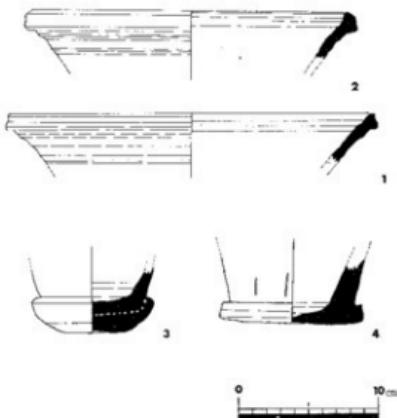
第93図 出土、平瓦・丸瓦

部近くで内寄し端部は丸く自然種がかかっている。器面は内外ともに左方回転のロクロを用いて回転ナデ調整を行っている。

(3)は須恵器の摺鉢で、底部径8.70cmを計る。胎土は緻密で表面に粗砂がみとめられる。外面は青灰色、内面は牙の明青灰色を呈する。右まわりのロクロを用いて底部をヘラ削りし、内部はナデ調整を施している。形態の特徴としては器体部を形成したのち、それに厚い粘土板を

はりつけて底部としていることがあがられる。またこの底部外面には自然釉がかっている。(4)は同じく須恵器の摺鉢で、外面N%灰白色、内面N%灰白色の焼成良好な自然釉のかかった胎土から成り、(3)同様器体の成形を行った後に粘土板を貼りつけて底部としている。底部と体部の境には凹線を有し、体部外面にはヘラ記号を有す。底部径は10.20cmを計った。

(十河)



第94図 出土、須恵質摺鉢・須恵器・摺鉢

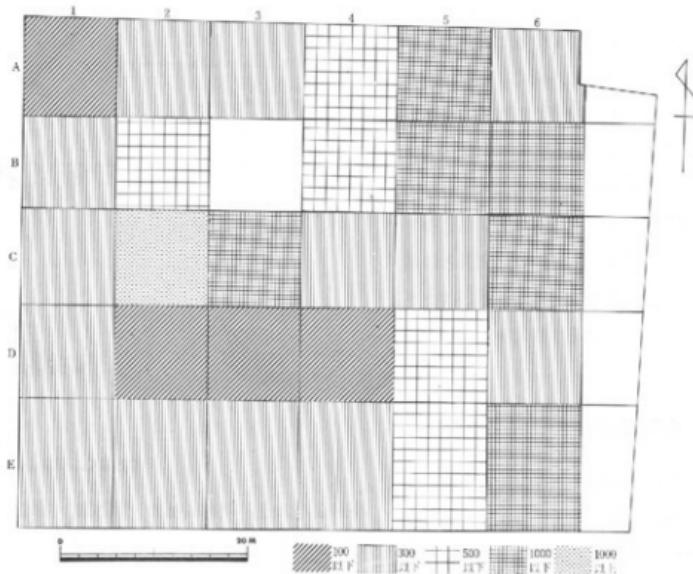
遺物は、包含層の上層部ではやや少なく、下層部の地山直上に多く見られるという傾向にある。遺物内容から見ると、上層部では瓦器・瓦等の中世遺物が多く、下層では、弥生時代の遺物が少數出土している他は、須恵器・土師器等の古墳時代の遺物が圧倒的多数を占める。

次に水平的分布であるが、これを遺構との関連で見るに古墳時代の遺物の密度図を作成してみた（第95・96図）古墳時代の遺物には地山にいく込むようにして出土したものが多かつたため（図版24）これによって、包含層内の遺物、特に古墳時代の遺物が、遺構とどう関連するのか、また原位置はどうなのかといった問題から、包含層内の遺物をどう把握すればいいのかを判定した。

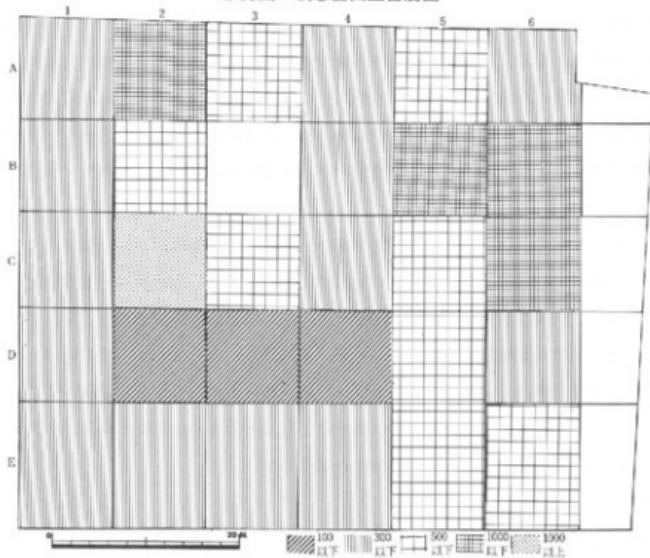
図によってわかる様に、全般的には東側域が多い。これは包含層の厚みに比例するものと思われる。また須恵器・土師器共出土率の高い地区はほぼ一致する。両者共C-2が最っと多く、B-5・6付近が次に多い。C-2は建物-2の東北端を含む地区である。B-5・6は、井戸状遺構-2・3のある地区である。逆に1列、4列、D-2・3・4、E列等は少ない。D列、E列は建物群や溝-2があり、B-4は井戸状遺構-1があるなど、遺跡の中心部分にあたる。以上の事から、遺跡の中心となる部分は、むしろ少ないことがわかる。したがって、遺構との直接的な関連はあまりないものと考えねばならない。

#### 保存状態

遺物は大部分が破片で、磨耗しているものが多い。また、復元できるものも少なく、各々破碎されてからかなり移動している様である。下層部の古墳時代の遺物は、上層部に比べてやや



第95図 須恵器出土密度図



第96図 土師器出土密度図

復元率が高く他の時代の遺物をほとんど含んでいないことから、この遺構に伴ない、さほど原位置から離れていないものであると思われる。(川口)

## 10. 須恵器に記入されたヘラ記号について

1地区・発掘調査によって検出した須恵器は、井戸状遺構-1から出土した完形品の遺物以外は前述したように破片化が著しい。

遺構内より出土したヘラ記号のある土器は2例にすぎず、大半は黒褐色粘質土の包含層より出土した。ヘラ記号のみられる器種は、杯蓋、身が圧倒的に多く、高杯、摺鉢に数例認められた。須恵器にヘラ記号が付加されている事は注目され、窯出土土器のみならず消費地に至る範囲まで論議が広がり多くの説が出されてきた。ここでは、1つの消費地でのヘラ記号を有する須恵器の資料を整理し分析してみたいと思う。

但し、今回、報告分のヘラ記号をもつ須恵器は、図化できないものが多いという資料的な難点はかくせないことを付記しておく。

### 1地区出土のヘラ記号の種類(第97図)

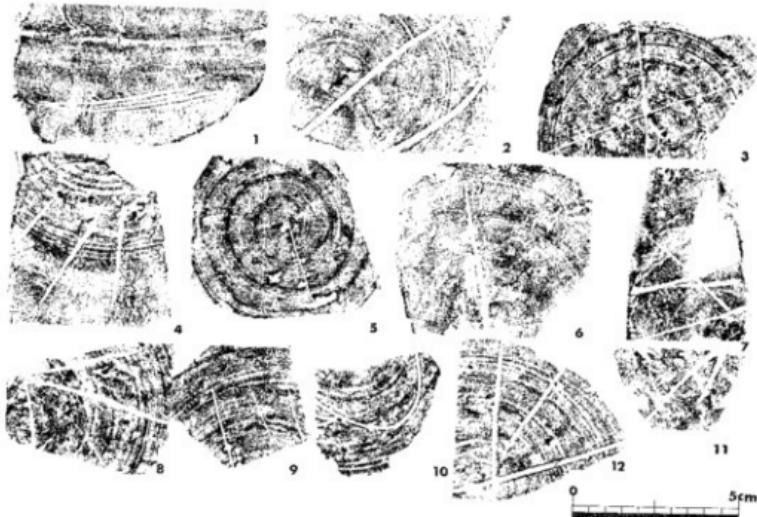
- 1.(5)(6)の「1」で最もも多いヘラ記号で線刻の方法に2種類に別かれた。各土器について、焼成、胎土、色調や技法によって分類を試みたが不可能である。総数72個体を数えた。
- 2.(2)のような直線を組み立てた「11」で計12個体分みられた。器種も杯身、摺鉢の外面に施され、テクニック、胎土、焼成等で分類されそうだが破片が多いので危険である。この記号にも、幅、深さによって2種ある。
- 3.(4)や(9)にみられる「川」をヘラ状施具によって、2種に別かれる施文方法がある。(4)と(9)では、一見、差異が知られこれが工人個人差によるものかもしれない。杯身、蓋の計5個体である。同一窯産で同一工人等について、製作技法からは見受けられない。
- 4.「メ」の(3)は、今回調査した出土土器中、17個体検出し、これもまた施文方法に、幅広く、深いものと、幅狭く、鋭いヘラ状施具で線刻した2種がある。色調、胎土、技法、焼成から3~4種に別かれそうだが確証されない。
- 5.「△」の形状を示し、鳥の足状と思わせる線刻(8)、(12)の2例しか見い出せなかったが、  
堺市、今池遺跡、陵南北遺跡等において、類似の記号は、比較的よくみられるヘラ記号である。
- 6.その他に、(7)、(11)のように完形品でないのがおしまれるが、直線を利用した複雑なヘラ記号があるがともに1例ずつのみである。

上述したヘラ記号について整理してみると次のようになる。

- 須恵器杯蓋、身は、ヘラ記号を有する総数122個体の内、119個体と大部分を占めており、高

杯、攜鉢は、極少である。又、1地区出土の須恵器 9,704個体の内、1.2%にすぎない。

- ② ヘラ記号を線刻した須恵器部分は、杯身（底部）杯蓋（天井部）の中央に大きく明確に施していた。高杯では脚部の基部と裾部、櫛鉢の底部近くにみられ、それらのすべては、外面に見受けられた。
- ③ 同一のヘラ記号をもつ須恵器を観察しても、胎土、焼成、色調、製品技法に細部の差異が知られ、同一記号でも工人差が考えられる。
- さらに、同一ヘラ記号でも数ヶ所の窯製品がありそうである。
- ④ ヘラ記号を施したのは須恵器製作段階のどの段階かは、製品や生やきの土器から推測して土器調製直後に、ヘラの先端部と把部を用いた2種類が確認できた。
- ⑤ 別途調整の必要ある高杯に、従来、言われている接合の目印としてのヘラ記号が存在する。
- ⑥ べつに、同一記号と思われるヘラ記号であっても、多少の差がみられ、工人別、又は、同一工人であっても線刻方法に差が出たものかもしれない。



第97図 須恵器ヘラ記号拓影

#### ヘラ記号の意味

この種のヘラ記号については、陶色古窯跡群の発掘成果や古墳、集落といった遺跡からの資料の増加に伴って「窯印—カマジルシ」とする有力説は即に否定されている。元来、土器生産を1つの種として生産地と消費地の有機的な関係を知る有力な手がかりとして十分に検討する

に必要な資料であろう。

その視点に立ち、大川清氏は、ヘラ記号を須恵器生産に従事する工人の分類や識別として把握し、また一方では需要者と供給者の約束ごととしてその使用者と工人集団への直接的な依頼、介在を示唆する久永春男説がある。

ところが、その後、各地での発掘資料に基づき、田辺正三氏はヘラ記号をしるす段階の限定と生産者から消費者の手にわたる経路の2点に注目され、石山勲氏は、①セット関係、②別途製作器種の接合時の目印、③製作者の識別、さらに福岡市広石古墳群出土の須恵器群を分析した山崎純男氏は、「ヘラ記号を有する須恵器は1個体で10個体前後の須恵器の量を意味して一」とした。

最近では、中村浩氏の窯内遺物出土状態の分析から窯の共同使用と「窯元的階層」といった中間層の存在を提示された論述がある。

本遺跡でのヘラ記号を有する須恵器は、保存状態上からくる資料の積極性に欠けるので前述の諸説に対し傍証出来ないが、一応、現段階で整理される点を述べてみたい。

① ヘラ記号そのものは、工人達が何らかの意識にもとづき製作調整後、記入したものであることは疑いのないものであるが、山崎説のいう単位を表現したものとするには、生産地、消費地での須恵器出土総量に対し、1～3.4%にすぎず、大きな隔たりがある。又、古墳出土品にはその総数に比して、ヘラ記号の付記されている率が50%を越す例が多く確認されている。

② 窯管理者、工人集団長の注文に応じて、工人各自が数量、製作時のメタの仕上げ、窯入れまでの製品の状態を観察する目安としていたかもしれない。

その数量の目安は、あくまで工人独自の目安であろう。

③ 同一時期、同一窯、同一床面において、3種のヘラ記号をMT 206号窯で報告されている以上、中村説は有力視されるであろう。つまり土器乾燥段階から手を離れるや窯入れ時においては、今や特別の土器製作者である工人達の関与する範囲でなくなり、窯管理者にその土器所有権が移行していくと考えられるからである。

「窯入れ」時の区別ではないとはい、「窯出し」後、消費者にわたる数次の中間介在者間での須恵器の単位や目安であった可能性は十分考えられる。従って、消費地には、数ヶ所の窯、又は工人集団より換言すれば数種のヘラ記号が消費地において混在する。さらに、中間介在者が生産者側又は、消費者側にも存在し得る可能性もあるわけである。

④ 古墳出土の須恵器のヘラ記号を所有する確率の高さは、次のように理解出来ないものどうか。古墳副葬品として消費者から特別注文された土器が工人集団の手を離れてから数次の中間介在者の目印となり、確実に消費者へと渡るものであろうし、確かに、古墳出土品の中

には、単純なヘラ記号もあるが、極めて複雑な記分の方が多い、その比は集落でみられるよりも高い。

それは、一般消費品、すなわち、集落が使されるものとは明らかに別途扱いされていようし、「I」「II」「III」「メ」といったヘラ記号をもつ須恵器が一般消費用に製作された事を物語っている。

以上のように、多分に億測の域を出るものではないが、生産地と消費地を結ぶパイプラインの解明には重要なもの言わぬ目印であり、土器生産にからむ、経済的、政治的な有機的関係を知り得る有力な手がかりであることは疑いない。(森村)

註一 森村健一 「今池遺跡」一学校建設予定地内発掘調査報告—今池遺跡調査会、堺市教育委員会 1976年3月

註二 北野俊明、森村健一 「文化財だより」No.1-2 堺市教育委員会 1975年10月

註三 大川清 「柳木県益子町淹ノ入窯址調査概報」「古代」19. 20合併号 1956

註四 久永春男 「記号状刻文について」『刈谷市の古窯』1958

註五 田辺正三 「陶邑古窯址群」1966 平安学園考古学クラブ

註六 石山歎 「鉢ヶ谷・山の前両古墳出土須恵器にみられるヘラ記分について」「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」Ⅲ 1972 福岡県教育委員会

註七 山崎純男 「広石古墳群出土の須恵器にみられるヘラ記号の検討」「広石古墳群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第41集 福岡市教育委員会 1977

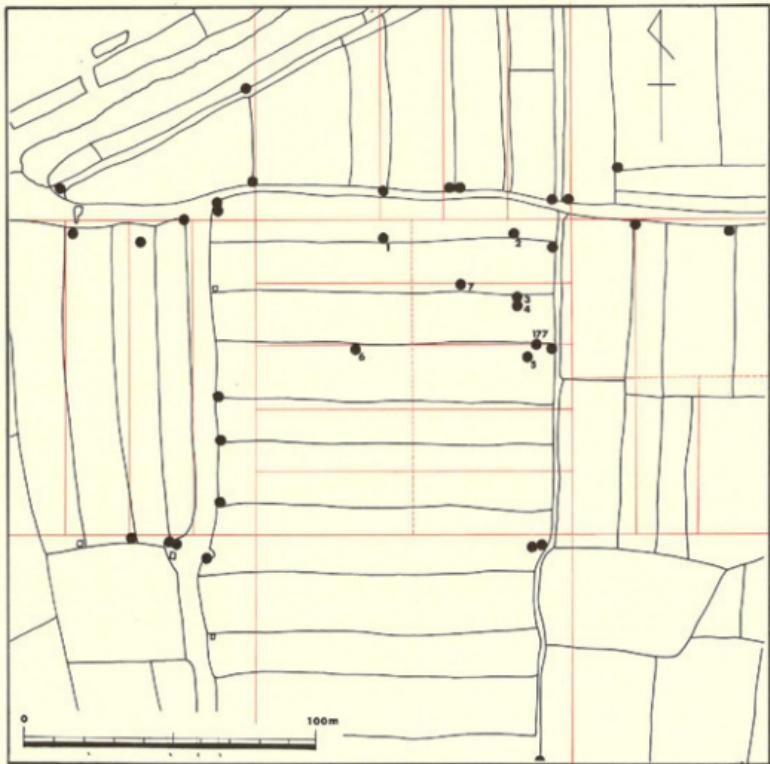
註八 中井浩 「須恵器生産に関する一試考」一和泉陶邑窯における陶組織について「考古学雑誌」第63巻 第1号 日本考古学会 昭和52年7月

## 11. 耕作用井戸

検出状況で観察する限り、特別の施設をもたない素掘りのもので、耕作用に設けられた野井戸7基を検出した。本来の井戸掘削は耕作土上面からと思われるが、判別が困難であったため発掘調査においては地山上面でしか確認できなかった。したがって井戸の平面規模で若干の拡大、深さで40cm程の加味を考慮しなければならない。

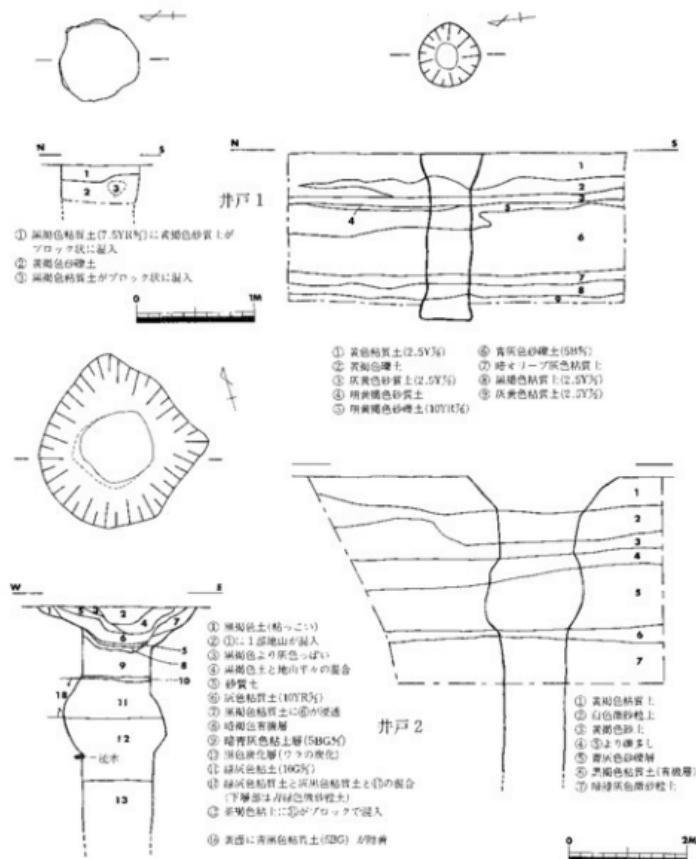
### 井戸ー1 (第99図)

A-2の西端に位置する。平面形は円形で、径1~1.14m、深さ2.8mを測る。掘り方は0.6mまで鉢状で、以下は径0.6mの円形で垂直に掘り下げられ、底直上で内弯する。底は径0.8mの円形で平坦である。-1.28mで湧水が得られる青灰色砂礫層に達し、砂礫層は0.76mある。井戸はその下の粘土層まで0.8mさらに掘り下げられており、湧水を十分蓄えていたようである。



## 井戸-2 (第99図・図版-26)

地区的北東隅に位置する。平面形は偏丸方形に近く、長軸 2.8m、短軸 2.4m を測り、深さは 5m まで確認したが底の検出は困難をともない不明である。掘り方は一 0.6m まで摺鉢状に傾斜した後、径 1.4m の円形で垂直に下がり、そこから一 1.2m まで最大径 0.8m をもって内湾し、再び径 1.1m の円形で径をやや小さくしながら掘り下げられていく。埋土は摺鉢状の部分までに落ち込んだ状態で 8 層の堆積があり、8 層目は有機層である。また -1.2m にある



第99図 井戸-1・2 遺構図

10層目はワラのような植物の炭化層がみられる。湧水は—1.6~2.6mの青灰色砂礫層の中位付近から大量に得られた。同位置での壁面の内寄は湧水による崩壊ともみれる。—2m地点で湧水が得られるにもかかわらず少なくとも—5m以上掘り下げられているが、貯水のための掘り下げ、あるいは湧水が得られる第2の砂礫層が存在する可能性がある。尚、緑灰色粘質土中より瓦片、木杭、砥石が出土した。

#### 瓦 (第100図-1・2、図版-39)

1は半瓦で厚さ2.0cmを計る。側面をハラで切り、下面に布目を残す。胎土は密で2~3mmの礫を含む。焼成良好。色調は下面で灰色(7.5Y6/1)、上面・断面で灰白色(5Y7/1)を呈す。2は博と思われる。端部最大厚で3.2cmを計る。側面をハラで切り、下面是やや凹みをもつ。胎土はやや粗で3mm程度の礫を含む。焼成は良好。色調は外側で暗オリーブ灰色(2.5G Y4/1)、断面はにほい黄橙色(YR7/2)である。

#### 木杭 (第100図-3、図版-39)

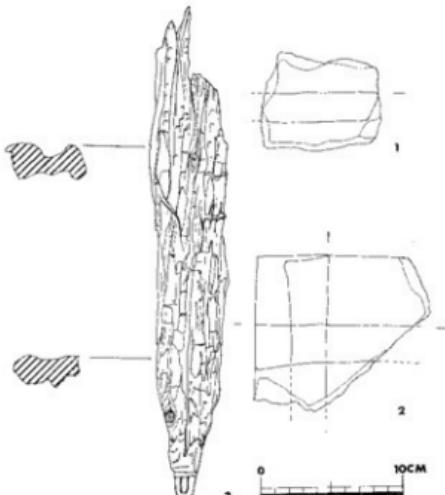
尖端部の残存で、本米は丸木と思われるが破損している。現存長35cm、

厚1.2~2.5cm(推定7.0cm)を計る。尖端部は8cmの長さを鋭く尖らせており。加工痕は明確に残らないが、斧のような工具で削りだしていると思われる。尖端は剥離して損傷をうける。

#### 砥石 (第101図、図版-35・36)

石材は紀ノ川流域を産地とする石墨鉄雲母結晶片岩である。柱状を呈する石材の正面と左側面の連続した2面を使用。A面の使用が最もはげしく全面が著しく磨滅しており、特にA面下部は面が落ち込む程に擦り減り、さらに左下方へ傾斜する数条の線条痕を残している。左側(B)面の使用痕はA面に比べてさほど顕著ではなく、部分的に石材の素地を残して主に下方に集中して磨滅した面が観察できる。同じく下方部には、長さ20mm、幅3mmを計る極めて浅い溝状の凹みがある。

また上方には平行した3ヶ所、中央部1ヶ所の計4ヶ所の縁に刻目状の切り込みがある。この切り込みはある程度石材の磨滅が進展してから(すなわち砥石としてある程度使用した)後



第100図 井戸ー2 出土遺物

つけられたもので、刻目部分の縁も磨滅しており、またその中心は鋭い条痕状に切れ込んでいる。耕作用の井戸から出土したこの砥石は、その大きさからみて手鎌等を対象として携帯されていたものではないか。

#### 井戸-3 (第102図)

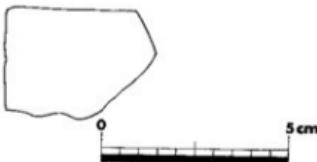
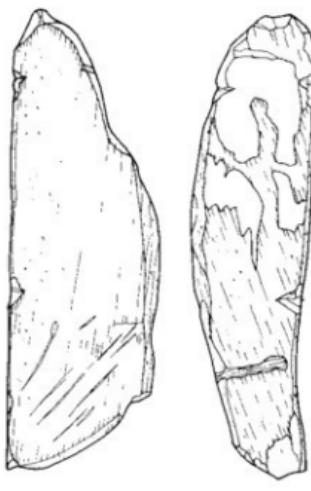
C-6の北側に井戸-4と隣接して位置する。平面形は楕円形を呈し、(長軸1.84×短軸1.6×深さ2.7m)を測る。掘り方は-1mまで上縁部でやや内傾した後鋤鉢状を呈し、(1.2×1.0m)の楕円形になる。以下-2.2mまで最大軸1.4mをもって内湾した後、径約1mの円形でやや狭まりながら垂直に下がる。底は(1×0.8m)の楕円形で、平坦である。埋土は10層あり多くは粘質ないし砂土であるが、-1.6m地点では凸レンズ状に褐色砂礫層が緑色微砂粘質土をはさんで推積していた。湧水は同じく-1.6m以下の浅黄砂礫層・同砂礫層から得られた。

#### 井戸-4 (第102図)

C-6の井戸-3の南側に隣接する。平面形は不整円形で径1.15m、深さ2.88mを測る。掘り方は-1.12mまで垂直に近い傾斜で、径0.8mの円形になり以下最大径1.3mの内湾を呈して掘り下がる。底は径1m程の円形で平坦である。埋土は5層あり、1層目は井戸-3と同じく灰色砂土がみられる。また湧水が得られるのは井戸-3とほぼ同じ深さ1.68m以下の浅黄砂礫層・青灰砂礫層からである。この地点において浅黄砂礫層は井戸-4で途切れ、井戸-3の底直上で深かった青灰砂礫層が南側へ上昇していくのが認められた。

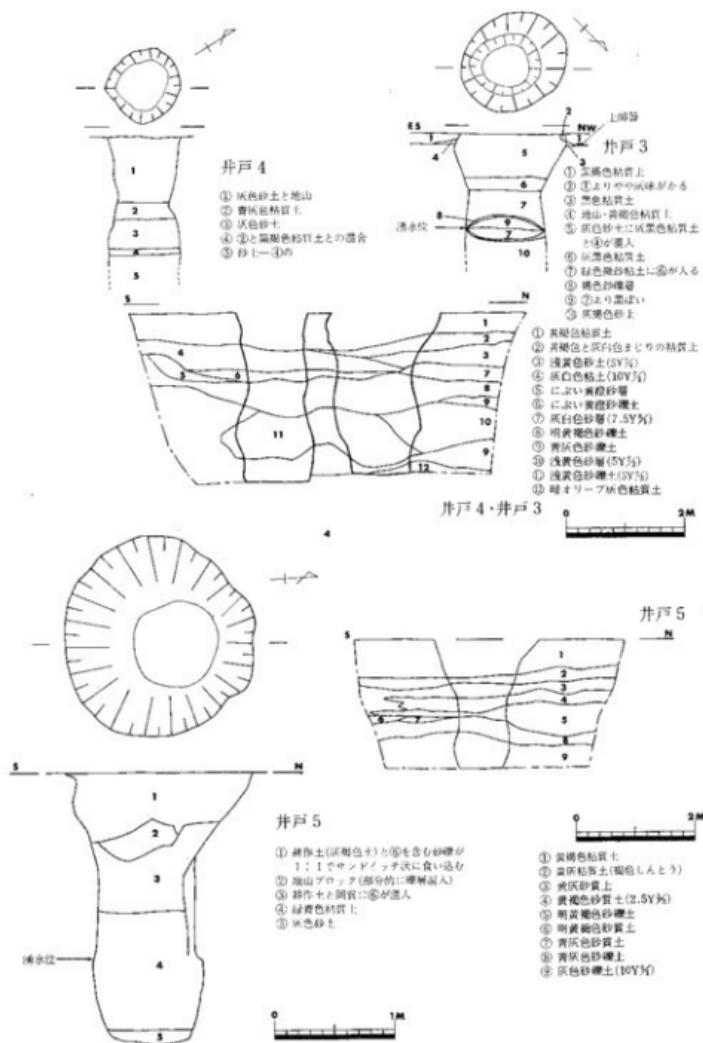
#### 井戸-5 (第102図)

E-7の北東隅に位置する。平面形は楕円形で(1.66×1.6×2.2m)を測る。掘り方は-0.84mまで一部内湾して鋤鉢状を呈す。以下-1.15mまで径0.7mの円形で垂直に下がり、さらに内湾して底へ至る。底は径0.7m程の円形で丸底に近い。埋土は5層あるが、3層目までに耕作土の混入がみられる。湧水は内湾する掘り方地点と同じ-1.54mの灰色砂礫層から得られ



第101図 井戸-2 出土砥石

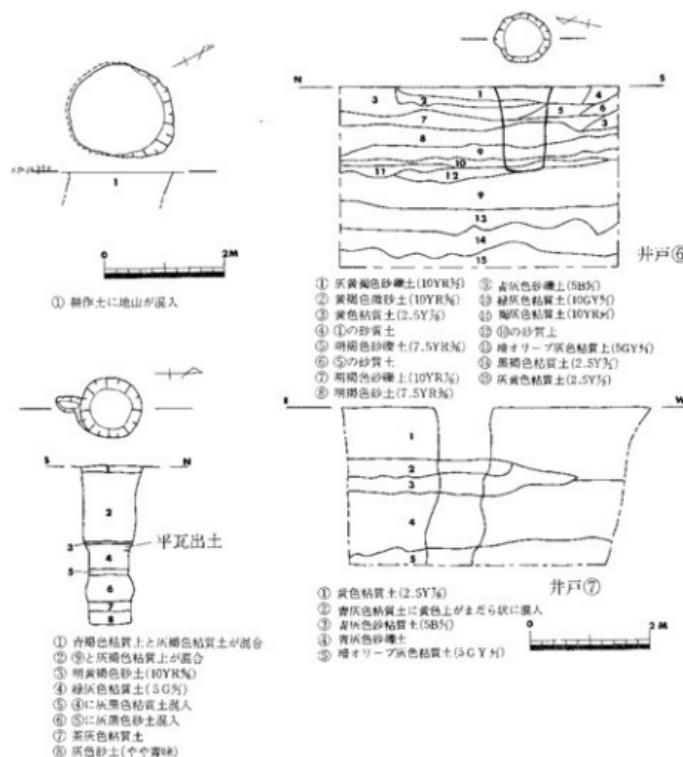
た。底直上の内弯は湧水による壁面崩壊と考えられる。



第102図 井戸 4・5・6・7 遺構図

### 井戸 - 6 (第103図・図版-27)

地区の西端、D-1地点で検出した。平面形は楕円形で ( $0.9 \times 0.8 \times 1.44m$ ) を測る。掘り方は  $-0.54m$  まで傾斜して径  $0.68m$  の円形を呈し、以下垂直に下がる。底は径  $0.64m$  の円形でほぼ平坦である。埋土は上層で耕作土の混入をみる。湧水は  $-0.96m$  の青灰砂礫層から比較的小量であった。したがって壁面の崩壊も少ない。



第103図 井戸 - 3・4・5 遺構図

### 井戸 - 7 (第103図)

B-4の南端に位置する。平面形は径  $1m$  程の円形で深さ  $2.68m$  を測る。上縁南側には ( $0.4 \times 0.2m$ ) の楕円形で浅い凹みが接する。掘り方は  $-1.44m$  まで垂直に近い傾斜で掘り下げられ、

以下径0.08mの円形で垂直に下がる。尚、-1.84~2.16mまで湧水によって壁面が内寄してえぐられる。底は径0.08mの円形で平坦を呈する。埋土は-1.24mの2層目まで耕作土の混入がある。湧水は-1.4mからの青灰砂礫層の中位よりやや上からである。

これらの井戸の配置と旧地形図（昭和35年当時）を照合してみると、井戸-5以外は耕作地の畦の南北に若干ずれて重なるようにして井戸が位置することが判明した。（第98図）しかし旧地形航空写真（昭和35年当時、図版-1）の景観には当地区で検出された井戸は存在していない。これは井戸-1が旧地形の畦と一致する杭列-1に上面を削平された検出状況（第6図）から判断すれば、井戸は旧地形の畦が設けられた時点で消滅したためと思われる。井戸は畦と耕作地の使用にできるだけ支障がないように畦と切り合わない程度の近接をもってつくられたと思われるが、とすれば井戸にともなっていた時期の畦と旧地形の畦の位置はほぼ同じであったといえる。ただ井戸-5は旧地形の畦、あるいは杭列との関連が認められず耕作地内に設けられたものと考える。井戸がつくられた時期については確証のある資料に欠くが、中世をも含む包含層の掘削からして近世以降が考えられる。とりわけ1704年の大和川改修にともなう水位の低下による耕作用井戸の必要にせまられたと推測するならば、その当時からの畦区画をほぼ遺存してきたことになる。ただ井戸-7は杭列-3に接しており、旧地形では認められない畦にともなっていたと思われる。つまりこれらの井戸は必ずしも同時期につくられたのではなく、畦の改修に呼応した時期差を有しているようである。そして畦にともなう井戸の存在は、畦の改修が先行する畦区画をある程度遺存させながら一方では消滅・形成の変遷をたどってきたことを示しているとみれるのではないか。さらに素掘りの井戸で湧水のために壁面崩壊を招く構造の井戸について長期間に渡る常用には疑問視する向きもあり、大和川改修にともなう水位の低下もさることながら、干魃による緊急時に設けられた可能性があることも留意しておきたい。

（古園）

## 12. 杭 列

地区的西側地域を中心に、東西にはしる6列の杭列痕を検出した。（第6図参照）杭痕は杭穴として確認したもので、木杭を遺存させるものはまったくない。遺構は包含層上面で検出されたが、本来の上面は耕作土表面にあると思われる。

平面形はほとんど円形を呈し、径20~30cmを測るが特に20cm前後のものが多い。深さは20cm程の浅い例が頻著で、中には地山にたっする40cm程を測る例がある。壁面は急傾斜して、尖底ないし丸底の底部に至っており、杭が打ちこまれた状態をよく残す。杭痕は一直線上に並ぶ厳密さはなく50cm程の幅をもって列をなし、また各杭の間隔でも接するもの、離なれているものが

あり一定ではない。

杭列①、P-2~4・11~17からなり全長13m。P-11~14の間ではかなり集中しており杭穴の近接がみられる。

杭列②、杭列①から南へ10mに位置する。P-25・27~31からなり全長4.5mを測る。P-20・30は北へ若干ずれて存在する。

杭列③、杭列②から南3mに位置する。P-34~36からなり地区西端より16m地点から、全長6mを測る。3ヶ所の杭穴しかなく、2mと6mの杭間隔がある。

杭列④、杭列③から南3.5mに位置する。C-1の北隔からのP-45~49・52・53よりなり全長14mを測る。P-49・52・53は地山までたっする深さを有する。

杭列⑤、杭列④から南へ14mに位置する。P-87・90・91・104~106・115・117~119・167・171~173・176からなり、地区の東西端で検出した。杭穴はかなり正確に一直線上に並び、一部を除き1.5m程の等間隔を保つ。

杭列⑥、地区の最南端に位置し、杭列⑤から18m離なれる。全長20mを測り、杭穴はいざれも地山にたっする深さを有する。

杭列-①・④・⑤は、旧地形（昭和35年当時の航空写真）の水田畦の位置と一致する。（図版-1、第98図参照）杭列間①~④-17m、④~⑤-14.5mは旧地形の畦間距離に等しい値である。杭列は明らかに畦に供なって設けられているが、杭列-⑤を除き地区西側のみでしか認められず、杭列は必ずしも畦全体に設けられていなかったと思われる。

杭列-②・③・⑥は他の杭列と平行して東西にはしるが、旧地形の畦との一致はなく耕作地に埋没した状態にある。この杭列-②・③・⑥は他の杭列に先立つ畦の存在ないし畦区画の推移を示す可能性がある。

この辺一帯は条里制の地割を今なお残存させているが、1地区にあたる耕作地の一町幅は旧地形で東西120m程を測りやや正方形である。しかし試掘地点と第4地区で検出された条里制造構（土層断面）では一町幅108mを確認しており、これを当初の基準とすれば今までにかなりの誤差を生じている。また旧地形の耕作地は東西に細長く7区分され、1区分幅14.5~20mを測り均等な分割とはいえず、この点においても地割の変遷がうかがえる。試掘地点と4地区の条里制畦を基準に一町幅108mで旧地形の区画を試みたところ、1地区があたる旧地形の区画は東畦で平行して西へ4mずれ、北・西畦も数mほど拡がっていることになる。また旧地形の航空写真によれば、この区画地の中央を南北にはしる1本の畦らしい痕跡が認められ、旧地形に先行する地割が東西で2段される半折形であったのではないかと推測させる。周辺地域の地割で半折形に近い景観を多くとどめており、その可能性は十分考えられる。さらに一町幅60歩で30歩×12歩の半折形地割をはてはめると1歩の長さは1.8mで、1段（30歩）の幅

54m、一筆（12歩）の幅21.6mとなる。これは復元した一町区画の東西畠と半折形の畦痕跡と思われる中央畠との距離54m、同じく復元した北畠と杭列—②間の距離21.7mとほぼ一致する。また杭列②—⑤間では20.5mを測りかなり近い値を示す。この興味ある事実は、条里制施行時の原形とまでは言及できないにしろ、少なくともある一時期においては一町幅108mの半折形の条里制地割が存在していたことを明らかにしているのではないか。そして杭列は耕作用の井戸と同様に条里畠の一部を遺存させながらも修正・消滅の変遷を物語っていると思われる。

（古墳）

- 註—① 試掘地点・第4地区は昭和53年12月～同54年3月末日に調査された。その結果、試掘地点で南北につながる条里畠断面3ヶ所、第4地区で東西・南北に直交する条里畠断面を6ヶ所検出した。畠はいずれも古墳時代包含層の中位程に幅1～2m、高さ0.2～0.3mで存在し、海拔高9.75m前後を有するが、遺存する旧地形畠畔のほぼ直下に位置している。試掘地点・第4地区で南北にはしる畠は平行しており幅（畠中心間）108mを測る。条里制地割の復元は、一町幅にこの108mを基準にし、試掘地点と第4地区で確認された南北・東西畠幅の中軸を起点として試みたものである。
- 註—② 明治18年測量（大日本帝国陸地測量部）の地形図によれば東畠地点に和泉国と河内国の境界がある。したがって復元条里畠と遺存する東畠間で誤差と思われた4mには長尾街道と直交する古道などの設定も考えられる。今後進められるであろう発掘調査によって明白になる事を期待したい。

## 第4章 結語

### 1. 調査のまとめ

この地区は、上町台地より北に小派生した洪積段丘中位上に立地し北、東側には広大な低湿地がひかえており東側を北流していた旧西除川の氾濫からまぬがれていた位置に生活を営んでいた。ここに居住した古墳時代の人々がいかに経済的、かつ社会的な重要性に位置付けらるかは、本遺跡の東西に形成された百舌鳥、古市古墳群の存在形態をみれば察知できよう。

20万m<sup>2</sup>に及ぶ広大な遺跡内、この第1地区ではわずか3,500m<sup>2</sup>を発掘調査したにすぎないが古代史復元に一資料を提供してくれた。この地区において検出した遺構を整理すると次のことがいえる。

「T」字型に設定された溝はよどみ状に流れ、掘立柱建物設定と同時に企画性をもって掘削されていた。この溝では5世紀後半期の出土土器も見い出されたが、6世紀中葉を主流としていたようで集落の廃絶と一緒に使用土器を投棄したものと考えられる。



第104図 大和川今池遺跡周辺 旧状図 「明治18年測量 大日本帝国陸地量部」抜粋

今回の発掘調査において最大の成果として掘立柱建物14棟を検出し、伴出土器や建物の主軸から建築段階を4期に分類した。しかし、数十年の間で4次の建て替えが成され土器編年を基準として判断するなら6世紀中葉を中心として上、下限に多少重複している事が確認された。

それらの掘立柱建物を分析するとⅠ期には単位集団の首長たる大型住居を構築しているにもかかわらず倉庫とおぼしき建物は存在せず、Ⅱ、Ⅲ期に推移するや単位集団の自立性が経済的にも社会的にも顕著に表出する。その具体的な事象として、円形に配設された掘立柱建物群内に大型住居と倉庫、さらには、構成員の住居にプラスして付属建物が3棟組み込まれた内の一棟は大型な建物で共同作業的な建築構造物と考えられるものも編入されている。Ⅳ期に属する掘立柱建物群は群中の北側に偏在する。前期より多少衰退が看取されるものの倉庫を含有させ一応の経済的、社会的な要素を死守しているかに見えるがこの期を最後にこの単位集団の終末へと迫る結果となった。これは、2地区（この地区より東南120m地点）での布留式土器とデボとした掘立柱建物、井戸状造構に居住をつづけていた人々は、この時期を最後にこの地を去ることとなろう。

さらに、掘立柱建物と最も相関関係にある造構である井戸状造構とそれに酷似する不明ピットをピックアップし、グルーピングすることによって、各建物築造期の住居と隣接して併存するタイプと単位集団存在期を通じて利用された井戸状造構に大別した。前者は、構成員の個人管理といった自発的性格をもち後者は、集団の首長を中心とした共同管理が認識された。

その内、人々の口をうるおす卓越した井戸状造構—1は、集落の廃絶期において一時期に3次にわけて「祭紀行為」を実施しながら埋め戻した。又、井戸状造構—1、2、3は掘立柱建物群とは隔離された位置に存在し単位集団の労働力の結集、意志疎通、共同作業場としての機能を果していたであろう「広場」と呼ぶべき「空間」を検出した。先に述べた「T」字型に配された溝は、掘立柱建物と有機的関係にあることは言うまでもないが「都市的」な企画性を十分考慮して集落の形成をおこなっている事が東側の第2、3地区的発掘調査成果によって確証付けた。

後世の新田開発によって耕作地と化した所産として井戸と条里制造構の復元作業上において裏付けともなる畦畔に打ち込まれた杭列を見い出した。現地表面より4~5m下まで掘削することにより地山の砂土層に達し豊富な湧水を得ていた。これは、おそらく宝永元年（1704年）に開墾された新大和川によって水位低下した事や狭山池をめぐる分水貫行、すなわち、水争いが絶えず田畠一枚毎に1~2ヶ所の掘削を余儀なくされたものである。出土遺物としては、黒色粘質土下層より弥生時代に属する石鏃、大型船刃石斧、不定形刃器、畿内Ⅲ、Ⅳ様式の土器片を微量ながら包藏するが大半は6世紀中葉を中心とした大量の須恵器群である。又、出土遺物の中に、数点の蛸壺が含まれておりこの地に住んだ人々の海岸での生活様式も復元する事を悩裏にとどめる必要がある。

その他、特記すべき遺物として金銅製鉛が完形品として地山に食い込んだ形で出土し当時の生活の一端が知られる。形態的には、6世紀前半に類型するものである事から多年の「伝承品」

としての性格を備えていたものと考えられる。

杭列もふくめ、律令体制下での経済的、政治的基盤となった条里制造構が現在に至るまで数次の変遷を経て多少の差異が認められているが大畠については不動である。中・近世期の遺物の多い中で興味深いものに、13~14世紀頃の龍泉窯、同安窯系青磁の精巧な製品が出土した。これは、この地区の東南に「薬師堂」「堂ノ北」「堂ノ西」「堂ノ前」と北東の「觀音堂」といった小字名を残存していることから、早計かもしれないが寺院との関係を問題提起し、さらに今後の発掘調査資料の増加に期待したい。

地籍図には、1地区に相当する部分に「大阿世」「フシワ」と呼ばれる小字名が、北には「繁木田」西には「提漆」「サカタイ」「カラキ田」南には「打合」「今井池」東には「龍殿(龍田)」が見受けられ地元の人々からも確証を得た。

このようにしてみるとこの地区は、古墳時代においては微高地に掘立柱建物群を立地させそ



第105図 今池遺跡内小字名

その東に隣接して、水田址と推察する低地が存在していることも見逃せず、今後これらについての有機的関係に肉迫する必要がある。

この地域が律令体制下の基盤と成り得ていたことは、条里制遺構と密接に関係している事を再述しているが、「長尾街道」を基準とした条は規則正しく北上するもの里については松原市側と堺市側との復元に差異を生じているが、出水疋巳氏の多年にわたる緻密な小字名調査が松原市全域にわたって行なわれた結果、この地区的東側、現耕作用畦畔が里の起点となって東進していることが判明した。ただし、この里の起点は厳密には現畦畔より東側、数m（4m）とすべきで南北に走る古道路と復元され後は考古学的な裏付けを持つのみといえる。日本書紀、<sup>註-2</sup>推古天皇21年（613年）「又自難波至し京置大道。」<sup>註-3</sup>が実証できればさらに官道と土地区画制度の企画性に繋がることは疑いない。

古墳時代に生活していたこの地の人々の後裔として單脈的に直結するのは多少の無理が生じるとしても依羅連「新撰姓氏錄河内國諸番」物部依羅連「新撰姓氏錄・河内國神別」「日本紀記推古天皇16年8月発卯」依羅造「統日本書紀・神護景雲元年7月末」依羅屯倉阿彌古「日本書紀、仁德天皇4年9月、皇極天皇元年5月已來」

依羅屯倉阿彌古「古事記・中、開化天皇」

余佐美能伊氣「古事記・中、応神天皇」などの文献上から捨い上げる事ができるが、氏族の性格付けには相当な時間を用するであろう。

このように地盤の一片ともとれる発掘調査対象面積と一定水準に達した行政的発掘調査内容や保存対策手段は今後も肩の荷をおろすことのできない段階に入ったままであることを認識し、最低100年以上の視野範囲で歴史的事実を組み立てる作業が必要であると自責している。

末筆になったが本報告書作製は、川口、古園、十河諸氏の労苦の易物であり、満腔の謝意を申し上げます。（森村）

註-1 福島雅藏「近世・河内山地の分水賛行」『封建社会の村と町』大阪史学会昭和35年10月  
「堺市におけるため池の調査研究」堺市経済部農学土木課 昭和44年3月

註-2 出水疋巳「松原市における条里」郷土風土記『中学の広場』64号 大阪府公立中学校教育研究会 昭和49年12月

註-3 「堺市の古代城域と古代豪族」堺市史、続編、第1巻、堺市役所、昭和46年1月  
武藤 直「古代2」堺市史、続編、第6巻、付岡、堺市役所、昭和51年3月

註-4 「松原における小字名と小字図」松原市史資料集、第4号 松原市役所、松原市史編さん室 昭和50年3月

註-5 岸 俊男「古道の歴史」古代の日本、5 近畿 昭和45年1月

## 2. 記紀にみる「依羅池」について

「池」が古代において経済的、政治的な重要性に肉薄することは何人も認知している事実でもある。古代に築造された池は、小河川をダム的構造に形成することによって流域の灌漑に十分活用され、人々の生活を支え強いては組織の経済的基盤や力の堅持に直結する。とりわけ、池が築造出来る強大な労働力、管理能力は、古墳築造にもある意味では匹敵するものであろうし、人口増加に伴う耕作地の増大化は言に及ばず生産物余剰が即、経済力、組織力、さらには政治的な力のバロメーターとなつた当時では「池」は必然的な所産物かもしれない。

こうしてみると「依羅池」いわゆる、大和川・今池遺跡を中心とする地域は、陶器山台地より端を発した西除川・左岸に位置し、地質的には中位洪積段丘上に耕作地を求める必要があるものの土壤も生産性の高いものではない。「池」が後世、気候条件や地質と相俟つてこの地方の溜池の多大と共に今日に至る長い歴史において緊迫度を包蔵してきた。

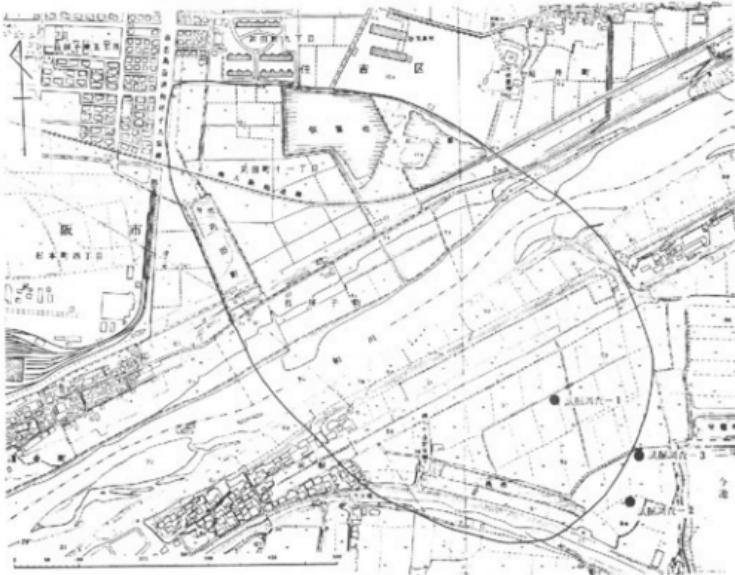
さて、大和川・今池遺跡に歴史的に脈絡しているであろうことを想定しつつ、「依羅池」について若干整理してみたい。依羅池について触発されたものとして次に述べる文献が見受けられるが頗著に論述したものは目に止まらない。<sup>註-1</sup>

森 浩一は「河内湖の南側と新たに安定させた広大な水田地帯に給水……」と述べ依羅池の性格を灌漑用と考験しさらに日本書紀・仁徳天皇43年9月条に触れて「中国の池でやっていた養漁・補鳥というようなものへも少し注目しなければならない」と説いている。出水睦巳は「古墳時代に西除川を利用、帰化人の力をかりて造られた……」と推定すると共にこの池の所在地を松原市池ノ内町「弁天池」を当該されたのは新大和川の付け替え前は西除川が弁天池に隣接していた事実と「河内志」の内容を吟味してであろう。この池は、西除川をダムサイト的に堰止めていることも地質図からも読み取っている。三浦圭一は「中位の洪積段丘である上町台地上に灌漑用水池が築かれたのは依羅池が最初である」と述べ土壤の劣悪さからくる生産性の低さを指摘された。<sup>註-2</sup><sup>註-3</sup><sup>註-4</sup><sup>註-5</sup>

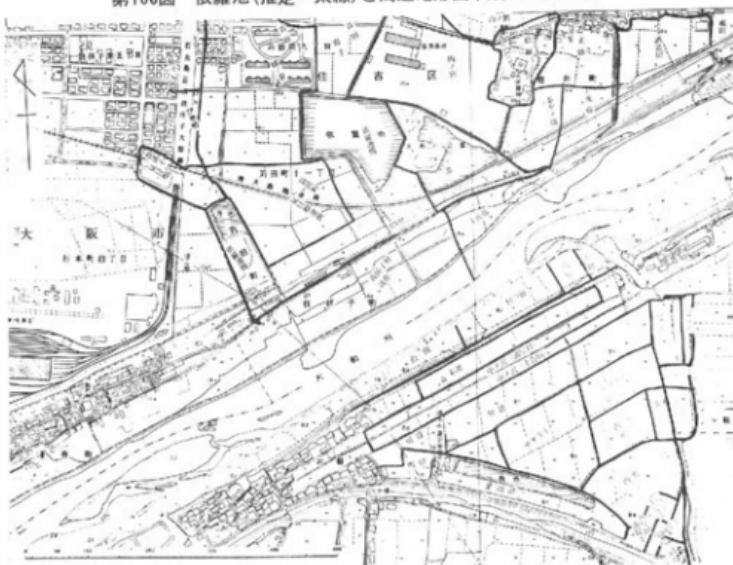
森 浩一は、依羅池の範囲を大阪市住吉区庭井町から松原市天美西に推定し17世紀には上流の狭山池の給水範囲であったと述べ大和川付替前にも依羅池の機能の変遷が有り得ることに注目した。<sup>註-6</sup>

間 晃は、依羅池の所在地を大阪府堺市池内町の地としているが行政区画上、松原市池内町の誤記であろう。これも「河内志」の記述に依存している向がある。<sup>註-7</sup>

国史大系・日本書紀では、大阪市住吉区庭井町に1haの池があるが大和川の付け替え前は大和川南岸の北花田・芝・油上の諸村域（今の堺市北花田、松原市西天美町）に跨る30数ha（10<sup>註-8</sup>）



第106図 依羅池(推定一太線)と周辺地形図(昭和36年作製)



第107図 依羅池と周辺地籍図

万余坪）の大池であると註釈を付加した。

過去、10万余坪の大池で開墾以来、台地一帯の灌漑用水として活用され河内の狭山池と連絡していた事を「大依羅神社」保存の古図より判断すると同時に依羅池の選択を台地中やや窪地に形成していると考えられた「住吉区誌」がある。  
註-9

堀田啓一は、依羅池を大阪市住吉区庭井町から堺市常盤町3丁付近に設定しているのには賛同出来るが、その池に流れ込む水系を新西除川として図示しているが川床の0.9と依羅池底高を考えた場合又は、新西除川の開鑿が新大和川付替え時に伴うことが考掘しているのでこの解釈には同意し難い。  
註-10

これらの散見した依羅池に関する記述の範囲は、基礎資料の欠如にかかる問題であるが次にその資料を整理分析したい。

日本書紀・崇神天皇62年10月条に「(是月)造\_依網池\_造」古事記・崇神天皇条「又、是之御世、作\_依網池\_、亦作\_輕之酒折池\_也」とあり記述をそのまま鶴巣にするならば古墳時代に依羅池を築造し、農業生産性を高揚していたことになりこの記述の前後にも他地域において「池」を造る記述が再三みられ、特に、河内の狭山地方に「池」「灌漑用水路」に充当するもの構築するという具体的な文章が表出する。

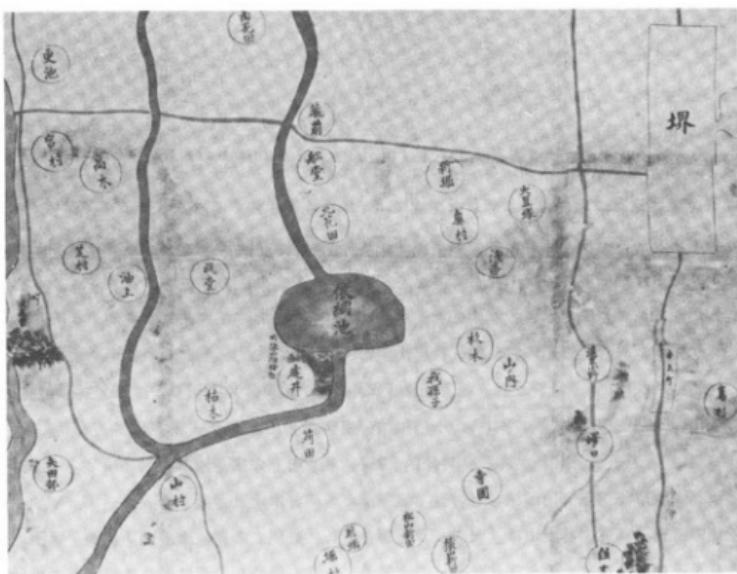
渡来人である秦人の技術を利用して土木工事を完成させていた事が古事記・仁徳天皇条「又役\_秦人\_作\_茨田堤及茨田三宅\_、又作\_丸瀬池、依網池\_、又掘\_難波之掘江\_而通海、又、掘\_小椅江\_、又定\_墨江之津\_。」と記されていた。

日本書紀・応神天皇13年9月条に「瀬豆多摩能、豫佐瀬能伊成珥、奴那波区利、破陪鷦区御羅珥、委遇比菟区、御破摩多伎能、比辭俄羅能、佐蔚区御羅珥、阿俄許居呂群、伊夜干古肱辭氏。」とあり依羅池には、ひつじぐき科の多年生水草である尊菜すなわちぬなわが池に繁茂した情景を歌にしたものであろう。

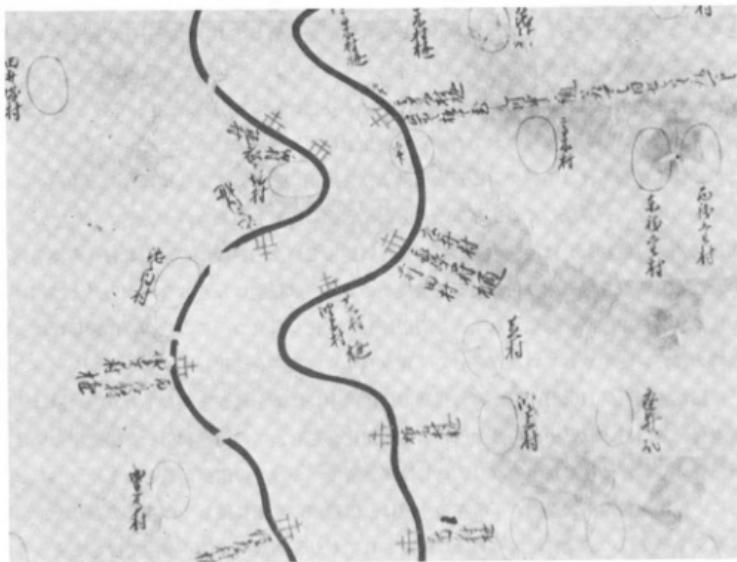
古事記・応神天皇条「水溢る 依網の池の 墓材打ちが 挿しける知らに 尊縁り 延へけく知らに 我が心しづ いや愁にして 今ぞ悔しき」と歌い上記とほぼ同義の内容が見受けられた。

日本書紀・推古天皇15年冬条には「足歲冬、於\_倭國\_、作\_高市池・藤原池・肩岡池・菅原池\_。山背国、掘\_大溝於栗隈\_。且河内國、作\_戸刈池・依網池\_。亦每レ国置\_屯倉\_。とみられ屯倉の設置とともに数多くの池の築造が正史に記載している旨を考えると当時の古代国家において国単位の池の築造がいかに重大なメリットを所持していたかを窺わせる。

上述した「古事記」「日本書紀」の関連事項を摘出したが推古天皇条以前については、いわゆる「記紀伝承」と呼ばれる歴史的事実として歴史像に組み込むことは多大な危険を含んでいる。あくまで伝説にすぎないものの記述が少くないばかりか、たとえ、歴史的事実として存在



第108図 「大和川開鑿前地方図」(一部) (大依羅神社所蔵)



第109図 表題・不明(大依羅神社所蔵)(一部)

したとしても時期的に難問を含有していることは従来より指摘されているが歴史的事実として  
註-11  
一概に無視することは早計である。

時代が下り、河内志には「丹比郡池内池、在<sub>註-12</sub> 池内村。広三百余畝。或曰<sub>註-13</sub> 依羅池」<sub>註-14</sub>とみえ、これを現在の行政区画にあてはめると松原市池内町所在の弁天池（上ノ池）が相当するが以下、上げる資料から判断しても所在地には一抹の不安を残す。溜池として現存する「依羅池」に隣接して大阪市住吉区庭井町33番地に鎮座する旧式内社、大依羅神社所蔵絵図について見識してみよう。

「大和川開鑿前地方図」には、狹山池を中心に東除川、西除川さらに西端に描写された依羅池に注ぐ小河川が見られ古道の竹ノ内、長尾街道と同一と復元される幹線道が記入されている。旧西除川は「狹山池」「とどろ池」（北野田城西側開地）を経て「天見宮」すなわち阿麻美許食神社の東側を北上する。図示の中央の小河川は「南余部」「とどろ池」の西除川より分流して「日置莊原寺町」の東、「石原町」の西、「中村町」の東、「我堂町」の東を流れ、大和川・今池遺跡を貫通し、大阪市住吉区矢田部枯木町付近で依羅池からの分水流と合流する。

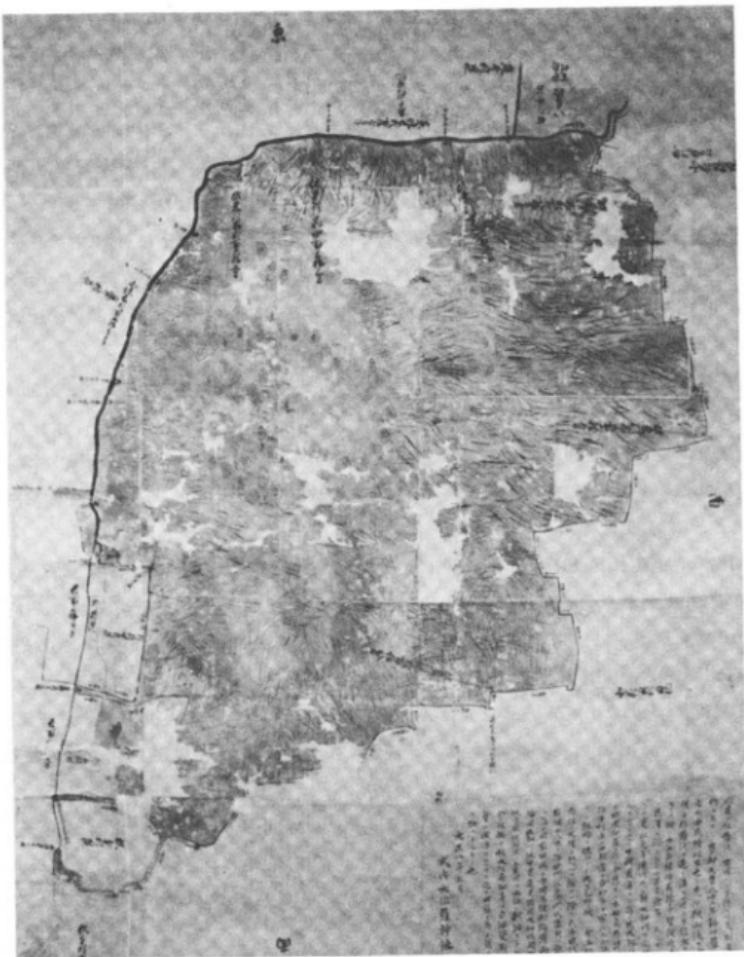
問題の依羅池に通ずる河川は「大六」から端を発し「野尻」の東、溜池の「長池・蓮池」のあたりを通り、「金岡町」の東、「北花田」の守屋池・新池を経油し、西に振り常盤町万才橋付近の位置から依羅池に流れ込み、大依羅神社北側をまわって先の河川と合流していることが現地形と考え合せ復元出来る。この河川も「土地条件図」と判断しても洪積段丘上の凹地ないし浅い谷間にそって流れ、後世、溜池化している。

又、図版・上部に東西に走る一直線が大津道であり、難波との交通路となっていた道路が「山村」から西除川に沿って描写されており洪積台地東縁辺に沿っているようだ。

この絵図の作製年代は不詳であるが狹山池より東除川に通じる人工流路の存在（東除げ）と新大和川の不記入から推して延宝3年から宝永元年間に描写されたものである。

表題・不明（第109図）は、狹山池の分水貢行に従っていた旧西除川の周辺名村への灌漑用水がいかなるものかを樋の取り付け位置を表現している。依羅池はみられないが以外と需用地と樋が近く当時の川床高が想像されようし周辺地形の変化も目立つ。この絵図の作製年代は、再表装時の裏打に使用されていたが辛じて「寛永14年」の文字を透視した。

「依羅池古図」（第110図）の描かれた当時の依羅池中には葦・蓮が繁茂しており西北隅はすでに杉本村、苅田村、我孫子村の3ヶ所による新田化が進む。この池を利用した灌漑用の樋は10ヶ所見受けられ、それに対する取り入れには4ヶ所で「今池」の南側が最も大きく「川幅3尺」とある。現在、松原市天美西六丁所在の今池は、依羅池の東南に接して存在しており今池の存在は寛文9年7月の油上村絵図にも既に記載されており新西除川に伴う溜池ではなきそうである。この今池は条里制造構の2坪四方に整然とはまり込み、その施行後の所産である。このこ



第110図 「依羅池古図」(大依羅神社所藏)

とは、何も今池に限定されず周辺の洪積段丘上の溜池の多くに看取される。さらに、北及び東側は曲線を描き人為的な提を考えさせるが南・西は田畠の入り込みで凸凹が顕著である。これが洪積段丘上の凹地を選択した自然提である。この絵図の製作は、不詳であるが新人和川開鑿前である事は明白である。尚、この絵図の右下に端書きされている内容から大正天皇即位大札の折「氏子田代冠者信網18世1孫田代在右衛門氏」より寄贈を受けた大依羅神社が大正8年3月に表装し直したとある。

次に「大和川池中貫通見取図」も作製時期不明の絵図ではあるがこの段階での依羅池と新大和川の関係を知る好資料である。前の絵図に比してスケッチ化が著しく東・北側はやはり提の人為的さを推し計る線引きであるし、「依羅大明神」すなわち大依羅神社の位置から最近の行政地図との復元基準となる。北側には3ヶ所の樋がみられ、刈田村、我孫子村、杉本村の各村の村額が北西に新田開発されたことが確認されるが前の絵図とさほど拡大化していない。南端は「除川」すなわち今日の西除川中で「長池」は依羅池の残存と思われる。西側・提は蛇行しており新田化が相当進んできていることに気が付く。

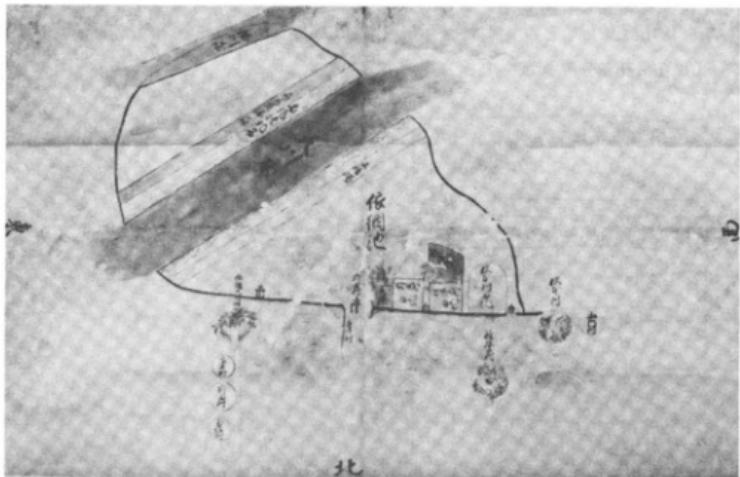
新大和川の南側沿って落掘川（今井戸川）が、依羅池を貫通しているが現在は、埋め尽されたその池の東側で大和川に落ちている。

依羅池の位置を明治以前に作製された精度の高い資料をプラスしてみると大依羅神社所蔵絵図の内容はかなり重要性をもち合せるとともにその位置をやはり大和川、今池遺跡西隣に比定することには疑問はない。

明治の地形図（図版104）は、明治8年に大日本帝国陸地測量部の手によって作製されたもので古墳・古道はもちろん旧地形の復元に大いに役立っている。依羅池と思われる地域には「長池」「依羅」「升池」といった溜池が合計6ヶ所が集中している事が看取される。特に一見して驚くことに先の絵図に描写された北・東・西の池の提が地形図に小道路や戻として表示している。依羅池に流れ込んだ小河川も絵図とほぼ同一地点に取り付いている。新大和川貫通後、新田開発によって「庭井新田」等に埋め戻されその周辺はもとより大和川、今池遺跡もそれによって削平され犠牲となった。

昭和35年作製地形図と航空写真から判別出来る事実に3点上げられる。  
①依羅池と考えられる推定地は別辺よりも一段低い。  
②大津道を基準にして施行された条里制遺構が推定地に限定されて大きく西に畦畔を振る。  
③絵図にみた東・北側の提は、道路、畦畔として合致する。（第106・112図）

「土地条件図」から観察した依羅池推定地は、洪積段丘中位に含有する上河台地上の東縁辺に位置し東と西の提に沿ってo.p 10,000mの海拔高が走るが浅い谷間や凹地としては図示されていない。さらに、依羅池にそそいだ小河川は、洪積段丘上の浅い谷間や凹地を流れ「守屋池」



第111図 「大和川池中貫通見取図」(大依羅神社所蔵)

「新池」「大泉池」「頭泉池」中村町の「尻池」「大池」石原町の「新池」を結ぶ線が浮び上がると同時にもう一本は金岡町から「長池」「森池」「菅池」に通じる浅い谷間が開けし洪積段丘上の雨水を集水し依羅池にそいでいたであろうことを築造時に溝って後元可能なのはダム状に堰止められた多くの溜池を媒介とした。

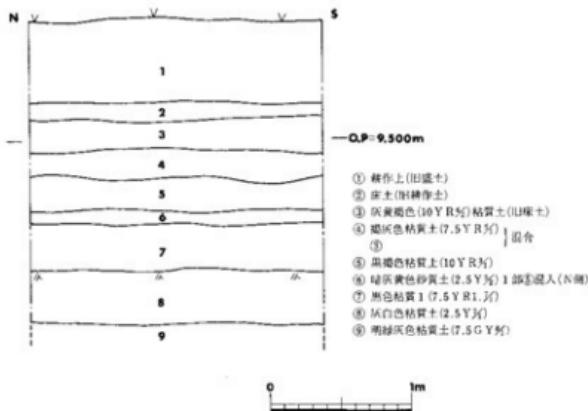
もう一つ蛇足的な資料として小字名によっても依羅池の推定地を確証付ける意味で地籍図がある。「依羅池開」「薗田町見付畠池開」「池」という小字が残存し今の「升池」も小字は「依羅池開」とあり依羅池の西端が判る。大和川南側沿いの「末池」もその池の名残りであろうし東側と東南隅には依羅池の堤を想定される「五反田浦堤下」「川向堤下」「堤添」がある。

#### 考古学的調査

##### ①—試掘地点—①、所在地—堺市常盤町3丁12-9（第106図）

上記地点に「堺市宅地開発指導要綱」に基づき昭和54年6月19日埋蔵文化財存在確認の試掘調査を実施した。最近の土地区画整理事業に伴い旧耕作土上に0.5m近くの盛土し畑作を行っていた。調査の起因が上記によるもので約2m×2mのグリッド調査であったが「依羅池」と推定するに足る資料を得た。層位としては、明緑灰色粘質土、灰白色粘質土の地山上に黒色粘質土、暗灰黄色砂質土、黒褐色粘質土、褐灰色粘質土+③、灰黃褐色粘質土、旧耕作土の6層

が堆積していた。それらは、すべて水平層で⑤⑦層には多量の植物遺体を検出し、その有機質の間層には一時期のはんらんによる流れ込みがみられた。ただ、各層からの出土遺物は確認されない。旧耕作土と池底との差異は、1.18mで池底のo.p.は8.60.3mを計測する。尚、各土層について現在、花粉分析中である。



第112図 試掘調査 ①土層図

#### 試掘調査地点—②

末吉 勇氏所有地の堺市常盤町3丁16番地について昭和52年11月8日試掘調査を実施したが1m近い盛土下には0.2mの旧耕作土がみられ、その下には地山の暗黄褐色砂質土(0.5m)黃褐色粘質土(2.0m以上)が検出されたが池底の通有な土層は示していない。これと同一層が試掘調査地点—③でもみられ依羅池の範囲外で堤に相当するものと考えられる。

依羅池の位置、性格付けに結び付く十分な発掘調査資料に欠如する現状では臆測の域を越るものではないが傍証した資料によって整理してみよう。依羅池は、河内志に記された場所よりもむしろ現在の行政区画では北は大阪市住吉区刈田町11丁目、我孫子町、南は新大和川を挟んだ堺市常盤町三丁目に属しラグビー場に類似した平面形を呈した上で約35万m<sup>2</sup>に及ぶ池であると考えられる。各資料を総合的に判断して大和川・今池遺跡の西側に隣接して所在し西・南側は旧地形上の高度から自然堤を主とし、北側は多分に人為的な築堤が考えられる。  
註-16  
小河川として「丈六」付近から洪積段丘上の雨水を採取しながら浅い谷間に流れ依羅池に達し森 浩一や「住吉区誌」で触れているように灌漑用溜池として役割を果していたのであろうが、森 浩一の養魚等の説も脳裏に納めておく必要もある。又、森は、新大和川付替工事前にも

依羅池の機能の変遷を指摘している。

註-18

2・3の試掘調査ではあるが依羅池の存在を十分確証付けられ文献資料を裏打ちした。今までの大和川・今池遺跡の発掘調査資料から考え依羅池と考えられる東側には1地区が立地し6世紀代の掘立柱建物を14棟分について検出したのは洪積段丘中位に位置する。その東側は一段低くなり氾濫平野としての低地でもあり古墳時代における西除川の氾濫を物語る。この遺跡の人々が経済的かつ社会的な位置付けを行った場合、安定した農業余剰生産物を確保するには低地での耕作行為もさることながら土壤的に恵まれないものの洪積段丘中位上で生産行為が重要なウェイトを占有していた。その上に於いて、洪積段丘上を流れてきた小河川を依羅池に集水し灌漑する必然性はあろうし、依羅池北方の上町台地東縁辺を灌漑していたと考えられ、又、土壤が貧弱な為、生産性を少しでも高める努力として池底に堆積した有機質層を引き上げ耕作土とする實行がごく最近まで存在していた。

大和川・今池遺跡の存在と関連付けて依羅池の築造時期を古墳時代にまで溯らせたが記紀編纂時期にはもちろん、その池の存在は確定出来る。又、野上丈助は、池の立地を分折して4型態に分類し、この依羅池を第3形態すなわち“丘陵開折谷を堰とめた溜池”とらえ、その製造年代を推古期と比定している。その後、宝永元年（1704年）の新大和川工事に伴い北流して西除川を付替えと城蓮寺村の排水を行うため落掘川を開発した。

註-19

以後、依羅池は大阪市側と堺市側に分断され、660余畝の面積に減少し「味衛門池」ないし「仁右衛門池」と呼ぶようになったとあり「和泉名勝岡会」中でも依羅池は表現されている。宝永2年姫路城主及び明石城主が池床を埋めて田畠とし水草が密生し水面が見えなくなったとある。明治2年、堺県に合併するまで庭井村領に所属しその名残りとして「庭井新田」が児受けられる。現在は、宅地化が著しく依羅池も造成され田畠は希少となりその面影はない。

註-20

註-21

註-22

ところで、古代の依羅池を管理運営に従事していた氏族については「位置と環境」で前述しているので詳細は避けるが物部依羅連、依羅宿彌に代表される依羅諸氏の本貫地として妥当であるが文献上の十分な考査が必要である。又、依羅池の存在が古墳時代にさかのぼるのなら大和川・今池遺跡に居住した人々が支配していた可能性も十分考えられる。

試掘調査によって依羅池の存在を確定付けたものの切札的な考古学的調査に期待したい。依羅池を中心に大和川・今池遺跡、北南田遺跡、住居遺跡、山ノ内遺跡が取り組み各遺跡共に弥生時代～中世に至る幅広い遺跡として認知されているが本格的な発掘調査に依る成果を得てない。今後「依羅池」とその周辺での考古学的な調査によって総括的な歴史像が浮き彫りにされよう、古代の依羅池に紫紅色の花を咲かせたじゅんさいを再び、歴史の産物として復元し花咲かせることがあつてほしい。（森村）

- 註－1 「依羅池」の名称については、記紀には「依網池」とあるが大阪市住吉区庭井町に現存する「依羅池」をそのまま呼称したので他意はない。
- 註－2 「池」『日本古代文化の探求』
- 註－3 出水睦己、池上裕造、田中信治「天美の沿革」「松原市の史蹟、天美編」昭和45年3月31日、松原市教育委員会、松原市郷土史研究会
- 註－4 国土地理院「大阪東南部」1:25,000『土地条件図』昭和40年6月30日
- 註－5 三浦圭一「第5章、莊園制の展開と堺地方」『第一編、古代』堺市史、続編、第1巻、堺市役所、昭和46年1月25日
- 註－6 森 浩一「第3章、生産の発展とその技術」「第三章、古墳文化と古代国家の誕生」大阪府史第1巻、大阪府 昭和53年3月31日
- 註－7 関 晃「日本書紀・上」「崇神天皇62年10月条」註釈、日本古典文学大系67 昭和42年3月31日
- 註－8 国史大系、第一巻・上、日本書紀、崇神天皇62年10月条 註釈
- 註－9 「住吉区誌」住吉区役所、昭和28年7月1日
- 註－10 掘田啓一「住吉周辺の考古学散歩(1)」「すみのえ」春季号、第16巻・第2号 昭和54年4月15日
- 註－11 津田左右吉「古事記及び日本書紀の研究」1924年
- 註－12 「河内志」越前関祖衡撰 丹波並河永 校補
- 註－13 絵図については、大依羅神社官司 桜谷喜久磨氏の御好意により実見させていただいた。記して謝意申し上げます。
- 大依羅神社、由緒略記**
- 「大阪府神社史資料」大阪府 全1巻、昭和8年
- 秋里藤島・柳原喜兵衛「摂津名勝図絵」寛政10年
- 井上正雄「大阪府全志」大阪府全志発行所 第5巻の3
- 岡田権志「摂陽群談」享保2年
- 「摂津誌」
- 「大阪府誌」大阪史編集専門委員会 第5—5 明治36年
- 井上元造 稿本「名葦探杖」
- 「大阪府史蹟名勝天然記念物」第5冊
- 「摂津名所図会大成」
- 所在地 大阪市住吉区庭井町33番地
- 御神祭 建豐波豆羅和氣王、底筒之男命、中筒之男命、上筒男命、
- 社格 府社(現在)式内社(旧)
- 文献 続日本紀「仁明天皇承和4年7月甲子朔丁卯、修造摂津國依羅社、為宮社」

三代実録「清和天皇貞觀元年正月27日、從五位下勲入集大依羅神四位下」

同年9月8日、庚申、攝津国大依羅神集遣使奉幣、為風雨祈焉

陽成天皇元慶元年6月14日、奉幣大依羅甘雨

同三年6月14日癸酉、遣使大和國広瀬、龍田、攝津國住吉、大依羅等四神社、奉神賊」

延喜式・神名帳「攝津國住吉郡大依羅神社四座並名神大・月次・相當・新舊預80鳥祭」

「堺市史」続編、第1巻、第1編、古代、堺地方の古代豪族に「天平宝字2年8月、依羅宿彌の姓が与えられた時、神奴意支奈と祝長ら53名のものにも依羅物忌の姓が与えられている。

祝、神奴は、大依羅神社に奉仕し隸属する身分をあらわもの………」と記されている。

明治42年、式内村社草津大歲神社、村社或孫子神社、同入阪神社、同山三内神社、大山作神社、無格社道祖神社の六社を合祀した。

註-14 「松原市における小字名と小字図」『松原市史資料集』第4号 松原市史編さん室 松原市役所 昭和50年3月31日

註-15 註-4に同じ

註-16 立命館大学教授・日下雅義氏の御教示をも得ている。

註-17 「住吉区誌」住吉区役所 昭和25年7月1日

註-18 註-5に同じ

註-19 野上大助「河内における池溝開発についての覚書」『大阪府の歴史』第9号 大阪府史編集室 昭和53年3月

註-20 山口之丈「松原年代記」(近世)『松原市史資料集 第3号』長谷川文書、松原市史編さん室、松原市役所 昭和50年3月31日

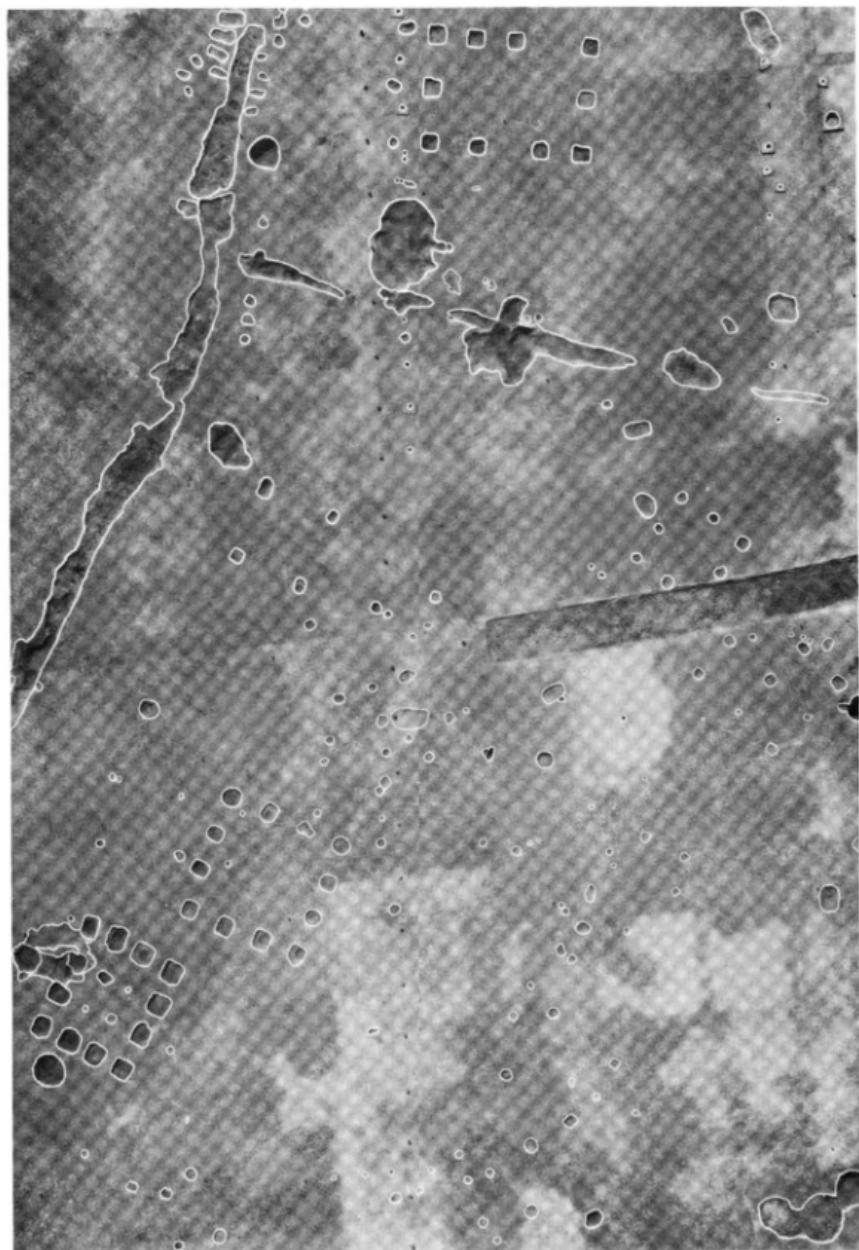
落掘川は、新大和川開鑿時は、現在よりもさらに西側に伸びていたことが大依羅神社所蔵絵図や地籍図の「川辻」「中ノ沢」にその痕跡を残す。

註-21、22 註-13に同じ

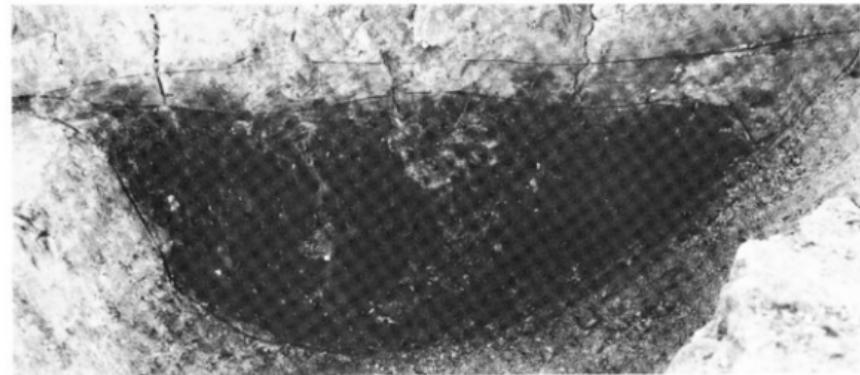
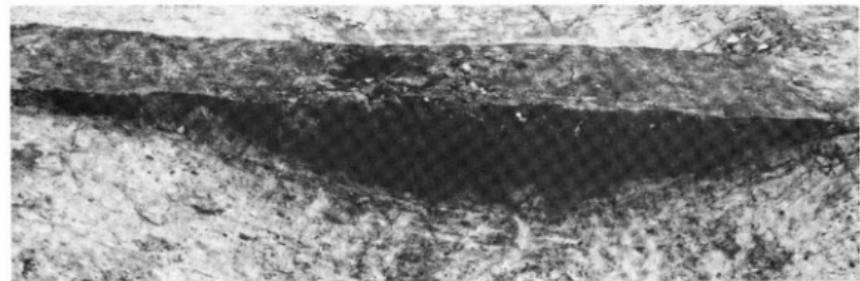
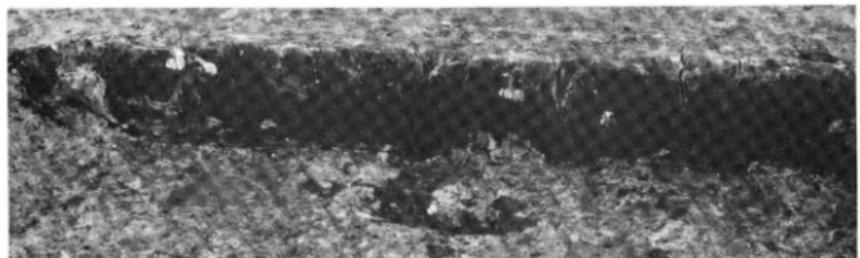
# 図 版



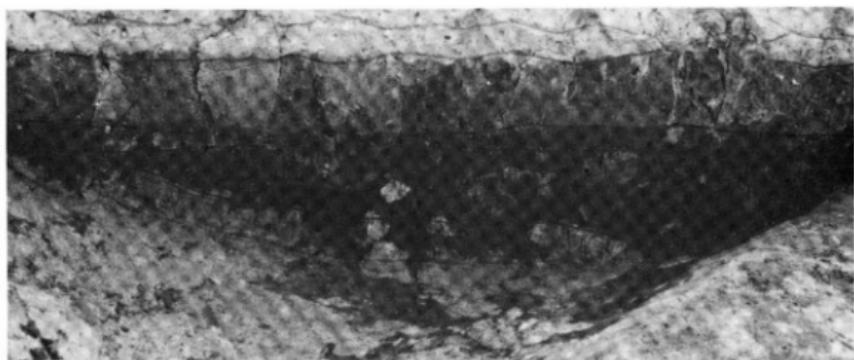
今池遺跡航空写真(昭和35年撮影)



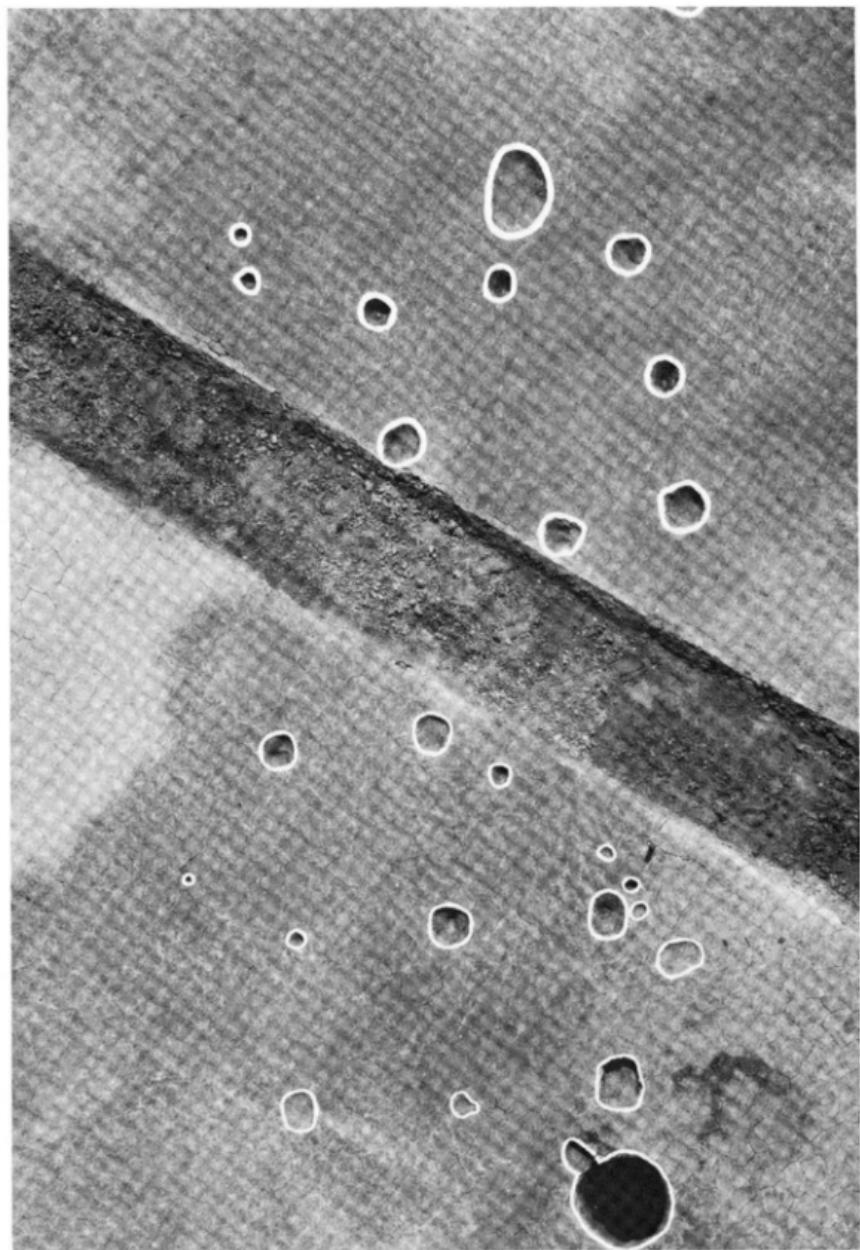
1 地区遺構全体写真



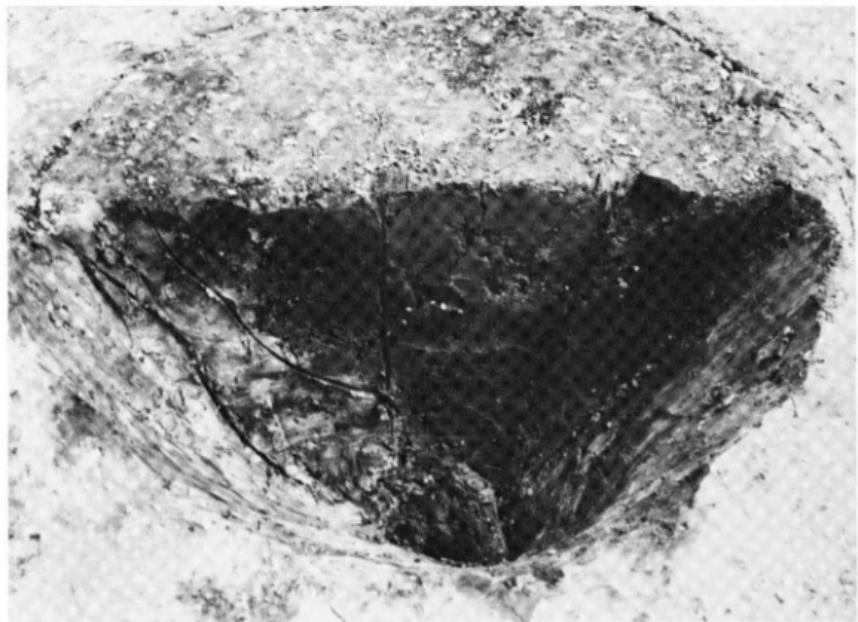
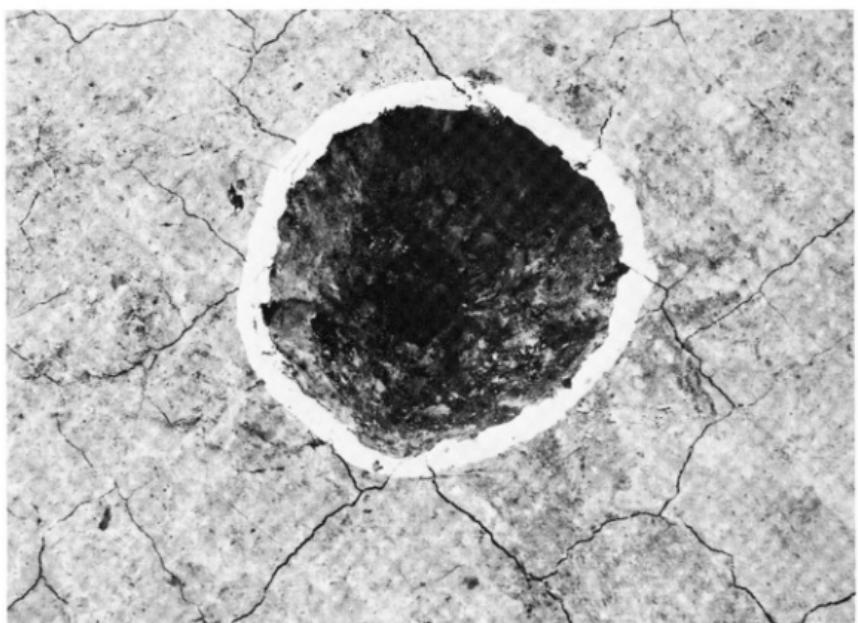
溝-1 D-2, B-3, C-3, 2



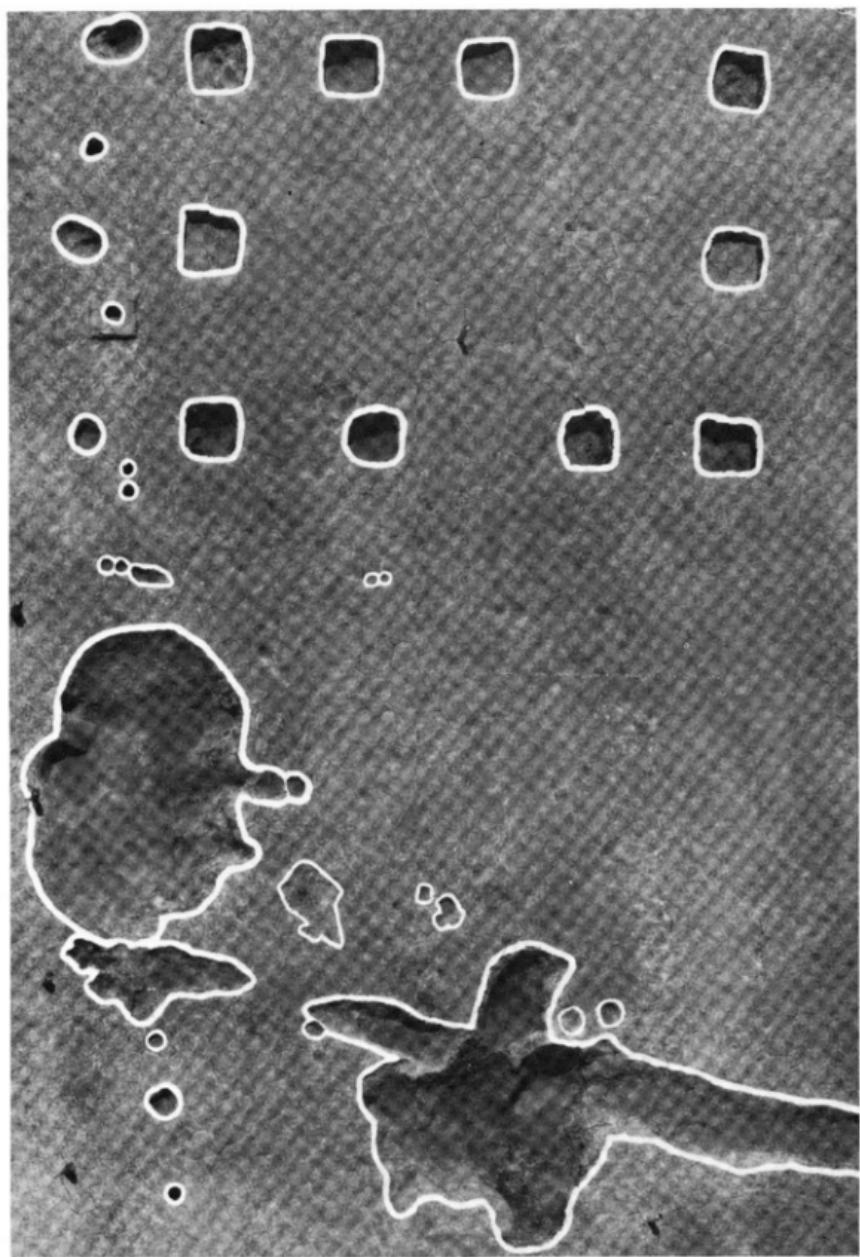
溝一2. セクション-⑦, ③, ⑥



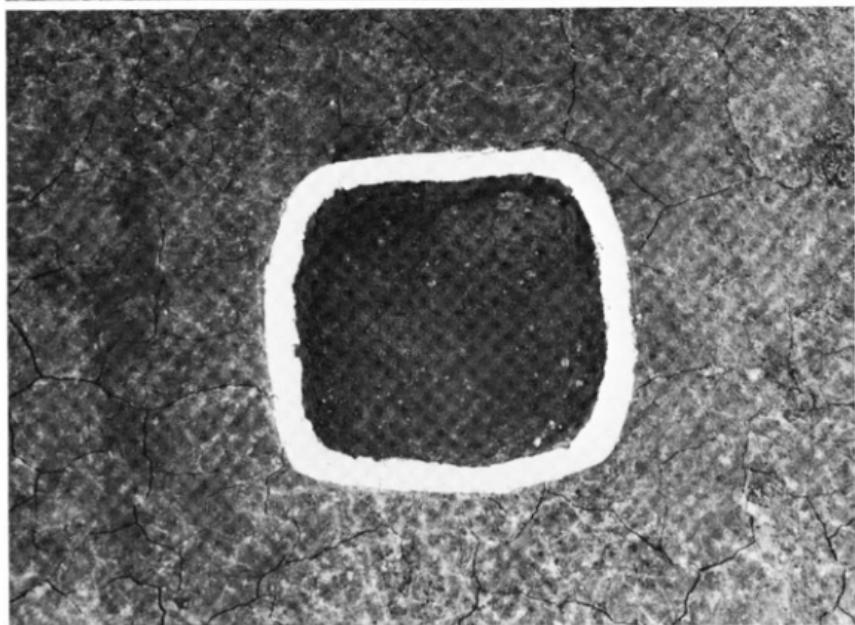
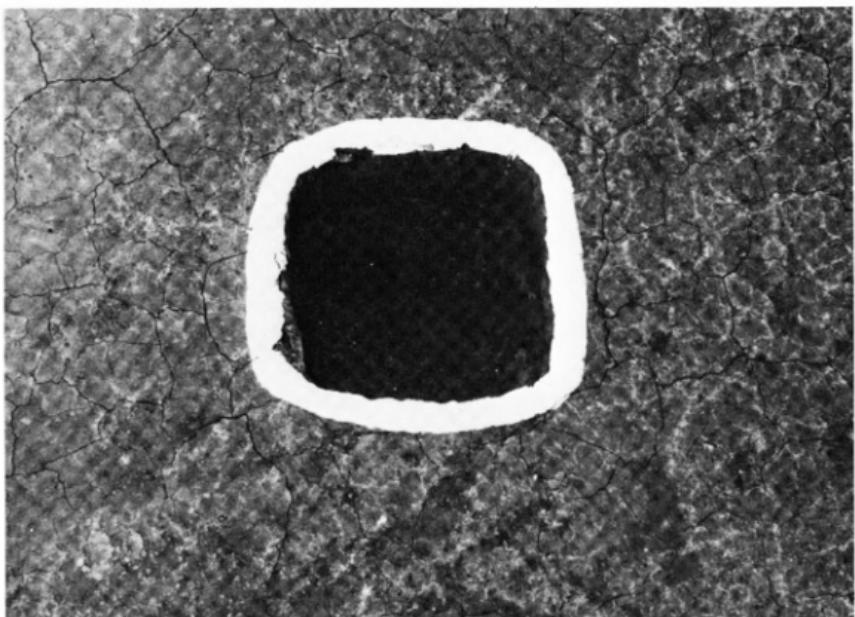
掘立柱建物. 1, 6



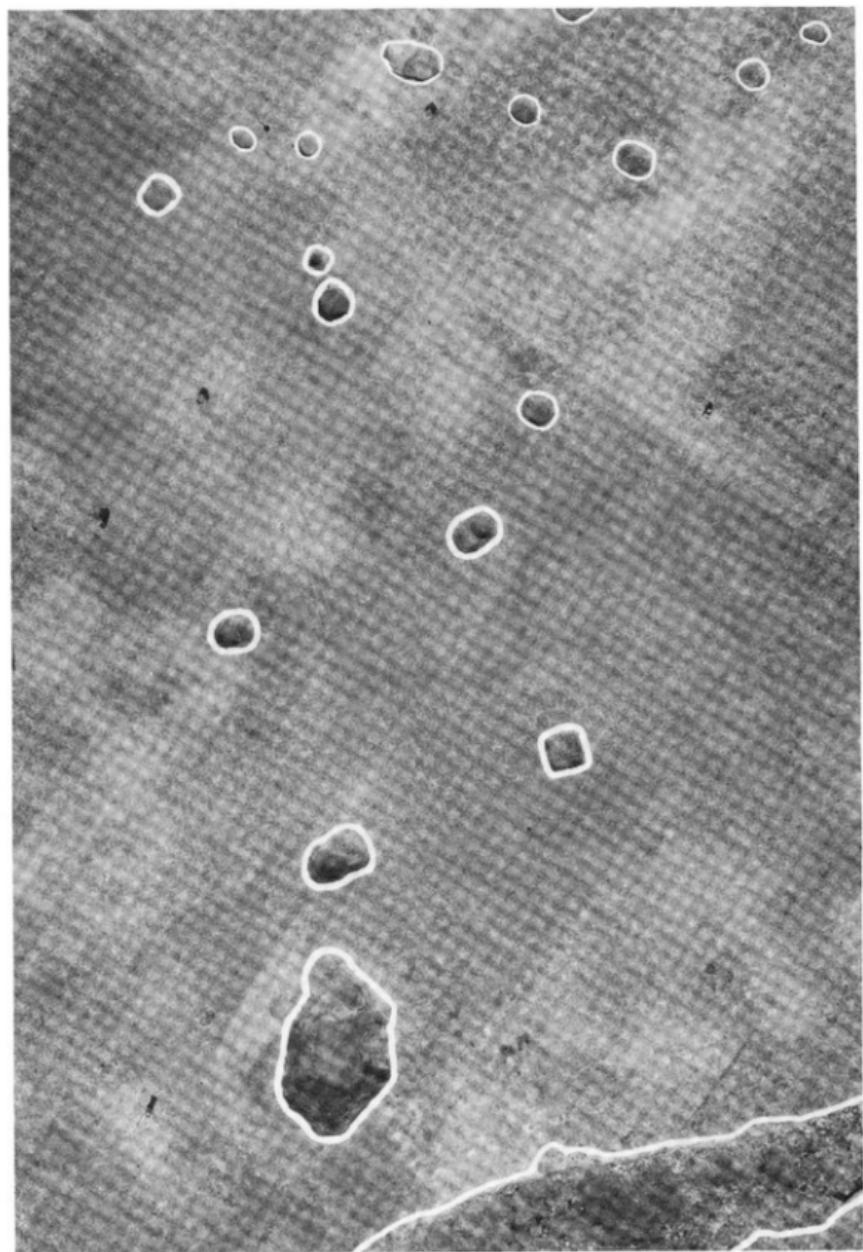
掘立柱建物-1, P-7



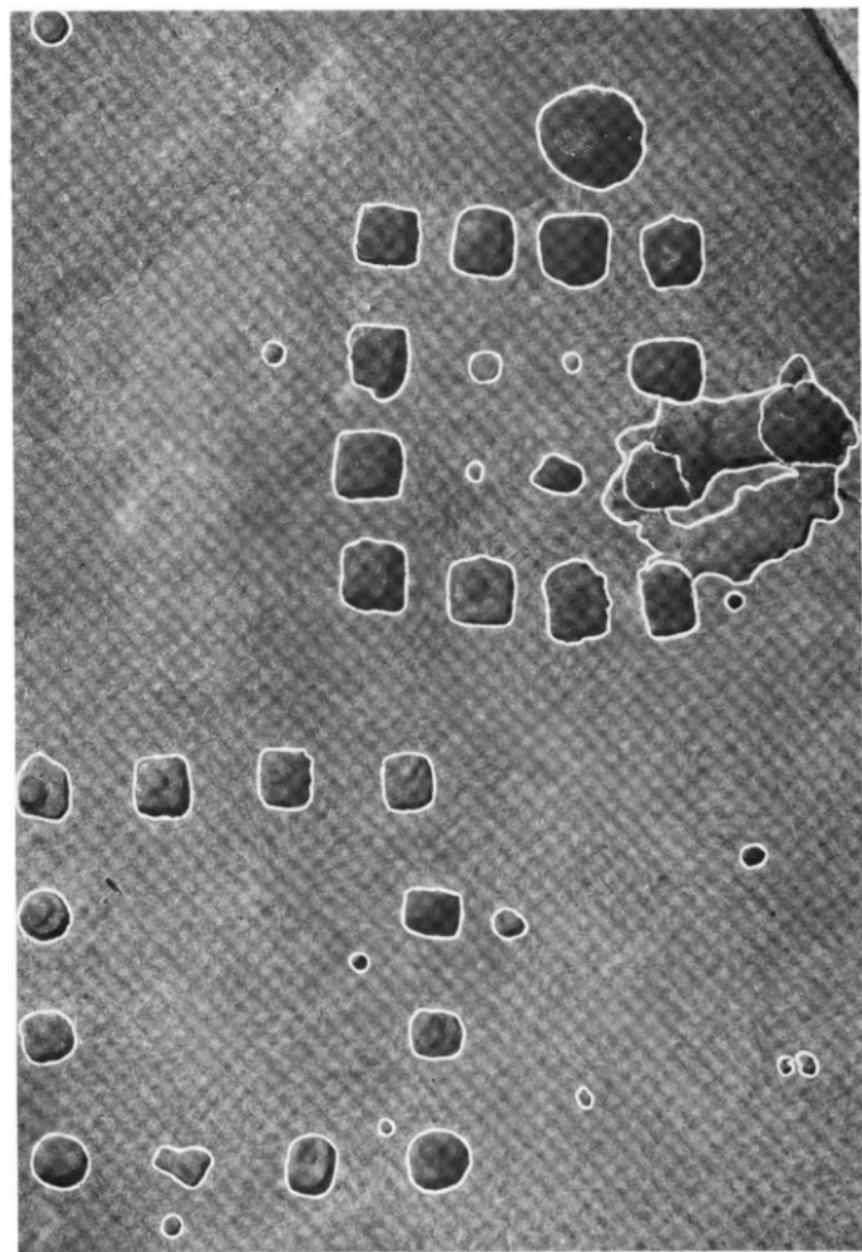
掘立柱建物—2・溝一1



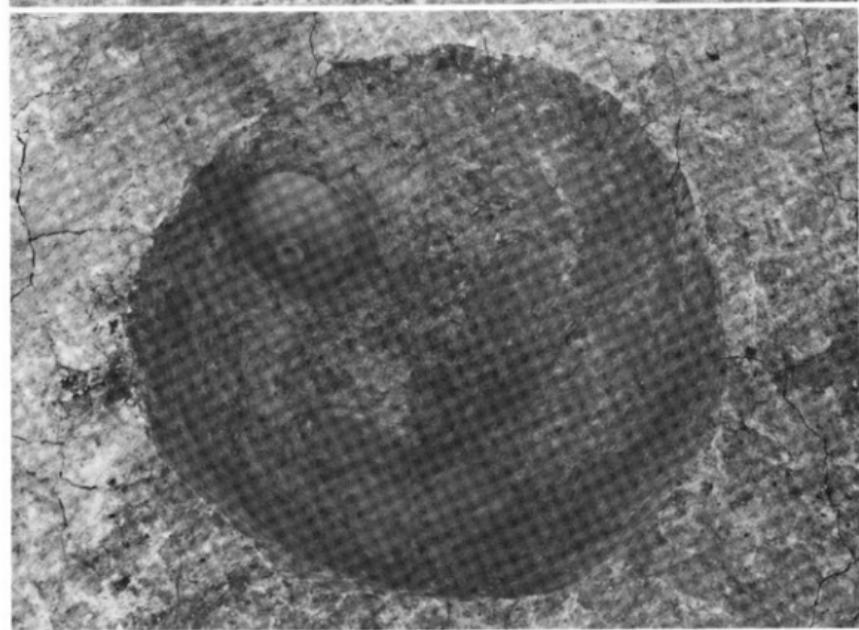
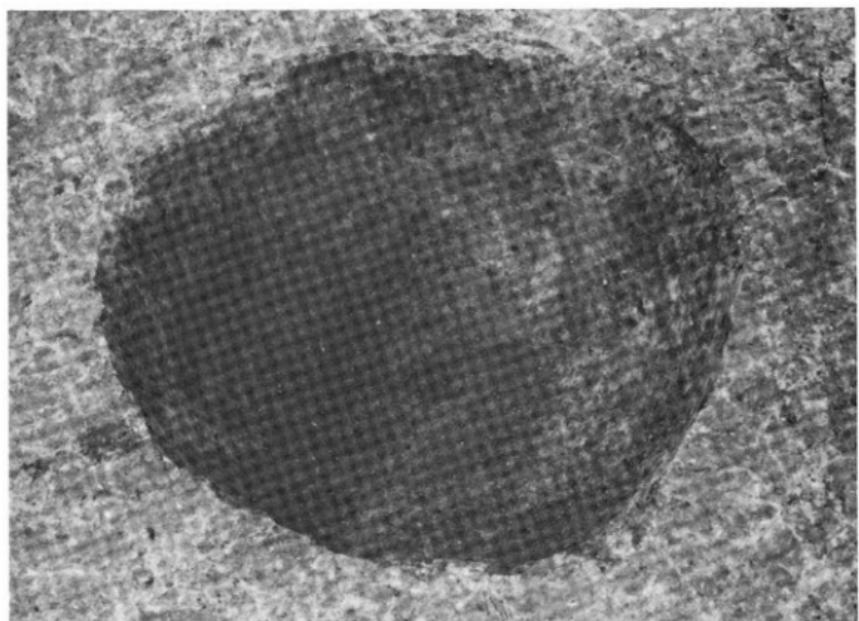
掘立柱建物-2. P-6, 10



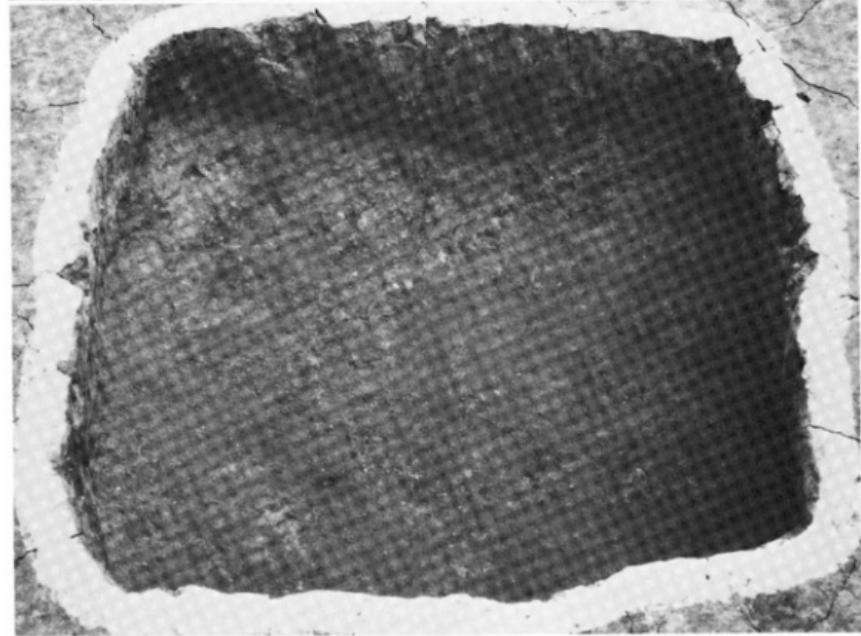
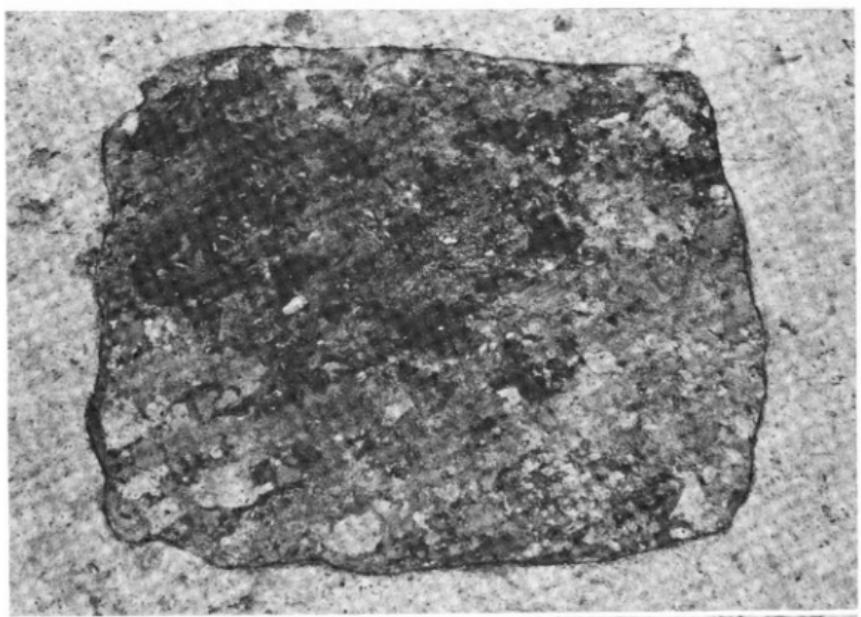
掘立柱建物—3，8(南→北)



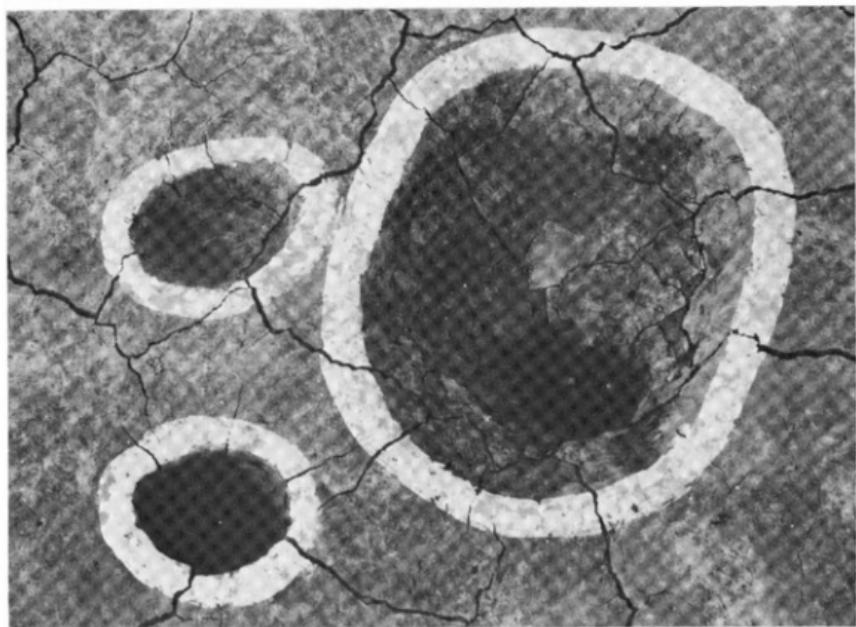
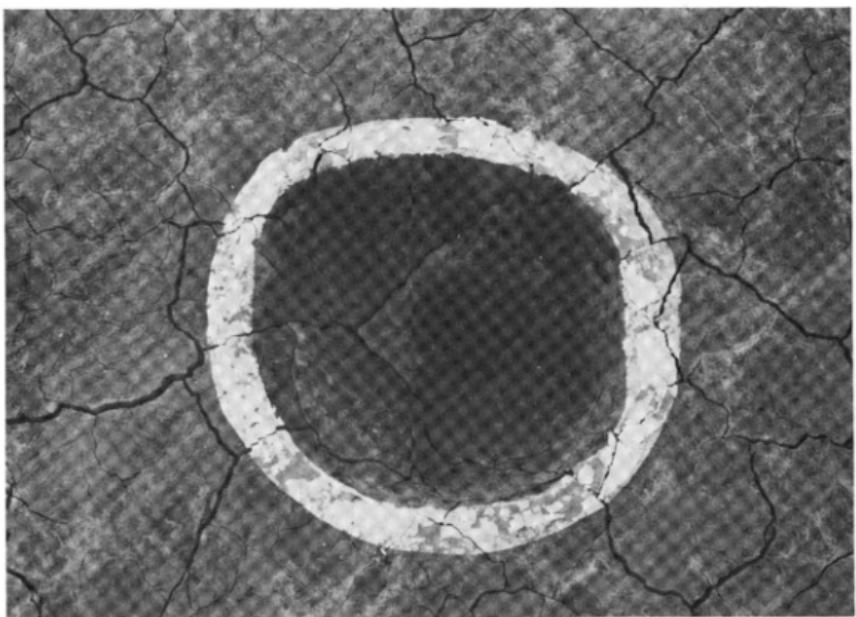
掘立柱建物-4, 5, 7

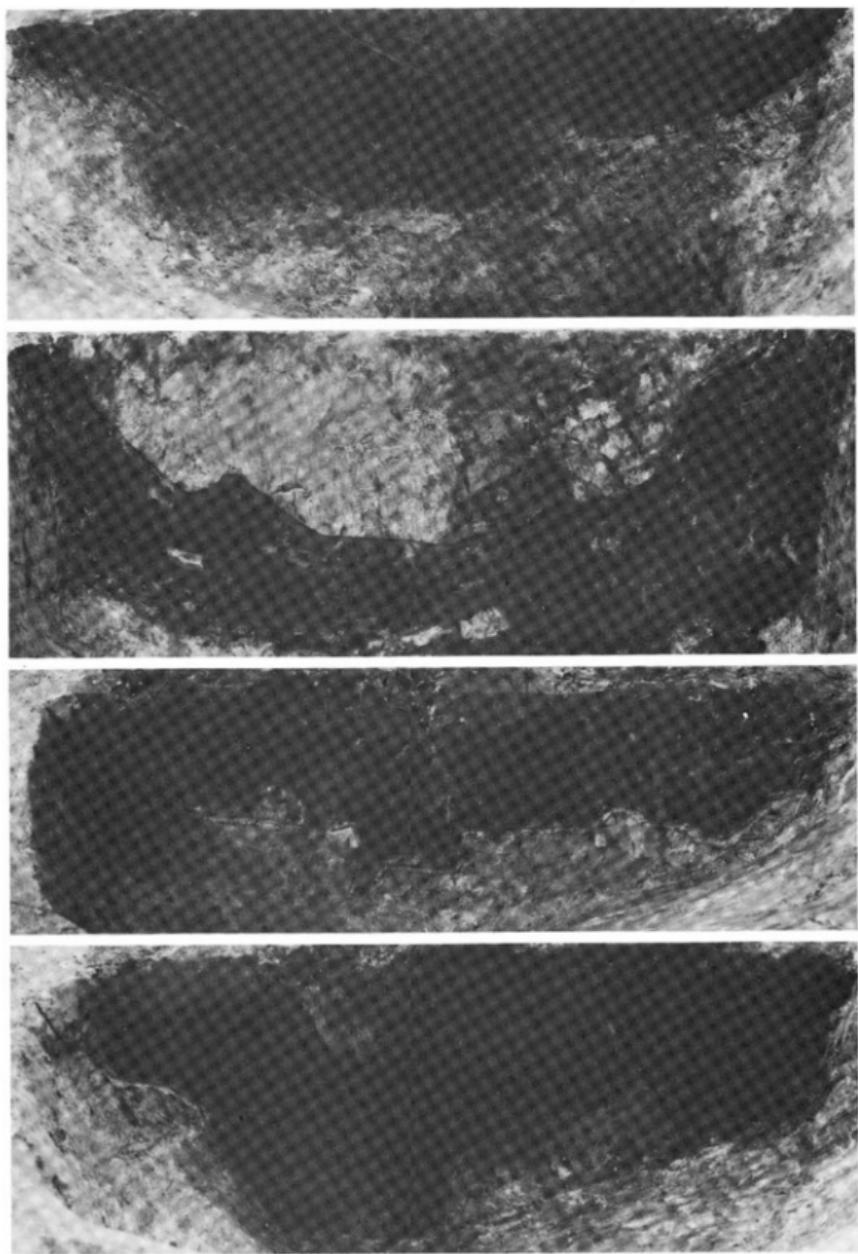


掘立柱建物—4. P—1. 3

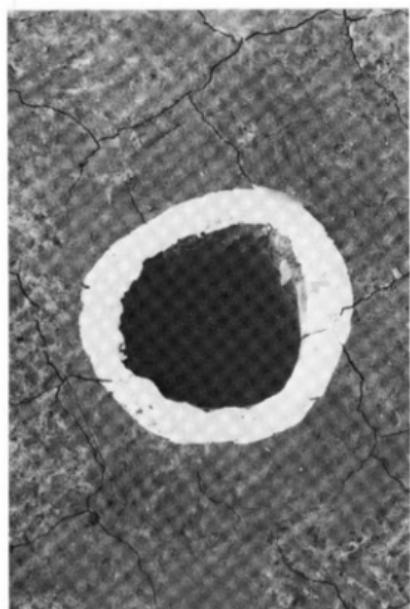
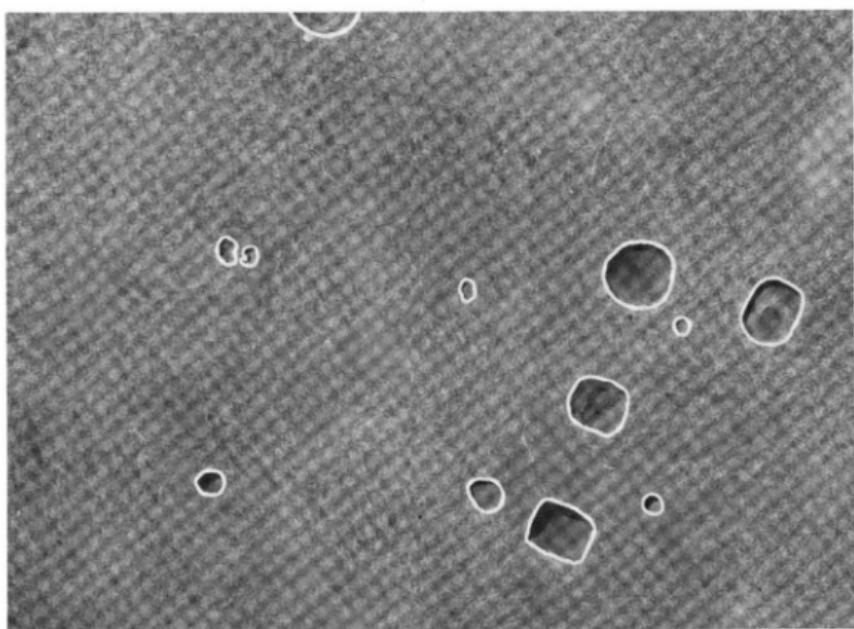


掘立柱建物—5・P-20 掘削前後

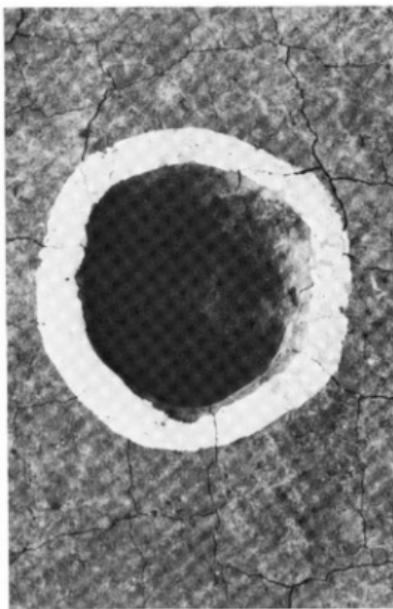




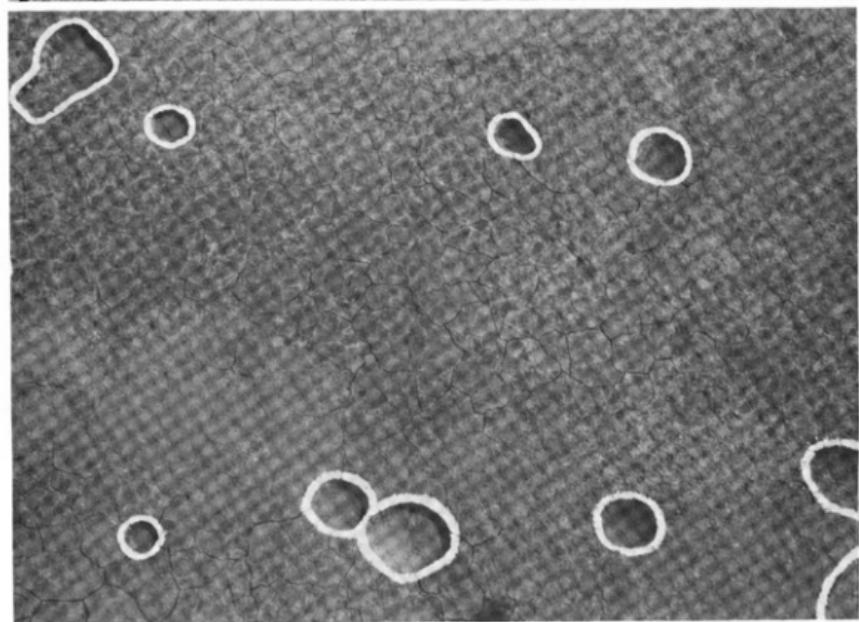
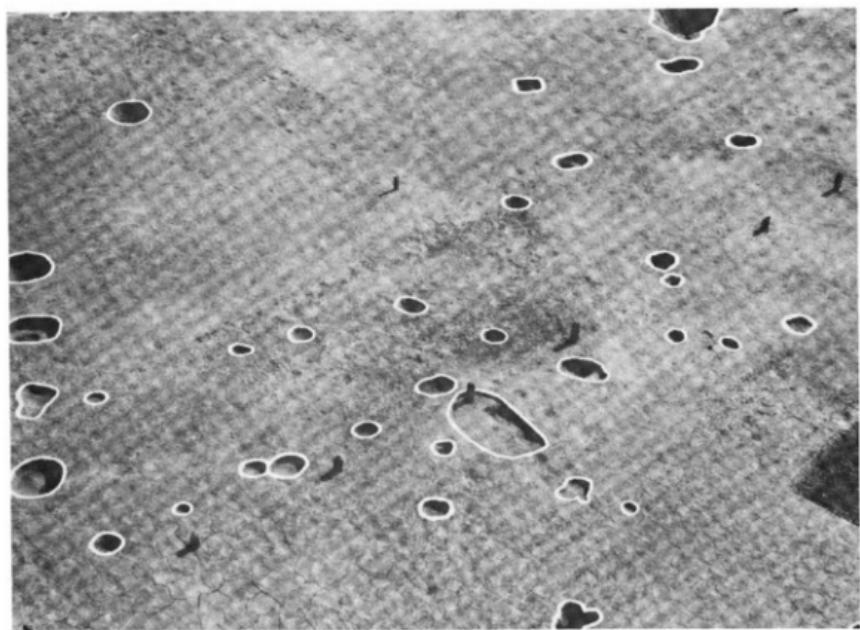
掘立柱建物-6, P-1, 2, 6, 8 土層断面



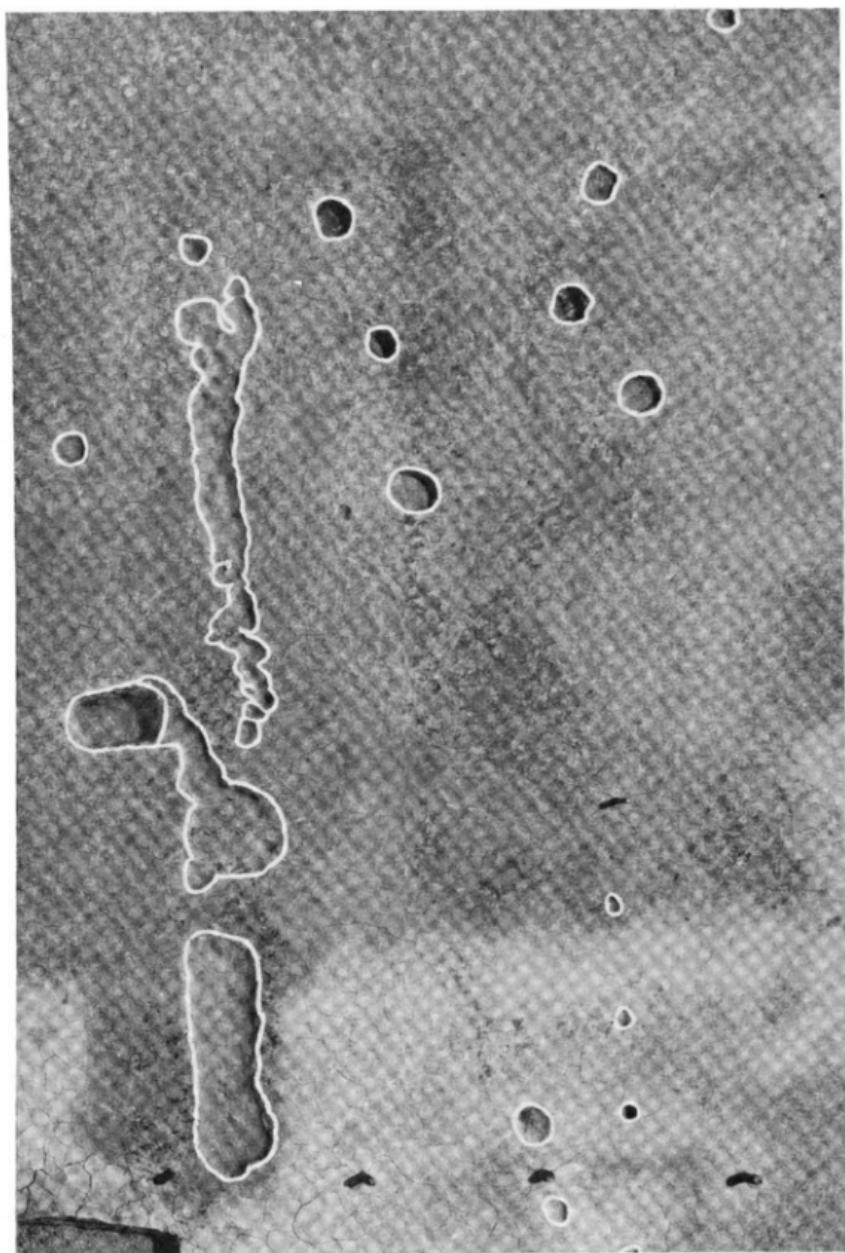
掘立柱建物-7(上)



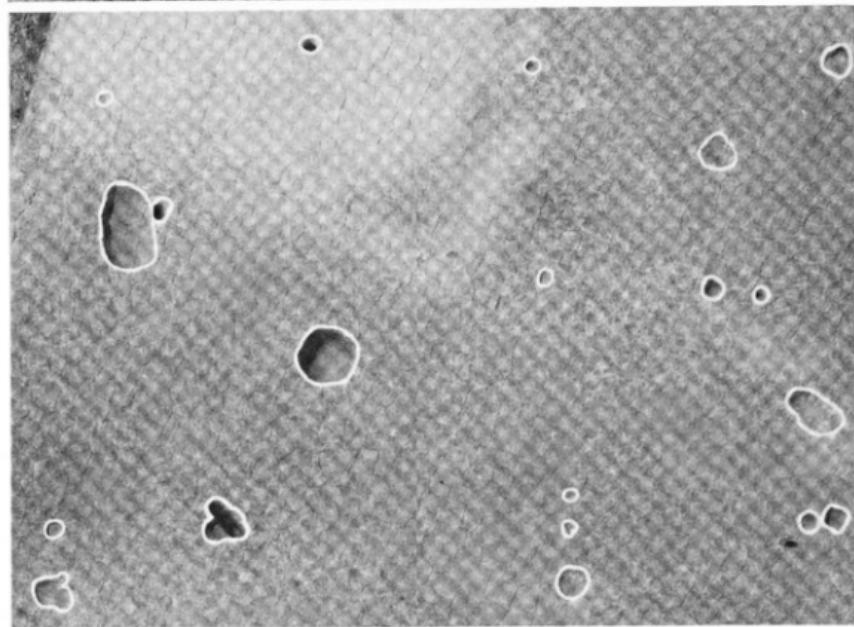
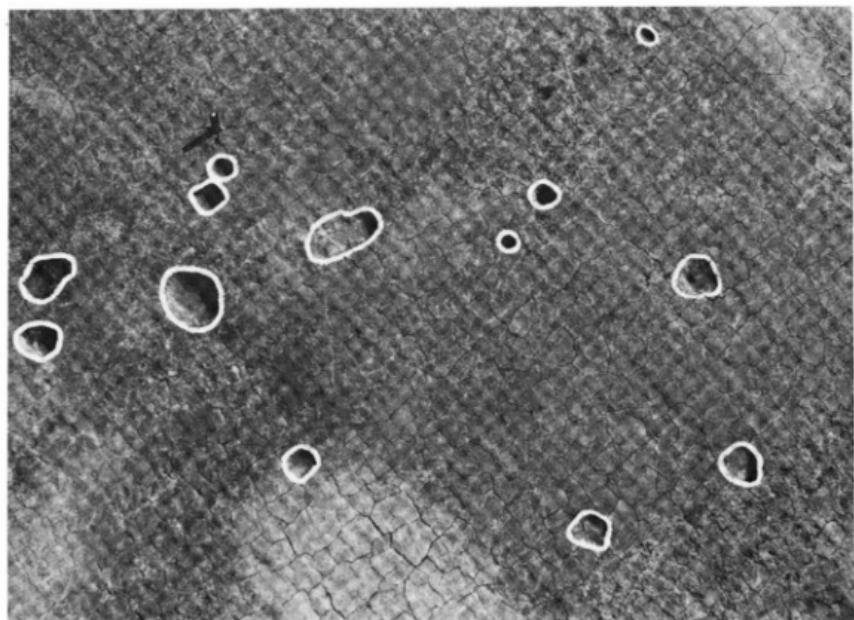
P-2, P-4



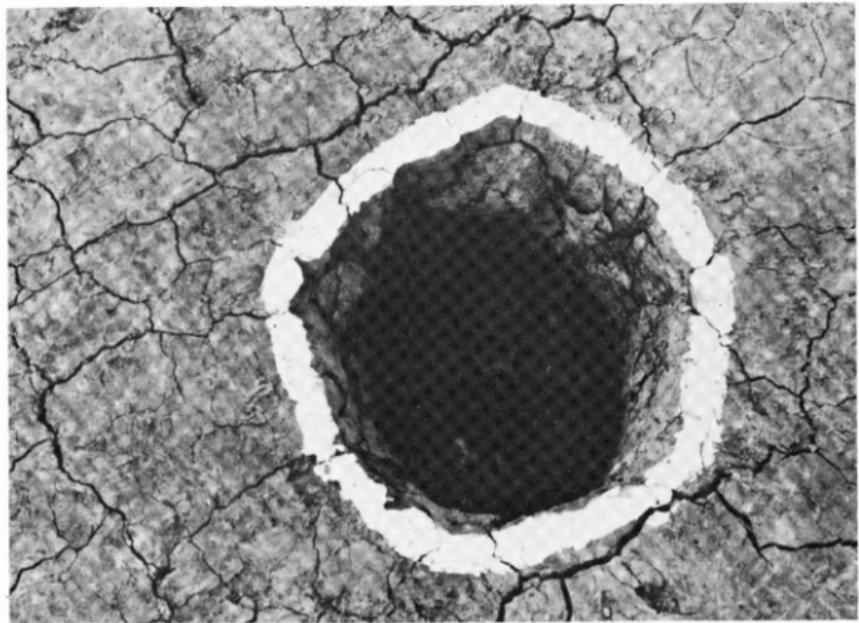
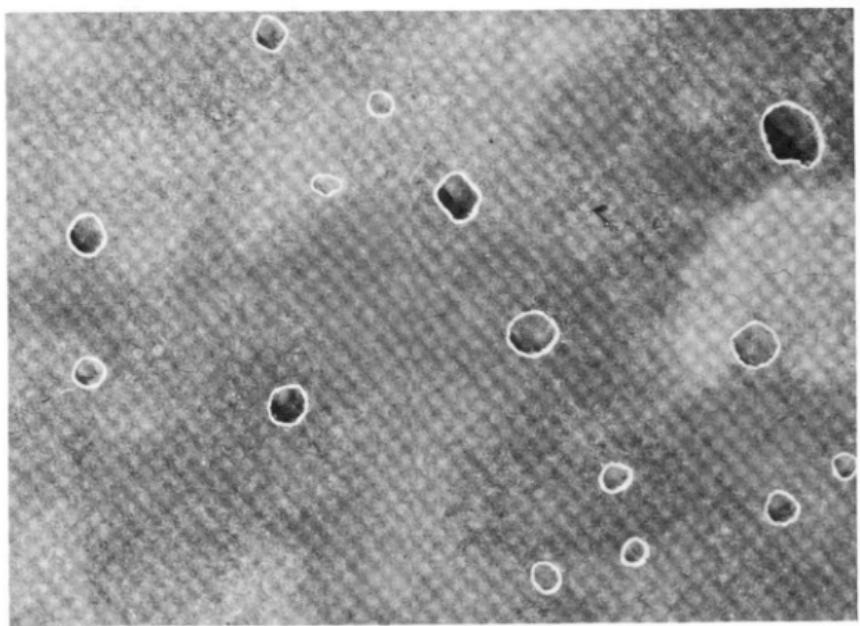
掘立柱建物—3, 4, 8, 9(上), 掘立柱建物—9(下)



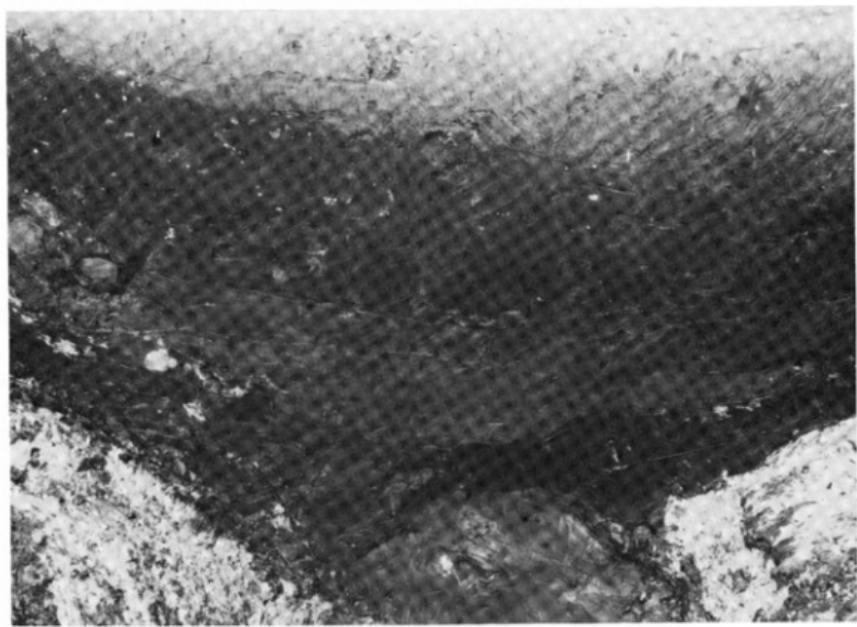
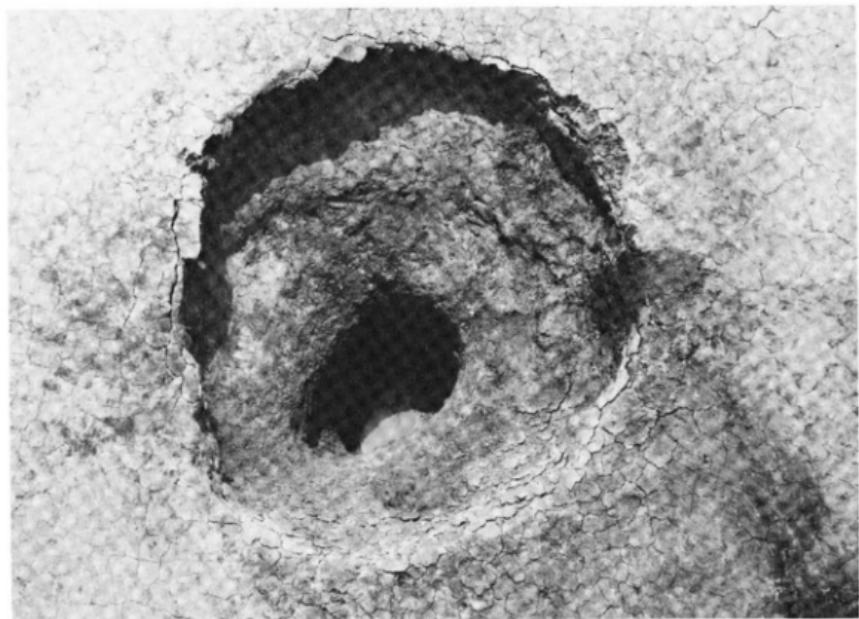
掘立柱建物-11. 溝6, 7, 8



掘立柱建物-13(上). 12(下)



掘立柱建物-10, 14. 掘立柱建物-10・P-3



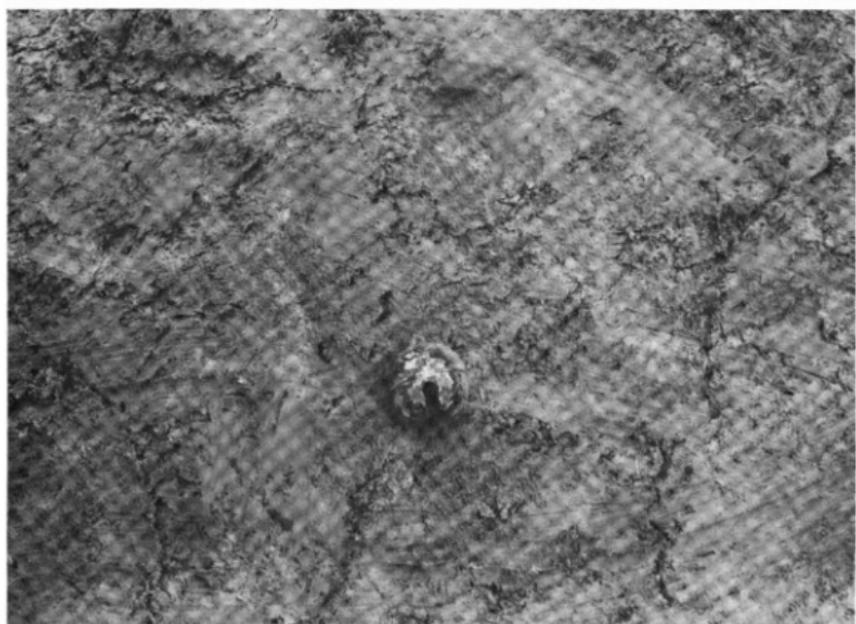
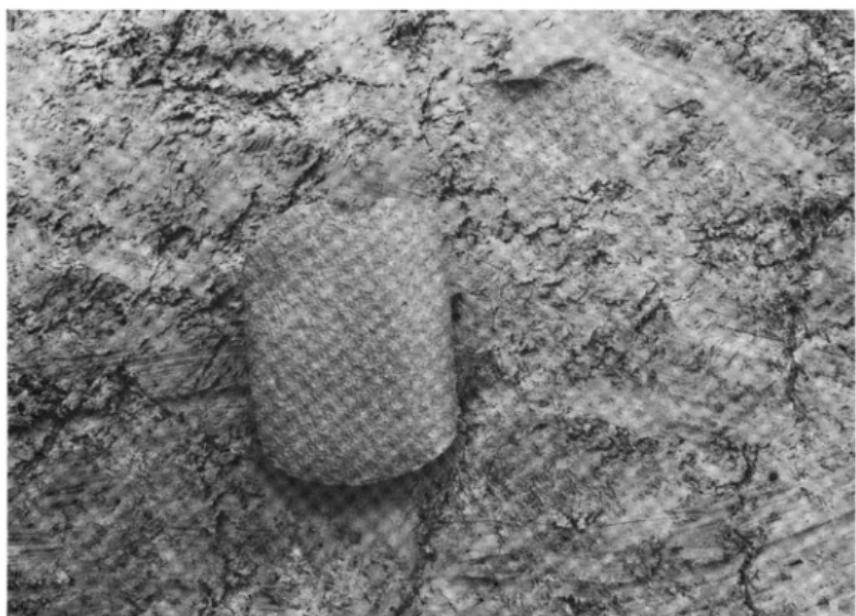
井戸状造構一 1. 上面. 土層断面



井戸状遺構一 1. 下層. 遺物出土状態



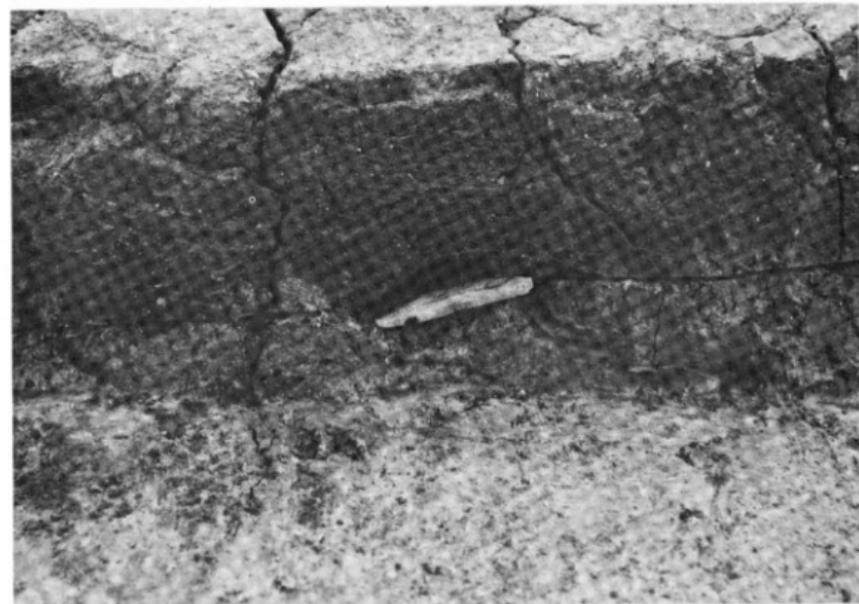
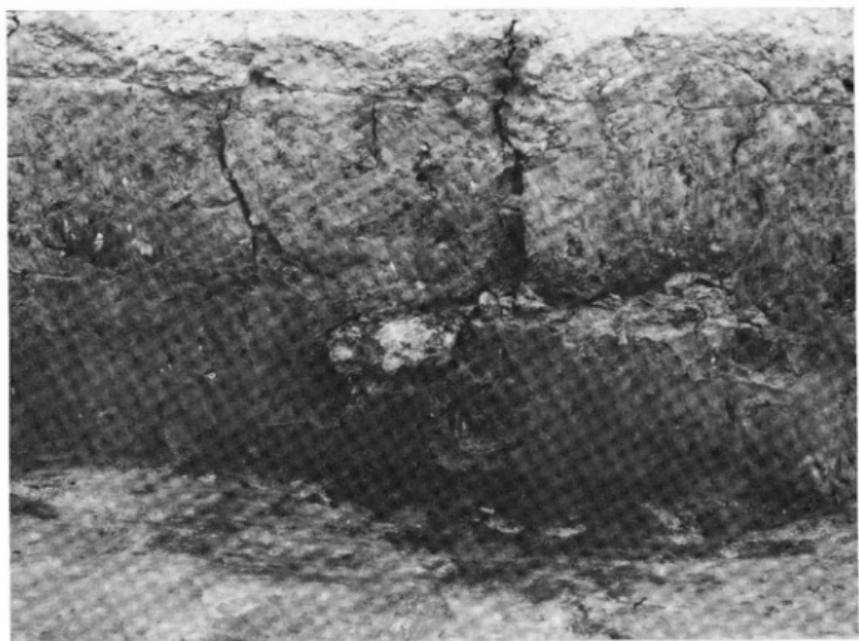
井戸状遺構一 1. 下層. 最下層. 遺物出土状態



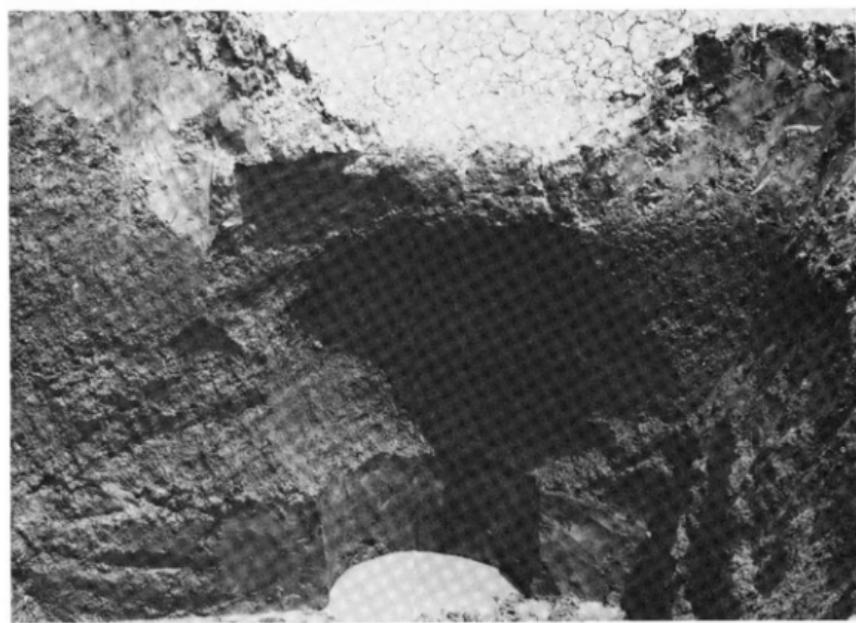
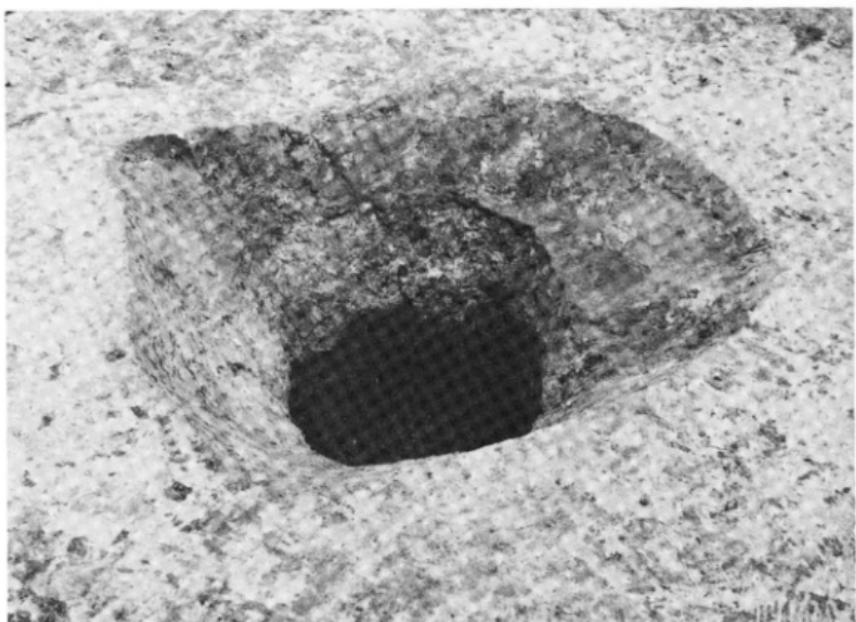
D-3出土 太型蛤刃石斧・E-5出土 金銅製鈴出土状態



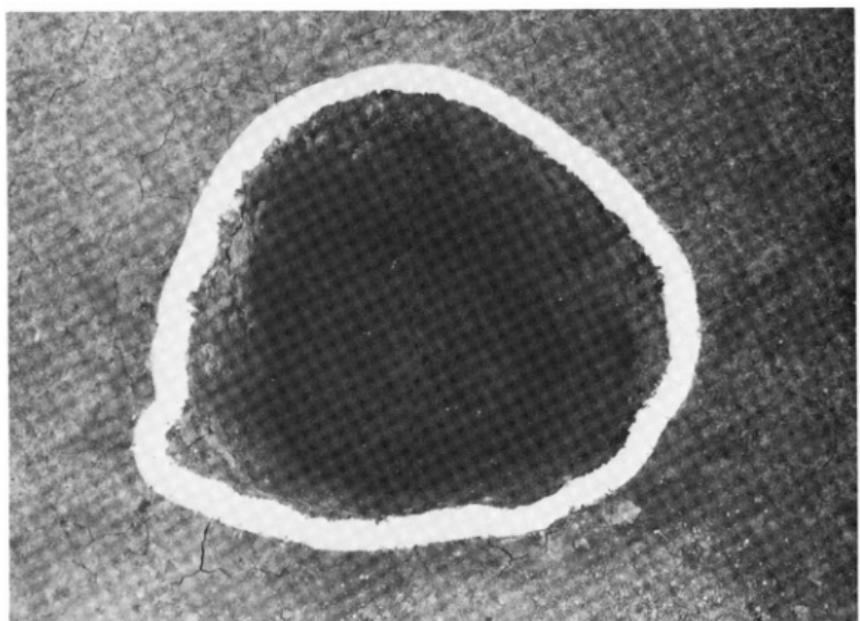
B-3 出土土器・溝-1出土石鏃



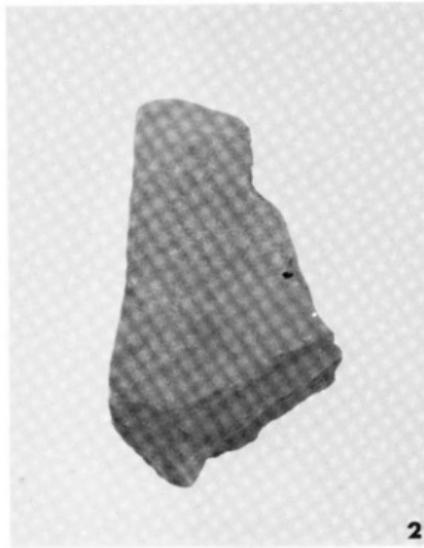
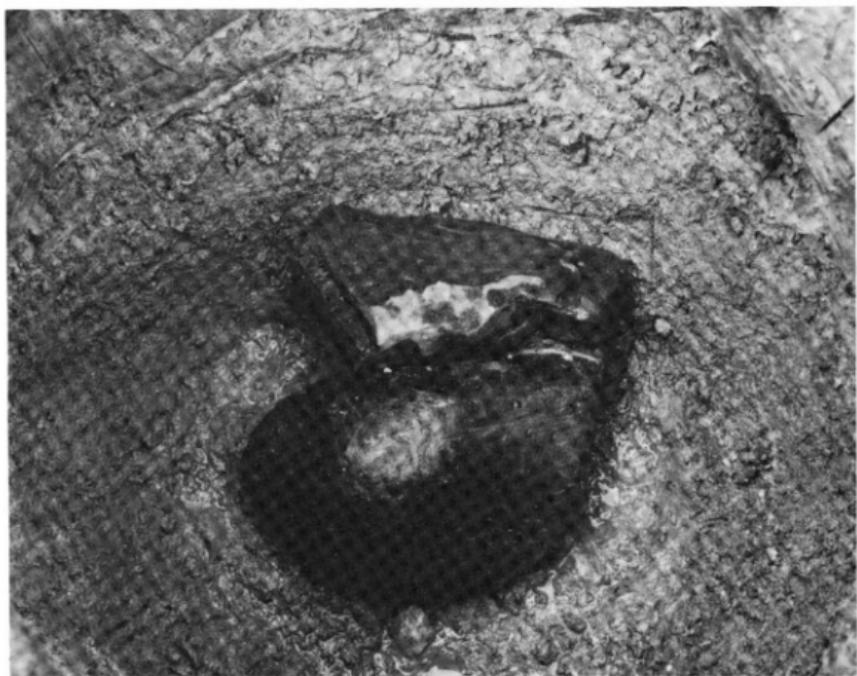
スラッグ、不定形刃器出土状態



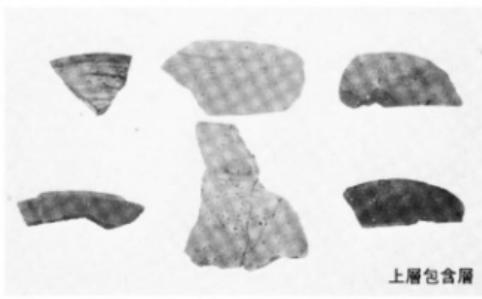
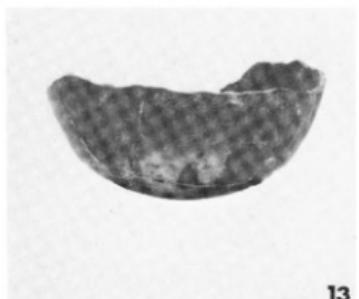
井戸一 2. 上面. 断面



井戸一 6. 上面. 断面



P-161 砥石出土状態・出土砥石



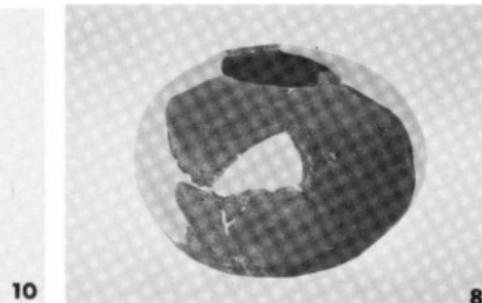
13

上層包含層



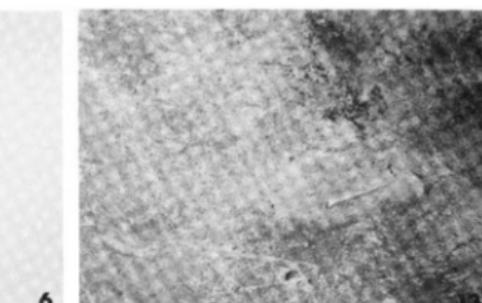
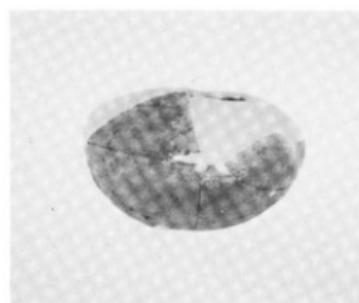
1

上層包含層



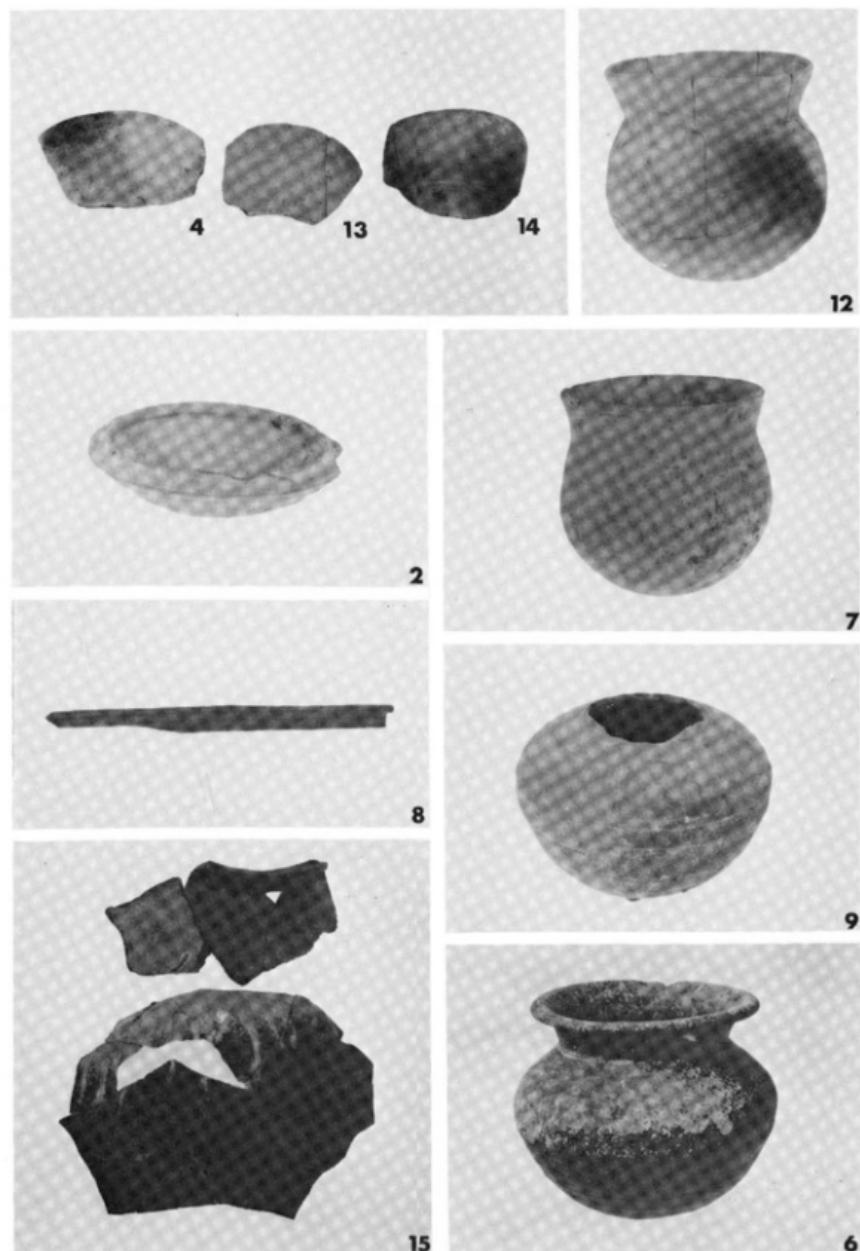
10

8

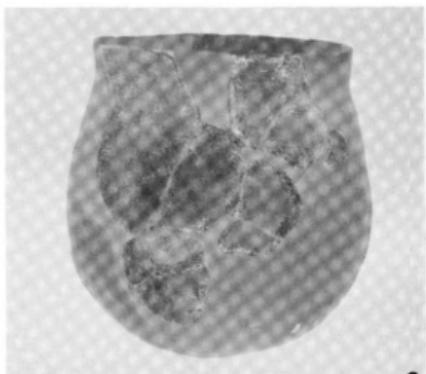


6

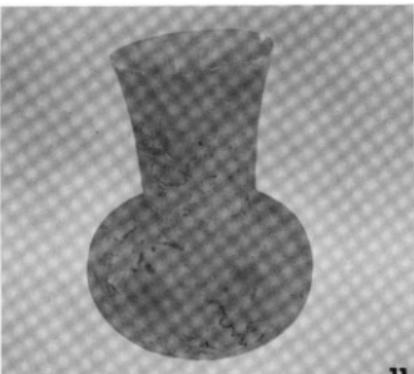
井戸状遺構—1. 上層包含層. 上層出土土器



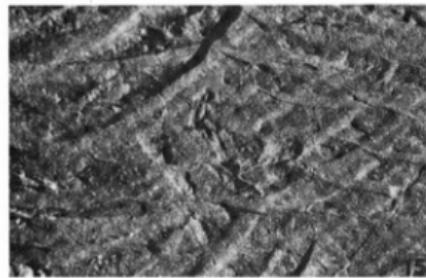
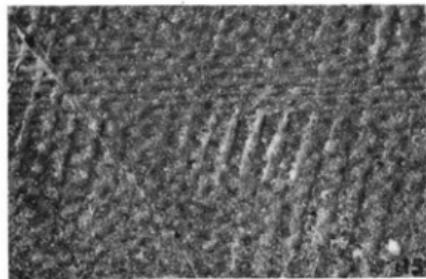
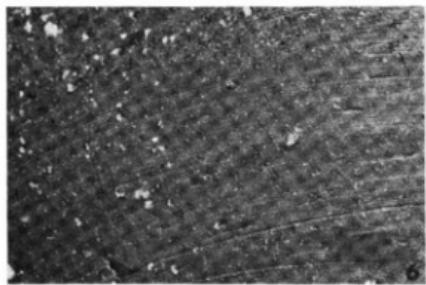
井戸状造構-1 下層出土遺物



3



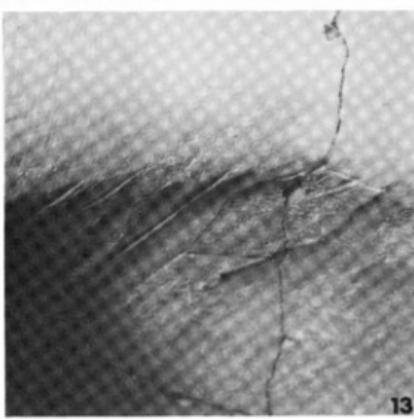
11



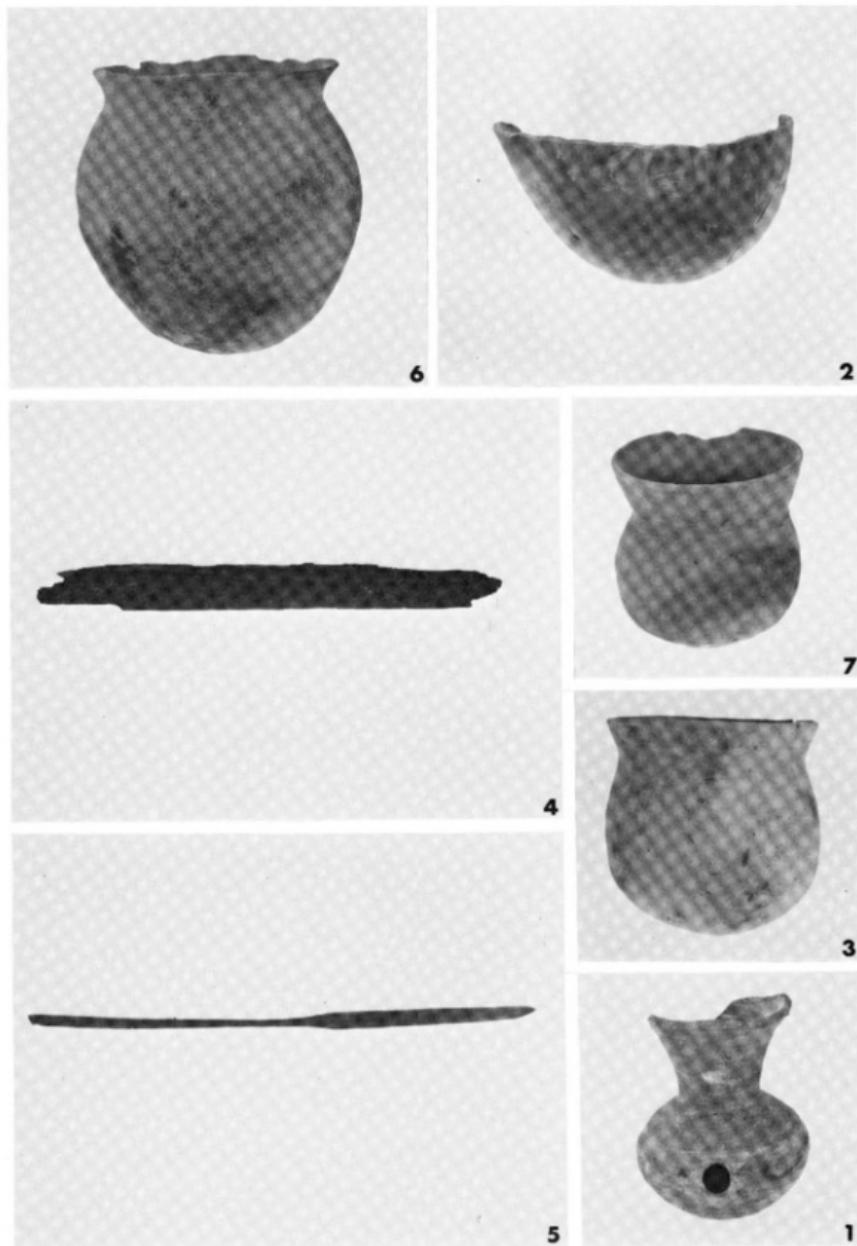
5



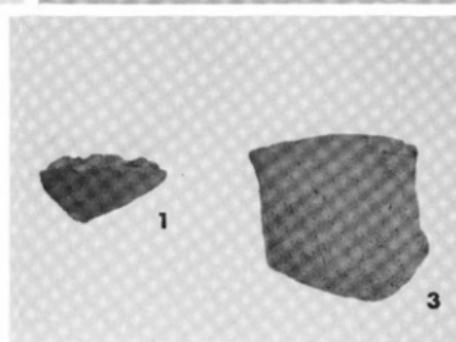
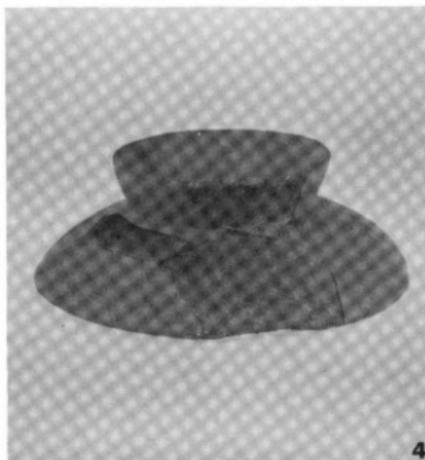
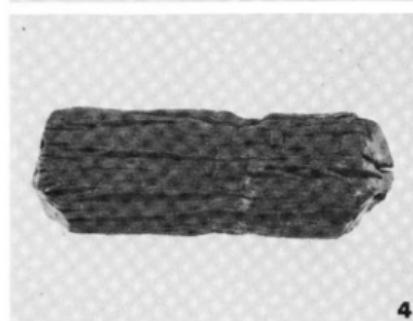
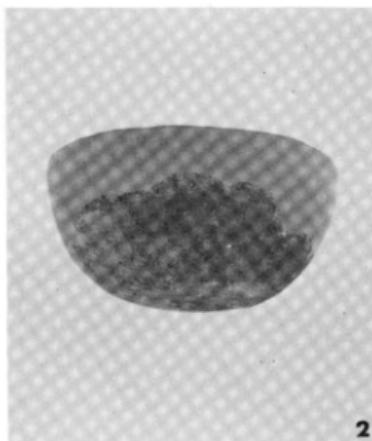
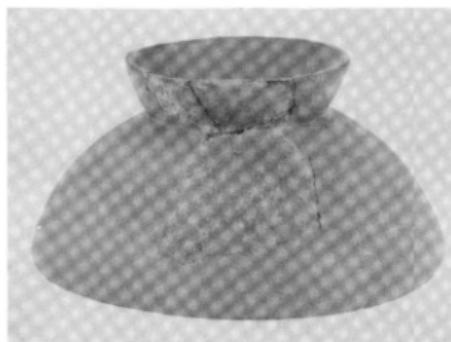
3



13



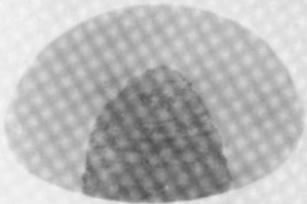
井戸状遺構一 最下層出土遺物



井戸状遺構—2. 上層(左) 下層(右)出土遺物



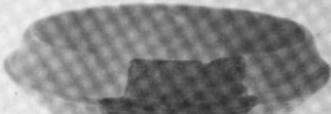
13



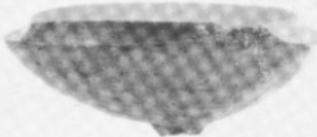
3



17



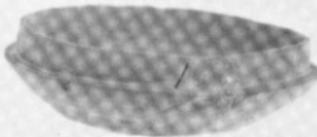
12



14



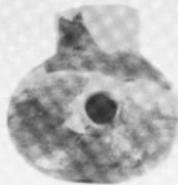
8



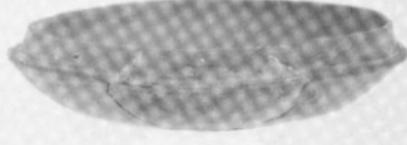
4



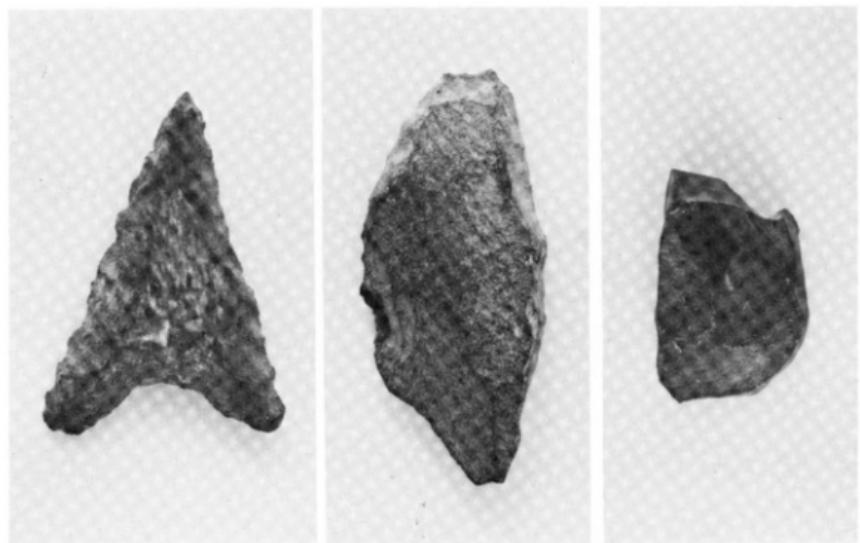
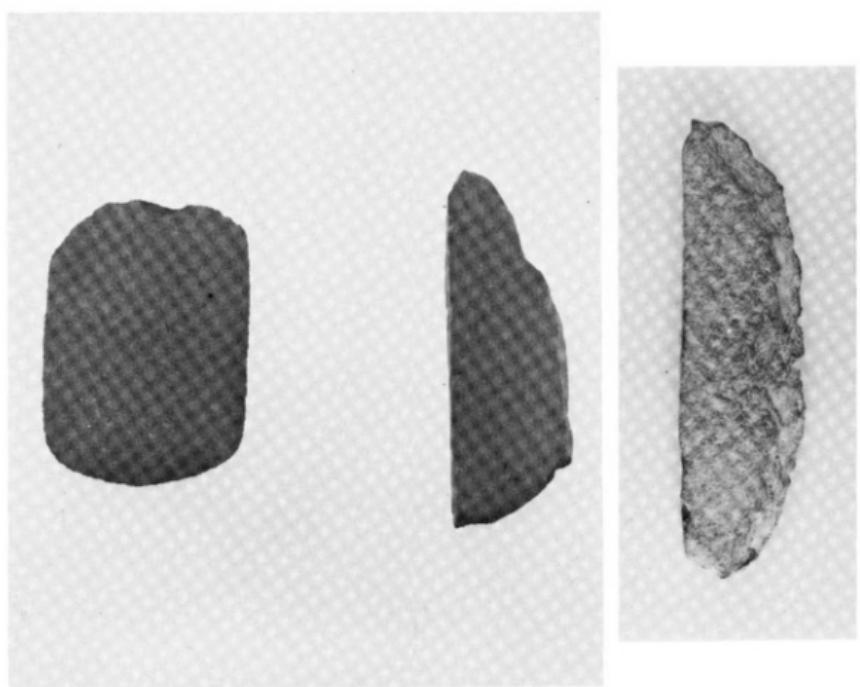
18



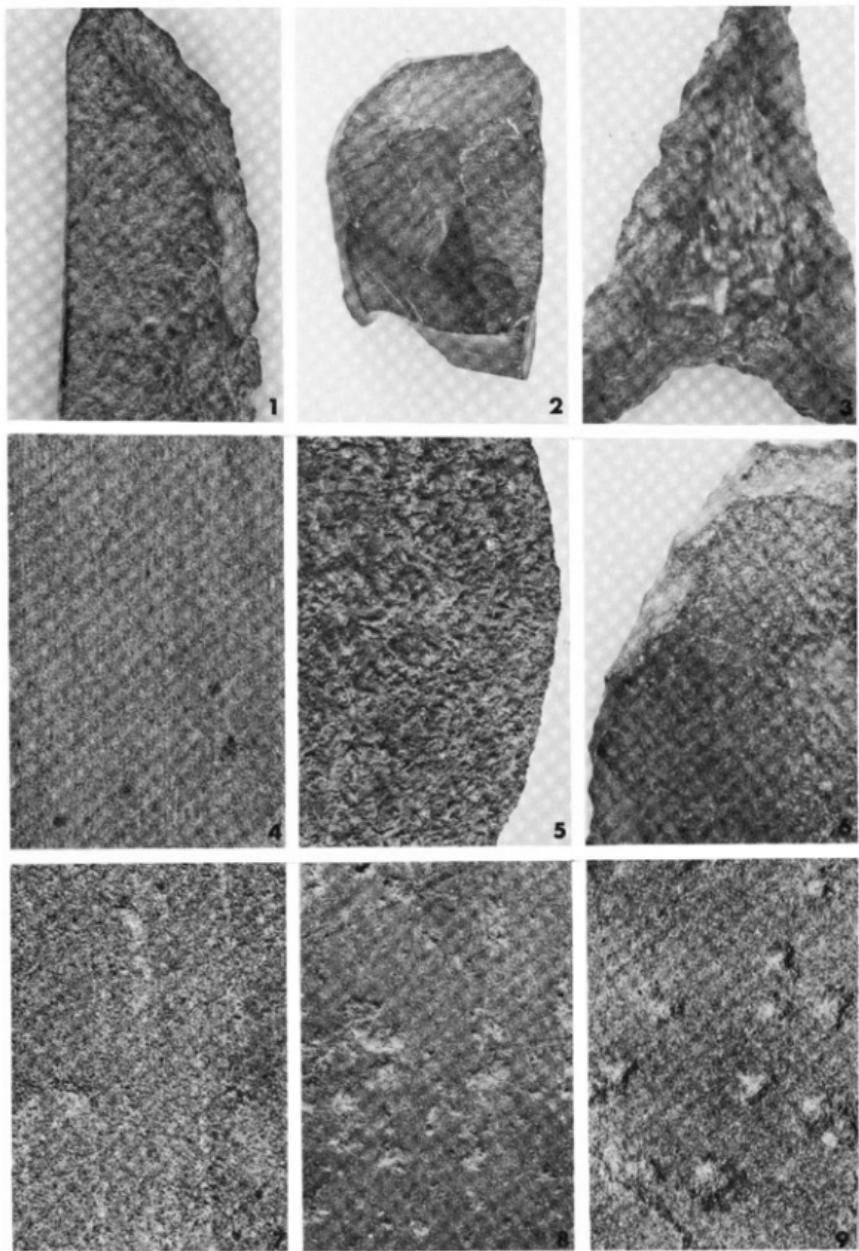
15



2



第1地区出土 石製品



石製品技法接写

1. 不定刃器

2. 石屑

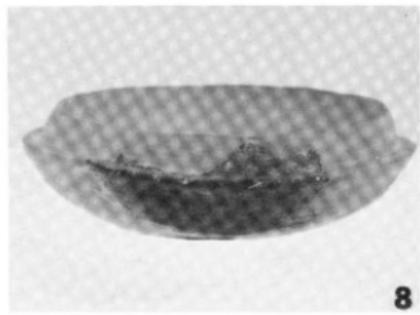
3. 石鏽

4. 井戸-2 砕石

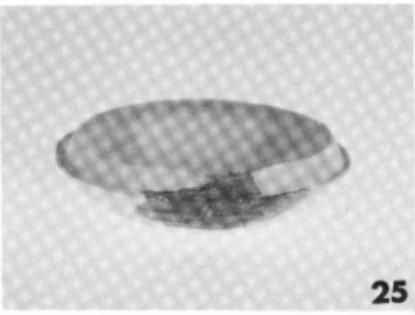
5. 石斧

6. 不定形刃器

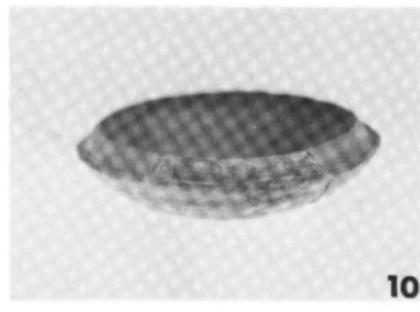
7. 8. 9. P-161 砕石



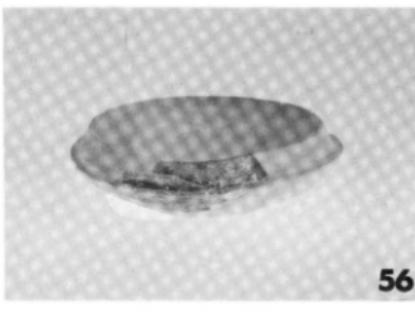
8



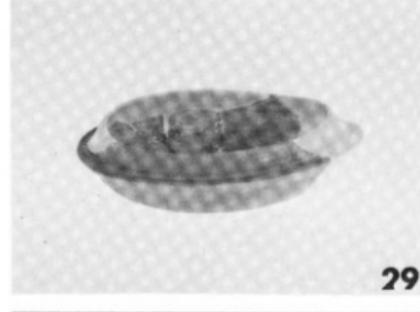
25



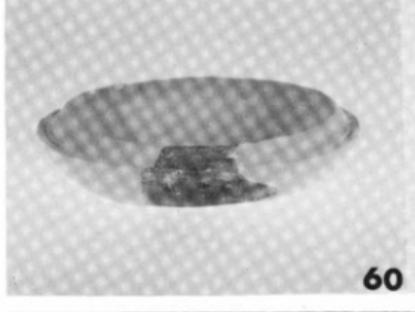
10



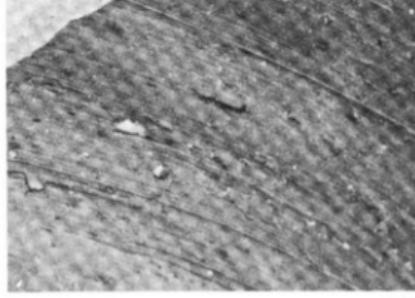
56



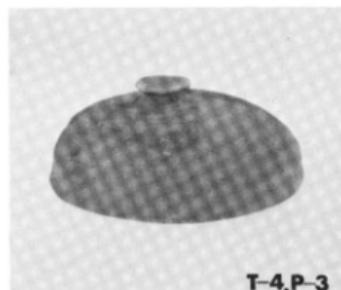
29



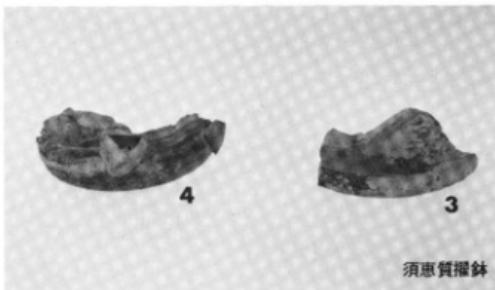
60



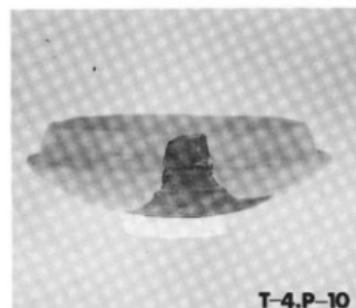
第1地区 包含層出土 杯身



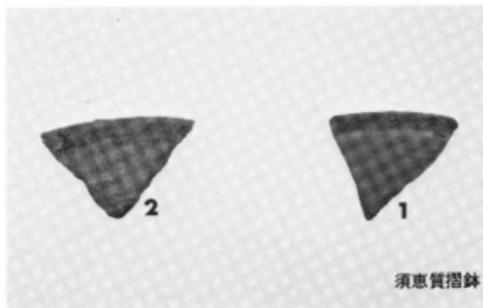
T-4.P-3



須恵質攢鉢



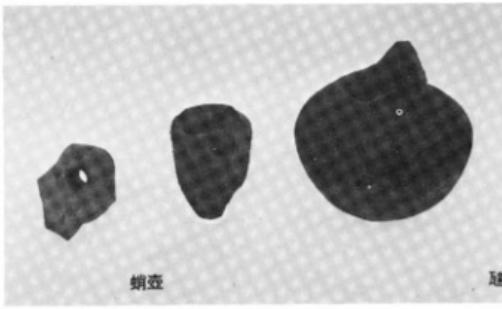
T-4.P-10



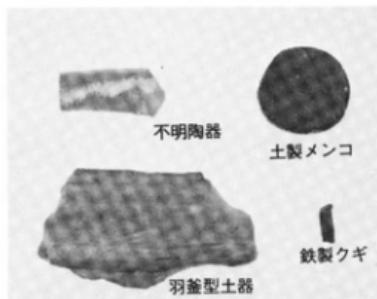
須恵質攢鉢



T-1.P-7



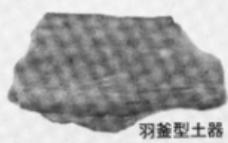
蛸壺



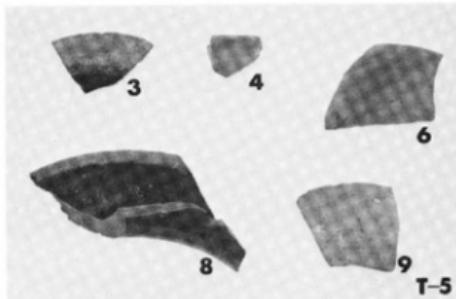
不明陶器



土製メンコ

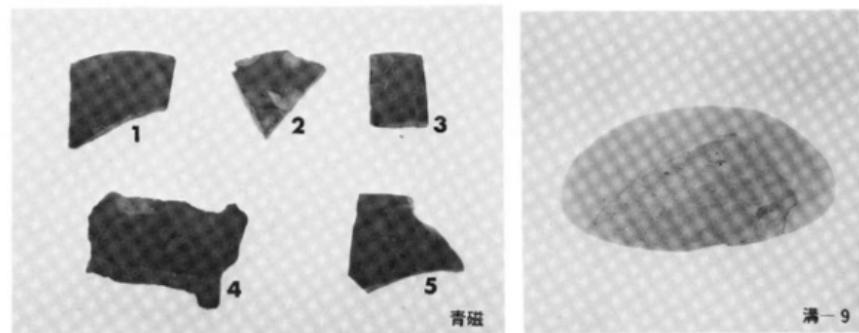
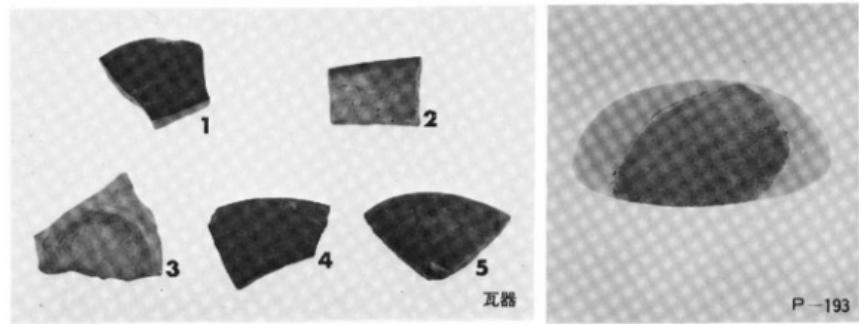
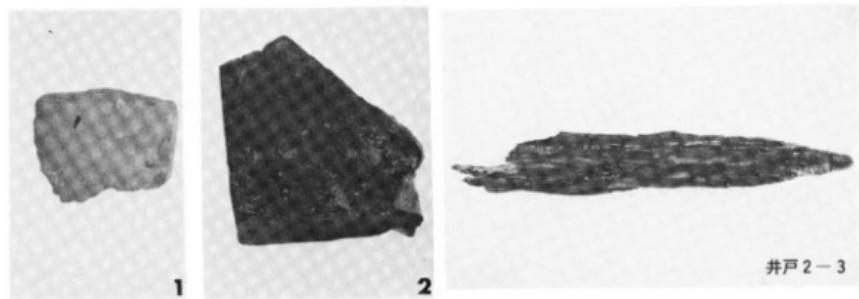
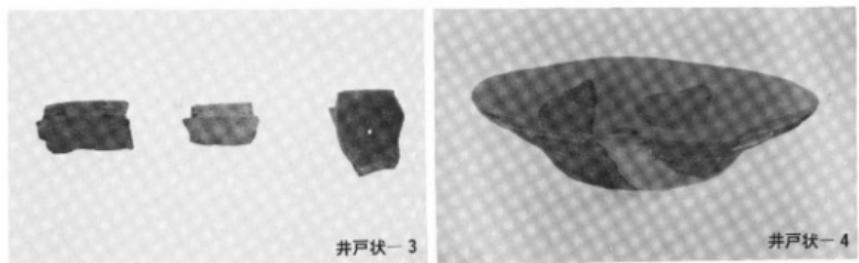


羽釜型土器



T-5

T-1, T-4, T-5出土 須恵器、須恵質攢鉢、蛸壺、翫、羽釜、鐵製釘、土製メンコ、不明陶器



井戸状遺構3、4、井戸2、溝9、P 193出土遺物、瓦器、青磁



P-43-4



P-43-1



P-43-2



2



1

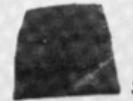
鉢



P-43-3



2



3



5



4



1

器台

P-43出土遺物、包含層出土、須恵器、鉢、器台

## 大和川・今池遺跡

大和川・今池遺跡第1地区発掘調査報告書

発行日 昭和54年3月31日

発 行 大和川・今池遺跡調査会

住 所 松原市天美西町7丁目263の1

〒580 TEL 0723-36-9993

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

